

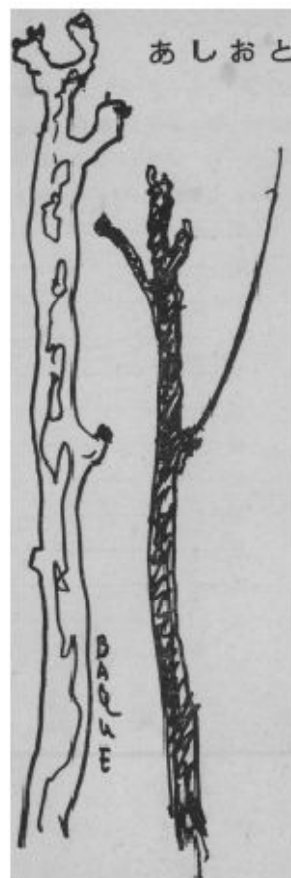
あしあと

あしあと

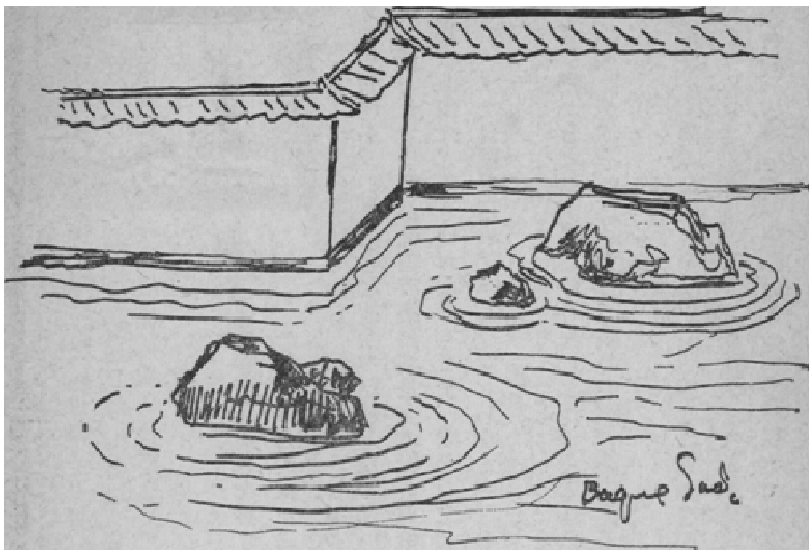


H. Endo

KOFU 1ST. HIGH SCHOOL



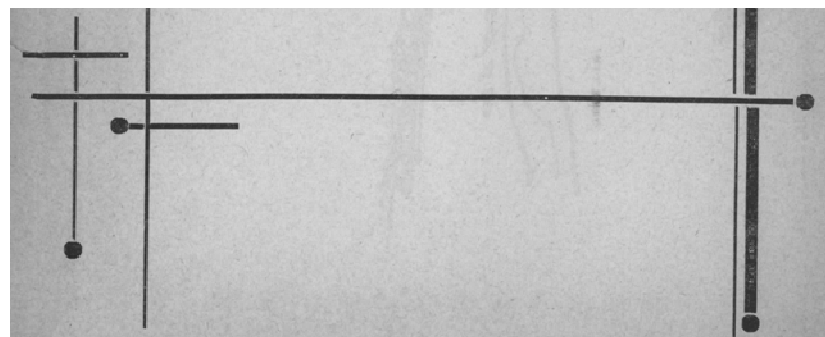
甲府第一高等学校第一学年



一年生の夢と哲学……………学 校 長 広瀬勝雄…	(1)
学習に真剣さを……………第一学年部会長 飯島 哲…	(2)
歴史の繰り返し……………第一学年副部会長 花輪 是…	(3)
あしおと・あしあと・期待……………保坂忠信…	(4)

1組……………	(8)
2 組……………	(23)
3 組……………	(40)
4 組……………	(56)
5 組……………	(69)
6 組……………	(86)
7 組……………	(99)
8 組……………	(111)
9 組……………	(123)
10組……………	(136)
11組……………	(144)
12組……………	(162)

目次



一年生の夢と哲学

学校長 広瀬勝雄

夢を描き 哲学する

若者たちよ えみたたえ

睦かがやかし 黒潮の

よせくるごとくきそいて進む

一高生よ 聡慧 利根

通敏易悟

学校へくるのがうれしい、働き甲斐がある。急増第一陣の一年生は、あたかも「黒潮のよせくるごとし」の勢で学習面にも生活面にも若者らしい活力を示して伸びている。素晴らしい成果を修めて一年を終ろうとしている。学年の先生方は「師弟の和熟は育英の大本なり」と協力一致、温かい創造性に豊かな、そして厳たる秩序を立てた指導体制を確立して将来に大きな希望を托している。学年 P・T・A のみなさまも熱意をもって後援して下さい。一年生の将来はまことに洋々たるものがある。学年便りの発行もこうした親と子と師の融和一体の裡から自然に生れたものでした。今回の学年誌は思い出と将来への夢を創り出すものとなりましょう。一年生には夢があり哲学が生れるであらう。



学習に真剣さを

第一学年副部長 飯島 哲

青少年の問題が、いま大きな社会の話題となっていますが、たしかに深い配慮と温かい理解が政治のうえになされねばならないと思います。私が全国市議会議長会の国会対策委員長として、今の政府に望んだ要望の一つに青少年対策があります。いまの世代は、若さのおもむくまま、安易を求め、努力をおこたる傾向が強いようであります。真剣さに欠けるようであります。また目標を定めないようでもあります。それは恵まれた環境に育ったせいもあることでしょうが、悲しいことでもあります。

私は昨年招かれて中国にまいりましたが、その国の若い人たちは非常に向学心が旺盛であります。文化の遅れを取り戻そうとする意欲が、そのたくましい顔の中から読みとることができました。早く一人前の国にしたいという真剣さがうかがえました。

私が皆さんに望みたいものは、生活態度に真剣さがほしいということであります。真剣な態度こそ、人間の尊さであります。やがてみなさんが進学し、立派な人となるのには真剣さが欠けてはなりません。

みなさん、しっかり大地に足をつけて、真剣に勉学の道に進んで下さい。希望と歓びの将来に、光を求めて、正々堂々と進んで下さい。春のおとずれとともに、萌えいずる若草のように、はつらつとした、みなさんのご健康を私は心からお祈りいたします。

歴史の繰り返し

第一学年副部長 花 輪 暹

世の常の親は誰でもが吾子に対しては慾求過多症である。学業の成績が良ければ、それが悪い親より対比的に吾子への慾求が少くていい筈だが決してそうではない。素行の正しい子供の親は、その点に関して心配は要らぬ筈だが矢張り結構氣を使う。その結果がすべての子供（と云うには少し大きい）にとつて、すべての親は五月蠅い存在となる。

さて其処で私はすべての子供達に、即ち高校生諸君に訴えたい。諸君の親は少くとも諸君よりは二十年或は三十年かそれ以上か、とに角長い生活経験を持つている。諸君はそれを古いと云うか。然り、確かに諸君よりは古い。然し古いと云うことと価値の有無は必ずしも一致しない。新しいものだけが正しく偉大であるならば諸君より小学校の一年生の方が新しい。諸君が弟や妹に自信に満ちた態度で応待出来るのは、諸君の軽蔑する古さがさせる業であることに気付いているであろうか。が然しだからと云って私は古いものの方が価値あるものだとは断定はしない。それは元来比較すべきものではないからだ。新しいものには新しき故のよさがあり、古いものには古い事に依って生ずる良さがある。同時に亦、新しいものには新しきが故に持つ「脆さ」があり、古いものには古きが故の「固さ」がある。それぞれに持つ一長一短だ。要は古さの中にある良さを見出す努力を諸君にお願いしたい。

諸君の親の中には、平穩無事と云おうか、十年一日と云おうか、何の変動も無く過ぎて来た家庭もあるだろう。が諸君、その様に平穩無事に過ごすために如何なる困難、苦勞、努力が積み重ねられたか、それはその家庭の親のみの知るところだ。栄光ある一高生としての諸君の現在は、諸君の親の血と汗とによって与えられたのだ。その価値、その意義、その批判は諸君、暫時置け！何故ならそれらは今後の君達の行動と勉学の如何によつてのみ結論付けられる可きものであるからだ。諸君の協力無しにはその価値も意義も無に等しいものであるからだ。

諸君、諸君もやがて子を持ち人の親となりそして古くなってゆく。丁度私のように。

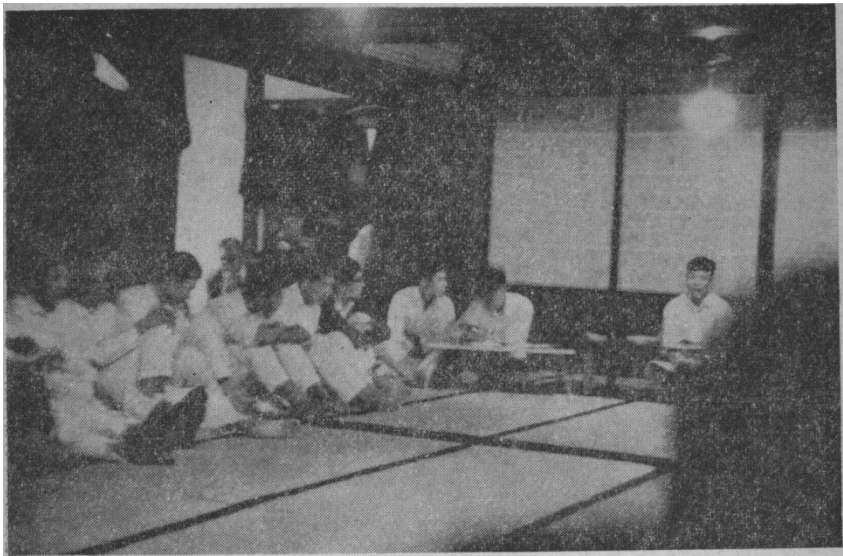
私は子を持ち人の親となって初めて私の親の真実の姿がわかった氣がする。反撥を感じ、反抗した親の慾求は実はすべて自己の失敗を愛する吾子に繰り返されたく無いからであり、自己の経験から最も有効適切であると知って教える道であった。そして今の私は、私の親がやった行為と同じ繰り返しを、吾子の反撥を感じながら切ない気持ちで繰り返している。

歴史は繰り返すと云うが、この愚なる繰り返しを諸君、諸君の叡智によつて断ち切つては戴けないだろうか！

あしおと・あしあと・期待

保坂忠信

鶴城の甲府中学には、「生徒控所」というのがあった。一年から五年迄の生徒の下駄箱が並び、南側が全生徒の昇降口でこれと向い合った北側正面は「生徒監室」であった。ここには体操の先生と教練の先生がおられた。かつぶくのいい血色豊かなドングリという愛称をもつ加賀美一平先生。（この先生は、甲中の名物で、何もかも、新入生のどきもぬいた。その、らんらんたる大きな眼、太い深い声、今も健在であるが、ドングリの愛称が示すように、一時は五合たべたというお話を直接伺ったことがある。柔剣道や謡をよくし、千葉周作四天王の一人、今福しん明の弟子であると自負された）軍縮で、陸軍大佐をやめ、短期の体育教官養成機関をでてこられたという高橋先生。（温厚な小造りの方で、その頃は珍しい保健についての話を「体操」の時間、木蔭などでなされた。からだをカードと発音されるので、「カード」というニックネームがあつた）お二人とも、ひざ迄のキヤラコズボンをはいて、大きな四角の火鉢を囲んでキセルを吹かしておられた。この型の大火鉢は、美咲に引きつがれて、会議室に残つ



ている。それから背中の中光った紺の詰襟服、高い襟だと思ふ、それをきちんときて、歩兵操典から抜けでたような一挙手一頭足の山下小文吾先生、名前迄こう書けるのは不思議だ。鉄ぶちの眼鏡に真赤な顔をきりつと立てられていた。山下先生はたばこを召し上らなかつたかもしれない、——この三人の先生方がいつもおられた。

この控所の壁には、「変更板」を始め、月謝納入通知からあらゆる公示がはられ、一学期の中頃には、校友会各部が夏休みのプランをかける。その中で、西側の真中の天井近くの壁に、「校友会誌」の原稿募集の紙がはられていたに違いない、中学一年生の僕の眼に、壁の位置迄はつきり記憶させてしまったあの「登音（きょうおん）」という文字の強烈さ、を思いだすからである。

お城の石垣は、ウルシの葉に掩われて、草いきれがする頃だったので、近づく夏休みのあしおとという意味に違いない。書もひかずに、自分勝手にソクオンときめていた。一年生をおどろかせる文学好きの上級生の高踏ぶりがこんな文字を拾い辞上げたのだろう。とに角、この視覚的印象には驚く。わが学年誌に、この「あしおと」の題名が採用されたときいたとたん鶴城の控所が僕の憶い出を占領してしまった。僕は鶴城の中学に入り、「御」咲町の「三層楼」で卒業したのだから、幸いにも、君達と、校舎的つながりはある訳だ。「登」は当用漢字にはないらしいが、「あしおと」が現われたのは、鶴城の心の亡霊であろうと、余韻であろうと、僕には異常な驚きと愉しさであった。鶴城の子も、美咲の子も同じなのだ、大正と昭和の時間の流れの中で、合流しているのだという気がしてくる。

春のあしおとがきこえてくる。「冬来りなば春遠からじ」「冬は去り春がきた」みなイギリス人の文章である。始めはシェレーの詩の一行で有名、つぎは今のクラウン・リーダーの前身のニュー・クラウン・リーダーの二巻の第一課の冒頭にてきて、ここで、「現在完了」というものを始めてわれわれは覚える。中学の英語は春と深いえにしがあろうである。冬の長いイギリス人でなくても、春待つ心は同じであろう。

今日の夕刊と一所に配達された二月最後の週刊「ニューヨーク・タイムズ」は、社説欄で、（自然を毎週取扱っているが）ザ・サトル・サインズ（ほのかなきざし）という随筆でキプロス解決、モスクワとコメコンなどの論説の中に、爽かさをふりまいている。「……ポブラやシナノキのつぼみは膨み始め、樹皮を守るヤニも暖い日にはしみだし、日当りのよい午後など、ポブラの茂みには、この香ばしいやにの匂いが強い。ブナ、ハコヤナギと共に、ポブラの小枝の皮も一月前よりも光沢を増し、山腹の南の傾斜のハシバミの茂み、それから冬中そこにあつたカワヤナギのネコはもうかすかに花粉をふいている……云々。」そしてこう結んでいる、「これらは微かな、いや一時的のしるしである。併し、二月の厳たる事実としてそこにあるのだ。このしるしは、くる日、くる目の天気を変えはしないが、来るべき変化は約束している。」

諸君の入試の日は大雪であつた、大雪も三月の一部であらう。本格的春へはただの一步、春のあしおとの変形にすぎない。もう、氷も北風も一時のもの、南風の日さえある。春の進行の徐々で、着実で、結局、素早いこと。

春は諸君の姿勢にもにている。二月十五日の一万メートルのスタートをきる時のあの勢いはげしき、溢れたダムをつつさる勢い。入学の時より、大きく遅しくなったなあと私は威圧を、一寸感じる。君達のははや、世界はせましと駆廻る世代である、一年生は頼母しいね、と校長先生がもらされる。

六月の親善ソフトボールゲーム、一年の先生軍は善戦つとめたが、武運拙くやぶれる、しかたなし。日のべになつてた七月九日の野辺山行き。十二台の大型バスが佐久街道をつつ走る、車掌さんの案内の口上や合唱で、一寸した修学旅行気分。太陽と霧、七分三分の高原には所々に牛がなき、一日をフォークダンス、フットボール、車座の雑談に楽しむ。この同じ高原は、北極星を仰ぐの合言葉の第三七回強行遠足の「野辺山本部」となるのである。午前三時五〇分、懐中電燈をもつて二年九組の望月君がまっくらな長い道をやってくる。併し、しじみ汁をのんでくれたのは、五時迄にやつと十人、霧の大群が某日に濡れて、やつと星が針葉樹林の上に見え出してくる。ここでは、ほやくも、冬の星座が頭上にかかげられた。北極星がやつと、みつかる。市場の方向に走る道沿いの林の上だ。北極星を仰ぎ乍らでてくるのはこの時からであつた。一年生はこの時も威力を発揮した。最終点中込まで八七キロを一年二八人、二年二〇人、三年二三人、野辺山本部四九キロは一年一三人、二年一八人、三年九〇人であつた。女子は一年野辺山本部一〇三人、二年八一一人、三年五三人、最終点（三十キロ）海之口迄、一年九人、二年二人、三年七人と、一年は女子一九人、男子五二人、計六四〇人がよく歩いた。前後したが身延山宿泊研修も、諸君の友情をあたため、亦ホーム・ルームの先生と、親しみを深めるよい機会を提供した。友情、男女の交際をかり、学習を論じ、青春のあり方について深く話し合う、またとない機会となつた点において意義深いものがある。その九月三十日の夜はしとしと雨がおりていた。校長先生のおともをして東谷七坊を廻つた。ホーム・ルームごとの七時から始まつた話し合いに、あるいは激しく、あるいは静かに論じ合つてゐる諸君の中に、ひとときを坐つて、感想をのべたりした。

十月一日も雨で、午前中は、この話し合いをつづけた。帰つてからの感想文の中で、I君はこのように述べた。「……眠れない儘にいと何人かそういう仲間がいた。……その仲間は以前には、自分と口をきいたこともない者ばかりだった。菓子、あめを食べることをすゝめられて、そのまゝにたべた。自分ももつていたガムをだした。……その翌朝、その仲間の一人が自分に二枚のせんべいをもつてきてくれた。この時ほど人間の心を暖く感じたことはなかった。この二枚のせんべいをもつてきてくれた人、この友人を一生の親友にしてもよいと思つた。」しゃべらなくても、心が通じる。身延はそのような親近

感をかもしだした。先生方も生徒の心の髄に触れるような感じがして、もつと早い時期にこの宿泊をもつて、学校の行事としたりどうであらうという意見であつた。

学業においても、春、秋二回の学力テスト、一月の基準テストを通してみて、その進歩はめざましいと思われる。学習態度が積極的で、予習をして教室に臨む態度もよい。答案の文字も正確できれいになつた。併し、余りよいことばかりは書けない。進歩が停滞したような人達がいる。入学当時より成績が目立って振わない諸君も少数いる。市外の一時間以上もの遠くからの汽車・電車の通学生の諸君が著しい上昇を示している、諸君の学習は、注意集中にかけてはいないが、夜半迄のだから勉強はきりかえよう。半ばの一〇分、二〇分の時間を利用してゐるだろうか。教科書外の教養書は如何によんでゐるか、そして、諸君の大学・学部の志望はどのようになつてゐるか、この春の休みはこれらの点について考えてみて貰いたい。諸君が卒業する四十一年度は、大学入試の激しさは頂点に達し、現浪合わせて、約五十五、六万人が志願する（只今は現役二十七万、浪人十四万）と推測されている。

アメリカでさえ、一九七〇年には大学が狭あいをつける。猫もしやくも大学へゆくなと警告をだしている。併し、競走意識の中で育つたのは諸君ばかりではない。故ジョン・F・ケネディ大統領の一家ほど劇しい競走意識をもつた一家はあるまい。ケネディ大統領の挑戦者は兄のジョーであつた、スポーツでも学業でもそうであつた。九人兄弟の五人の妹達でさえ、テニスにまけると泣いてコートを去つたが、すぐ、この兄達に挑戦して兄達を負かした。お母さんのロウズは、体罰の必要を信じ、ジャックや兄弟をなんどもビシヤリとやりました、と告白している程である。

君達とほぼ同じ年令、十三才から十八才（昭和五年一十年）迄はコネティカットの有名な大学進学の私立高校―ブレバラトク・スクールのチョウト高校ですごした。英語、歴史は中の上、ラテン語、生物、化学は低かつた。併し、ある日、木造しつくい粗末な寮の室から、学友と一所に父に手紙を書く「僕らもう無為にすごさない、ほんとうに決意しました。」成績は上昇する、プリンストン大学は彼の入学を認める。少年ジャックはこの高校時代にセルフ・アウエアネス（自己認識）を把握する。自己の確立である。自分の長所・短所性格を凝視して、生涯の方針を定めることが高校時代の課題であらう。それは大学進学と直結する。大学・学部学科の選定は、諸君が案内書で調べ、父兄、先生、先輩と相談して出来るだけ早く決めるのがよい。とに角、高校一年は終りをつけ、もはやこれを繰返すことは出来ないのである。時は繰返さないのだ。

冬は終り、春がきた。ほんとの春がきた。諸君がこの「あしあと」を手にするのは、三月の末、四月はほんのそこにていてゐるだらう。さあ、諸君、新生生の諸君、友情けスクラムをもつと固めて、一人一人が個性にみちた自己確立に精進しよう。（二月二十四日）

1 組

その時

コンクリートの高い塀が

広い空間をとりこにして居た

豚小屋には

ヨークシャーがけだるく眠る

まばらな毛なみに

金粉をまき散らす

六月の太陽があつた。

二号室の旅人達は

かんまんな歩調と

空墟な瞳を持つて居た

これは、けつして 集団では無い

乳白色のやり切れない群像である

この旅人達は 一体

何処へ行こうと云ふのだ

白ペンキの調理室が

まぶたに泌みる

と、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、……

独房のしわぶき

そして又消えた。

旅人よ、旅人よ、

貴方達にとつて

コンクリートの塀は

何故にある

ヨークシャーは眠りこけ

まばらな毛なみに

金粉をまき散らす

六月のある日の

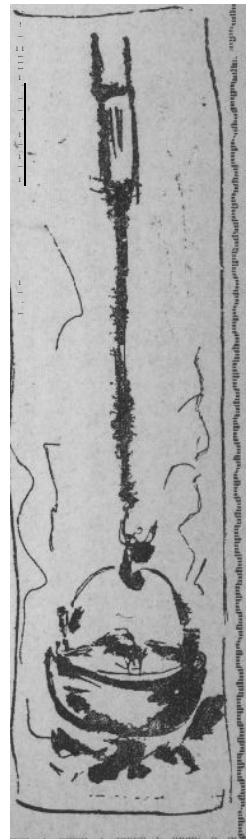
ひるさがり

…… 須 藤 獏 ……

孤 独 の 群 像 ●●●……………

わがクラス 1

坂 本 まさみ



私達の一年一組はバライティーに富んでいる。その筆頭は芸術家の獏さん。私達は先生から芸術というものを多少ながらも知った。時々大きな穴をあけるが、なかなか憎めない。その獏さんに続いて門下生がわんさという。彼らはそれぞれ興味ある個性を持ち、楽しんでゐる。それらを深く観察するならば、時は尽きる事を知らないだろう。私達の教室もなかなかのくせ者だ。教卓の見通し、特別あつらえのゴミ箱つきこし板、ガラス張りのロッカー。こんな教室の方がかえつて落ちつくというわものばかりだ。

第一の思い出といえば、やはり身延山だろうこの時の楽しさは、今でもありありと思ひ出す事が出来る。余興で逆立ちをした人もいた。あと少して、この一年一組も解散となるわけだ。一年間という年月がこれ程短かったのもめずらしい。それ程みんな夢中だった。

この教室でみんなが今考える事、それは、「もつとお互いに高校生活を話し合える時間競はしかった。」ということではないだろうか。

2

内 田 憲 正

ここで諸君達に各教科の先生方が見た一組を紹介しよう。まずは、おほめのおことばから

全部の先生方がおっしゃっていたが、全権大便としてE先生のおことは、

「そうですねエ、とても明るいクラスですヨ。勉強もよくするし……。だから成績もあがつてきたんじゃないんですかア。」

外に個人的には、ある先生（匿名希望）がおっしゃっていた。

「授業中ですが、まとまっていて静かです……。とてもいい組です。ハア。」

M先生は「質問がよくでるなあ。」

しかし諸君。ここでうぬぼれるなよ、

美德はみずからを正しいとすることによりみずからの品位を落す（ヴォルテル）

あんまり図に乗るといけないから、ちよつと悪口を言つてもらつた。

まずM先生から「そうだなあ、教室がきたないよ。掃除道具なんかもちらばつてるし……。」

色彩が豊富な時、形も充実する（セザンヌ） たとえ教室はオンボロでも、掃除ぐらいしつかりやりたまえ。自然と心が豊かになるぜ。

英語の先生が二人ともこぼしておられた。「予習が足りないですなあ。」

有レ備無し愚、たまには予習して来て、デツカイツラして先生をにらんでやれよ。

又ある先生（匿名希望）は「積極性が足りないです。」

そして最後にK先生が、「勉強はよくやるがネ、なんだか冷たい感じがするよ。古典を教えているのが一組だけだからかもしれないがネ……。」

おつと、あんまりガツカリするなよ。S先生は逆の事をいつておられ、たんだから。終りにあたつてH先生は「二年でもこんなクラスを持ちたいですね。」

が

H先生は「なおいっそう努力するように。」

数学のK先生は「一年の基礎を土台にして反復演習に依り、ますます実力養成して、物の

見方、考え方の科学性と初期の目的が達成されるように。」

生きる技術とは一つの攻撃目標を選び、そこに力を集中することである（アンドレ・モロア）

諸君、一年間手をとり足をととり（あつこれは失礼）して教えて下さった諸先生方に感謝しなさい。



私の一年間

志村 満喜子

これから書くことは、私の一高での高校生活の最初の一年間の思い出である。

さまざまな重荷を背負い、若くけわしくそびえる山の頂上を目指して登山を始めた。

山道はさまざまであった。曲がりくねった道もあれば、なだらかな道もある。その中で私がこの山に登り初めて歩いたのは、白く斜めに横切る道である。その名前は、打ち切りと呼ばれている。そして私がこの道を歩く時、せめてもの優越感を味わったものだ。

汗をふきふき、荷物の重さにフーフーいながら歩いていく自分の前を、もくもくと歩みつけ、頂上目指し前進を続ける人々、汗も流さず、息切れもしない友人を見た時、私はこんな言葉をよく思い出した。「天才とは九九%の汗と一%の靈感よりなる」そして深呼吸をし、のどをうるおし、又歩き始めるのだが、道中私たちは身延山のある坊で一夜をあかした。この時ばかりは荷物もおろし、おもいきり背のびをした。山道では言葉をおかわ

すことのできない友達ともこの宿では語り合えた。

十二月五日の夜、私は夢にも思わなかった悲しみの道を歩んだ。そのままへなへとすわりこみたいような気持ちであった。まわりの山々に向かって大きな声で頂の名を呼んだ。でもいつもの優しいこだまは二度と聞えなかった。その夜仰いだ星空はとても美しく悲しく見えた。こうしてやっと三分の一の高さまでたどりついた。ふり返ってみると曲がりくねった道がふもとから続いている。私の足で一步一步踏みしめて来た大事な道だ。リュックサックの中には数々の思い出をつめた。頂上はまだ遠い。しっかりと荷物を背負い、靴のひもを結びまた歩き出そう。でも今度はリュックの中の食料は少し減らそうと思う。「スマートになる道」という私にとってあがれの道を歩まねばならぬから。

ある日の日記を読んで

杉山 協子

去年の八月八日の私の日記にこんな事が書いてあった。

「星頃、クモが一生懸命に（そう見えた）巣

ひとつも出ていなかった。細い路地に建った電柱が、コーヒーをこぼしたようなその路地を照らしていた。淡い霧の中をぬって流れる風が頬を刺す。重ね着したオーバーの袖を、ちよつとまぐった。時計は九時を示していた。「さあ、終車に間に合わない」と大変だ。」私の足は、俄然、速く動き出した。ある時は強行遠足のように、又ある時は、一万メートルのように。

はき古した私の靴。「はいた」のではなく「踏んだ」と言った方がはよいような、それでいて愛着の念を込めた私の靴が、その時ばかりは、妙に邪魔になった。強行遠足の時はまだよかったが、一万メートルとなると、もういけなかった。「バクバク」足から離れるような音がする。重い。足が痛かった。

ようやく三つ角に出た。商店は、もう閉まっている。さあ心配である。「私の時計は遅れていたのかしら。それとも、まさか止まっているわけじゃあるまい。『もし終車に乗れないと、お前、家まで歩くんだよ、人は通らないよ。月も星も出ていないよ、どうするんだい。歩いて帰るかい。』」心臓が速くなり出した。もう一つ角を曲がって、私は驚いた。もうバスは止まっていた。ひとり、ふ

を作るのを感じて見ていた。放射状に張った糸から糸へさほど身軽にでも、といって鈍重にでもなく飛び移る。早く、機械的に、

『もくもく』という表現が、・ぴたりするような様子で作っていく。基になる糸を張るのはどんなに大変だろう。でもクモ自身そう感じているだろうか。しばらくの間この素朴な光景に見とれていた。クモに意志は無いだろうが、そのもくもくと仕事をする姿に感銘を受けた。

そこを離れ、すぐ後再びそこを通った時は巣のことは全く忘れていたのでうつかり頭をひっかけてしまった。できたばかりの巣は全然目的を果さず、開いたこうもり傘の布が骨から外れるような情無い状態になっていた。クモは本能的に作ったのだから本能的に修繕する。がっかりするなんて感情はない気がすると自分に言いかけたが、さっぱりしなかった。同時にすぐ作り直すクモの根気に感心していた。今しがたクモにそんな根気などないと考えたのに。『一寸の虫にも五分の魂』というのは本当だろうか」

この時の自分の気持は今でもよく思い出せる。ふと島木健作の「赤蛙」を思い出し、日記にも書いた。感情など持つと思えない動物

たり……お客さんが降りていく。私の足は、一万メートルになった。ばくばくした靴をひきずりながら、一万メートルは、なおも続いた。最初に降りた人が、私を見て、車掌さんに大声で言った。「ちよつと待ってやって。」あやうく乗り遅れるところだった。床に入ってから、私の頭からは、このことばが離れなかった。「ちよつと、待ってやって。」、「ちよつと待ってやって。」しばらくは、興奮して眠れなかった。

から意志のようなものを感じる点では共通しているかもしれないが、やはり私と彼の場合を結びつけて考えるのは無理だと今は思う。それよりこの時さっぱりしなかったのは、クモにすまないという気持ちもあるが、感銘を受けてもすぐ忘れる自分が妙に腹立たしかったのだ。私は良いにつけ悪いにつけ根気がない、物事を最後までできんとできない。編物や勉強を始めても、精神を集中し、やりとせせない。くだらない事だが、バスなどに乗って道路の水にぬれたタイヤの跡が消えるまでじつと見続けようと思っただけだ。気がついて道を見ればとくに消えている。こんな事だから、目的に向かってもくもくと休みなく働くクモに感心し、知らぬうちに恥じていたのだろう。そしてまたもや、その感銘を持ち続けるにあきてしまった自分を恥じ腹立たしくなったのではないか。しかもその時は、まだこの事に気が付かなかったのだ。

ちよつと待ってやって

堀内 成子

霧が、かかっていた。空を見上げた。星は

持つ。しばらく真空状態になる。とつぜんだが一枚目をまくる。するとそれに続いてわれ先にと、その昔は、まるで波があわをたてて海岸へ「ぎあー」と海岸へ打ちよせるように……。後はまた波がひいたときのような静かな状態になる。しかしこの静かさは海岸のそれとはまったく異なる。この中には激しい闘争がある。これは問題と鉛筆の競争である。スキーにたとえてみると、ちょうどスキー競技のまっ最中である。途中で転倒する者快調な速さで進む者もある。途中でむずかしい問題にでくわす。だれもここであせつてく。しかし、ここであせつてはどうにもならない。ただ時計の針だけ気にかかる。あせつてはだめだ、あせつてはだめだ。と自分にいきかす。もう少しで制限時間になる。血が頭へのぼる。胸が非常にあつくなってくる。問題があと一つ残っている。時間は二分しかない。あせりほとんど増していった。そして頭が何だかおかしくなってきた。答を必死でかく、その時チャイムがなる。その時いっぺんに体じゅうのあつきがとれる。このような緊張の連続をくり返し、おれ達は入学できた。その中の一人としておれは今、ここの一年一組の教室で勉強している。また冬の柔らかな

ある秋の夜

志村郁造

ある秋の夜、私は家に向かう。アスファルトの道路を自転車で……。所々にある家々はかすかな光を放ち、その車がつめたく走り去る。夜十時過ぎともなれば、星あのかくさんの車を走らせた道路はまったく変っていた。だんだん調子がでけると歌を歌った。しかし急にやめ後をちよつと向いた。だれもいなかった。また今度は大きく振り向いた。同じだった。また歌った。しかし困りの桑畑は黙っていた。疲れているのかな？おれは、空をみ上げた。星はあった。自動車を通り過ぎた。また静かになった。道のまんなかに出た。右へ左へと大きく自転車をつねらせながら走った。この道はおれの専用道路だ。頭の中は、そんなこと関係ない……。ただ聞えるはズボンのすれる音。黙々とペダルを踏みつつける。空を見上げた星は……。

今日は実に寒い。ハアと吐く息は、冷たい大気の中に消えていく。冷たい、肌を突き刺すような風が顔といわず、胸といわず容赦なく吹きつけてくる。風のせいだろうか、ペダルを踏む足は心持ち重く感じる。しかし朝早くペダルを強く踏みつける気持は、何ともいえない、さわやかな気持ち体がの中を走ってくる。この一こぎ、一こぎが不安と期待に入りまじった将来につながっているのだと思うと何だかすぐつたいような気持ちになる。そんなことを考えながらきょうもペダルをこいでいる。春、夏、秋、冬、こうして三度くり返す年月を通う道である。

平均 一組

成瀬俊久

一組のこの一年間のある一日を紹介しよう。

ある日の当番日誌

神津幸哉

一校時（地理 中村先生）
三学期終り頃のきまり文句。
「あと授業日数も……日間、残り少ない日数を胸に夢は羽ばたく遠い空——それはそれとして。」後は例によってあれこれと話題はとぶ。その間にドイツ語の講義が交る。また口の早いのでないね。地理の時間転じて速記の練習と化す。めまぐるしいたならありやしないね。まったく。そういうこと。
・二校時（古典・橋田先生）
「今日は×日だったな、はい×番」は何形。」
「はい、連体形です。」
「ほんとかい。」
「アレツ、連用形だったかな。」
「なんで、なんで、なんで、どうして、どうして、どうして。」
「アツ、終止形です。」
「アレアレ。」
「已然形かな。」
「もう一度良く見てみろよ。」

一校時地理。中村先生、ていねいに出席をとり、快調な講義が始まる。そこへ我等のホーブ、遅刻常習犯があらわれる。こうなると、遅刻ぶりもみごとである。三校時の休み時間、教室で「じゃんけん」が始まる。中食（昼食は別）のパンを買ったためだ。負けた者はみじめである。売店の前で生存競争の激しさを思い知り、十数個のパンをかかえてきて自分が食べられるのはただ一つ。

昼休み、待望の弁当である。（既にないない）また、多くの一年生は既にご存知と思うが一組独自のルールによる卓球大会が始まる。女子は非常に勉強好きのようで、休み時間さえ席にすわって一生けん命やっている。（授業中は？）

一時十五分、我々の最も尊敬する須藤先生がHRへ登場、先生と顔を会わせるのは、多くこの一回だけである。

放課後、いっせいに掃除をはじめる。（終わるのがまたはやい）二組の活発な掃除を見ても我々の当番は何ら影響を受けない。ただ「わが道を行く」のみである。

「呆然形……」
「おいおい、やだよ。」
「命令形じゃないでしょう。」
「ガチョン／＼」（どれか当たりますよネ）
・三校時（英語訳・猪股先生）
「ハイ、ハイ、神津 ゴンパン （五番をやってみますか。）」
「わかりません。」

「ハ、やつぱりむずかしいからね。教師がこういう事言っちゃいけないね。やさしいですよ。うーん。むずかしいですねエ。」
理解に苦しむよ。洒落ばかり言っていて、それにアインシュタインに良く似てるんだ。

・四校時（生物 日向先生）
僕達が教わっている唯一の女の先生、鐘が鳴ると職員室から走ってくる。おちおちしてられないよ。この先生の授業は家庭的（？）なんだ。それに女子の味方はかりするんだ。（チクショー。一男子代表——。）

・H・R（須藤先生）
昼休みが終ってホーム・ルーム。
「H・R」のバクサンこと須藤先生（逆だったかな。）がゆうゆうと入ってくる。夏でも教室では背広を脱がないのが自慢の先生、よく伝達事項を忘れて隣のクラスへ聞きに行く

隣のクラスの人が言ってたよ。

「君のクラスの先生は礼儀正しいね、毎日あいさつに来るよ。」

・五校時（地学）・小林先生

理学博士である先生は、ダブルの背広にチヨビヒゲをはやして教壇の上でよく、

「エー、アー、ゴホン、ウン。」

と発声練習（？）をやる。質問すると紙が黄色くなった本を持って来て説明してくれる。

熱心だけど——調子狂っちゃうヨ。

・六校時（数学（代））・清水先生

青い背広に茶色のクツ。背中を少し曲げて黄色のムチで肩やズボンたたきながら（これはもう癖になっていて、おかげでズボンはわりときれいなんだ。）やってくる。このムチがまた便利で杖以外なんの役にでもたつ。（時にはこれでコツンとやられる）

「先生ある所、必ずやムチあり 神津——。」（？）

もう一つ変った癖（？）があつて中位の声で答えると聞えないが、小声で言つても悪口は聞きのがしたことがないんだ。（キビシイ線いつてるよ。）

掃除状況——優——

そんなことないだろうって。トンデモハッ

又夕日を深く考えて見つめるようになった。

この目を思い出して僕は今夕日を見つめている。

『抒情小景』

渡辺弘之

私は私の橋の上に立つのが好きだ。長い古い橋があつた。私がそこに立つ時、いつも北風が私のほおを打った。私はそこから俗界と自然とを見た。俗界は風景であり、自然は私の心情であつた。思い出と未来を思う時、それらは三角形となつた。川原には雑木林と、すすきと、竹やぶの間に水が流れていた。今木枯れの中で上流の一点より発し、急流の岩波となつて、私に到る水はこれから大河の漣となつて行くのだ。彼等はよるべき漂白の旅に出発するのだ。私は彼等に心の心情を託す。彼等が大海の漂流者ならば、私は人生の漂流者である。彼等の悲哀が私を刺す時、私は私の孤独に襲われる。ああ何と世の中は無情なことだ。私の人生もこのようなものだらうか。

私は彼等を愛している。私の身内だから。

ブン歩いても十五分てんだ。僕達のクラスは真面目で、凡帳面で、そして……あんまりならべると信用されないからこのへんにしとこらう。

夕日

横森 万

西の空に夕日が沈んでゆく。僕が沈んでゆく夕日から感動を受けたのは中学二年のある秋の日だった。その日は一日中、憂うつだった。夕方、ふと西の空を見ると沈んでゆく夕日が目に写った。その時の夕日はなぜかいつもと違ったものに見えて、僕を強く引きつけた。僕は夕日を見つめた。頭の中を色々な考えが駆け回っていたが、最後に夕日からの感動だけが残った。そしてその感動から偉大な自然への畏敬の念と自分の小さな存在の認識が湧いてきた。そして何か胸の一部が空虚になったような漠然とした寂しさが襲ってきた。

僕はこの状態から裕然とした心の状態と明日への意欲、希望を得ていたことに気付いた。僕自身はこの日から今までの僕の考え方が一変し進歩し始めたと思つてゐる。

この日から僕は自然を身近に感ずるようになった。

私の青春は前進だけなのだ。ああ日が沈む。

自然は大きかった。小さな私は永遠の幸を見つめて立つてゐる。

それから夕闇の中に私は溶けこんでいったたった一人だ。

雪におもう

芦田川 きよみ

捨てられるように降ってくる雪。

例えば、うすよこれた紙屑を空から落とすように……。それは緑の木に、こげ茶色の大地の上に、道端に積み上げられたゴミの上にまるで汚れをかくすように真白なおおいをかぶせる。しかしその上に人は薄茶色のレン炭の灰を散らし、白を白でなくしてしまう。子供はそれを固く握り今までと違う透明にする。その透明は決して汚れないものではない。白の上には、靴やげたの跡がつき、端の方にかき集められたそれには、まるで不安でもあるかの様に、黒が、そして茶色が広がっている。

陽が照ればそれは縮み、雨が降ればつかの間消えてしまう。何とあつけない運命だらう。



歌と句

清水陽子

雪のあした

木々がみな真白き花をつけし朝

空の碧さが美しく映ゆ

淡雪のやみし庭に立ちてみる

くろき土まに春のいぶきを

水ぬるみ池の水のとけまより

生あるものと赤き尾ひれを

制服に誇りと希望いつばいに

歩みて流る日目を惜しみて

刻みゆく時の早さに目を見はる

抱きし夢の心せつなく

横内 明子

早春

雨だれの音に降るとぞ思はるる

けぶるが如き春の雨かな

竹やぶのかげに芽ぐみしねこやなぎ

一雨ごとにふくらみを増す

笠井 貴久男

晩冬の川辺に生える枯れ草の

根に秘めたるは新たな命

元旦の空あかねさし新たな春

真紅の太陽今のぼらんとす

通学の車窓にうつる連山の

雄姿きびしく天にそびえる

数野 清治

冬の部屋にただ一腕のチューリップ

はらりと散りて茎衰れなり

雪白き、八のこがらし身にしみて

われはこたつをはなれがたし

石原和広

雪の湖水も張らず舟一そう

私は雪が降るといつも思う。白いものはいつまでも白く残しておきたい、と。

仲間

岩 間 一 子

雨の日に考えたこと、それは、「仲間」ということ。薄暗い天空から地上めがけて我先きに飛び下りてくる雨粒。トタン屋根にぶつかって、するすると滑り下りてくるお前。突然、支えがなくなり、悲鳴をあげたお前、それと同時に下へ其逆さま。そしてお前は何かへ飛び込んだ。びっくりしたとたんに、お前は喜びで飛び上がった。そこに、お前の仲間達がいた。お前はひと安心。また一人お前の仲間が飛び込んで来た。やつぱり同じ様に、びっくりしてそして嬉しそうに飛び上がった。仲間はいいもんだね。やがてお前達は方々から仲間を集めて元気よく行進していった。「仲間」、ほんとうに良いものだね。

人間の機械化

近藤 久子

先日、教科書で人間が機械化する事は「人

類の発展の為に思わしくないという事を学んだ。ところが、私は機械という事は人間が感情的にものを考えないことであると解釈し、人間の機械化を肯定する。

もし、ある人間が物を生産する時に、あまりにも人間的になりすぎて注意力が散漫になつてしまつたらどうだろうか。危険である。それにより生産が減少する。これこそ、日本の人類の発展において喜ばしくはない。職業に従事している際には、人間的なものは一切忘れ、その事だけに全神経を集中することが必要である。しかし、人間である事をすっかり忘れてしまつても困る。家庭において、友人とのつきあいにより、人間性を回復し、より良い人間になるよう努力すべきである。

人間は、ある意味において、冷たさと暖かみを持つ二重人格者であらねばならない。

心がけ

舟久保 良子

毎日、毎時、毎刻、自分の周囲をめぐって自分の心の姿がいつも美しくあるように、氣をつけなければならない。

我々のH・R・T

深 沢 みつ子

先生が教壇に立たれると私は一つの期待を持つ。今日はなんの話が聞けるのだろうか。あまり読書をしない私にとって先生の話は、いつも思考の道標となる。また、美術をやりパイオリンをひき、小説まで書くその広い分野にたち、中国・欧州と外国を見て来たその多くの経験から生まれる先生の話は、私をいやクラスのみんなを勇気付け、やる気を起させた。先生の話ぶりといつたらその鋭い瞳で私達の心をとらえ、私達をいちいち納得させてゆく、そしてユーモアに満ちた話は決して私達を飽きさせない。時にはその話しぶりにのまれてしまう事もあり、また理解し得ない事もある。しかしこの「H・R・T」の内容にわづかながらも自分自身を見だし、そのエネルギーシチュな話ぶりは、国語でならう以上に「話し方」について教えられた。

いつかクラスに起きたトラブルによって、みんなは憤り、冷たい空気がクラスを流れた。みんな不安だった。しかし、冷たい空気を一掃し、誤解の輪を解いたのは話し合いだ

った。話し合う事によって私達はあるくなつた。この話し合う重要さを暗示してくれたのは先生ではなかったかと思う。それ以来、私達のクラスには話し合いのグループができた。安心して話しあうみんなの顔は明かるい。グループの話し合いは悩みや問題解決の広場である。偉大な芸術家であると同時にすばらしい話家でもある先生と、話し合う私達。

我がクラスは話し合いによって平和解決の道を兄いだす国際連合である。

先生のシンに触れた話は、私達を哲学の世界へ、芸術の世界へ案内し、真理の探求に私達をしむけ、その発展に期待をかけられている。

嫌いな物

中村 光江

「世の中で一番嫌いな物は？」 「蛇」即座に私は答える。大ていの動物は好きであるけれども、どうしてもあれだけは好きになれない。「蛇」という声を聞くと無意識のうちに逃げるのだが、一瞬の後、意識を取り戻すと、又見に行く。嫌いなのでよく見たことはないのだが、粘液で包まれた丸い黒っぽい、

ひものような胴体に、円形か長円形のような斑点が、背にあつたり、モザイクのような皮で包まれていたように記憶している。その端には、お玉杓子のような『ぶくつ』とした頭があり、そこにある二つの神秘的な目は、神にたとえられるだけの力に倍すると思つた。

ある時私は、蛇の目を長時間よく見た事があつた。その時蛇も私の目を見た。その日は丸かつたか、三角だつたか全然覚えてない。が、日頃から『早く退化してしまえばいい。』等と思つている私には、ぎらぎら輝くその日に『生きる権利』と『強い生命力』が感ぜられた。そしてその生命力は、際限のない世界へ私を誘い込んだ。その中のその物の生命の形は、我々のそれと何ら変わりなかつたような気がした。

私は、『この蛇の生命力だけが、人間という生命のない物体に入つたらこの蛇は、即座に我々のような人間になるだろうか？ もしなつたら今私は、蛇の生命を持つ人間と話していたかもしれない。もしかしたら私だつたかもしれない。』などと考えると、急にこの蛇が可愛相に思えた。『この蛇の生命が蛇という物体に入つたからこそ、蛇になつたのだ。そして今こんな石垣に巣を構えているのだ。』と思つた。しばらくして蛇は、頭を下に向け緩やかなの字を書きながらスルスルと石垣の間に入つていった。

喪神

須藤 獏

不死鳥よ

そのまなこを

鉛鋳炉に投げすて

わたしに

季節を返せ

不死鳥よ

その翼もて

黒い太陽の下に帰れ

もはや

わたしには

休息が必要である



童 話

猿の恵利子 匹崎 二矢

むかし、むかし、ある山に働き者の猿と怠け者の猿がいました。働き者の猿は、いつもかけずり回って食物を集めては、穴の中に貯えていました。怠け者の猿は、いつも木の間を飛び回り、木の実を食べ飽きると寝そべっていました。

あの春のうらかな日、働き者の猿は怠け者の猿に言いました。

「おい、お前はこの世で何が一番好きなんだ。」

「うん、俺は遊ぶ事と寝る事だ。」

「ほほう、遊ぶ事と寝る事か。なあんだ。」

「なんだと、じゃお前は何が好きなんだ。」

「俺は働くことだ。」

「へえ、お前はばかだなあ。働いてばかりいたら、楽しむ時はないじゃないか。」

「俺は働いていれば、いつも楽しいんだ。」

「俺の機械体操を見てみる、このすらすらとし

た腕を見ろよ。お前のひん曲った腕とは比べものにならないよ。」

「このひん曲った腕が、この冬中腹一杯食べさせてくれた。あの気持、楽しかったなあ。」

そんな口論をしていると日がつつぷり暮れて、月がほんの巧と木の間から上って来ました。猿たちは自分の穴へ帰って行きました。

夏になりました。雨の降らない夏でした。

草も木も枯れて、猿たちの食物をみのらせることができず、谷川の水も干あがつてしまいました。怠け者の猿は谷を幾つも越えて、遠くまで草や木の実を捜し回り、やつと腹を、ふくらませましたが、いつも腹ぺこで走り回らねばなりませんでした。

そんな日が何日も続き、体も弱ってききました。働き者の猿は春のうちから貯めてきた木の実を穴から取り出してきては、涼しい木陰で食べていました。穴の奥には果実や豆がたくさんありました。

秋の気配がはい寄ってくる頃には、怠け者の猿はべっしやんこの腹を抱えて、喉をヒュウヒュウさせながら仕方なく木の根をあさって、うろつき回りました。もう機械体操どころではありません。死んだほうがましなくらいでした。そんなある日の夕方、怠け者の猿

はかすむ眼をやつと開いて、岩や木のつるをさけながら山を降りてきました。まだ自分の穴まで、谷を越えて行かねばならないと思うとすつかりへたばつてしまいました。

その時目に赤い火が入ってきました。ふもとの百姓の家の灯でした。

猿はびつくり仰天しました。いつの間にか里へ近づいていたのです。あわてて又山に登り始めましたが、足には力がありません。目はいつそう見えなくなり、手さぐりで木につかまり、峯を越え又降り始めると転げ落ちてしまいました。

ふと気がつく働き者の猿に手をひっはられていました。「おいどうした。こんなかっこうで。」

「すまんが何か食べさせてくれ。腹ぺこだ。」働き者の猿は怠け者の猿を自分の穴へおぶって連れて行きました。そして腹一杯食べさせました。元気づいた怠け者の猿は自分をとりもどすと、春の日の口論を思い出して、大変恥ずかしくなりました。すらすらしていた腕も、ばねのようにはずんだ脚もしなびてみすばらしくなっていました。

怠け者の猿はやつと聞こえるような声で、「俺はお前に降参したよ。働くことがどれほどよいかわかったよ。」と、言いました。

詩



帰宅路

おれは歩いている。

目の前には蛸が飛び、

左右に稲の穂が、

重そうにうなだれかけている

その中を、おれは歩いている。

ふと空を見上げると

其赤な夕やけが目のおおいかぶさり、

今さらのように

大自然の凄さを思わせる。

都会では味わえない境地に立って、

おれは思いきり自然にひたりたくなった……。

まるで大自然の中に吸い込まれるように

足どりも軽く

おれは歩いている。

中山高春

春

うらかな日。

明るく、さわやかな日。

一人庭に出て、おもいつき深呼吸する。

新鮮な暖い空気で胸はふくらむ。

庭の隅には陽炎が燃えたち、

草花は淡い緑で咲きみだれ、やわらかい

日差しをうけている。

小鳥は、青空を、楽しそうにさえずりながら、

自由気ままに飛び回る。

地上に降りて、餌を拾うものもあれば、

高い梢にとまって、あたりの景色を眺め

ているようなものもある？

遠く連山には、まだ、雪は残っている。

近くには、新緑に包まれた山々が、陽光

を浴びて接近しているように見える。

どの山にも、厳しい冬を貫いて、穏かな

季節を迎えた喜びが感じられる。

うらかな日。

明るく、さわやかな日。

一人庭にでて、春の喜びを感じた。

中 沢 保

オレと生命

オマエは何故オレにつきまとうのだ
小さな……汚れきった……このオレを
オマエはどうしようというのだ

高屋れい

小さな……汚れきった……このオレを
オマエの世界に誘わないでくれ
そんなにいたわらないでくれ
そうでなくても苦しいのだ
小さな……汚れきった……
このオレは

遠い昔 真白い雲の上を
水晶玉の様な心のオレは
歩いていた
オマエの
すべてを知ろうとして
考える事に喜びを持って

だが オレは
オマエをよく知る前に

心にいくつかの……
傷をおってしまった
オマエはまだオレにつきまとうのか
こんなに小さく……汚れきってしまった
オレを……
この上 どうしようというのだ

二十分

鈴木保彦

飛び降りた ベッドから
あ、又八時十二分だ
洗顔／ 食事／
ボタンの五つは多すぎる
あの角のとび出た石に触れた右足の
感覚もきのうと同じだ
そして校内、教室につく
一分前／
このあわただしい二十分
当分おれの身辺から
離れないだろう

真夜中

中林源吾

真夜中に
ふと外へ出た
陰うつな風が
ほほをなでていく
空はどんよりと
黒い雲をいだいて
頭におおいかぶさるように
野良犬の遠ぼえ
夜霧の中に
ただ街頭の裸電球だけが
一人孤独に
立っている

野辺山高原に行く

中村悦二

歩く
紅葉の野辺山高原を。
紅葉の木立を貫く

成長

広瀬和江

この小さな部屋に、
私の生命としての喜びが充満し、
オレンジ色に輝く。
ある時は悲しい薄紫の霧に包まれる。

長い間苦しみ、悩んだ心は、
やがてその殻を破って飛びだしてゆく。
喜んで笑い、
悲しんでは泣いた私の心は
殻を破って飛びだしてゆく。
さなぎから蝶へ、さなぎから蝶へ。
それを目指して成長してきた私の心は、
春を前にして
殻を破って飛びだしてゆくのだ。

君に望む

内田 憲正

君は！。
悠々と大地に向い
黙々と踏破せよ
荒涼たる雪原に
徳義の灯をともし
君は 一。
悠々と天を仰ぎ
黙々と進展せよ

冬の朝

成瀬 俊久

寒い
鼻の先が赤くなっているのがよく見える。
まわりの人が皆僕の鼻を見ているようだ。
息を自分の鼻にふきかける。
鼻の先があたたかくなるが、色は依然として
．．．．．
まだみんなの目が気にかかる、
まわりほ霜で某日なのに、
なぜ僕の鼻は赤くなる。

2組

楽しい時

小林 美和子

机に向かってぼんやり山や野原のことを思
う時が一番楽しい。又きのう登った山や、お
とといとびまわった高原のことを思い出して
思わず一人笑いするのも何ともいえない楽し
いひととき。

春のレンゲの原っぱを仁ちゃんにおいか
けられるのもうすぐ。あの小っちゃな両手で
あった／ あった／ ってたんばぼのつぼみ
をとってしまえそう。ねんねしようってまっ
かなレンゲの花の中をころがり回るのをお供
させられそう。＃お手でつないで野道をゆけ
ばトントン＃、ちよろちよろ流れるまつ青な
水の傍をちよこちよこ仁君と歩ける春もも
うすぐ。



白い花

保坂 とし子

白い花
あまずつばいとおりの花
きょうもひとりで咲いている花
いつもひとりでさけんでいる
生きつづけたい
美しく生きたい
せいいつばい生きたい
あの花はひとりで
きょうも静かに咲いている。

夏の高原は楽しかった。狭い、身の丈程の
雑草に回まれた野道を「奥の細道」気どりで
歩いた時。激しい草いきれと暑さで思わず木
の下にかけずり込んで、友達に引っぱり出さ
れた事。皆と歌って、足並みそろえて登りつ
めた広い野原は私達だけの御殿となった。お
みなえしやあざみがあつた。夢中でつんでい
た時＃花がかわいそう＃と姉さんの声。素直
に先輩の声をきいて少しばかりのあざみを湿
ったハンカチにくるんだ。ちよつととげの痛
いあざみをかかえると、大きな深呼吸をして
いる姉さんのもとへかけ寄って＃この青い空
気をかんづめにしていこう＃っていう。姉さ
んのびつくりした顔。思わず息がつまんだと
逃げまわる私をつかまえて絶対放さなかった
姉さんの大きな腕。今はビヨンビヨンはねま
わる仁君を追いかけて、やつとつかまえてに
っこりしている姉さんの大きな腕だった。

手と手

雨宮 由貴子

「洋食の席上でAがフィンガーボールの水を、飲み水とまちがえて、のんでしまった。その時同席のBはそれが何であったか知っていたのにAに注意してやるのでなく、Bもその器の水をのんでしまった。Aの立場を考えたらBこそ本当のエチケツトだ。」その友の話はどんなものだろうか？

中学生のころ先生がおっしゃった「私達の友達はただ一緒に行動していくための友達です」と。自分は考える。友達とは集団生活を営み、人間形成のためにのみ必要なのか？

最近こんなことがあった。「人間はどこまでも自分の意地を通すものだ。又それができるのは友達だからこそできるのだ。」という事を聞いた。そのわがままを友達から通すのか？それが人間なのか？私は悲しかった。そんな事を考えていたのが私の友だったのか……。あまりにも考え方に違いがあるが、ぎたのだ。同じ環境で生活していくのだからお互いにゆすり合い、温かい言葉をかわしながら生きていくのが本当ではないだろうか？

暗闇

浅川 一也

「パチツ、パチツ。」電灯の火を消した。室中が真暗になった。ほんの少しのすきまからさえも戸外の偉大な暗闇が満ちてきたかのように。今日一日の生活を葬るかのように。静かに忍び寄ってくる。窓からもれる一すじの淡い光。月も出てないのにさしこんでくる僕の明を導くかのように――。急に意識がぼんやりしてきた。そして風のように。一すじの光はぼくの視界から消えていった。

我が決断力

吉岡義博

中学三年の時の事、ふと見た雑誌に速記のことがのつていた。そのころノートをとるのに苦心していた私は速記に大きな魅力を感じた「しゃべっている事がすらすら書けたら」と期待をかけて申し込んだ。

初めの一週間は、まあ順調に進んだ。一方学校ではテストがあり、一時速記をやめて試験勉強に専心した。さてテストが終って、ま

なんと利己的な友だろうと思った。しかしそれが友というものかもしれない。自分にはわからなかった何かをつかみとる事ができた。それこそ本当の人間の姿である。最後には誰もが「自分のため」という事で生きている。友達というものも自分が生きていくための手段なのかもしれない。そうであるならばお互い

一期一会

間もなく一年二組も解散の日となる。忘れえぬ思い出の数々、一人、一人の顔が、そして声が遠く消え去った日々の夢をよびさましてくれる

何時か諸君達に話してあげた「一期一会」という言葉を覚えているだろうか。いちいちえと読むんだよ。S氏が某新聞に発表されたものだけれども、こんな話だったんだね。S氏が時たまこの言葉にふれ、ある時友人と大いに論じたり、名僧の教をこなくもしたけれど、さらにその意味がわからなくて困っていた時、たまたま奥さんの「実感的な説明」にふられ「万事が解決した」と喜ばれたこと。即ち「昔はなかなか人に会えませんでした、初夏にホテルに会えただけでも、うれしく思いました。ですから人にあったとき、これがこの世の最後かとよく思いました。でも今は交通機関

に利用し賭事みたいな事をやっているのだ。本当の友達の場合は何だろうか。もつと美しいものでありたい。何でも相談でき、その友の事だったら何でもやってやりたい……そうありたい。このごろ段々わかってきた。お互いに理想を求め、信じ合い愛し合うことのむずかしさを……。

原 幸

が発達していますし、いくらでも人にあえます。しかしそれほど便利な世の中に住んでいても、人に会ったときは、これがこの世のわかれかと思う心がけはほしいものです」という説明なんだ。S氏は結局「人間の一生は一期という悲しい言葉に尽きる。その一期のなかで会える人々、それは尊くかたじけない人びとだ。一度でも会うことができれば、これ今生の初会で、また、とわのわかれかと思う気持が、人間としてのこの世の真実かと私はしじみ思う。」とのべられておられるのだが、思い出しらう。

あの時、大きな共鳴を覚えたまゝに、諸君達に話してあげたのだが、今更のようにひしひし迫ってくるこの言葉。別れに際して、ふたたび思いおこしてみて下さい。

た始めようと思うが一向にはかどらない。一月で終るはずの教則本が二月…三月……半年近くかかってようやく終るあり様。「ああ、なさけない事だ」と思いまたハッスルするがいやな数学と英語のためになんとしても進まない。最近では週に一時間か二時間すれば上ってきた。

まったくの三日坊主でもない、さしずめ五日坊主？ あたりだろうか。

強いと思っていた我が決断力のなんと弱かったことか／

日記

加藤 マサ子

何ができっかけて日記を書き始めたのかよくわからないが、川の水が川上から川下に流れていくような現在の生活から抜け出るためなのか。そして今日よりも明日がよりよい日になりますようにという期待からであろいか。それとも私の心の中にあるものを表わしてみたいのか。このどちらともいえないような気持ちからだと思う。勉強、友人などの悩み、詩、感想文、カット、写真までがその中にある。気が向くままに縦に書いたり横に書いた

り、鉛筆、万年筆、大きい字、小さい字、それでも前をふり返って読むのも楽しいし、これから先にはどんなことが起り、どんなことが書かれていくのかページをまくっては一人に楽しくなっている。

或る誘い

杉 原

起きようか、それともまだ寝ていようかと寝床の中で言っていると、耳のずつと奥の方から川の瀬音がかすかに響いてきた。それは僕を川へ誘っている呼び声だった。

笛吹川に沿ったアスファルト道路まで出ると、早瀬の荒々しい瀬音が皮膚の毛穴を通して骨の芯までも響いてきた。

僕は前に何回となく座ったジャカゴに座った。荒々しい瀬音をたてている早瀬に突き出した褐色じみた古いジャカゴだ。早瀬のなかほどに大きな石が、ただ一つあった。そこできようもいつ絶えるかわからない戦いを見た。石と波とのすさまじい戦いだ。石の底知れぬ

んだ梅色の苔が所せましとはえて、真正面から戦いを受ける先端は、戦艦が波をけたてて戦場へ行くように押しよせる波をぐいぐい左右にけちらしていた。僕は早瀬が好きだ。がもつとこの戦艦が好きだ。一番好きだ。なぜならこの戦艦は、自分の力がとうい敵におよばない事を知っているが、絶えず戦いを挑んでくる敵に自分の持つてゐるありつたけの力をフルに發揮して戦いやがて波間に消え去ってしまうからだ。

西の空が晴れて、きびしい容姿の南ア連峰のいただきがクックリと見え始めた。

形

市川 明夫

国語の本にあったが、この場合は一高という名のことである。他校生にクラブ活動のことを話すと、クラブなんかあるのかと、びっくりする、模型飛行機なんかとばしている。一高生があほうもねえという。店屋へなんかいくと、オバさんが使ったこともないようなこつちもわからないような、むずかしい言葉使いをする。一高だつて普通の学校だ。へんに神経をとがらす必要はない。

気のむぐまに

井 口 潔

ただ単に一人の人間にすぎない。考える事行動する事すべてが自由である。しかしその中には規律がある。規律あつてこそ自分といふものの一単位を認め、また行動するのである。時には自分自身としてもいやな、はずかしいと思う事もある。これが自分本来の姿たのかと思うと急に寂しくなる。つまらない、いやな自分を見つめては成長する。僕は。

無題

山岡 政興

ほろほろと木の葉が枝を離れるように長く短かい一年は終る。なぜ時はこうもぼんぼん走り去ってしまうのか、余りにも情がなさ過ぎる。ちよつと位待たつて、僕は言つた。早く行け。とつと行つてしまえ。蹴り飛ばしたが、そうはいかんよ。相手は簡単に突き放した。こんな時を無理に引張つても思いどうりにならんことは解つてゐる。僕だつてこの一年、有意義に過ごしたただけなんだ

こう弁解するより手はないのかこれに身を任せたのが運の尽きか。この一年に収穫出来たものを列挙しようとヒザを正して考えてみてもいっこうにそれらしい者が浮かばない。雲か霞を捕えようにも漠然としており早撃ちがピストルを抜くような調子に素早くとり出して言う事は容易ではない。これではいかんと思う時もあるのだが、確かに何かある。ああこれを表現力のない悲しさというのか。

したいことの第一部

矢崎 和博

学校生活は、ある面では楽しく、又ある一面では大変つまらない単調なものになつてしまっています。

ある定まつたわくの中で、きゆうくつな生活をやいややながらする毎日は是非もなく過ぎていつてしまします。

学校から離れて家庭にもどつても、まだ自分のやりたいほうだいの事はできません。だから時には自由なのびのびとした、他から束縛されない事をするべきだと思います。

三年前のあの日

三 沢 直 美

三年前のあの日
私は思い出すたびに胸がつまる
三年前のあの日
父は二度と返事をしてくれなかった
父は二度と笑顔をみせてくれなかった
幼ない弟は何が起つたのか分からず
ただ母の元にすがりついていた
私は、泣いた、泣いた、泣いた
涙は底をついてかれた
しかし悲しみは絶え間なかった
三年前のあの日
私は思いだすたびに目頭を押さえる

妹へ

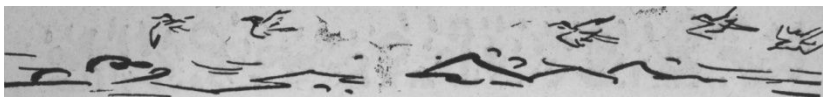
志 村 公 子

ほっぺちゃん
其赤なほっぺ
真黒の髪
黒い瞳が光に潤んでいる
ああ、あの時

夢

望 月 由 美 子

庵といわれる簡素な家
事ぶきの屋根は苦むして、素朴な田舎の片すみにある
庭は広く植わるは竹とコスモス
草の繁るに任せて
水はどこから流れになつて注ぎ入る
そこに居るは唯一人





そのひと

望月 加奈美

そのひとは
 青い花をいっぱい抱きかかえて
 わたしの夢の中に現われる
 青い花——夜も光るから
 君にあげるといふ
 涙のいっぱいいたまった大きな疲れた目で
 そのひとはわたしの心を
 力いっぱい抱きしめて、いじめる
 太陽のかおり……
 ああ さびしい手をひろげて
 そのひとは憎しみを教えてくれる

親父さん

吉川 敏子

物置の中でね
 探し物をした時なんだ
 それが見つかったのは
 ほこりまみれになった
 親父さんの帽子……
 彼、頭が小さかったんだね、わりと。

兄 貴

戸栗 礼子

ほんとうはないのに夢をみる
 ほしい ほしいと思っているから
 とてもよく笑う
 わたしまでもつりこまれる
 あまり笑って悲しくなつて
 泣いたわたしを笑いながら
 涙をやさしくふいてくれる
 わたしの好きな白いハンカチで
 二人は時々けんかする
 わざと負けてくれるから
 いつもわたしの勝ちになる
 「ごめんね」て言う
 恥かしそうに頭をかいいて
 「あゝ」て言う
 たいくつすると
 白い道をいつも二人は歩いていく
 じっと黙ってあてもなく
 枯れ草に歩き疲れてすわるまで

1

ほこりをはらった そいつにさ

無理に頭を押しこんだら

彼のおいが……してね

なんとなく目が熱くなつたよ

寂しいんじゃない

悲しくなんか あるもんか

ただ ちよつとね

かわいそうだなって 感じるんだ

バカだなあ

あんなに早く行っちゃうなんて

親父さん……

朝のバス

鶴田 千樫

朝のバスはこの世の所とは思えない
 四方八方から圧迫をうけ
 息がつまりそうだ
 不機嫌な顔、顔
 「なんとかしてくれ」と叫びたくなる
 人間のかたまりは
 止まると前に倒れ
 動くとき後に倒れる
 どうすることもできない

弟

丸山 道子

弟は我が家のホープのきかん坊
 ハスキーボイスの豆ギャング
 家中みんなが彼しだい でも
 「ねエみつちゃん。内しよだヨ」
 「えっ、なアに」
 「ぼくねエ、今度5が一つきやないんだ。」
 私にそつと耳打ちをするお茶目さんです。
 毎日毎日赤胴胸に
 「お面ボーン」 「お小手」と
 一生懸命剣道にはげんでは
 「ぼく大人になつたら総理大臣になるんだア」
 そんな事を言つてみんなを笑わせる少年剣士も甘えっ子
 「ねえつたらあ。動物園行こうよー」
 そう言つてねだる弟が
 もう、四年生になりました。

現代人に欠けているもの

太田 隆雄

過日、知り合いの家を尋ねた際に、その家の子供に、「大きくなったら何になるの」、と尋ねたところ、「エラクナルノ」という返答があった。そこで私は「偉くなる」とは、どういうことか、考えてみた。しかし満足した答は得られなかった。物事の分別のよく分らない子供が偉くなりたい、と言ったのほどういうことだろうか、もちろん私はそれが子供自身の意志ではないだろうと思う。近頃の日本に出世主義的な風潮がみられる。その為に子供が小さい時から英才教育をしている親が多いそうだが、そういう親の気持がわからないでもないが、そのあまり人格形成をおろそかにしがちだ、ということも聞いている。私は世間でいう人格者といわれている人も知っているし、小学校しか出ていないが多くの人達から尊敬されている人も知っている。はたして人生においてどちらが成功者か、ということになると、私はいちがいには決められないのではないかと思う。ある程度の知識は人生にとって必要だが、それだけで世間が渡

れるだろうか、知識は必要だ、しかし、それ以上に大切な何かが現代人に欠けているように思う。

思ふこと

斎藤 哲夫

自分は人である。姓は斎藤、名は哲夫。どうしてこんな姓がついたかは知らん。親も知らんそうだ。祖父は？ 祖父はとうの昔に死んでおるが、だいたい知らんだろう。斎藤家の者が自分の姓がどうしてついたか知らぬならどうせたいした価値はないだろうし、又いわれもないだろう。しかし思うに、「斎藤」を選び出した人は他に安い姓しかなかったのだから、安いながらもそれらよりましだったのだと思う。しかし「哲夫」はよい。なんとなくよい。この前、町で友達に会った「おい」と言ってもこちらを向かない。でっかい声で「おい」ともう一度いったら、よけいな者までこっちを向いた。やはり名前はあつてよいものだな。しかしつくづく思うに、しんみり思うに、なんでこんな姓がついたか、不思議でならない。

汽車の窓から

幡野 芳久

学校への往復、汽車の窓から見られる景色は自然の美しさ、偉大さをいろいろ感じさせる。春夏秋冬、美しいと思った景色はいろいろあるが、中でも冬の南アルプスは最高だろう。青く澄みきった空をバックに、白く雪に染まった峰々が朝の太陽にキラキラ輝いている。これを初めて見た時、自分の小ささを痛切に感じ、同時に危険を侵してまで冬山に挑む人々の気持ちがあつたような気がした。他には確か夏だったと思うが、雨がりに雲の間からもれる太陽の光が濡れた樹々の緑に反射して風に吹かれている。それがなんとも言えぬほど新鮮に見えた。このような美しい景色が汽車の窓越しに眺められる時は汽車通のうれしさをしみじみ感じるのである。

私たち

仲田 栄子

毎日の新聞を見ると「高校生が……」といったよからぬ記事が載っている。こんな人々

は数多くいる高校生の中の、ほんのわずかな存在であろうが、私達の仲間になるのかと思うと残念だ。

高校時代、広いう青年期に特徴の迷いがある。なんでも自分にできないものはないような気がする。実行してみるとなかなか思ったようにいかない。自分はやっぱりだめなんだと決めつける。別のことをしている。一生懸命しているのにどうしてもうまくゆかない。結局もうだめだとあきらめる。ここまで来てしまうと自分ではどうしようもなく、ずるずると悪の道へということになる。ある程度の迷いなら人間成長の上に多いに役だつ。では有益な程度の迷いにするには……。目的と意志——それ自体がぐらついていない目的と、実行するための意志を持つことだと思ふ。目的がないと益より害の方が多くなる。高校生、青年たちの全部が目的意志を持っていたら紙上をにぎわす青年期の人々の事件も少なくなるだろう。

夜空

菊島 慶彦

私は何の価値もない一人の男だ。日本人丸

つしやりたかつたのでしよう。

人には他人の迷惑にならない限りいろいろな生き方が許されています。その中で世の多くの人は何とかして人間らしく生きたいと悩み、また努力しているのではないかと思ひます。

結局、人はどのように生きるのも自由ですが、それにつけても我々凡人としては自己を最も愛し、自己に最も忠実で、その上にできることならより多くの人を愛し、社会のために少しでも尽くすこと、そしてこの世に生まれてきたかいがあつたというような人生を、それぞれが自分なりに最大に築きあげることが大切だと私は考えます。

悩み

丸山 正之

一高へ入学してから、後一ヶ月余りで一年間が過ぎようとしている。一年間にはいろいろな事があつた。中学時代に考えていたように高校生活は甘くないことが、ようやくわかつたような気がする。楽しく高校生活をおくろうと思えば成績はカンバンクないし、高校生活を調和させるために体育クラブへ入った

がどうもうまくゆかず、一年間が過ぎそうである。高校生活とはテスト、テストに追い回されるものだろうか。現実はそうである。二度とない高校生活を有意義に過ごしたいものだ。

町

浜 佳寛

町は生長している。僕等人間も生長している。町の良し悪しは住む人の思考や判断からくる行動のしかたでできる。人間も同じだ。観光客が町に一步足をふみ入れる。さらに光る水晶の中から町の生命力のような水がふき出している噴水が目にとまる。大通りにそった活気のある商店のネオンも美しい。この客が町の色々な面を見てどんな感じをいだくだろうか。よい所ばかり見えないだろう。町のよこれや、風紀の悪い所を見るかもしれない。また他の町と比べて良い町だと思ってもいい。また他の町に住む人は町がよくなることを望んでいる。余り背伸びをせず、大都会といわれるようにならなくても、着実に一步一歩良い町に生長させていきたいものである。

授業の打ち切り

雨 宮 弘 治、

私は毎日自転車を通っているが、道も時間も行き合う人も、だいたい決まっている。行きはスピードを上げて行くので三十分位、帰りは少しゆつくり帰るので四〇分位かかり、帰宅時刻は午後四時頃である。だから少しでも早く、もしくはおそくなればすぐわかる。きょうは六校時が打ち切りになった。それでいつもより一時間も早い。畑では、ちょうど午後のお茶時である。頭をさげてそばを通るのはいやではないが、きょうは時間が一時間も早いので、なんとなく学校をさぼったようできまりが悪い。それで人に見られぬように家に帰りたいのだが、そうはいかない。だからどうか行き合ってしまおう。だから私は打ち切りで早く帰る事をあまり好まない。

朝のだけ

丸 山 恵 子

「フッ」まつ自な吐息がパツと広がって消えていった。けさはいやに寒い日だ。家

クラブ活動

市 村 一 人

ぼくがこの学校に入った時は、若さが満ちていました。しかし、この学校には重苦しさがあるような感じを受けました。この重々しさが伝統かもしれませぬ。みんな何かの大きな力にでもおされて動き、ついにはその情性

で無意識に動いているようにも見える時がありました。若さが欠けている。だからぼくはクラブ活動に入って大いにあばれたいと思い入ってみました。最初はあまり楽しくありませんでしたが、今では欲がでて、毎日が非常に楽しく感じられるようになりました。だから山の上に登ってつかい声を上げたい。そう思っている人はクラブに入りあばれると良いと思います。できれば全員が放課後の二二時間をクラブ活動で友達と語ったり一諸に汗水ながしたら良いと思っています。みなさんクラブ活動に入って学校生活により多くの楽しみを持つようにしましょう。

思 い 出

古 屋 美樹子

二月にげ月、願書等のことばを耳にするとともに、去年のこの頃志望校も決らずにいた私を思い出した。入試を前に早く志望校ととあせるだけだった私に、先生が種々の資料を集めてくださったあの時、私は父母と何度も学校に相談にいったものだった。結果は今の学校を受けることになった。そのあとの気ぜわしかったこと、学校さえ知らなかった私に

友達と一緒にいれたのは何よりだった。

苦 痛

米 山 浅 雄

人生に苦痛はつきものである。それに対抗

するためには先入観や偏見を去り、既往を顧みず、将来を考えることが必要である。強い意志をもって解決する、そこに人間の進歩があるのではなからうか。こんなことをいつている間に社会は大移動をしている。

弟

森 田 久 子

私の弟は小学五年生である。通称清ちゃん末っ子だから人なつっこあまったれさん。家へ来るお客様はたいてい「小学三年生ですか」と聞く。「今年入学ですか」でなくなつただけでもよいと思う。そしてよく喧嘩する。きまつてテレビのチャネル争い。弟は「マンガ」と言う。私は「マンガなんか、いや」といい合う。でもいつも弟が勝つ。マンガをかけると、面白いことには一生懸命になつて見てるのは私の方である。思わず苦笑してしまう。こんな清ちゃんにもかわいいところがある。私は泣き出すと隣りの室へ行く。するときまつて弟がふすまをスツとあけて入つて来る。そして「姉ちゃん、泣いちゃよし」と言う。そういう時はとてもうれしい。私ももつと弟をかわいがらなくてはと思う。清ち

やん、もつともつといい子になつてね

雪の幻想

中村春子

だあれもいない

だあれも見えない

まっ白な世界

雪の上で横になつてみよう

そしてほおを押しつけてみよう

まっ白な やわらかい雪の感触

このままじつとしていたい

人間社会の何音も聞こえず

ただ聞こえるのは吹雪の音だけ

私はまっ白な世界に

すいこまれてしまいそう

このままじつとしていたい

いやなテレビ

内藤純子

「困っちゃたなあ、明日の勉強何にもして
ないのに」教時間テレビを見た後、必ず出て
くることばだ。すると妙に心がいらいらして

にらみつける。しかしその人間かどこへ行く
のかわからない。俺が馬鹿だったのだ……。

あの時彼は何してたっけ。僕がまじめに掃
除していたのに彼は隠れて大人の本を読んで
たっけ。あれが今何に役立っている？ 今度
彼に会ったら聞いてみよう、覚えてるかな。

星の降るような寒い夜、一人、道の真中に
立つて星空を見つめた。悩みをおまえにう
ち明ける。ロマンティックな気分誘われる
時、俺がそこに立つてるのを知らぬかのよう
に、若い男女が何かささやきながら通り過ぎ
て行く……。

劣等感

上杉恵子

だれでも大なり小なり劣等感はあるからか
の場合にもつものだと思う。むしろもたない人
はまれだろう。それをふきとはせる人はふき
とばすがよい。ふきとばせない人は堂々と自
分の劣等感にたち向うがよいと思う。たいせ
つなことは、それに押し流されないことだと思
う。たち向うというのは、劣等感の寄つて
来る原因をつきとめる努力をすることだと思
う。苦しくもそうすることによって、自分が

きて父や母にあたりちらしくなる。父や母
はさぞかしい迷惑であろう。本当は自分が
テレビから離れられないという意志の弱さに
対してなの。自分の好む条件の中でテレビ
を見ることは非常に楽しい。だから好きであ
り、又困ったりきらいになったりするのだ。
私は自称テレビのながら族である。最初
の内はまだしも、あとはコマシヤールタイム
が勉強時間になつてしまう。結局、ながら族
ということばも、テレビを見る口実のひとつ
にしかたつていないのである。こんな風にズ
ルズルとテレビに引いていかれつばなしなの
だ。とか何とか理屈をこねながら、今もテレ
ビの前に座つちやつてゐる。おや！ 失礼、
こんなグチを聞かせてしまつて。

長距離競争の記

金丸光邦

細く長い道をぼくはさも倒れそうなかっ
うで息をハアハアさせながらゴールをめざし
て走り続けていた。中にはラストスパートを
かけたものもあるが、僕は休みたいと思つた
だその願いのために、いやおうなしに走つて
いる。また一人ぬかれた。また一人あと百米

はたして真に劣るものか、そうでないものか
なぜ劣るかがわかつてくると思う。それが勉
強であり、練成であり、進歩はそこから生ま
れてくるのだと信ずる。劣等感を適切に処理
した人が大成するような気がする。劣等感の
ない人は返つて危険だと思ふ。
私もこれまでに、学校の試験、入試などと
くさん受けた。いつも自分がひとより劣つて
はいまいか、の念にかられて来た。だから劣
等感には深い共感をもつてゐる。

彼の横顔

宮野政彦

僕は今、一人の友だちができつた。彼
は背が小さいが、気は優しく力持つという
ところである。彼は動物が大変好きである。
中でも犬が一番好きらしく、僕に大切に育て
た犬が病気で死んだ話をしては寂しそうな顔
をしている。彼の氣にくわないところとい
うと「ガンコ」天下一品である。自分で一思
い付くと最後までそれを押し通す。前にもそ
のガンコがもつて、こちらが牛乳一本せしめ
たこともあった。しかし彼は一つのことにい
つまでもこだわつてゐない。実にさつぱりし

あと十米、四三二一もう一人にぬかれてゴー
ルイン。息を切らせて教室へはいるなり、い
すへどつと腰をおろした。いまの競争のはげ
しさをものがたるかのように、汗はだくだく
と流れてくる、その時ふと考えた。あの時も
う少しがんばれば、もう少しがんばれと。しか
しその時ぼくの考えていたことは、ただ早く
ゴールに着きたいということだけであつた。
この競争で自分がいざという場合いかにたよ
りにならないかということがわかつた。これ
からは世界中で一番たよりになる自分である
といつても思えるような人間になるために努
力しよう。身心とも、立派な人間になるため
に。

何か

辻 順次

ある時ある場所ですら同じ人間に行き合
う。相手はどこへ何をどこに行くのか知らない
知るべき用がない。いつか話しかけよう、そ
して何かして遊ぼう、二人だけで……。

いつかぶらぶら町に出た。目的はない。よ
くまあ人間が出てくる。何を目的に何を考え
ながら歩いているのか知らぬ。足先と顔面身

かおつち

ている。「そこが彼のいいところである。彼に
は何か一つの理想像というようなものがある
ようだ。時々僕にそれらしいことを話しては
一人でムツツリ考えこんでゐる。額にしわを
寄せ、遠くを見つめているような眼、こんな
表情をしている彼の横顔なんともいえない、
ケチばかりつけたけれど、彼は実にいいヤツ
だ。いつまでも仲良ししていきたい。

なんとか気違い

志賀雅人

僕の場合、このなんとかに多分「山」が入
るだろう。年中山ばかり見ている。朝おきる
とまず窓をあけて朝日に輝く南アを見る。学
校から帰ればまず夕日に輝く富士を見る。春
の雨が降る。晴れると真先に確める。何米か
ら上は雪かな。夏は一日一日と消えていく白
雪に失恋したようになる。秋は初雪の降るの
を待つ、一日でも早けりや早いほど喜ぶ。冬
はなんで太平洋岸は雪が少いんだろうと悩む
日記を開けば、――七月十四日富士山六合目
まで雪、山頂で積雪一〇三厘、九月二十三日
富士初雪、十月十五日富士、南アに雪。根雪
になるだろう。十月二十九日南ア、富士の三

千米以上に雪。とまあこんなぐあいである。今朝も目を皿のようにして白峰を見つめる。おかげで視力は左右とも二・〇である。

ばかだなあ

ふじなみあきら

「きよねんのなつやすみと私たちとしてんやりよこうにいったことがあったけ……」
「あさのひかりをまともにうけてね」
「かつぬままではいいちようしだったな」
「ささ」とんねるのまえであけたみかんのかんずめはんぶんこぼしちゃっておこられた」
「とんねるをでてからのきゆうなさか、あのさかはすよかったよね。べたるをふんでもからぶりばっか。ひやつこいかぜをつつはしって……。すかつとしたよね。」
「おおつきでふたりにいつこのひやしそば」
「云が云だ！」
「ぼろじてんしゃをあげるのがえらかったよねかえりのさかは。ほんと」
「いきはかえりのことをかんがえなかったんだからあたまがしれるね。ばかだなあ」
「あせびつしよでたべたささこもち。いやにあまかった。もうひとつくいたかったが……」

「たんばんのあとがいやにしろかったよ」

現代つ子に思う

宮川 文夫

現代つ子が良い面と悪い面の一相をもって、新聞を飾り世間の批判的になるのは悪い面のあらわれである。こういう面を出さないように彼等を取りまく人々も気をつけようが、これは私達が自分で自分の心をひきしめ、誘惑に打ち勝ち、そのよき面をますます發揮して、進みゆく民主主義の社会を明るく住みよい所にしなければならぬ。

「流」と「迷」の考

田中 孝道

僕等の魂は理想郷を探し廻る大船だ。甲板に声が聞こえる《しっかり見張れ》。狂ほしい熱気を帯びた櫓操様の声がわめいた。ところがそれは暗礁だ……彼はいう。我おもえらく、日常に「暗礁」とも解らず、虚なるものに心を満たしている例は挙げるに難くない。しからは「生きる」といふこととは何を意味

しているであろうか

永遠より今 現世をより幸福に送ることかも知れない「幸福とは」「生きとは」

喟！ 現世には不可解なるものが多すぎる偉大なるかな人の世！

聖なるかな不可解！

我はいう

僕等の魂は悩みの園を彷徨する乳母車だと。

私の心

堀井 由美子

学校にいる時など、よく私の心は私を離れる。時の流れの傍観者のように。

友達の話し声、笑い声がいきりまじったワーンという不協和音がだんだん耳から遠ざかると、もう心は囲りで行なわれている事とは遠い位置から時という流れをぼんやり見ているような感じになるのです。

ほとと我に戻って初めてばかな自分に気付くのです。

私の感情的な心は、朝焼け夕焼けのことにすばらしい景色に変化してしまうこの周囲がたまらなく好きです。雪の山々、次々に不思議な色に変化して星が見えだす空、また次第

に明かるくなる空をずっと見ている時、言葉

ではいい表わせない喜びを感じます。

でもこの他は、いたって現実的。

ある日の思い出

岡本 明

ちょうど今頃であつたらうか。青かった空が次第に白いそれに変わってゆく頃、線がボツン、ボツンと置かれている土手に立ってあたりを見ていた時、ふと幼かった日の事が思い出された。

あの鉄橋、あの橋、その向うの橋、みんな僕達の生活そのものだつた。橋まで走りこの競争をした。川に石を投げ込んだ。鉄橋を渡るのがこわかった。しかしそれをやりたかった。砂の上で相撲もした。暗くなるまで無心に遊んだ事は珍しいことではなかった。

それらが全部一つのかたまりになって頭の中を占領してしまう。思い出はあとからあとからと、止まることを知らない。まだ冷たい。しかし、こちよいい風に吹かれながら。その日から一年近かつただろうか。

高校一年の思い出

の色相

山口 憲子

あの頃の私は、高校生になる事を夢みていた。この道を通り、この坂を降りて、こうして高校に通う日を願っていた。そして、この願いが達せられた時、誰よりも一番喜んだ私である。黄色のような喜びだった。この時、あたりまえてか、当然だとかいう言葉は、もはや私の手の届かない所に行ってしまったと感じられた。その一学期は、さつさと過ぎ去った。くやしいくらい速かった。私の想像した一学期とは、およそかけ離れていたが、色相だけは、同じ若草色だった。その後、やって来た夏休みは、ほとんど白い部屋での生活だった。また、生れて初めての経験だった。この白い部屋で、私は、今までより一番深く考える事が出来た。

そして、私の知らなかった一面を体験し、私とまったく違った道を歩いている思いがけない人達と接することが出来た。彼らの話はその望みは、唯一つに集中していた。私は、ここで、生命の尊さを、ひしひしと感じさせ

られた。この時から、私の決心が変わりだしたようだ。白い夏休みに、この色は、やはり白一色だった。そして、痛々しかった夏休みの後、待ちかまえていた二学期は、意地が悪かった。私は夢中で本を読んだ。こんなに多く続けて読んだのは、初めてだった。それは、私を考え深く、陰気にもさせた反面、私を戒め、慰めもしてくれた。だから、私の一日の中には、多かれ少なかれ、必ず自問自答の時間が加わってしまった。ただ本と共に、二学期は行ってしまった。紫色の二学期だった。また（スポーツに明けくれた冬休みは、レンガ色だった。

そして三学期。遊び過ぎた私にとり、この最後の学期は水色のような。黄色、若草色、白、紫、レンガ色、そして水色と、私の高校一年の生活は複雑だった。ある面では楽しくなかったが、私として一年前より、ずっと進歩したと思う。特にあの白い部屋での思い出は忘れられない。これからも、私の人生は、いろいろな色相で色どられるだろうが自己を失わず、私は私なりの色で、高校生活を送りたいと思う。そして一歩一歩、自分の理想に向って前進し、その中に素晴らしい色相を発見できたら、私として最高にうれしいことだ。

進 歩

内藤敏夫

人が一般に言う不規則な生活も、それが長く続けば規則的な生活になる。僕の生活もその意味での規則的になっている。困ったものだ。「人生は習慣の織物にすぎない」という言葉がある。僕の人生はこのままでいくと、一生不規則なもので終わりそうだ。もちろん満足してはいない。少しずつ本当の意味での規則的な生活にしたい。毎日が少しでも進歩して行くものになりたい。

水

酒 井 二 四 雄

ある冬の寒い朝ぼくはなんの気なしに水をのみにいった。一杯の水を口にした。つめたかった。その時、ふと「水・水・水」 って：

密度はセ氏四度の時最大

いろいろのものをよくとかす

水素が燃えるときできる

融点をセ氏零度

沸点をセ氏百度

などとすぐ頭にうかんできた。

だが、もつとわれわれの身近なことでは、大雨がふり洪水がおこる

ひでりが続き、人々の悩みとなる

が、どんなことがあらうとも生物は水が必要なのだ。ぼくのいま飲んだ水が、必要なのだ。

訴 え

千 野 宗 雄

一年も最後となると学校にも慣れてくる。

又数多くの疑問も生じてくる。その一つに先日調査した科目の調査である。どうして科目を選択するか。科目を選択するならば「苦手とか成績の悪いもの」を主体にしてみたいが、現状はそれと反対である。選択によって一部の人は自信をなくし、人生を誤る人も出るかもしれない。しかし高校は義務教育でないから言われればそれまでだが……。

遅 刻

伊 藤 昭

はじめのころは、八時三十五分の予備の力

ネが鳴り終ったばかりの時、我がクラスでは

大急ぎで教室に飛び込んで来る者が二、三人はいた。そして当人は日直に「今カネは鳴り終ったばかりだ。僕の時計ではまだ三十四分だぞ、僕は遅刻などしていいないぞ」とハアハア白い息を吐きながらまくしたてる。しかし日直は断固として受け入れない。「オマエ、また遅刻か、掃除だな」と周りにいる連中。「遅れたらいつたって学校の制限時間では遅刻ではないのに、チエ、ツイテネ」と遅刻の当人

このように僕達のクラスでは昨年の十月頃から遅刻防止に務め、今では八時三十五分でさえ遅刻者はほとんどいない。学校全体にこのような事でもして遅刻防止を行い、また遅刻者は、遅刻することを恥じるべきではないか

わ が 一 日

佐 野 衛

授業が終って家に帰る。着物を着換える。

腹が減ったので何か食う。机に向かうがそれ程しない。夕食を食べる。少しテレビを見るまた机に向ってやろうとする。音楽を聞きた

くなる。ラジオをかける。音に自然と集中す

る。能率は上がらない。テレビよりラジオの方が悪い。放送終了。今度は出来る。本格的にやり出す。それからすぐに体が睡眠を要求する。起こされる。急いで朝食をすませる。遅刻。そろそろ一年程くり返す。あーあ

一 言

伊 藤 利 治

去年の四月、瞳れの甲府一高に入学できた。どの顔も、どの顔も皆秀才に見え、自分自身ひけめを痛感した。あれから早いものでもう一年が過ぎようとしている。もうすつかり一高の生活にも慣れた。

この四月に新しく入学して来る一年生を、良き先輩として暖かい手で迎えたいと思う。

子 供 の 死

伊 藤 輝 夫

生後九カ月の幼児が死んだ。これは別にめずらしい事ではない。しかしこれが姉の子供だったのだ。

それは二月四日節分の日だった。病院で、しかも医師に見まられながら、わずか九カ月の短かい生涯を終えたのだった。

まだ神棚にはつてある命名の紙が目にしみた。これからがかわいい盛りなので両親の悲しみは大きく、一晚中死体をはなさなかったそうである。翌日の葬式にも死体をだいたままはなさず、周囲の人の悲しみをさそった。

このように身内の者が死んだというのは私にとって生まれてはじめての体験であった。この事件によって私は「たった一人の子供を失っただけでもこんなに両親は悲しむんだなあ」と思うと、同時に両親の子供に対する愛情の深さをあらためて知った。

勉強？ 内容

深 沢 稔

勉強は本来楽しいものであると、ある本に書いてあった。しかしぼくは、この本に一種の反発を感じた。というのは、勉強はぼくとしてはおもしろくないものだからである。

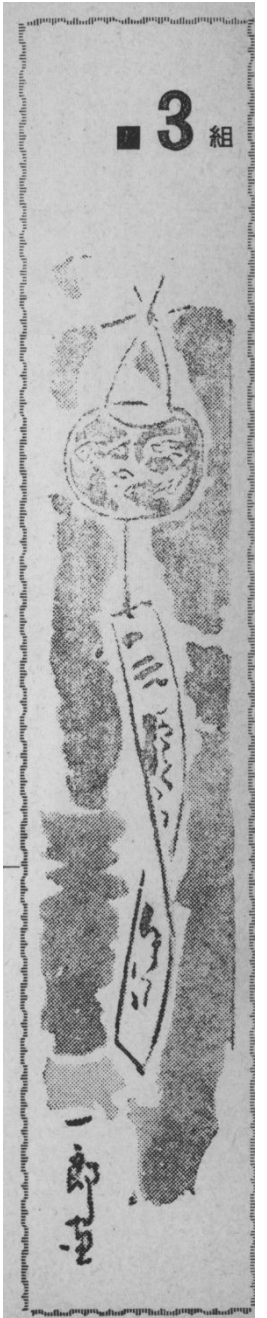
ある日、二階で勉強？ していると、下から人の来る気配がする、早速カギを掛けに行く。このようなことが、前のことを実証させてくれる。机の前にすわる、まず十分間、精神統一。五分間鉛筆けずり。十分間机の上の整理、十分間本の上に目を置く。三十分間整理運動、以上勉強終り。このようだから好きになれるはずがない。

高 校 生 活

加 賀 美 竹 彦

高校に入って特に感じたことは、大きな自由が我々に与えられているという事です。ぼくも自由というものは高校生にとつてとても大切なものであると思います。しかし、それはまた高校生としての規律を守った上に与えられるべきものであると思います。また、その規律を大規模にしたものが社会の法律、その他のいろいろな規則になっているのであり、一般社会人はこれを守ることを義務としているのであると思います。この社会では多くの人間が集まって生活しているのですから自由が法律・規則を守ることが条件として与えられているのは当然の事だと思います。従って、私たち高校生が良い社会人となるためにはまず、高校生としての規律を守ることが大切な事であると思います。

我々は高校生らしい態度をとり、高校生としての規律を守り、学生の職業である勉強に、励み、健全な娯楽、スポーツによって健全な体、精神を養い、楽しい高校生活を送らなければならないと思います。



随 想

沢 登 真

一 学年誌を作って、生徒全員が何かのせることになったのは本当によろこばしいことだ。自分の書いたつたない文章でも活字になると、大人でも子供でもうれしいものでその本を長く保存することは勿論、他人のものもよくよむという具合で、有意義なことだと思う。校友会誌第七十九号（昭和十四年）山梨県立甲府中学校校友会（生徒会）発行というのが私の手もとにあるが、表紙は勿論中味も色あせてはいるが、当時を回顧するなつかしい思い出の数々がひめられているわけで、中学一年生の私のつまらぬ作文がのっていることから、今もってしたしみとなつかしさでよみかえすこともある。自分のかいたものがめつたに活字にならない凡人の私にとっては、人一倍等しいもののような気がする。

二

こんな文章をよんだことがある「賢い人間とは、過ちを犯さない人間というのではなく、過ちを犯して二度と再び同じ過ちをくりかえさない人間をいうのだ……」生来人間はあやまちを犯すように出来ているらしいので、それをおそれ何もしないのは愚の骨頂で、どしどし勇気をもって実行したらよいと思う。とくに青年の特権たるその過程に意味があり、結果については二の次だというだんかいに於ては尚更のことである。

ある。しかし同じ過ちを二度三度と犯すならば日常の反省が欠けていることになる。こんなながい経験がある。軍隊生活をしているとき服装検査の際、忘れものをしたが、もっているとうそをいったため大勢の前で恥をかいことがあったが、それ以来うそは絶対に言うまいと心にちかい、つね日頃心がけてはいるが、同じ過ちをくりかえしてはいはしないかと不安の中にも反省の必要をつうかんしているわけである。

三

すべてを変化するものとしてとらえる所に現代の特質がある。数学的に言うとな関係となり、相対的なものの考え方がその基本にあるわけで、何が何に対して変化しているかと、二つなり三つなり変化する対象があることをわすれてはこまる。

自分の成績が下れば他の人の成績が上る、自分が学習をよりよくすれば、相手方はより以上にやる。すべて相手があつてのことと、この辺に将来の見とおしをつける場合、職業を、大学を選ぶときに注意しなければならないことがあると思う。ペーパーの波の最高頂にいる諸君が、大学の門をたゝいたとき、一たん失敗すると大波の如き浪人の中にうずもれ、青春の夢ははかなくきえさるかもしれない、大いに用心しなければならぬと思う。変化とその実態を、正しくつかむことこそ急務だと信ずる。

四

自己の若さをほこり、よろこびの中に眼をかゞやかしている多くの諸君の中に、時には老人のようにはきの乏しい生徒に接し、何となくたよりない気がしている。すべからず大きな希望をもって、むねをはって歩いたらどうだろう。そんな生徒は先ず自己の可能性の無限なることを信ずべきだと思う。事にあたつては完成する迄の努力をおこたらない。これこそ可能性の実証だと思う。やらすして可能性は生れはしない。

次に年令的若さへの信頼である。それこそ諸君のかけがえのない特権だ。人生七十年、今は十代、今からなら何でもやろうと思えばやれないことはない。若さにものを言わせて大いに馬力を出すことだ。及ばずながら私は諸君の小さな支柱となるための努力を惜しまないつもりだ。大いなる奮起を心より期待する。

脚本をにぎった
人生が劇になった
男も女も
老人も若人も
青年も学生も
すべてが消えた
君は老人になり
君は若者になった
僕は劇を創つた
苦しみであり
楽しみであり
汗であり涙である
人間が人間になり
過去が現在に
未来が現在に
劇は人生である

文化祭の思い出

斉 藤 猛

前 橋 藤 也

淡色に染った か弱い芽が一つ
薄茶色の土の間を わけるよう
優しく 白い光線を引いた
柔かい陽射しに
キラキラ輝きながら
右へ左へ微かに揺れている
「花の命は短くて……」
やがて可憐な花をつけ
清い風に乗った と思うと
再びもとの土中に没し消えてゆく
ギラギラと輝く
陽の光を受けながら
私は、呼びかける
黄紅と色着いた葉を数えながら
私は、呼びかける
一面真綿を敷きつめた内で
私は呼びかける
でも、返事がない
来年も、そのまた来年も
やつぱり、返事はなかった

孤 独

わがクラス

一年三組の一日

原 敬郎

八時四十分チャイムが鳴り始める。鳴り終る寸前に五・六人教室に駆け込む。鳴り終わってから二・三人舌を出しながら教室に入る。一、二、三校時終る。あちこちでガチャガチャ弁当を開く音がする。五分後、速い者は全部食べてしまいう四校時あくび二・三回で終る。昼食の時間、聞き飽きたメロディー流れる。つまらないし、食べ足りないので日新ホールへ足を向ける。五校時始まる。しかし、皆、目を細め満足そうな顔。六校時始まる。完全に目を閉じる。夢見る時間である。しばらくして、ある者秒読みを始める。ついに愛の鐘鳴る。今日も一日が過ぎて行く。

男子クラスは

楽しい

山下久次

三組は野郎だけのクラスである。バラバラの掃除道具、ほこりの床、不整然な机、花一輪飾つてない教室等、教室自体が男子クラスにない素朴な美しさを漂わせている。男子クラスは愉快だ。男女クラスでは遠慮がちに話す先生も、男子クラスでは痛快な事を平気という。爆笑の嵐である。それにカッコよくする必要がない。これは大事な事だ。なぜならば金はいらないし、女子を気にする必要がないから、それだけ神経細胞も疲れず、長生きできようというものだ。日本男児諸君、僕は声を大にして訴える。「男子クラスは楽しいよ」

一年三組

早川昭仁

一年三組。おれのクラスだ。いろいろな人

先生紹介

無名氏

三組のH・Rティーチャー沢登真先生について述べよう。

先生は甲府二高から僕らの入学と同時に本校へ転任してこられた。甲府中学昭和十八年度卒業生というから僕らの先輩にもあたるわけである。面長、しまった顔に眼鏡、長身に白衣をつけた姿はいかにも僕らにとつてはこわい存在の数学を教えるのにふさわしい風格

をそなえている。

授業中の先生は非常に細かい興味深い講義をなさる。陽が明かるく照り込んでくる日などはそれが子守唄のように聞こえる時もあるが、前任が女の子オンリーの学校だったからといって先生をあなどるなかれ、頭の上にカミナリが落ちること必定である。

又先生はクラスのコタゴタを快いほどに解決していく。そして僕らの世代を良く研究なされ、強い向上心に富んだ大河のように見られる。(赤岡)

友人寸評 1

長田 亘

赤岡猛 階段の下の郷土研究部の住人で猛烈なフアイトと明かるさの持ち主。ガールフレンドが出来たのかスタイルをきにしている様子。

浅川春雄 英語に関してクラスでは生き字引並み。「言うより行ないに」と急にすごいフアイトを見せる時があるが、不断はおとなしい。

天野正仁 実際より小柄に見える。サツカーはキーパーが上手。囲碁将棋麻雀となんでも出来るとか。そんな感じは受けないが……。

石井正栄 笑うと政治家みたいな大きな口となる。身長に比較して長い足は山城から自転車で通う彼を遅刻させたことがない。

石原源彦 休み時間でも彼の本は赤く塗られていく。他には真似の出来ない努力勤勉型のいい所から排球部の臨時部員となった。

2 小野正巳

今村一也 ちよつといい男、清潔で明かるい。ただ彼は勉強があまり好きじゃないようだ。学校を出れば社長だ、などと言っている気がした。

今井吾之助 どつしりと落ちていていて低音の魅力的な声の持ち主。何事にもハッスルして好感がもてる。スポーツは万能である。

今村務 のんびりした男でちよつと美男子。

大変器用な男である。物事にくよくよせず、明日があるさというようなスツキリした男。

上田一彦 気がやさしくて力持ち純情な男

自分では女と勉強はにがてだなどと言っているが何のことに……。

遠藤博之 野生的な美の持ち主。頭はよくきれる。笑うとえくぼがでて魅力的だ。物事を深く考え落ち着いていて、我がクラスの手本だ。

3

川口 雄

上田浩 髪をオールバックにした秀才タイプ。通学に一時間位かかるらしいが、それにまげずに勉強にはげんでいる。

小尾正彦 一見するのとぼけているようにみえるが、しんはしっかりしている。長坂出身だけあってスケートがうまい。

窪田美文 みるからにまじめで縁の下の力持ちといった感じである。柔道部に入っていて毎日へこたれずに練習をやっている。

小池基次 弓道部に属している。自分ではうのには弓はとてもうまいそうだ。最近頭の毛をのびし始めて今ではかなり整っている。近藤信雄 遅刻が多いのが玉にきずだが、

これは夜遅くまで勉強をしているためらしい運動神経が発達していて、ボクシングがうま

4

小尾正彦

大西透 おとなしく真摯な態度で人に接する。遅刻なしはこの表われだ。スポーツは何でもやるスポーツマン。

大森浄二 細い体だがスキーをするという。頭を動かすくせがある。高校生活が楽しいようだ。

長田亘 親切で、言葉使いが正しい。まじめである。理屈が多くて科学者タイプ。スキーが上手であるという。遅刻はない。

小野正巳 柔道部で活躍していて体格が良い。声が大きく明朗快活である。友達を大切にする。人を導く力が大きく政治家タイプ。

川口雄一 見こわい顔つきだが内心気持ちが良い。全く地味でおとなしく何事にも冷静である。絵が得意である。

5

小池基次

斉藤猛 明朗快活な気持の良い人間。自称「度胸を売りものにする男」。なんといつても最大の特徴は声がずばぬけて大きいこと。

佐藤基 遠い長坂から通っているが、まるでなくセンスがいい。最近髪をのばしてバイタリスをつけてくる。

菅野悟 カッコイイ男。頭髪がカッパのようである。大のポピュラーソングファン。

鶴田一彦 一見まじめそうである。ノンビリしているが、心はしっかりしている。読書熱のある点好ましい。

遠山其弘 いつもハッスルしていて気持ちがいい。遠足のバスの中では中心になって面白いことをしゃべる。

6

近藤信雄

土橋健治 勉強熱心でほからかな性質。色が黒くて健康そうなのは若々しくてとてもよい。体育の時はうんと活発で楽しそうだ。

内藤静雄 学校生活の中では誰でも弁当を食べるのが好きらしい。この人の中にはいる？ 授業はとても静かに受けている。

中山浩一 まじめ一本という顔。その通り熱心に勉強している。少ししゃれ気がある。

新津章二 英語ができ発音のうまさほうらやましい。どちらかといえば指導的で活発。いいことばかりで他に言うことはない。

西山正樹 バスケケットをやらせたら文句なし。むろん他のこともみんなよくできるし、活発な性格。

7

佐藤基

萩原克彦 辺地出身の勉強の虫である。ふだんはニコニコしていて良くしゃべるが、いったん勉強を初めると……。

花野郁夫 丸顔で色は黒いが日本人らしい。ユーモアが少々行き過ぎる、いい男かもね？ 馬場富夫 パンで育ったせいか背が高く

頭が良い。少し生真面目すぎる。背は高いがその割に胴が長いのでスタイルは？

早川昭仁 ちよつとつかみどこの無い感じだがおとなしい。クラスで一番純真な心を持つているのうわさ。

原敬二郎 背が非常に高く鼻も高い、ちよつとこわそうだが根は真面目でやさしい。

8

菅野悟

早川光之 体のわりに顔が小さく、メガネも大きく感じる。話してみなけりやわからない性格の持ち主。短気だがそれが欠点でない。

原重昭 峡北の山を二越え三越えやってきたこの男。中肉中背、一見目立たなさうにみえるが負けん気のある奴。数学は学科の18番。樋口和光：四五度前に出て、一二〇度下った鼻の持ち主。スポーツは万能、肩幅も広い。グロテスクな感じもするがそこが男らしい。

平井和行 「どうすか、いいすか」と教師の癖を盗用してから一段と人気を博している眠そうな目は落ち着いているのかいないのかわからない。

平賀健 いち早く坊っちゃん刈に転向した

この男。今では角刈りと威勢が良い。それに白い半オーバーを着ると清潔な高校生。

9

鶴田和彦

広瀬孝嘉 可愛いさがある。人付き合いの良さが一層彼を引き立てている。一度彼と話しをするとよくわかるだろう。

古屋伸二 男性的な引き締った顔。ファイトが有り、自動車の内部構造、運転に詳しい努力型である。

保坂誠一 一見目立たないが黙々と自分の道を進んでいる。運動神経が発達していて体操も得意らしい。

前田淳 彼は明朗な少年である。広く交際するためにベンフレンド部に入っている。人に好かれる性質を持つている。

前橋藤也 スキーがスキで言葉使いが優しい感じを与える。盲腸を取られてからスタイルが良くなった感じだ。

10

遠山其弘

内藤静雄 学校生活の中では誰でも弁当を食べるのが好きらしい。この人の中にはいる？ 授業はとても静かに受けている。

中山浩一 まじめ一本という顔。その通り熱心に勉強している。少ししゃれ気がある。

新津章二 英語ができ発音のうまさほうらやましい。どちらかといえば指導的で活発。いいことばかりで他に言うことはない。

西山正樹 バスケケットをやらせたら文句なし。むろん他のこともみんなよくできるし、活発な性格。

7

佐藤基

萩原克彦 辺地出身の勉強の虫である。ふだんはニコニコしていい良くしゃべるが、いったん勉強を初めると……。

花野郁夫 丸顔で色は黒いが日本人らしい。ユーモアが少々行き過ぎる、いい男かもね？ 馬場富夫 パンで育ったせいか背が高く

頭が良い。少し生真面目すぎる。背は高いがその割に胴が長いのでスタイルは？

間瀬敏明 ほがらかの中にどことなく寂しさがあったが近頃活気づいてきた、将棋は坂田三吉より少し弱く、僕と同じ位だ。

三谷正明 鏡・クシを常に持ち、休み時間は鏡とにらめっこ。シャレ化の才能を持っているらしい。

望月克充 さんしよは小粒でびりりとからい。親しかった盲腸を失い寂しい事だろう。

諸角強英 苦手のものは勉強と女性というポップとジャズが好きでプレスリーとクロスビのファンである。

矢沢進一 彼は一見、骨皮筋之助の様に見えるが、意志は人一倍強く、強い決断力がある。親しみやすい彼にそんな所があるかと思う位だ。

11

内藤静雄

山本順二 スポーツマンタイプ。東郷刈りのにがみばしい男かどうかは人によつて見解の相異があるので責任はもてないがタフであることはたしかである。

山本武彦 ある男いわく「かわいいと言う

生れど時々奇声を発するのにはこまったものだ。」

山下久次 自分ではハンサムで歌もうまくなんとかという歌手よりいいと思っっているらしい、クラシック音楽は苦手とか。

渡辺宏之 メガネをかけた紅顔かれんな美少年、趣味はないと言うから勉強一本かな。

柳沢英久 遠路はるばるの鯉沢から通学。苦勞さん。まじめではあるが、一つの難点は、良く言うところがある、悪く言うところも

だ。

山下晴夫 三組の理事、正義感が強く、力もちかどかには知らないけれど、落ちつきがあることではクラス一番かもしれない。が、放浪癖があるのがたまにきず、趣味はないと言うけれど？

入学式 1

浅川春夫

その日は、からりと晴れた気持ちのいい日だった。教室へはいって、先生の話を聞いて、記念撮影を済ませて式場へ向った。まった

2 三谷正明

待ちに待った総合体育大会。僕らにとって初めての大会であった。皆入学以来各部においてほしい練習をしてきた。僕の入っているバスケットもほしい練習のあけくれで今までの二ヶ月位は勉強も手につかなかった位であった。バスケットは関東大会県予選もかねていたので上級生は一生懸命だった。一年生は勝手もわからず上級生の練習を盛り上げる役目だった。一・二・三回戦と勝ち、決勝で日川を極少差で破った時は、ひじょうにうれしかった。はじめての試合で一高はつよいなあと痛烈に感じた。

3 馬場富夫

七月の中旬、ぼくたち十名は校内球技大会のソフトの部に参加した。試合は放課後を利用して行われた。一回戦の相手は一級上の二年八組であった。だが、チームのメンバーには女子が三名はいっていた。むしろぼくたちのほうが有利であったのだ。が、結果は最後の反撃空しく小差で破れた。相手チームの女子が災いしたって？ 鼻の下がのびのびしてるとって？ ぼくたち十名誓ってそんなこ

皆の顔は喜びに満ちていた。式場へはいった時、だれもがこう思っただろう。「なんて古びた暗い所だ」と。みんなが、さわざわしているうちに、貫録十分備わった校長先生がでてきた。そして言った。「おめでとう。君らは優秀だ」と、今考えると、とてもおかしくなる。PTA会長の許山さんの話は、実によく教えられるところがあった。緊張した、それでいてなごやかな気分では終った。

2

天野正仁

校長先生の入学許可の言葉が水を打ったように静かな講堂内に響きわたった時、何かほつとしたような気持になった。そして始めて一高に入学したんだという実感がわき上がってきた。

生徒代表の力強い声、PTA会長、同窓会々長、生徒会々長等の祝辞、特に笑ひも混えたこれらの人々の話に胸があつくなりそうだった。最後に先生方が紹介されて式は終了した。外の太陽の光がまぶしく感じられた。

とはなないと思う。ところで応援にはクラス全員きてくれた。みんな始めは勝つと思つたことだろう。たかが男女チームである「申し訳ない」

4 窪田美文

僕達一ノ三のバレーボールチームは、一回戦で三年生と対戦することになった。試合前全員揃つての十分な練習は出来なかったが、僕達の会話には、自信が満ちあふれていた。試合が始まって動揺の色は見えず第一セツトをとつた。しかし第二セツトにはいり、やや疲れが出たのであろうか、大接戦の末ジュースで惜しくもそのセツトを失つてしまった。これでみんな肉体の疲労に加え今まで張りつめていた気持が急にゆるみ出したと見え、第三セツトになると凡ミスが目立ってきた。自分自身まだ大丈夫という気が、やはり全員の心のどこかにわだかまっていた。「もうだめだ」「負けた」という感情に支配されてしまったのだ。それで僕達の善戦も及ばず「対一」で惜敗した。

個人の気持の持ちようは、技量以上（少し大げさ）に物事を左右するよう思われた。

春期総合体育大会

1 今井吉之助

俺達バトミントン班は練習に練習を重ねたと言いたい所だが、残念ながら当初初めてラケットを握った始末である。「試合に勝つこととでなく、参加することに意義がある」ということをモットウにしたという理由があるからである。

第一回戦を突破。ついで第二回戦強豪三年七組と対戦。すでに他の一年生は二本の赤線で塗り潰されていた。三年生の中に一人二年までバトミントン部に入部していたモンスター様のなかいかやつがうろついていた。いくさは敵モンスターに取った一勝に対して味方二勝やはり一人だけが上手なチームよりも俺達の様な四人が四人とも同じくらいで、力を合せて戦う方が優勢であること。つまり「三本の矢」（毛利元就）というのを實際経験して習得した。第三戦完敗。出場者は安定性がありラケットさばきの器用な前田、ダイナミックなスマッシュを決める上田（一）、チームワークがあり敏速な今村（務）Ⅱ今井のダブルス組。

詩

消しゴム



広瀬孝嘉

私は赤や黒の長い棒と同居している
静かな夜私は楽しい夢をみていた

「しまったXじゃなかったYだった」

彼はそんな一人ごとを言った、と思うと
ふいに私の首筋をギューとつかんだ
痛かった、驚いた

何か白黒の平面を行ったり来たり
私はそれと摩擦して今にもこげそうだった
ああ、たまらん たまらん
四角の体が丸くなっちゃた
もうよしてくれ、やめてくれ
私の体が消えてしまうんじゃないか

七月十五日から始まった校内球技大会の三日目僕ら五人はバスケットの部で隣りの四組と対戦した。練習は二日ばかりのインスタントだったが一年同志なので結構勝てると思っていた。ところがそれは大きな間違いだったのである。ジャンプボールをしてボールが敵に渡った瞬間、ゴール下へ走った者がパスを受け、あっさり決めてしまった。敵も練習不足らしく、動きはぎこちなかったが、チームワークは味方よりまさっていた。それに何よりもフオローが強かったのが致命傷だった。得点は皆さんの想像にまかせるとしよう。

野辺山

石井正栄

初夏の野辺山は実によかった。美しく清らかでしつとりとしていてなにか人間のふるさとへ行ったような静かな感動に浸ることができた。高校に入ってから始めての遠足、友と緑の草原にころがり心から語り合った。新しい希望がわいてくるような気がした。僕の心を満たしてくれるものはいっぱいあったけれど限

られた時間だった。いつまでもあきないで眺めていたような気がした。清潔で健康な緑の野辺山、そしてその雄大な姿はいつまでも印象に残るだろう。

野辺山高原での

集い

石原源彦

六月の高原のつじのすばらしさと、個人への間の親睦を深める目的で、この遠足がなされた。しかし、多分みんな、ぼくと同じように目的を知らずに、ただ勉強から離れることが楽しかっただろう。

六月三日に実施になっていたが、おりからの梅雨と台風で、一端中止になったが、生徒の要望で七月九日に実施された。

つじが見られなかったのは残念だった。サイロが立ち並び、北海道を忍ばせる風景であった。すがすがしい空気の中で、晴間が少なく心ゆくまでゆかなかったが、半日、みな存分に飯盛山の麓で、楽しく遊んだことだろう。

夏休みの思い出

原重昭

僕は郷土研究部員として、八月四日から行なわれた「夏草天日道中」に参加しました。

この催しは、歩きながら郷土の歴史や地理を学ぶことが目的で、山日新聞社主催だったので、新聞で見た人もあると思います。出発地は蕨崎市の新府城跡で、参加した人は、九十才にもなる常連から中学生まで広範囲な年齢層でした。僕はこれら百余名の人たちと、勝頼が落ちのびていった遺すじをたどったわけですが、道中の所々で郷土についての歴史や地理などを見開きました。僕たち現代に生きる人々とはかく、郷土を愛さないなどと言われますが、これを打ち消すには、このような催しに参加して郷土について学ぶことなどはよいことだと思えます。とにかく、夏の暑い太陽の下で歩きながら郷土を知ったということは、いい経験でした。

志摩坊の由来

早川光之

身延山宿泊の際、我々一年三組が宿泊した

志摩坊についてお話ししましょう。

志摩坊は、中老僧日伝上人の開創で、彼は真言の経験者で、小室（現、増穂町）一帯に法威をふるっていた。ところが文永十一年五月末、日蓮が甲斐巡化の時、小室をすぎ、ここで法論となり、遂に上人は論伏せられた。これによって日伝は、日蓮を殺そうと思ったが失敗し、かえって諄々の教化に預り、日蓮の弟子となり、志摩坊をかまえて居住した。これが、志摩坊の由来である。

身延

今村務

小雨降る身延は、とても印象的で好かった。坊での話し合いはとてもよくためになったと思う。一番好かったのは友達が多くでき、これからの学校生活に一つの楽しみを与えてくれた。なんとといっても学校生活とはちがつて自由に話してもでき、何でも気軽に話し合え、又やりたいことが出来、大いに楽しむことができた。

宇宙

萩原克彦

私達の空の向うの限りなき宇宙それは広くかつ静寂又その空間は絶えまない寂しさをたたえいつも私を待っている宇宙は私の友であり又心でもあるああ！あの広大なあの静寂な心を持っていよう宇宙は今日も明日も変わらない私の心のように未来は宇宙のようだが静寂でなく不変でなく……未来は私を待っている宇宙が私を待っているように！

静思

中山浩一

清く、優しく、静かな湖君はわたしの心から悲しみと苦悩を奪い取るそして優しく呼びかける「いつでも夢をもて」と高く、厳しく、がっちりとした山君はわたしの心に夢と希望を吹き込むそして厳しく忠告する「なにものにもめげず生きぬけ」と

山川

望月克充

其暗である。……悲しかった。流れの中の水がゆるい坂をおりて来た。やわらかい大きな石にあたった。それは死んでいたようだ。少し曲がつた七ころで急に速さをまし中位の石に接触した。いたかった。

身延の事

遠藤博之

身延へ行つてから末だ半年経っていないのに十年ばかり前に行つた様な気がする。あの体の中にしみ込むような冷んやりした空気がとても好い気持ちだった。あれが曇つてたから良かったので、晴れてたら幻滅だったろう。そして、大広間で聞いたあの訓話は、末だはつきり覚えてゐる。ぼくは、二日の間すがすがしい気持ちで暮らした。あと一日ふやして山の中を歩かせてくれたら好かつたろうと思つた。

強行遠足 1

平賀 健

この一年を通して特に印象に残つたものに強行遠足がある。いままでの僕達にとつて徹夜で歩くことなど一度もなかったからである。またもくもくと歩きつつ検問所でもらつた麦茶の味も忘れられない。そして夜明けのひえびえとした空気の感覚、これらのどれをとつても一生忘れられないだろう。僕は野辺山ま

でいったが、さすがに疲れてしまった。が、これらの経験は、今の学生に欠けている精神的な何かを与えてくれたと思う。

僕達はこの経験をいつまでも大事にして、人生を有意義にすごしていきたいと思う。

2

古屋伸二

もうすぐだくと言っているが、なかなか見えない。皆検問所を目ざして一心に歩いて行く。「あつ！ 見えたぞ、検問所が見えたぞ」誰かが叫び駆け出して行く。この声は僕達をほつとさせ、また元気づける。検問所、ここは僕達のオアシスである。ここへ着いた時の気持ちはなんとも言えない。お茶を出して接待してくれ、また検印カードを渡す。手持の枚数が一枚、二枚と少なくなっていく、この感激は遠くへ行く程大きくなる。僕達は歩き続ける、終点目ざして。忍耐の続く限り。

3

保坂誠一

十月十六日、十七日と夜とおし二本の機械

のようになつた足に打ち打つて歩いた姿が今

でもありありと思ひうかぶ。長沢―清里―野

辺山。朝の野辺山、大そうすばらしかつたろ

うが僕の視界にはない。視界にあるのは道

道、道だけである。葦崎までのあの元気さは

どこへふつとんでしまったのだらう。野辺山

―三軒屋―海之口。一步一步を踏みしめなが

ら一つの精神は進む……来年こそは！ と

思ひながら。

4

山本順一

暗やみの中を検問所をめざして歩く。みんな疲れはてて口をきく人もなく、だまつて歩く。夜があけて遠くの山がうつすらと見え出した。前を歩く人たちがみえるようになってきた。次の検問所では何を出してくれるのだらう――それだけがぼくのはげましになつてゐた。足にまめができて無感覚になつた。一步一步に力がいってとても最終点までいけそうもなかった。ただがむしやりに歩いた。しかしどうしても歩けなくなつてしまつた――帰りの汽車の中で、いつのまにかねむつてしまつた。

5

今村一也

足の裏は豆だらけ、体は疲れきつてゐた。それでも彼らは目的地に向つて一步一步確実に歩んでいった。自分も、前にも後にもだれもいないはじめての土地を同じように進んでいった。夜明の空気がすこく新鮮で冷たく、あつくほつた頬にひんやりとふれていく。この早朝のすがすがしい中をしばらくは足のいたみも忘れ、小石の道を「ザッザッ」と突走つていった。

6

大西 透

あの目の夜、九時、校長先生の叩く太鼓を合図に、僕達は一路中込に向つて出発した。初めてのことにだけに不安はあつた。しかし、それも見送りの人々の声援によつて、ぬぐい去られた。暗い夜道を黙々と歩く。ただ先を行く人影をたよりに、石につまづきながらも興味と不安な心持で、一生懸命歩いた。既にあたりは暗黒の大自然に包まれていて、まる

急いで手をひいたが傷ついた。

勢いにおし流されて小石にふれてしまつた

暖かだった。生きていた。●

あかりがみえた。楽しくなつて来た……。

冬の夕暮

土橋健治

日は沈み、西空はかすかな紅。

灰色の雲の間に、又白と紺との雪山の背後に、ほんのりと明るく。

その雲は夕焼をかくし覆う、またたく間に雪山から吹きおろす風は冷たく。

枯木の間を通りぬけ枯野の上を走る。

骨格をむき出しにしたきびしい冬の姿を土を。

茶かつ色の雑木林はやがて黒いかたまりと化し、

東の雲の合間からシリウスの青白い光が、

その上を照らしている。

冬の夜のさみしさに神秘的な何ものかをひあ

で

で供を今にも吸い込んで行くかのようにありた。所々の休息所でお茶を飲み、再び重い足に鞭打つた。早朝に目的地に着いた。そこでの朝日は、僕を祝福してくれているかのよう

に、光り輝やいてゐた。

7

大森浄一

十月十六日、午後九時より明日午後二時まで十七時間、強行遠足が実施された。

最初のうちは調子がよかったので、このぶんなら相当いい所まで行けるだろうと思つていたら、葦崎のあたりでもう足にまめができてしまつた。靴がまだ新しかったので足によくないんでいなかつたらしい。いたい足を引きずるようにながら弘法坂を登つていようとよく空が明るくなつてきた。三軒屋について、清里まであと二*、やれやれとゆつくりやすんで再び歩きだしたが、いけどもいけどもいけども清里につかない。二*以上あつたような。制限時間をそうとうに超して清里に着いた。友達の疲れたような顔が沢山見える。

何でも書こう



若いということ

赤岡 猛

高校生の強盗事件が起きた。今度もおとなは社会が悪いとさわいでいる。確かに複雑な機構に生活する僕らには罪悪感が薄らいで来たという自覚はある。しかしあいつらが僕と同じ十六才である以上、その行為は社会よりむしろ自己への抵抗だといえると思う。僕の部屋の机にはトルストイと漫画本、レコードケースにはベーターベンとプレスリーが仲良く並んでいる。そして心の中では早くおとなになりたい、いやこのままでいたいと二つの感情が事ある毎にぶつかりあっている。十六才とはこんな不思議な時期なのだ。未熟な僕にはあいつら行行為を全面的に否定はできない。しかし若さとはもっと、何かはねつけてしまいう強いものではないだろうか。

謙遜について

花野郁夫

「公共のために生きるには、まず第一に謙遜でなくてはならない。謙遜な人はよく人に

完全と希望

矢沢進一

ゲートは「完全は天の尺度であり、完全であろうとする希望は人間の尺度である」と言った。確かにそのとおりだ。しかし人間が完全に近づいていった時、そして完全な人間となった時に、人間は何を見、何を知るだろうか。それはおそらく失望だろうと思う。完全になるうとする希望が達せられた時、その時すでにそれ以上の希望を望むことはできないのだから。しかし人間は完全に近づこうとする希望を失なってはならないと思う。なぜならその希望を失った時はすでに生命は無いように思われるからである。

人生

山本武彦

人の人生がたいせつなことはいうまでもない。しかしそれをどのようにして生きるかというところ知らない人が多いであろう。人間の文化の発達に従って、人は機械のようになる。だからそんなことは考えない。しかし人は考えないでいいかというところではない。人はよく考えてよい人生をおくるのである。それには、まず勉強をすることである。それをしてないといふ考えがでない。勉強をするということ、それは人生をよくする第一歩なのである。

功をゆずる。そういう人は形の上ではいつもしりぞいてばかりいるように見えるが、人間社会においてほんとうの意味では進んでいる人である」と物の本に書いてあったが、自分が謙遜であることを誇る人間ほど高慢な心の人はいないと思う。

私はこんな人になりたい

樋口和光

私はこんな人になりたい。人生にはゆとりと計画性を持ち、人には和顔愛語の気持で接し、助け合い、よき友となる。自然を愛し、時間を尊び、善きことは急ぎ行い、細心の注意大胆な行動をとる。一日の終りには静かに自己を見つめ、今日生きる喜びを感じ、明日の準備と整理をし、生涯を貫く仕事を持てるようにする。私はこんな魅力ある人になりたい。

聖者

柳沢英久

人間は自分の存在しかわからない。心の中が卑賤に満ちた一盲人にすぎない。それな

個性

山下晴夫

人間は幸福であることを願う。幸福の本質もわからぬに。「なんたるいやらしさ。」盲人に必要なのは信ずることのみだ。人間は信ずる能力を持っている。現に相手の存在を信じている。それは部分的にすぎない。いまだ争いは断えない。信ずる事は幸福の基盤だ。ぼくは思う。聖者になるべきだと。その時こそ幸福の本質をきわめ、平和を見いだすことができる。神の存在さえわかるだろう。ぼくは虚弱な一盲人にすぎない。ぼくは聖者になりたい。世界の平和を夢みて。

自分の写生

上田一彦

ことであるけれども、自分が他の人に印象が薄いことはなさげなかった。僕は思う「個性がないのが僕の個性なんだ」と。

友達が僕の所に文集の原稿を持ってきた。自分を写生しなければならぬ。僕の特徴はなんだろう？。いろいろな考えが頭の中をかきめづつた。でも結論は一つだった。僕の特徴であり最大の欠陥であるのは、あまりにも物事をするのが消極的な事だ。これが結論だった時、いいようのない悲しさと反省とが僕を襲った。この事で絶えず悩んでいる。だが今の僕にはこの問題を解くすべをしらない。ただ盲目的にこれに従っていくしかない。しかしこの問題が解ける日がいつかくる。僕はそう確信したい。

大変化

新津章二

時の流れとあいまって変化のあるのは当然であるが、ぼくの生活にとって、この一年間

ほど変化の大きかった年がなくなってしまった。十五年間というのは、鯀沢というのどかな地でのんびりと暮せた。毎日遊ぶことに余念がなかった。勉強などはしなくても、それで通れた。朝寝坊もできた。しかし今は違う。

一高生活！それは今までのぼくにとは異なる事ではない。朝も暗いうちに、夕方暗くなつて帰らねばならない。勉強も一層しなければならぬ。しかしやだと思わない。この変化は有意義なものになるであろう。「吾十有五而志学」来たるべきものが来たのである。

回 天

間瀬敬明

この一年間は、今までで一番いろいろな事が僕に起こった年だった。まず四月に、今まで最大の苦い体験をし、そのことで、今年の一月まで悩んでいた。

でも今はその悩みはきれいに解消し、現在は、この一年の分をとりかえすことができるという希望もできた。今やすべてが回天しX軸の正の方向にまっしぐらに進み始めたのだ。そして加速度により次第にその速さを増

し、遠い未来を挙げて力強く行進しつつあるのだ。

チビ

上 田 浩

「チビ」これは今僕の家にいる雌の犬の名前です。彼女は茶と白の毛皮をきていて、僕が家の中を歩くといつも後に付いてくる。こたつにはいつて本などを読んでいると膝の上にあがつてきて、顔を胸のところへなすりつけてくる。その姿はなんともいえなくかわいらしい。背中をなでてやると、うれしそうになおよりそつてくる。しかし僕の気嫌が悪いときは「うるさい」といつて投げとはしてしまふ。するとチビはしよんぼりと悲しそうな目で僕を見つめる。そこで「チビ！」と呼んでやると、又うれしそうに走つてくる。やはりチビは僕のものである。

蛾

渡辺宏之

身延山へ行った時のことだった。「大きな

蛾がいる」というので、坊の庭へ出てみた。池のふちの血止め草の中に、二十センチばかりの枯葉のような物が池の水面すれすれにぶらさがつていた。赤や青の色の交わつていないかわいた道の色をして、この寺とともに一種のさびのようなものを感じる。だが、どうして落ちそうにぶら下つているのだろうか。目を上げると池の向う岸は垂直に近い崖で、雨の霧がかかつて上まで見えない。それだけに崖のしかかるような感じをあたえる。もしかすると崖が上に登つてこないのはこれを感じてからなのだろうか。あるいはその大きな羽がじやまになっているのかも知れない。雨が降ってきたのでぼくらは部屋に入った。緑と茶色という変な組合せが目に残つた。

仲間のいる室

諸角強英

足元には紙くずが散り、隅のゴミ箱にはゴミが堆く積まれ、黒板の下板には白墨の粉が積もり、壁の板は穴だらけとなり、偉い先生方の為のガタガタになった説教台の中には、いつか知らぬ間に紙くずの宝庫と化している

修学旅行について

等々。これが、僕ら男子クラスの表面的な姿だ。しかし、僕は誰も堅いことをいわず、みんなが活発に、ハッスルし、そしてそこに女子のいない寂しさが漂う。こういう雰囲気も含めた男子クラスで一年間を過ごしたのである。

バス通学

中井和紀

とんなな私は、風呂屋の前で自転車盗まれた。母は怒つて「歩いて通いなさい」といった。私はそれがハタタリだとわかつていたので「ああそうする」といつておいた。一週間後一ヶ月分の定期を買った。なんでも三ヶ月分だとまたなくされてこまるとのことであった。かくして私はバスで通うことになった。朝は自転車のときより寒くないのだけとして悪くないと思っている。

ペンフレンド部

前 田 淳

僕の所属している部はペンフレンド(PFF



C)部です。この部は平和・友愛・教養の三つを信条にして活動しています。文通する事が主な活動ですので、個人的活動に陥りやすく、地味で不活発になりやすいのですが、機関誌の作成、文化祭などを通して部員相互の努力で、グループ活動として活発になりつつあります。又各学校PFCの親ぼくをはかるためのキャンプやレクレーションなども行っています。

夏休みには全国大会があつて、全国からマでの会員が集り、いろいろと勉強になります。開催地が毎年変わるので楽しい旅行にもなります。活動が地味ですが、大変楽しい部だと思います。

「いま」での修学旅行は、少し長すぎたりという声があり、すっきりとした価値のある旅行にしようと考えて、いろいろな案を練りました。生徒の希望や、PTAの意見なども加えて立案したわけで、およそ次のようになります。

学年は三班に分かれ、十一月十三日から四泊五日で、奈良、京都を重点的に見学し、京都を巡ね、古美術を通じて日本の歴史に接し、併せて団体生活のあり方も勉強しようとするのが、ねらいです。

無理のない日程で、印象的な見学をしようというたてまえから、奈良二泊、京都二泊で、主な見学は、五日の中の三日間で済まし、残りの二日は、身延線や東海道線などの往復に使われます。

費用は生徒一人当り、六、四二四円で、旅行積立て金は、三月末で、円になっていきます。

今年はオリンピックがあり、修行旅行も春に集中される傾向ですから、かえつて秋の落着いた時期がよからうということと、十一月中旬を選びました。ですから例年よりも一ヶ月程遅れて実施するということになります。

一部の生徒は、中学の時に伊勢、京都などの見学をすませているむきもありますが、大部分の者はまだで、特に選ばれた寺院や古美術を、心ゆくまで見学したいと思います。晩秋の古都は、さぞかしよい思い出を残すと思います。

係より

保坂知己

君達へ

A MEMORY William ALLingham
 Four ducks on a pond,
 A grass bank beyond,
 A blue sky of spring,
 white clouds on the wing
 waht a little thing
 To remember for years -
 To remember with tears /

この詩は、四羽の鴨、緑の土手、空に浮び過ぎる白雲を簡潔に我々に印象づける。ふと目にふれたなんでもない風景が、幾年にもわたって、ずいぶん後までも思い出されることがある。涙をさそうこともある。そんな気持ちを大切にうたっている。

早くも一年が過ぎた。印象がふかかったことや、今の月分の気持ちをあらためてふりかえって書きしるすことは、将来のために良いことである。その一つ一つの記憶は永久に消えず、思わざる時に異常にはっきり浮んでくるだろう。例えばiusane なる語がゴッホを想い出させるかもしれない。糸杉や寝室の絵、テキストの表紙、教師の表情などまでも。又ふと、あの教室の窓を枠ごと見事にたゞきつけたカラッ風をなつかしむかもしれない。二年、三年と楽しい思い出をのこしてもらいたい。

現実はいきびしい。苦しいことも沢山あるだろう。しかし、虚勢をはることなく、自分をよくみつめて、独自の道を歩いていけ。机をはなれて、のんびり野道を歩いてみよ。豊かな自然に接して、全くなりがった角度から、物を見る余裕が生れてくるだろう。成長を心から祈るばかりである。

諸行事と回想

この一年の主な行事をあげると、
 四月 三日 入学式
 八日 初の高校生活開始
 五月 四日 新入生歓迎一万
 十九〜二十日 総合体育大会
 六月 十五日 文化講演
 七月十八〜十九日 校内競技大会
 八月 下旬 夏期特別講座
 九月三十日〜十月一日 身延山研修会
 十月 十八日 強歩遠足
 二十三日 学校創立記念日
 十一月一〜三日 文化祭
 十二月 下旬 冬期特別講座
 二月 十五日 春季一万
 三月 一日 卒業式
 試験試験で追われてまたく間に過ぎてしまったこの一年も楽しみと苦しみがたくさんあった。これから先、幾度か困難とぶつかるかも知れないが、この文集を読んで、またはりきって明日にむかって進みたい。

萩原憲明

苦しかった生活も今から見ると、何のつらさもなく、過ぎてしまった感じがする。

強歩大会で夜を徹して歩きつづけ、懐中電灯一本持って友と行ったこと。身延での研修会に雨が降られて、半日中室の中で楽しく遊ぶんだこと。その他小さな事が、あれこれと浮かぶ。入学当時うつろに思われたこの生活も案外楽しかった。だけどその楽しさも小さく頃に比べると、苦しさが多い中に、少しはあるが見いだされるような気がする。それだけに、その楽しい思い出が強く頭に残る。それがこれから先も、不意に現われてきて、クスと笑いがでるかもしれない。そのためにも今までの楽しさをいつまでも持っていたい。

依田政幸

四月の初め、渡り廊下を北に進んで校庭に

この一年間



接する二階の北側の太陽の照っている窓ぎわに座った。新しい高等学校へ入学した心にはすべて美しく新鮮に見えた。この校舎も、窓ごとに見える山はだも、また周囲にいる友だちの顔も、このすばらしい雰囲気の中で高校での三年間における意志をかためた。

田中正文

キラッと光る校章に、銀色のえり章。不安の中にも、希望に満ちたおももちで、名門甲府一高に入学しました。その堂々たる偉容。灰色がかつて、高々とそびえた校舎に、全校生徒の気塊とブライドが感じられた。日がたつにつれて、この感はいよいよ深まっていった。がしかし、最初に思ったほど、線が太くなかった。いかにもこせこせしていた。そして、その状態は今なお続いている。僕は、この濁流に押し流されまいとして、かえってこせこせしていたのではないか。こんな流れを作った社会も、その流れになった、日本の多

高野孝雄

この一年間に、まず第一に印象に残ったこと、それは、希望に燃え、一高の門をくぐったあの時の気持、これを一生忘れることがないことだろう。そして体育部に入り、先輩と共に毎日、日がくれるまで練習し、家に帰ってからは、あまり勉強できなかった。そんなことで、一学期は過ぎてしまった。夏休みの十日間の合宿は、毎日が苦しかったが、終わったときは、ほんとうにうれしかった。それにこの合宿は、ぼくには、貴重な体験だった。二学期朝中頃、部をぬけたが、これからも、あの頃と同じように、「毎日毎日を全力尽していく。」という気力に満ちた生活をおくって行きたいと思う。

小野松治

入学してはや一年が過ぎてしまいました。この中にはいろいろな思い出が沢山あります。中でも心に残ったのは強歩の事です。この時私は友達の有難さや先輩のよさを強く感

じた。その入達がはげましてくれたので、足の痛いのも我慢して中込まで行けたのだと思います。よく「高生は冷めたいと言われるが決してそうばかりではない。中には心の暖い人も沢山いるのだ」という事がわかりました。汽車に足が痛くて、保坂先生にに手伝ってもらって乗った事も今では楽しい思い出となつて残っている。あの時は、校内生活では学べぬ有意義なものを私に教えてくれたと思う。これから皆がバラバラになるかも知れないけれど、楽しかった思い出を時には思いだすことでしよう。

清水文法

あこがれの一高に入学を許された時は天へ登る嬉しさ感激でした。この感激の中にもはや一ケ年も過ぎんとしこの一ケ年を反省する時に今迄の中学時代と違つて学友が皆秀才揃いである事と先生の講義に權威がある事を痛感しました。入学の喜びは一ヶ月位で消え去つてもまず頑張らなければ一念に燃えるのみです。やらなければ落伍する、やつても落伍するかもしれない。不安は中学時代と違つたすこし大人びた考えに変わり、まずやれるだけやり、絶対負けられない気持ちになつた事

数野詞治

入学以来およそ十ヶ月三百余日が夢のようにすぎ去りました。入学式の感激や、秋のイチョウの黄金の美しさ等に打たれたのはつい昨日のことのようです。特に身延の宿泊訓練は、いまでも忘れません。信仰深い祖母と共に家中で何回か行つたこともあるのですが、その朝は落ちつかなかつた。あいにくの雨に降りこまれて外出は出来ませんでした。雨に洗われた古木の肌の美しさや名も知らぬ小鳥のつばさに深山の感じを受け、ちり一つおちていない清潔な庭は、杉の木立と対照してすばらしいな、と思いました。本山を中心にして数知れぬ坊が並びその規模は宗教の偉大さを物語っているようです。今から何百年もの昔行脚によつてこんなすばらしい山を発見した日蓮上人は立派な人だと思いました。

原田久

四月に入學、不安と希望を胸に高校生活を始め、早くも一年過ぎようとしている。

この一年を反省すると、何が身についたであろう。何か自分でも満足したようなものがあったか、「電車通学の疲れだ。」といつて

は一つの進歩と思われます。言同生としてのほこりを傷つけないようにまた社会人としての人格等に一層の奮気を新たによびおこすものです。

細田浩

この一年間何をやってきたのか自分でもよくわからない。が、忙がしい生活の中で、一番自分の利益になり収穫があつたかというとはやはり強歩遠足で中込までいけたことだ。それも競技において遠くに行けたのではなく、一人きりで歩くように努力し、その結果、己れに勝つたことは自分に大きな自信を与え、非常に有意義であつた。人間一生涯において自分の力を試してみる場というものは、まれであると思う。その中に強歩遠足がある。ましてそれが未来どんな人物になるかわからない学生時代にあることは、まことに有意義であると感じた。

最後にクラスの仲間が非常にも朗らかでクラスを明るくし、その中で勉強できたのは、とても幸福であつた。

意気揚々として入つた学校。しかしこの学

宅間功

自分を甘やかし努力を怠つた自分がなさけないように思える。また高校という所をあまりにあまく考え過ぎた。一種の不安が胸に湧きその不安が自分を考えさせた。「こんなことでいいのか。」

もっと自覺して頑張らなければならない。

渡辺兵衛

高校生活の最初の一年間もあと一カ月を残すだけになつてしまつた。そこでこの一年をふりかへつてみると、試験の連続で苦しかつたことがまず感じられる。その反面数々の楽しかつた思い出も頭に浮かんでくる。中でも身延の研修会は印象深かつた。深閑とした環境の中での岩間先生の講話は、ダム工事現場の真心ある青年のことや日蓮についてのいろいろな教訓をたいへんわかりやすく話され、僕たちは深い感銘を受けた。話し合ひでは友人のすばらしい思想を聞き、時のたつとも忘れて議論に熱中した。その他にも数多くの思い出のあつた身延山での体験はこの一年間僕にとつて最大の収穫であつたように思う。

校は入学前の知識とではかなりの差があると思う。最初外から見るとわりに立派な校舎だと思つていたのが貧弱なものにはびっくり。ガラスは割れている、羽目板は風通しが良い。天井からは液体が落ちてくるからである。想像より学習が苦しいと言うよりは、理解しかねる問題が自分にとつて少し多過ぎるので困るが、依然として教科書に対する意欲は腹の下の方に住み、頭の方にはさっぱりおとずれて来ないのである。勉強をしないのだから、したがって成績は良くならないのである。

長谷部貞夫

一年とは実に早いものである。一年の数々の行事も終えた自分としては、おかしいようであるが、まだ「入学」ということが頭の中になくてもない。それはただ一人とりとめもなくすごしてきた証拠であらうか。クラスの友とただ楽しみだけを共にしてきただけだからであらうか。が、一つ一つ振り返つてみると、勉強の面でも他の面でも、少しは進歩したものと考えることができるような気がする。これからは「困難が大きければそれに打ち勝つ名誉は大きい」をあいことばにして、頑張つていこうと思う。

名取孝

私達は四月にこの学校へ入つた。そして十一月になつて寒さもきびしくなり、ストーブはいつ入いるのか疑問に思つた。風が吹けば窓はがたがたゆれ、ひどくなると砂が入つてくる様である。私達の過去はこんな事は全くなく、ストーブがあり寒くてふるえるなどという事は無かつた。私達の中学時代は幸福だつた。かつての時代の私は現在と過去を比べると現在を非常にきらうだらう。しかし、今の私はちがう。私達は「寒い、寒い」と言いながら冬を過ぎた。この間に私は中学時代は足りすぎたと思つた。それは寒い中で緊張してする勉強は身にしみこむことが分つたからだ。それに、このような体験はきつといつか役に立つと思つたから。

田中清隆

昨年この学校へ入つてからもう一年もたとうとしている。この一年間をふり返つて見るとまず第一に思い出されるのは強行遠足である、実施中は足に豆ができたりして苦しかつたが今になってみると良い思い出となる。

それから新学期の頃も思い出される。その

頃は皆、緊張していて、僕は中学時代がなつかしく思われたが、今では当時の様子などはあまりみられない。ぼくにとってはこのような雰囲気の方が良いようにも感じられる。

田中秀文

「光陰矢の如し」といわれるが、甲府一高へ入学してからすでに一カ年が過ぎ去ろうとしている。何もかもが新しいことばかりで夢中ですごしてしまった気がする。一高にはいつて特にめだつて心に残っていることは試験がむずかしいということ。これが何よりもぼくにとっていやなこと苦しいことである。ただでさえ試験はいやなものとおもわれるのにこうむずかしいのには閉口してしまう。その上一学期朝間に期末・期間考査、さらに学力または基準考査などがあるのだからなおさらである。しかし、いやだ、きらいだなどとはいっていられない。もうすぐ二年生なのだから……。

内藤雄次

四時間目の終りをつげる鐘がなった。本をカバンにもどす音がしたかと思うと、あいさつもそこそこいちもくさんに、食堂に向つ

てかけだす。前には先生も驚いていたが、頃はそれでも慣れたらしい。このくらい早く飛び出してもすでにかなりの人が並んでいる。このところずつと弁当を持ってこれるので、この苦勞をしなくてよい。それでも、できるだけ早くしまい、できるだけ早く昼食を終える。それがおいしくなろうとなかろうと問題でなく、ただ満腹になりさえすればよい。こんなに味もそつけない昼食でもやはり楽しい。あちらでもこちらでも、笑い声が、話し声が、自然に生まれてくる。

大木勝彦

おもわずニコリしたくなる空の青さ、山の緑、日新ホールの屋上で、これらを見るのが大好きだ。入学して以来、時々ここに来た。そしてポカポカする日光に目を細めて、ぼんやりしていたものだ。今では、もう山の木の葉も落ちて、遠くの山は、冷たい銀色につつまれている。時たま名物のからつ風が、無遠慮に吹きまくる。この前の昼休みも紙クズが、八ヶ岳から吹いてくる風にまわされているだけだった。が、春が来れば、土色の山が緑にかわり、ポカポカする日光がまた私をねむくさせる。そして私はその快さに思わ

ずほほえむだろう。私はそんな時とても幸福だ。屋上は唯一のいいこの場だ。私は昼休みをここで過ごすのが大好きだ。

小林章一

我が一年四組は男子クラスで、みんな礼儀などというものは全然なくてこの寒い冬にあげた戸もしめずに、教室から出たり入ったりする。（戸もあまり良く動かないが）それでも一月に螢光灯が入ったので以前よくやったふとんの投げつこなどはしないが、まだチョークの投げつこなどを時々したりする。こんな天心乱慢でのびのびと勉強している雰囲気は四組の良いところといつていいかもしれない。そしてこの氣質を長くもつていきたい。

鎌田隆雄

一見物置小屋と思える建物、廊下、階段を歩くと所々床板がいたみ、ギシギシという。いまにもこわれそうな校舎ではあるが、そこで一年間生活して来た中にはいろいろおもしろいこともあった。清掃当番のとき、掃き寄せたゴミを板のすき間に掃き落して先生の注意を受けた事もあった。又風の強い日にガラス戸がガタガタして一時授業を中断する事

あった。天井には雨漏りで多様の地図が書かれているのもおもしろい。この校舎もこの長いことなさそうだが、そしてそのボロが与

えてくれた出来事のいくつかはいつまでも忘れることができない。特に冬は完全暖房で全身こおりつく思いで勉強したことなどは。

身延の思い出



山本正敏

去年一年生全員で身延山に行ったが、その一日目の夕食後のことを想い出す。お茶を飲みながら、御飯が足りないなんて言っていると、お茶が足りなくなったのでぼくがお茶をもらいに台所へ行った。すると、広い台所で夕飯を食べていたおかみさんらしい人が、「皆さん、まだ足りないようですか。」と尋ねた。ぼく自身ほんとうに腹がへつていたので「ええ、足りません。」と答えると、「うちではこんなに御飯を使つたのは、初めてですよ。」とぼくの方を見ながらいう。いかにもぼくが食べるようで、恥をかいてしまった。

塚谷次雄

九月下旬身延山で研修会があった。「坊」という言葉からはかけはなれた感じで旅館の様な感じがし、食事などは若い坊さんがみてくれた。夕食のあと話し合を三時間余した。会の目的は達せられた様だったがまだまだしつくりいかなかった所もある。今年が初のころみだったが毎年一度くらい行なつても良いと思う。時季も秋でちょうどよかった。春の遠足をやめて、これに力を入れた方がよいだろう。

横塚尚志

又、身延へ行った。しかし、数年前とまるで印象が違うのは否めない。同じ道、同じ階

段、同じ寺なのに。やはり成長しているのだと思った。

二日目、天候、雨。朝からしとしと降り続いてとても登れそうになかった。しかし山は印象的に美しかった。渦巻く霧に全身を灰色のベールでおおって、暗黒の空に更に高く聳え、さながら、その肩に天をも支える巨人のようであった。そして彼は、幾万木という針を大地に突きさし、雲を呼んで、我々をあざ笑っているのだ。「愚かで、ちつぽけな人間どもよ。思いあがるな。もう一度、よく自分たちの姿をしてみる。まだまだ俺様はおもえたなどには、負けはせんのだ。ワッパッハッハッ。」……と。

上田 満

身延山での二日はとても楽しかった。二日目に雨に降られてがっかりしたが、一日中部屋の中で話合いをしたり、トランプ等をして楽しんだ。話合いの時は皆活発に意見を出して大変勉強になった。ぼく達は、クラブ活動学習等について話合つた。前の日山に登つて栗を拾つたりして遊んだ。この二日間はとても楽しくまた勉強になった。今後ものような会をしたらよいと思った。

多田和夫

九月三十日から一泊二目で、一高では初めて身延山研修会が行われた。生徒同志、又先生と生徒との親近感を増そうというのである。身延山はさすがに景色がすばらしく、又空気も清涼だった。すぐに身延山久遠寺の大講堂で校長先生や他の人の話を聞いた。みな話に感動したのか、割合に静かだった。その後、寺の中の見学、記念撮影などをしてから坊に帰った。夜は坊で「クラブ」「友情」その他について、時を忘れて語り合った。翌日はあいにく雨で「奥の院」行きは中止となった。皆で話し合いの続きやゲーム等をして時を過ぎた。たった二日間であったが、みな話し合いを真剣にし、先生との間の「しこり」？もなにかしら解けたような気分であった。

保坂哲也

私達は、身延山へ行った時「愛」という事について話し合いましたが、それから数ヶ月の間に、私はいくつかの世界の名作を読みました。それらの主題は、みな「愛」と「命」と「戦い」について書いてあり、その中から私が読み取ったことは、「愛」ということは

がすぐれず清里の手前でついにダウン。僕はより重症的な同行の友を一応は元気づけながらもその光景で幸福感に満たされていた。

清水 毅

赤い光が前をポツリポツリと行く。そのはるか向こうに大きなあかりが二つ見えた。『検印所か』―それは小さな小屋を照らす外燈だった。其黒な木がおおいかぶさった。山は静けさを表わすかの様に黒く澄んでいる。もう追い越して行く人達もない。友と二人きりだ。なんだかとり残された様な気持ちになつてしまった。もうどの位歩いたんだろうか。太鼓の音に、合戦きどりで出発したのはいつの事だったか。気付けの軍歌を歌う元氣も今はまるでない。一步毎に膝がガクガクする。フラフラ、幾度か友とぶつかりながら歩いた。電燈の光も眠そうだ。あとの位歩くんだろうか。むしろ人にが恋しい夜だ。

秋山義人

〃毎時五キロ〃これはすなわち、僕の強歩大会における平均時速である。あの清里までの夜道。もうすぐだから、すぐだからと思いつながらつらいのをがまんして進んだあの時の

あらゆる物から影響を受けるということ、偉大な「愛」があるということです。キリストが『「愛」とは同胞を愛することなり。』と言いましたが、私達の同胞とは、家族、友人、学校、社会、祖国、人間となるであろうか。いずれにせよ、「愛」と「生命」「戦争」とかは、はかりしれないほど多くの素因をもっている物だと、私は思います。

大石俊治

ぼくがこの一年間で一番印象に残っているのは身延の研修会のことです。岩間先生の講演やクラス単位の話し合いなどがおこなわれ

強歩の思い出

吉 岡 一

ああなんでこんなに美しいんだろう。無数の星はわりはみ、山がほんのりとその暗いかげをすすきのほかげに見せている。耳もとではかすかな虫の音と小気味よい小川の音がデ

気持。しかしそのあとには、すばらしいなにともとえようなない夜明けが待っていた。苦しかったあとの…。ここが行くか行かぬかの瀬戸ぎわである。しかし僕は…。野辺山におけるあの景色は、絶賛すべき美しさだった。高原を直行するあの遺、進め、がんばれ。僕らは、もう情性で進んでいた、が。またすばらしい景色が待っていた、帰りの千曲川辺の紅葉だ。けれど僕は途中から寝てしまった。しかしこの初めての強歩の思い出は、いつまでも心の中に織り込まれているだろう。

天野朝馨

初めての経験であることへの心配と期待の気持ちで校門を出てから、寝静まった町を歩きつづけた。三軒茶屋から清里まで、ここが一番の難所だった。懐中電燈の光も弱まり、地図に2キロと書いてあったが数倍はあつた。街燈の光を見ては駄だと思つて幾度かがっかりした。日の出は清里でむかえた。金色の光が一面に広がって行く様子はすばらしい。清里から野辺山までの紅葉の林などが霧のわれ目から見え始める光景は絵のようだった。帰りの汽車の中で、疲れはてた体の中に何か得が

た。この集会で、日常私達が感じているいろいろの悩みについて書見の交換をしました。

私達のクラスでは、「友情」「クラブ活動と勉強は両立するか」というような問題について話し合いました。しかし、時間も少なかつたりしたために結論を出すところまで行けなかった。が、このような集会は、今自分が考えていることを多くの生徒も同様に考えていて彼らはそれについてどのように対処しているか聞いて、大変ためになった。このような集会は二年、三年になつても続けてやりたいと思います。



ーマソングの如く響いている。今までの気分の悪さもどこへやら。彼もきつとそうだろう。

僕は九時意気揚々と一高を出発長く苦しく楽しい徒歩旅行を開始した。快調に前進を続け若神子あたりまではなんとか来たが気分

たいものを得たような感じがした。

小林賢二

出発十六日夜九時、校長先生のタイコの音を合図に、校門を出る。道のわきには、僕達をばげましながら、見送ってくれた家族の人々がいた。僕は、中込までを目標にして、一步一步力強く前進した。夜空には星がピカピカ光って、とてもきれいだった。

空が僕達をばげましてくるようだった。

小林正英

校長先生が打つたたいこの音と共に強行遠足は開始された。僕は最初にあせつて早く歩きたすぎたせいか清里でとうとう弱音をはいて休んでしまった。それから足が棒のようになつてしまい一步一步がすごく身にこたえた。

清里では早い方であつたが、そこを過ぎてからは一人二人三人とどんどんおい越されてしまった。くやしいがどうしようもなかった。

でも思うように動いてくれない足を引きずりながらやつとの思いで野辺山につくことができた。それはそれは実につらいものであった。

この結果は歩き初めの頃あせつたり、清里で休んだのが悪かったのだと思う。この経験

を頭におきながら強い意志と落ち着きを持って何事も失敗しないように頑張り、それによってこれからの生活を有意義にしていきたい。

古場哲郎

六月三日の遠足は雨の為に延びてしまったが、その代わりとして七月九日に行なわれた。よく「高校生活は味けないものである。」といわれているが、だれでも皆楽しくそして明かるい生活を望んでいるのだ。そのことが今回の遠足でよくわかったような気がした。バスの中でのど自慢や、おもしろい話、目的地でのソフトボール等。

やはりこういう機会にクラス全体が一つにまとまっていくという事。これが学習面にも影響してくるのではないだろうか。

松尾 栄

この競走は学校へ入って、はじめて経験した。前は中学で七千メートルを走った。でも一万メートルとなると、ちよつと心配になった。しかし前の記録より良くしようという気持で走った。走ってみると、苦しさ足の痛さで「歩こう」と思った。でも折返し点を通

冬の空

武井秀雄

それは、青く澄んでいる。

やわらかな日射しは

遠い山々の純白なコートを

キラキラ輝かせる。

時として浮かぶ深い白雲は

生命のはかなさを象徴するかのよう

自分の心を曇らせる。

時として降る銀色の雨は

時には絹糸のように

時には朝露のように

この世を嘆く人の涙のごとく

この汚れた社会を洗い流すがごとく

ただ落ちる

時として舞いおりる冬のスター、雪。

それは幼い音を語るがごとく

やさしく静かにつもる。

西の雪山に日が入りオレンジ色の夕日が

煩わしい多い世の中を染め始める。

冬の空は、また一日暮れる。

過した時なんとなく疲れを感じなくなった。その時から何人も追い越し気分をよくした。学校の少し前、最後の力を出し、二、三人を



寒 朝

村松康彦

私だけが畑中の道を歩いていく

だれも連れなく歩いていく

あぜ道には草が白いものをかぶりながらも

若芽を出している

春がいるように

だが私はひとり歩いていく。

ほほは赤らみ固く感じがなくなっている

鉄道線路の方へ来たのであろう

空中でかげろうがもえている

しかし音はない。

その上にはからすの群がいる

だが声ほしない。

高校時代

安藤一宏

一生とは、ほかない命をもったものの

長くあるいは短かい

生から死までのもの。

しかし高校時代、運命の転換期である。

まだ未知である世界を求め、夢をもち

ほかない旅路に出る準備、

そんなときと思う。

あるときはつらくそして楽しく

勉強しまた体力の基礎を築く時、

現在の政治・世の中に目さめる時、

子供でない完全な大人でもない

まだ未決定な時、

しらずしらず通してきた子供の世界

しかしそれも無意義でない。

高校生活を有意義に過ごそう。

そして未来に生きる準備のため／

われらの教室

江間誠二

ある日 あの時 夢の中

抜いた。そしてブラブラしながらゴールインした。記録は前よりも良かった。うれしかった。その時急に疲れを感じた。

詩

山の朝

丸茂皓生

山の朝は、美しく、清らかだ。

ほの暗い空が、しらじらと紅色に染まる。

それが青色に変わる時、

朝の太陽が其赤な顔を現わした。

空は、青く澄み、雲は一つもない。

山々は、きりつと青い姿を浮び出す。

空気は、冷たく澄んでいる。

山の朝は、静かだ。

山の朝は、生き物を心の底まで快くする。

モダンな、モダンな 校舎に憧れて

目がさめたら 木造建

夏も 冬も " スイススイー" ドタン"

前者は風なり 後者は戸なり

「賢者は質実から生まれたと」

賢者は賢者、おれはおれ

やつぱり モダンな教室 恋しいな

秋

志村義一

吹き荒れていった強風に追われて

焼けるようだつた夏の名残りは

あと形もなく消えていった

草の上に坐っている

悲しみの幻想だけが

私たちの呼吸を奪ってしまふ。

頭の上でツバメが「サー」と風を切った

背景の青空が落ちてきそう。

時々微風がきて私たちを抱いて、

熱い匂いをかき出そうとする。

あわただしい世の中にも

こんな美しい流れもあるのだ。

追憶

深沢正樹

一年がすぎる
一年がすぎた
ほのかなかおり
やわらかいみどりの世界
こころはきぼうとよるこび
するどいひかり
まぶしいきいろの世界
みずうみのほとりでくらす
さわやかなそら
しみるようなくれないの世界
ともとのかたらい
さびしいおと
つめたいはいいろの世界
あるくあるくあるく

一条の光

前島良男

年老い校舎が立派に見えた時、
見知らぬ人が友人のように見えた時、
ツイーと、何かがジャンプした。



読書

石川利彦

今考えてみると小学・中学時代を通して読書するという環境に恵まれていたにもかかわらず余りに本を読まなかったとつくづく後悔の念をいだくようになった。というのも今までは読書に対する意義、価値というものについて自分の概念が乏しくまた考えが浅かったと思う。しかし個人によっていくらか読む時期が違うのだから僕の場合は高校になって読書意欲がでたのだろう。それだけに社会に対して以前より少しわかってきたと言っても良いと思う。これからは暇をみつけて良書をより多く読み、考えを一層深めていこうと思う。

おい友よ、何がそんなに心配なんだ
何がそんなに心配なんだ。
だれかがそと

「自身を見つめて大きく生きる。」と、
言っただろう……。
聞いただろう……。
大きな重荷が小さく感じられた時、
それでも重荷はいつまでも重荷に、
ずーと。
一条の光が、何条かの光が
そとと包んでくれる……。

夜

遠藤憲三

静かな淋しい夜だ
電灯が無口にぼんやりと道を照している
寂しい夜だ
時より車の音が意外に高く聞える。
星がなかったかのようなのである
ザワザワと木の葉がさわいである
顔を刺すような
冷たい、夜の風が感じられる。

随想

道

深沢又男

山へ一人で登った。誰も通らない。沢に沿って雪の中をグサグサ登る。聞えるのは流れの音と足音だけだ。しばらく行くと二・三年前まではよくトラックが通ったものだが今では片側は崩れ、他方は上からの土砂がつもり、半分ほどの巾になってしまった道にでる。時々、ガサガサと音がする。何だろうと思つて見ると土砂くずれだ／＼……、そして又、前の静けさにもどる。又少し行くとトンネルがある。天井には大きなツララが何本もある。棒でたたくとグワーン響く。

ああ、今ではすっかり荒れはててしまった道、しかし、僕にはこよくなつかしい。

試合

岡部修造

打たれた！
スコアボードに1が出ていた。
なおランナー一、三塁
「どうしよう」
一瞬不安に襲われた。
もし盗塁でもしてきたら
もしボールをのがしでもしたら
胸がドキドキしてきた。
盗塁しないでくれ
僕はそう祈りたかった。
次第に孤独感に襲われてきた。
僕は助けを求めたかった。
誰れでもよい……
「ショートがんばれ」と二年生の声
とたんにフアイトがわいた。
と同時に孤独感がスーと消えた。
青い秋の空が
さも笑っているように大きく目に映った（

ぼくの友達

窪田岩夫

ぼくには親友はいない。そしてまだ知らない。ぼくにはどんな人も普通の友達で十分なのです。ぼくには親友のよさというものは分からない。しかし、ただの友達によさ以上は必要ないのです。

ぼくの学校での友達に区別はありません。一諸に話し、ふざけ、笑う人。皆ばくにしてみれば友達なのです。ぼくは相手がどう思っているかというその人を嫌いなになんたくないのです。好かない人とも話し一諸に笑う。嫌いな人ができないように努めている。一人の親友を作る前に、皆と友達になりたいのです。

僕のストラヴィバリウス

鈴木義広

ストラヴィバリウスとは、現在世界に六つしかない時価七千万円のヴィオリソの名器である。僕がヴィオリソを手にしたのが六歳の

時であるから、もうかれこれ十年になる。その間幾度かステージを踏み、又、テレビへも出た。しかし今までに快心の演奏とは縁が遠かった。楽器の整備がまずかったり、身体の調子が悪かったり、みな、ちよつとした不注意からだつた。でも僕の楽器ほ、ストラヴィバリウス以上に良く、僕のわがままをうけられて、働いてくれた。七千万円位の金額では代償できないほどに。無論、僕のヴィオリンは、ストラヴィバリウスではないけれども、それ以上の名器であるだろうと思う。

自己

赤池幸久

ぼくは今までのいろいろな大事な事を学んだ。知識を身につけ自分の考えを持つ事がいかに大事かということは、勉強するのにまた他の行動にも非常に大切である。また高校生は常に時間との戦いである。いかにして時間を有効に使うかという事がこれからの課題であることがわかった。時間に追われる生活は実に単調なので常に「自己を考える」時間を十分とりたいと思う。しかしあくまでも「自分をばかにするな! 自分がしなくても人

がばかにしてくれる。自分を悪くみれば損をするのは自分だけだ。」と言った先生の忠告を忘れずに、守っていきたい。

空想の世界

平井洋一

「SF」なんて言葉を、聞くようになってきたけど、米国では30年くらい前に非常に盛んだつたそうで、今でもかなり人気があるらしい。とすると日本は米国より30年もおくれていることになる? 日本語に訳すと「科学小説」となる。幼稚な感じがするが、そのテーマは超自然的な物が多い。推理小説を読む時間があつたら、たまにはこれを読んでみたい(たくさん読める程出版量は多くないが)。

「物理学入門」(分ツ。ハズ)を読むと「SF」の中に含まれているすばらしく独創的な世界観が実に富んでいるように見える。又空想というものの大切さやおもしろさが養われる。

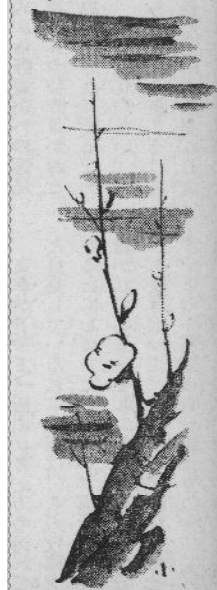
アラビアンナイトの宝物

斉藤正敏

秋風の快い感触に誘われて、かすかについたその手を振りほどいた: 君は小さな枯れ枝。空の青に身を泳がせる。ひやつと冷たい空気にビリッと体を震わせた。小さくひからびて、乾いたような土色も、今は黄金の島。君を追う子の目にはアラビアンナイトの宝石だ。そして彼の心は君のことだけでいっぱいさ。

彼の手は小さくて白い。つきたてのもちのように柔らかい。しかし: 君そのが中に収まった瞬間から、君はまたものひからびた一枚の枯れ葉さ。君は彼の手から出て行くよりはかなかつたんだ。

5組



プロローグ

楽しかった一年、悲しかった一年、つらかった一年、つまらなかつた一年。それぞれ個人差はあるでしょうが、三十八年度も終りました。希望・大望・あるいは野望・非望・欲望を抱いて入学し、それが失望や絶望に変化した者も、「今年こそは」で始まり、「来年こそは」で終つた者もあるでしょう。それはそれとして、一高の第一学年を終了した記念として学年誌「あしおと」を刊行することになりました。我々一高生が、どんな考え方をしているか、どんな経験を積んで来たか、まずは全編をお読み下さい。

この日ごろ うたよむことのよはりきて われはしも しきりに 思ひいづ かのふるさとの遠き山なみ (作者失念)

うたよむ心、詩心は日目の忙しさに次第に失われていく。めまぐるしく、つめこむことがいっぱいで、目前の「有用」だけで手いっぱい。「無用」のものなどよろしく忘却の向こうへ追い払わざるをえない。でも、緊張のしつづけでは疲れが出る。傷つき疲れた心につと去来する思い。それは、ふるさとの遠き山なみなのである。

そのおもかげの 幼くて わが越えしままついづい記憶もうすれがちなのだが、

ああ そのおも

かげの

遠くいとけなき

日のまに愛らざ

れど……遠き山な

みのおもかげは、



無用の用

古星真孝

／子守歌やままごと遊びやらと重なつて、とげとげた心に何かほつとしたものをあたえてくれる。

かのやまなみのふもと

すでに久しくねむりたる かの遠き日よ ふたたびわが前に生れ出よかし

「かの遠き日」をいとおしむ。ひととせ前もすでに「遠き日」となつてしまつた。思えばけなげな意気と謙虚さ、何よりも清新の気満ち溢れた日日ではなかつたらうか。その「遠き日」をふりかえりなつかしむ。それは、一時の感傷におわらず、現在を省みるよすがであり、当然明日への飛躍の大切な拠り所とならう。初心時代を忘れないこと、どうやらそれは「無用の用」、ムダの効用ということにならうか。

一年間を顧みて



一年間の反省

少年老い易く学成り難し、こんなことを考えるのは先のことだと思っているうちに、はや一年が過ぎた。高校生活に慣れるにつれ、新入頃の緊張と新鮮な気持が薄らいで来たことを自分自身、又周囲にも感ずる。同時に伝統と名門というこの言葉に学校全体が溺れてはいないかという疑問を持った。いつか先生が言われた「初心忘るべからず」「良い伝統をつくる」という言葉を思い出した。僕はいつもこういう気持で一高生の名に恥じない人でありたい。

(長田)

ゆううつ

高校に入ってから、今までの一年間ゆううつだった。今もそうだ。別に理由はないが、

当時と少しも変わらず、進歩がないのではないかとという不安です。なぜなら、他の人との交わりを、ほとんどしないで通ってきてしまったからです。なぜそういうことが言えるかというと、「自分は一高にはいって、実を為になったことが多い」とある卒業生がその話の中に、「一高生は、すぐ考え方が進んでいる。だから、自分ではできるだけ話をし、考えを聞いたりした事の益は、何を置いても、一番良かったことでそれだけでも毎日が楽しかった。」と言っているのを聞いて、自分も入学したらこのようにしたいと思っていたからです。もちろん、こういうことだけで、考えが伸びるとは言えないが、「自分は思考力が足りない」ということを思っていたので、入ってからの事を大いに期待していたのです。ところが、やはり人には性格の相違があり、又話下手の私は、このことが実行できなかつた訳です。悩んだ末、結局他のことは考えずに今は勉強だけを熱心しよう、とある時から決めて、もう一人でも何とも感じなくなっています。この一年間、一高生から学び得た事が余りなかつた事が残念です。

(宮川)

特に一言えは、成績の悪い事と、友達があま

りできなかった事にあるかも知れない。そんなわけで、何をしてもおもしろくなかつた。ゆううつな毎日を過ごしただけで終つたのだ。二年生になつても結局同じように過ごさ

一年を振り返って

(武川)

夢の様に早くも一年が過ぎてしまい物足りない気持がする。入学式から野辺山への遠足身延での勉強、強行遠足等、つい昨月かおとこのようにその時が思い出されてくる。一年間を振り返ってみて、余り変化のない、単純なあつけない生活であつた。今年こそはもっと勉強の面にも、運動の面にも活発にしようと思う。今年こそは強行遠足で松原湖まで

あつけなかつた一年

入学した時がついこの間のように思われる現在である。この一年間高校生活をして第一に気がついたことは生はんな勉強ではついていけない。第二に行事が多い。という点である。前者はともかくとしても、後者には、予想外であつたから奇妙な感じがした。しかし一つ一つの行事を体験した後は、こういうものも確かに必要なんだと感じる時や、又逆に何の役に立つんだらうなんて考えさせられるものもあつた。いづれにせよ、あつけなく一年が過ぎ去ってしまった。

(坂本)

あと五百日を有意

義に

私達の一高での生活は、あと何日あるでしょう。去年の四月、希望に胸をふくらませて入学したと思つたら、もう一年生の生活は終ろうとしています。「歳月人を待たず」の諺の通り、一高生活も、五百日足らずです。過去一年間を振り返ってみると、学校生活、家庭生活での、時間のむだ使いが多くて、学習

行き、一万メートルでも、思い切り走りたい。(名取)

初心を実行に移す

もう一年が過ぎ去ろうとしている。早いものだ。入学当時、校舎のすみずみまで、何もかも一高がめずらしかつた。だが今では大部慣れてきた。学習面においても、今までを振り返つてみて、初心は非常にフアイトでみなぎっていたが、いざ実行に移すととなると、なかなかスムーズにいかない。なんだか何もしないでこの一年が過ぎてしまふみたいだ。

初心はまだ、心の中にある。今後はそれを実行に移していきたいものだ。

(玉山)

一高生と自分

文章が下手で、皆より考え方の遅れていると自覚している私は、実は、この投稿をしないことにしていたのですが、黒板に番号まで書かれてしまいましたから、「強制的なこと」と受け取って、仕方なく、投稿した次第です。この一年間の自分を振り返つてみました。まず感ずるのは、自分の考え方が、入学

などに、満足な結果が得られなかつたので、残る五百日は、一分一秒の時間も無駄にしないで、学習等にすばらしい成果を上げるように努力したいと思います。(中田)

土足と廊下

私たちのクラスの廊下に下駄箱がある。掃除の時すっかりきれいにし、ほうきを教室へおいてもどつてみるともう廊下は泥だらけである。一人の人が土足で歩くと次の人はそこが汚れているので又土足で歩く。そして次々にそこは汚され、たちまち泥だらけになるのだ。最初きれいな所を土足で歩く人の心は全くわからない。その人がそこを土足で歩かなければ……。こんな事がこの一年間続けられていた。こういう行為は、これに限らず何事にも通ずる。みんなで考えて欲しい。

できないあいさつ

(小林恵)

簡単に、なかなかできないのがあいさつだと思う。高校生徒になつてから特にこれを感じるようになった。バスの中で、教わって

る先生によく会う。気がつくとすぐあいさつをするのだが、ちよつと間が狂うと頭をさげそびれてしまう。また、近所の人に会つてもよく話をする人でなければ、何となくあいさつがしにくい、あいさつをしたあととはとてもよい気持なのに。

(今井)

数学・記号・アル

フアベツト

私達が去年の四月入学して以来、今日までたいていの人は「もう一年間過ぎた。」などと一年の短かさに改めて驚嘆するであらう。けれども私は違います。この一年間が長いのに驚きました。幾度もテストの後の結果にはため息をつき、英語のアルフアベツトに数学の数字、記号に追いかけられました。これからも数学や英語と一緒に進むことはさらに続きます。けれども数学や記号やアルフアベツトには絶対に負けてほならないと思います。

(岡)

過ぎゆく一年

「光陰矢のごとし」の諺どおり、一高に入学

回想

新しい学園生活に対する希望を持って入学してから、もう一年が過ぎ去ろうとしている

(内藤)

数々の思い出が、僕の人生の歴史の一貫が完成しようとしている。学習面、高校生としての人格、又あらゆる事が進歩したかと問われても満足に答えられそうにもない。この一年間を反省して、後残された二年という貴重な高校生活をフルに活用して、自分の目標に邁進し、より有意義な学園生活を送ろうと思っている。

(斉藤茂)

友を待ちながら

放課後、私は掃除当番の友達を待ちながらこの一年間を振り返って、こんなことを考えた。四月入学以来、一万メートル、野辺山への遠足、強歩大会、身延山の研修会……と楽しい思い出は尽きない。しかし私は、この一年間、あれもしよう。これもしようと思いがら、結局何も出来ずに終ってしまった。二年生は勉強その他あらゆる面において一番大切な年。今年こそは後に振り返って、悔いのないよう有意義に過ごしたい。

(佐野)

すばらしい一年間

私のこの一年は、成績があまりかんばしく

一年の随感

去年の四月高校生活第一歩として一高の門をくぐって、学校に慣れてきたと思うと、もう一年が経過しようとしている。高校生として暮してきた中で自分は、多くの良い点を身につけたと思うし又、自分の欠点も多く発見された。高校生活一年目を、通して自分の良い点、悪い点の是非を決めることはできないが、この一年間を通して知った多くの良い点悪い点は、必ず有意義なものとなって現われてくると思われる。

(広瀬)

十一月のある日

私は丘にすわっていた。日の光が枯れ草の上で踊り、青い空の香りが髪の毛をなぶった葉の落ちた木々はぬれた様に光を帯び、細い槍先はそろって空高く伸びあがっていた。向うの空地には、いちようが黄色い列をつくり、飛行機をとばす子供達の影。私は立ちあがって空の向こうを眺めた。秋の陽は、西に傾いて、何もかもが淡い金色に包まれていた。

(清水)

身延山の楽しい思出

身延山の宿泊訓練は、私の楽しい小さな思

なかつたことを除けば、とてもすばらしい一年でした。身延山での宿泊訓練の話し合いのとき、私は意見を発表することができませんでした。というのは、私には自分の考えと、考えようとする気持ちの用意がなかつたからでした。そして皆の意見を聞いて自分がはじめに思えました。そして今、それらのものがあるかといえ、ありません。でも「考えなければいけない」という気持ちはあるだろうと思います。

(芳賀)

ある対話

「君はこの一年どの様に暮して来たかい」「そうだなあ、まあ、まともに暮して来たさ。」「それで五組の印象は?」「口に言つて、ユーモアのあるうさい連中だったよ、」少しほめて言えば、親切で女子思いの人達だったさ。」「君は?」「うん、ふざけすぎたりして、気分転換できない時があったけれど、それでも思い出多きクラスだったなあ。」「みんなとき、別れるのもつらいけれどまあ元氣を出して残り少ない日をおおいに楽しもうぜ。」「

(堀内英)

い出のひとつ、皆の意見や考えを聞いていると、自分の考えの浅さや物事に対する態度の反省にもなつて良かった。高校一年生といふわからないことの多かった年の大きな収穫だったと思う。

(小屋)

有意義だった身延山

研修会

身延山の研修会とはとても有意義なものでした。今までで学校だけの友達という感じがないうでもなかったのですが、一泊したり、自由時間に遊んだり、話をしたことによって、しこりがとれていくようでした。それからだんだんクラスがまとまってきたように思います

(相沢)

三つの思い出

▼入学式 今考えると、なんだからはずかしいそれ余りにも自分の考えと、今までの行動とが離れすぎているからである。

▼強行遠足 中まで行くつもりで走ってみたが、結果的には野辺山にとどまる。

▼身延山での研修会 なんといっても一年で

の最大の思い出……。」「こう振り返ると、実によく遊び、良く遊んだ。二年になると、高校生活で一番大切な時だと聞く。考えて行動し、自分の行動に自信を持ちたい。(山本)

四つの印象

一年を振り返ってみて、印象に残っていることを上げてみた。

▼入学式 正式に一高生になった日、この日より合格発表の日の方が、うれしかった。

▼多数の試験 グシャツというほどたたかれ「よし、次こそ」と奮起した。

▼身延山宿泊 友達と話し合い、笑い、食べて、寝て、最高に楽しかった。

▼強行遠足 夜明け、朝の八ヶ岳など、とても美しく見えた。歩くことは楽しいことである。来年はもっと頑張りたい。(増田)

毎日を充実した一日に

この一年をふり返って見て、なにか一つでも後悔せずにすんだことがあったらうか。勉強に、行動に、この一年間のだらしない

生活は、成績にはつきりと現われた。まるで

社会から脱落したような人間になつてしまつた。私の最大の欠点である「意志の弱さ」が

さらけ出た一年でもあった。この一年、私は何の目的もなく、ただ学校に來ているだけという

ような感があった。将来のことなどは全く考えず、ただぼんやりと過ごしてしまつた

それというのも、意志の弱さと根性に欠けている点に原因があった。悪い事と思ひながら

も、そこから抜け出ることが出来なかつた。勉強でも、当然努力をしなければならぬものを、私の心から「努力」という二字は遠ざか

つていた。もしこのままでいったら、本当に社会の落伍者になつてしまふだろう。しかし

今の私は、この一年の私ではない。新しく生まれ変つた私なのだ。毎日を悔いのない、充実した一日にしよとする。「一にも努力二

にも努力」と書き残してくれた亡き父のためにも、立派な人間になろうと思う。(有泉)

大きな収穫―考えることを知る

高校へ入つての最も大きな収穫は、ハイイに入つたことである。その最大のものはギリ

い。まるで一枚の絵のような、ただその日のその人の印象が……。(小林美)

いま考えて見ると

入学試験が近づいて、あたりが気忙しくなつてくると、去年の自分のことが思い出されます。先輩に手紙でも書いて励ましてやろうなどと、あの時の苦しさを、福笑いの目かくしをとる時のように、むしろ楽しく、すぐそこに思い浮べるのです。現在の自分のことを考えて見ると、何が何だか分らなくなつてくることもあります。そんな時(弱くなつたなあ)と思うのです。幼年時代によく泣かされて帰つた自分を思い浮べるのです。あまり楽

(新海) しをとる時のように、むしろ楽しく、すぐそこに思い浮べるのです。現在の自分のことを

考えて見ると、何が何だか分らなくなつてくることもあります。そんな時(弱くなつたなあ)と思うのです。幼年時代によく泣かされて帰つた自分を思い浮べるのです。あまり楽

印象

その日のその人の

一高生となつて始めての日、それは身体検査の日だった。勝手のわからない私達に、いろいろ親切にして下さつたのは、一年生に混つて検査を受けていた三年生だった。上品で清潔な感じのするやさしそうな、しかもはきはきとした人だった。私はその人に強く興味を覚えた。そしてその人の一挙一動をつぶさにながめていた。「これが一高の女生徒なのだなあ。」と急に嬉しい気持がした。私はその人の名前すら知らない。その日から一年たとうとする今、話さえたことがない。しかし、なぜか私はその人の印象が忘れられな

強行遠足の思い出



強行遠足

彼らは、ある山の頂きを歩いている。二人の友は励まし合いながら、

石ごつな荒けずりの山道を歩いている。木々の紅く染つているのも彼らのためにと思ふほど。時が立つにつれ

彼らは里を歩いている、
疲れた顔を見せながら、
川の水は彼らを励ましている。
彼らはいつしうけんめい歩いている。
彼らはどこまで行くのだろうか。（志村）

強行遠足の回想

友と一緒に励まし合って歩いた信州往還、
一枚一枚、氏名カードが減っていくにしたが
って、足は重く、歩みは遅くなる。夜明けの
空が夕焼けのように赤く染って来た。そのう
ちに雨が降って来た。初めは冷たく感じたが
だんだん寒くなってきた。コートを着た。又
カードが減る。そのカードもあと一枚、中込
だけになった。足の痛みはあまり感じなくな
った。中込駅の前でリンゴをくれたが食べる
気がしなかった。とうとう中込駅へついたが
疲れであり喜びでもなかった（加々美）

征服した八十七キロ

校長先生の太鼓が鳴り始めた。少しでも早
く出たい、らしい。入口で大部つかえていた。
韭崎あたりまでのペースは皆すくく早い。休

歩き通した夜の感激

僕はやつとのことで清里まで行った。一番
えなかった所は、弘坊坂、三軒屋、清里間だ
った。ちょうど日の出ごろ、三軒屋と清里の
中間付近をよたよた歩いていた。太陽光線が
木々の葉のあいだを通って僕達の体にあたっ
た。とても美しい。ちよつと冷々とした高原
の朝だった。生まれて初めて一晩中歩いた経
験は、生涯決して忘れないだろう。（渡辺）

強行遠足で知ったもの

ぼくらが入学してから、もう一年がたとう
としている、その中で一番印象に残っている
のは、やはり強行遠足である。初めての強行
遠足に張り切っていただけに、清里から前に
進めなかった事は残念だった。が、今ではも
うなつかしい思い出となっている。その中に
は汽車の中で疲れ切っている僕を見て席をゆ
ずってくれた先輩の親切がある。本当に嬉し
かった。来年も又強行遠足はあるだろう。僕
はそれから心のかてとして新しい何かを学び
取ることができたかと思っている。（保坂）

憩所の麦茶もありゆつくり飲んではいられ
ない。あまり上位ではないらしいので、それ
からは無心に歩き続けた。野辺山についたの
は六時頃だったろうか。ミのないみそ汁のう
まかったこと。ここでも五分位ただけでま
た前進を続けた。ここまで来るともう追い越
そうという気はしなかった。しかしペースは
案外早かったらしい。もしかしたら中込まで
行けるかも知れないと思った。しかし足の方
はゆつくり歩けば歩く程痛みがひどい。仕方
なく走ったりしてみた。雨も降って来た。沿
道で会う人ごとにどの学校かと聞く。「甲
府一高です。」と答えると「かわいそうに。
汽車を使えばいいのに。」などという変なお
ばさんもいた。しかし僕にとっては本当にう
れしかった。次第にカードの赤い部分がふえ
ていく、ふと顔を上げると、何か標識が見え
る。「佐久市だ。」やたらに胸が躍る。もう
足の痛みは忘れていた。そして中込駅に着い
たとき僕は何だか、けわしい山を征服したよ
うな晴れ晴れとした気持がした。七度目のそ
して最後の印が押された。十二時四十六分だ
った。（斉藤省）

思ひ出の秋の一日

伝統ある強行遠足の行事を初めて体験し、
自分の体力と精神力を試すことができたし
た。最初は、少し大またで歩くと前の人を気
持よく追い越せました。そのうちにクラスの
人達と離れて知らない人の中で一人ばつちに
なってしまうました。でも知らない上級生に
氷砂糖をすすめられたことや、周囲のすばら
しい景色は、ただ黙々と前進している私をと
ても慰めてくれました。野辺山で、ほんの少
しの差で前進停止になったのは残念ですが、
思ひ出に残る楽しい秋の一日でした（高野）

着いた／中込だ

ドンドンドン……太鼓の音で校門を出る。
北極星を仰いで進む。「カードは？」ようや
く一枚減った。「麦茶を飲んで行けよ。」口
の中に甘さが広がった。「清里までもう少し
だぞ。」身体だけが前にゆく。「これを飲ん
で元気を出せ。」身体中が温まった蜆汁。「
甲府から来たの？」目に焼きついた紅葉。「
さあ、お茶を。」おいしかった茶の漬物、「

清里で終った強行遠足

強行遠足は中学時代にもあったが、一高か
ら中込までの長距離を歩くことは自分として
も初めてのことである。出発の前日までは、
石にかじりついても中込まで行くつもりだっ
たが、歩いているうちに、なんだか心細くな
ってしまった。足のマメの痛み、寒さなどで
は無理からぬことだった。三軒屋から清里駅
までの二キロの長かったこと。こんなわけで
中込まで行けず、清里で終ってしまったこと
は非常に残念だった。（竜沢）

強行遠足の思ひ出

国界橋にさしかかる頃、山が黒く浮んでき
た。道は高原をぬって進む。清里を出てから
もうそうとうの時が経った。道がまっすぐ進
むようになった頃、東の空が輝きを増し、黒
い山との境界が鮮かに浮び上ってきた。その
上を朝焼けの雲がたなびいていた。「紫だち
たる雲の……」というのはこんな感じかと思っ
た。青と橙に黒の対比がいかにも美しく自分
買今もそれをはっきりと思ひ出せる（前田）

カッパ持ってるか？「うらめしかった雨空。
」「これ食べて頑張つて。」真赤なリンゴ。
「ほうれ、これ食え。」老人が木から投げ
てくれたカキ。「中込までもう少しだぞ。」雨
に煙っていた川。「あの角の向こうだ。頑張
れ。」二本の脚がしだいに速くなる。ポポー
ッ、汽笛だ、中込の駅だ。ついに着いた。

深沢 喜



詩

私の一日

騒がしい声に起され
今日の一日が始まる。
いつものように
顔を洗い
いつものように
飯をかきこむ。
それから
必死でベタルを踏む。
学校につくと
勉強が始まる。
今日も又渋い顔
鐘の音に生きがいを感じ
授業が終る。
家に帰る
夜は猫と過ごす
また楽し。

(窪田)

歯車



大きな／＼歯車、小さな／＼歯車、
大きい歯車は止らない、小さい歯車が止つても、大きな歯車は止らない。
小さな歯車は知らない。自分が何の為に動くのか。
大きな歯車も知らない。自分が回る理由をけれど歯車は止らない。
歯車の面に傷が刻まれた。小さな小さな歯車のかみ合いで。けれど大きな／＼歯車はこわれない。小さな／＼歯車の為に。
大きな／＼歯車は動いている。
小さな／＼歯車で
小さな／＼歯車は動いている
大きな／＼歯車。

(依田)

歌 二題

▼勉強はと
言われりやすぐにもぐり込む
布団の中の
あまのじやくかな

▼食うことは
ひけをとらない
吾輩も
作文ばかりは
四苦八苦なり

(林)

雪

雪よ
おまえはなんて神秘的なんだろう
遠い空からやって来て
山や野やいたる所を
白いベールでおおってしまう
おまえがやって来る所は
たとえそこがどんな所でも
神秘的に変わってしまう。
雪よ

春の回想

おまえはなんて神秘的なんだろう
遠い空からやって来て
すべての枯木に花を咲かせ
おまえの去った後には
自一面の神秘の世界が残る
雪よ
おまえはなんて神秘的なんだろう (佐藤)

相川哀情の歌

甲府なる一高の門
ただ狭く一人悲しむ
ピンクなす桜は咲かず
散る花も見るによなし
配られた席次発表紙

(石田)

無題

うしろから退いたてられるような
深い深いまっ暗闇だ。

(花輪)

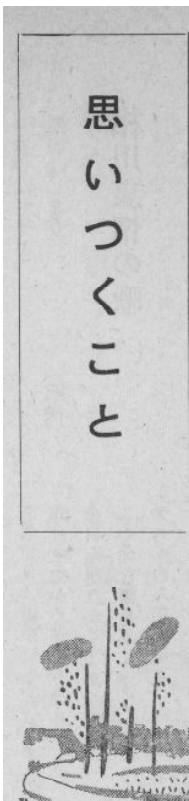
雲

お前は何て自由なんだろう。
北から南へ、南から北へ
いつも散歩してばかりいる。
わたしを乗せて、
わたしは空の旅がしたい。
山の向うの、海の向うの
広い国めがけて飛んで行け。
おまえは何て意地悪なんだろう。
わたしが日光を求めている時
おまえは太陽を横取りしてしまう。
そして、いつもより、
ゆっくり、ゆっくり歩む。
早く太陽を返して、
ほら、見てごらんさい

わたしの手こんなに冷たいわ。
おまえは何て泣き虫なんだろう。
きょうもおまえは泣いている。

何て大きな涙だろう。
悲しいわけは知らないけど、
お願い、もう泣くのはやめて、
わたしの洗濯物がわからないから。(白倉)

思いつくこと



「勇気ある人々」を 読みつつ

「人間は社会的な動物」であり、又、同時に孤独な存在である。この二つの相反する性格こそ、社会を混乱させ、容易に平和的妥協をしないいくつかのグループをつくる大きな原因であろう。そして、個人的内面的真実と自己の社会的な義務感の一致は、非常に難しい。ある人々にとって、この選択は「自由か死か」に匹敵する覚悟を必要とする。

しかし、別の―卓越した社会的視野、或は強い義務感をもつある人々は、極めて簡単にこの一致を見る。彼らにとって、二者は二に

して一なる離すことのできないものなのだ。

この本に描かれる八人の政治家は、皆この恵まれた人々の一員である。連邦への忠誠：「マサチューセッツ人としてではなくアメリカ人として」―否、社会への忠誠、愛、それが彼らの良心の叫びだった。そしてこの強い真実の力が、自己の政治的敗北をも辞さない勇気となって、ほとばしったのだ。

彼らの、自己の良心とその裁断に対する自信、信念の強さは、それ自身偉大と呼ぶに倍する。それは、単なる英雄的な、空虚な犠牲的な気持ではないのだ。「彼らは国旗の下に進み、これを防衛する覚悟のあるものであるうか？それは私の旗だ／＼という誇りと。―わが輩は泡沫人気を軽蔑する」という民衆へ

紗には変わらなくても、私たちの小さなかはたえず進歩し、宇宙に、大自然に、考えもつかない力を加えて、その主導権を握っている。そしてこの生活に私は満足している。」

(大塚)

言葉の真に響く日を

・待ちながら

自分は高校生として、人間として、やるべき事に気が付かないで過ごして来たように思う。毎日々が満足のいかない生活の連続であった。本を読んでもその中の言葉はカーララとあきかんのような安っぽい音をたてて心の壁にぶつかってころがった。そして其の音は自分をあせらせた。しかし己れでそれを克服しようとはしなかった。何故なら、それが恐ろしかったのかも知れないし、おつくうだったのかも知れない。只自分は現在も、そして多分未来も、やがて来るかも知れぬ言葉の真に響く日を待ちながら、その日まで苦悩している真似を繰り返すであろう。(伊藤)

私は無能力者

の信頼の上にたった、ゆるぐことのない決意なのである。

私達は、ともすれば現在の事象に圧倒され真実を見る眼を曇らしがちである。しかし、大きな歴史の流れをみる時、真実こそ最後の勝利者ではなかったろうか。あまりにも野心的なナポレオンはウォーターローで破れた。書物を焼き、学者達を殺害した暴君始皇帝、彼の国秦もまもなく滅び去った。そして又、デモクラシーの神髄は、「選挙区民の主義を一切のもの上におくこと」ではなく、「少なくとも、彼らの自主的な態度を支えた主義に対して敬意を表するに違いない」と信じ、「賢明なる良心の命令に従う」ことなのである。この真実への信頼なくして、其の政治的勇気―勇気は生まれないのである。第二次大戦前、東大を追われた河合栄治郎も又、日本人への強い信頼と希望をこめて、「学生に与う」を著わしたのではないのか。

しかし、これらの人々は必ずしも完全な人格の持主ではない。むしろ異常：な人々である。又、彼らのやり方は、賢明とはいえない場合がしばしばあった。けれども、それにも拘らず、彼らは賞讃され、記憶される。否、更に重要なことは、もし彼が忘れ去られたと

中学時代私の頭の中では高校入試という聖者が勉強という教えを懸命に広めていた。事実、その中はその教えで満たされ、他の邪教の侵入を全く許し得なかった。時に「何かが欠けているんだ」という様な考えもないではなかった、が、この大きな教えの前に屈服せざるを得ない。かくて、この布教は成功した。受かったのだ。人間はより高尚な自分より賢い自分を発見しようと思う。それが人間の本性だ。精神面の充実、これが私の新しい課題だ。ところが、それを考え出したとたんに勉強がいやになった。折角燃え出した火に水をかけて消す。つまり私の頭の中では勉強と精神的充実が相反する立場で互いに殺し合うのだ。両方とも死ぬことがわかっていながら……。私は無能力者だ。それが今までわからなかったんだ。

(長沼)

朝

でこぼこした畑道を力いっぱいペダルを踏んで進む。

朝八時

ブレーキのキーンという音がイヤに耳をつく。

今日も一日

上り坂にベタルを踏む足がだんだん痛くなつて、自然にゆっくり、ゆっくり、

校門をくぐると、さつきまでの足のいたみも消えて、快い疲れと、ぬくもりが残る。

さあ／今日も一日。(日向)

THE MIRACLE WORKER ニー

今やヘレン・ケラーの名前を知らぬ人はあるまい。だが、どんな英雄、偉人にも少年時代やわんぱく時代があるように、幼少の頃の彼女はすきんだ性格であった。この動物的存在だった少女を、彼女をして「身体障害者の神」とまで言わせるまでに育てあげたのは、家庭教師アニー・サリバンであった。彼女も又眼を患い、少女時代は養育院で動物同様の生活をしてきたのであった。が、アニーはヘレンの中に自分を見いだし、真実の愛―動物からの解放―に飢えた彼女を立派な人間に仕上げたのである。そういう意味でこの映画は作られた事実そのままであった。我々は、自分を信じ、他人を信じ、希望を持ち、失わないことが大切であるそれも単なる希望ではな

く、この映画は努力を伴う希望がいかに偉大な力を生み出すかを教えてくれ、合せて我々は、言語の重要さ、真実の愛をも知り得た。

三重苦という厚い壁にとり囲まれたヘレン音も色もない世界の中で彼女に残されたのは食べることに眠ることの二つの本能だけだった。食事は手づかみ、気に入らない事があれば疲れるまで荒れ狂う。そんなヘレンにもたった一つ残されたものがあつた、「触覚」である。アニーはまず指文字で自然の存在を教えた。―DOLL MILK WATER Egg...。さらに食事は椅子にすわり、自分の皿からスプーンで食べ、ナプキンをたたむという「生活」と「規律」を教え、ついにはこの世に「愛」というものが存在することまで教え、ヘレンを動物から生きた人間にひきあげるのである。

「人形に眼がない」と言つて怒り、眼の代りにボタンをつけてもらうと安心し満足するヘレン。そんな彼女に多分に妥協的な両親。現実には何ら希望を持たず「努力するだけ無駄さ」と言う義兄のジミー、アニーのヘレンの教育にとつて、彼らは害にこそなれ益にはならなかった。ナプキンをたたんだヘレンに理性の光がさしかけたかと思つたのもつかの

高校生活に理狼を 築く

入学したと思ったらもう一年たとうとしてゐる。何か知らないが、夢中で過ごしてしまつた感じ。良くこんなことを思う。今の世の中には、命はもちろんだが、名誉や名声、地位、金を求める人が、多すぎはしないだろうか。私達もなぜ高校に学んでいるのか、なぜ大学に行きたいのかを説明する時に、これらを抜きにして答えられるだろうか。何のため、……こんな時、これに対する一つの答として、「学問の目的は、学問自身にある。」という志賀潔のことばを思い出す。この高校時代に、いつの日にか役に立つ様な努力を尽すべきで、何もしておかなければ、後には何も残らないのだ。どんなに現実がきびしくとも、理想のないのは不幸だ。自分達の中にある可能性を大事にしたい。理想に現実を近づける事に人生の意義があるのだから。……現在の一日一日が将来の自分を作り上げていくこの高校生活が今の自分の生活に生かされていると誇らかに言えるように、現在の高校生活に本気でつっこみたいものだ。(小笠原)

吾輩は人間である

吾輩は人間である。猫ではない。吾輩は昭和三十八年四月三日に山梨県立甲府第一高等学校の門をくぐつた。つまりその日は入学式であつたわけだ。吾輩の高校生活はその日から始まつた。吾輩は五組になつた。……そして早一年、光陰矢のごとし、全く月日のたつのは早いものだ。苦しかつた事も悲しかつた事も夢の様に過ぎた。これからも荒波や厚く大きな壁が吾輩の行く手をじやまするだろうしかし吾輩はこれらにへこたれず、一步一步前進したいと思う。(藤島)

学問は自分でするもの

学問とは何であらうか。学問なんて、勉強なんてつまらないではないか。毎日文字ばかり見て、楽しみがない。しかし考え方によつては、勉強すること自体が美しいんじゃないだろうか。自分に高い教養を身に付け、自分の知識を深めようとすれば、どんな事にでも励みが湧いてくるんじゃないだろうか。自分

問、それが強制の結果でしかないと思つたアニーは考えさせられた。これなら動物と何の変哲もない。……そして二週間家族を離れ、二人だけで生活することを決心した。ヘレンは自然に触れ合い、多くの規律を教えられただが家に帰ると再び動物的存在になり、家族の反応を確かめようとする。アニーは断固許さなかつた。こぼした水をくまさせるため、水さしを取り、ヘレンを井戸まで連れて行く。

ここで奇跡的な事実が起つた。井戸から流れ出る冷たい水に、WATER、と綴るヘレン。彼女の頭脳はついに自然を捕えた。厚い壁は破られた。カラを破つたヒヨコが自由の世界に驚き喜ぶようにヘレンは歓喜した。FATHER and MOTHERもTEACHERも理解できた。今やアニーの教育―努力の結晶―は立派に析出した。彼女はヘレンをやさしく抱きしめ「I LOVE HELEN」と綴つてやるのだった。(甲谷)



の知識を深めようと思えば学問なんてつまらないなんていう考えが起つてくるはずがなら学問で自分でするものなんだ。(米山)

山の回想

校庭から南アルプスの連山が望める。山は絶えず変化している。毎日の天気のように、若い人の心のように、

あの時の山はギラギラ光っていた。それは先生が汗をにじませて熱弁をふるつた真夏の午後

あの時の山は晩秋の夕日を背にして、紅紫色にふちどられていた。それは得体の知れない感傷におそわれた時

山は絶えず変化している。(日野原)

果てしない流れを

進む

毎日々々たいしたことせずここまで来てしまつた。流れに後ろから押されるかのようになだ押し流されて来た。この辺で押されてばかりいるのがどうもいやになつてきた。少しは私なりの泳ぎ方がしたくなつたのであ

る。どこへ行くかわからぬ流れの中で、自分の目的地へ泳ぎつかねばならない気がした。時は流れ、私は渦の上でぐるぐる回っている。深い果てしない流れの中へ、私はただ進んで行く。

(大野)

努力と勝利者

渦の中に一人立っている―逆巻いている時間という渦の中に。大きな波にもまれていく―荒い人生という波に。絶えず浮き沈みしているのが人間の一生である。それは定められた事ではあるが、そこからぬけだそうとする努力は可能であり、必要である。努力とは自身の生活を鋭い眼で見つめて、むだをなくし自分の進むべき方向を見極める事である。その方向を早くつかんで、それに向って努力し自分の心を納得させた人こそ、人生の最大の勝利者である

(佐久間)

うまくない時代

上下左右まことにうまくない。「当然である。一生まれた時から空は果てしなく、又人間も果てしなく大勢いた。戦後の昭和二十二年に土を踏み、はや十六年の年月が過ぎ去ったにもかかわらず依然としてうまくない。他国の土を踏み人も中にはあろう。だがおそらく多くの人は、現状で十六年という長い年月をすごしている。これもうまくない現象である。だが、今は時代が違う。地盤が柔かれば低い家、硬ければ高い家が建つ。これからは上にのびる時代のようだ。

(秋山)

冬の星

冬の夜は寒い。空の星はふるえあがつている。この下界に暖かい光を全身から放っている、あなた自身の光は大きくて暖かいけど、私達にはとどかないの。私達の光もあなたにはわからないでしょうね。でも、あなたの光を私達の光が、こんな寒い冬の夜には調和しあってとても美しい。

(田村)

「変身」とカフカ

グレゴールというセールスマンが巨大な醜い虫に変身し、監禁されて死ぬまで、彼の感情の動きを中心に著わしたのがカフカのこの小説である。或る人はこれを夢物語だとけなすだろう。また当惑げな面もちの人もいるだろうし、素晴らしいという人もいるだろう。とにかくこれはいろいろの要素もっているが、これほど奇妙に魅力を感じさせる小説はないだろう。その魅力とは一体何だろうか

この全般に流れているのは作者の「人間―醜い物」への悲しみと憤りと現代の社会に対する皮肉だろうと思う。私達は最初から最後まで彼に振りまわされているような気さえする。変身は読者のあらゆる先人見をとり除くための手段にすぎないのでその原因を考える必要はないが、カフカはこれによって何を言いたいのだろうか。日本で言う上昇認識とはちよつと違うが、主人公は無生物に等しいような状態に変身し「初めて人間の本性というものはつきりと眼にし、それで絶望を感じたのだと思う。



彼の死を知った家族達には一片の悲しみの色さえみられない。それどころか未来の新しい生活への希望に輝いている。結局彼にとつて本当の不幸は人間を愛し、信頼しすぎたことにあると思う。家族の未来と言ってもそれは前進のない毎日毎日のくり返りで、虫けらと同様の生活である。だからそれを、夢見る家族、一つまり人間こそ虫けらにすぎないとカフカは言いたいのではないだろうか

しかしこうも考えられる。

――人間は生きようとする欲望を持っている。だからそこには数限りない、醜さが生ずる。これはすべての生物に共通である。私達はそれを憎むからといって無生物になりたいと思うだろうか。けつしてそうは思わないだろう。なぜなら、そこには醜さがないかわりに美しきも、喜びもないからである。カフカは人間が無生物化する事を望んだのであろうか。そうではないと思う。もし彼が「人間」であつたなら、きつとこう望むだろう。人間であつて、その「運命」の中で誠実に精一杯の努力をして生きてゆく事を。

このようにまるつきり相反する考えが生まれるというのもカフカ的だと言えるだろう。

考えたこと

「彼はひどいニヒリストで人生にも人間にも絶望していたんだ。」と兄は言う。だが私はそうは考えたくない。十六才の甘さかもしれないが、人生はすばらしく、人間も偉大であり、カフカもまた同様であると考える。

(佐久間)

学習の実態

近ごろ成績上位者につき学習の実態につき調査した結果、一年生について次のようなことが判明した。

①学習の時間について。予習時間は一日に平均二、二時間を費やしている。予習に二時間をかける者が一番多く、成績上位者は毎日少くとも一時間以上を費やしていることは注目にあたいする。復習時間は一日に平均二、三時間。この予習、復習において、特に予習に重点をおいている点は学力増進に大いに役立つことである。

②得意科目では数学が最も多く、次が英語理科の順である。逆に不得意科目は、国語（特に現代国語）と答えたものが最も多く、次に数学、地理、英語の順になっている。現代国語はすべての科目の基盤ともなるはずのもので、ぜひともマスターしなければならぬだろう。

③通学距離は学習成績に関連があるか。成績下位の者たちが平均三・八軒から通っているのに対し、上位者は平均九・二軒。通学距離は成績になんらの影響も与えていない。むしろ通学の困難さにうちかつほどの意志があるかないかは成績と関連するものと考えていようである。

(係より)



『タガ』雑感 中野正文

月は地球に向って裏側を見せない、月の裏面は永久の謎をふくんでいると教えられた時代は、すでに過去のものになった。
人工衛星の完成は、これら謎とされておった裏面の撮影を可能にした。月の表面では兎がモチをついていてと想像し、子供の夢をふくらませた形が、望遠鏡の発見により凹凸のある火山であったことを知った以上の驚きであろう。まさに隔世の感がする日進月歩の科学の発達である。
ところで、この裏側が地球より見えぬ理由を、桶のタガにたとえて月と地球の運行関係を教えられたことを思い出し、授業で話そうと思ったが、一体いまの生徒諸君は、このタガなるものを知っておるだろうか。周囲を見まわした。便利な合成樹脂等の製品が、こうしたタガのある桶などに代りつつあり、いずれなくなると思われる。あのタワミをもった青竹を上手にからみ合せてつくったタガなるものは早晚みられなくなるではなからうかと、郷愁に似たものを感じた。

このタガの状態に似たことに真理の二重性ということがある、例えば、光の本性については、粒子性と波動性が夫々独立的に、ニュートン、ホイヘンスにより提案され、真理は一つであるとの見解で両々ゆずらず自然現象を説明しようとしたが、何れもある面で矛盾を生じた。かくして、最終的には光の本性はこれら二面を綜合した性質即ち粒子でもあり、波動でもある二重性を有する式で表現されるものに落着いたのである。自然科学者の追究しておる自然像なるものも、やはりこうした二重性を有する式で表現されるのではなからうか。

人間像という言葉があるが、これは、自然像のごとく、自然界に厳然と存在しておるものを追究するのとはちがひ、時代民族等複雑なる心理的周子間より普遍性を見出すのであるから非常にむずかしいことと思うがやはり二面性をもった人間性の平衡した状態のものをさしたのではなからうか。孔子の中庸とは、こうした人間像をいつたことノと思える。
かく考えると、自然像も人間像も帰する原理は同一のものであろう。校歌にある天地の化育なる言葉もかかることを意味することと思う。

一班



第一班 浅香、功刀、中嶋、許山

四月三十日までのこと

三月。春はもうそこにやって来ていた。たとえ遠くの花々はまだ雪のぼうしをかぶつていようと、およそ生と名のつくものはすべて春の喜びに胸をおどらせ、心はずませていた。彼らはうれしさを自制出来ずに、春の喜びを語ろうとありつた力の力を出し切っていたのだ。本来ならば、その春の喜びに加わるはずの我々は、春どころではなかった。入試の仕上げに懸命だったのである。

そして苦しい入試は、我々の心のあせりをますます盛り上げて、規則正しくやって来たのである。十三日、すべて我々の戦いは終わった。今さら、戦いが始まるのではないことを充分知ってはいたが、我々は発表の日をゆううつに待った。

十七日、正午、幸いにして、我々の名前を掲示板の上に見いだしたのである。その瞬間から、ようやく春のしらせに抵抗なく喜びが生命の一つとなったのである。

そして四月三日。入学式のため登校した。

校長先生の、「方針を決め、自信をもって、努力をし着実に進み

なさい。」とのお話に感激の心で教室へ。ゆく末が案じられるほどに、校舎は実にシンプルであった。(言わずとも、わかるであろうが)

Kさんはこの日の感想を次の様につづっている。

「きょうは、一生涯の思い出のページを飾る一日でした。母につきそわれて、これから三年間自己をみがく学校の門をくぐった時は感激でいっぱいでした。中学から高校に移ったきょうの自分は、なんとなくきのうの自分より一段と大人になった気持ちだし、又社会の一員という自覚が深まったようでもありました。

『新しい学校、新しい友達、何もかも古い物が去り、新しい未来がある。』こんなことが頭の中を通り抜けました。

きょうの良き日にふさわしく、空も美しく晴れわたり、私達を祝福しているかのようにでした。

将来を決定するともいわれる高校時代に、私は一歩足をふみ入れました。この一歩が後もどりすることなく、前進するように、これから努力していかなければならないと心に誓ったことでした。」

四月十日。新一年生としての実際の活動が始められた。何もかもが新しい者にとって、必死になって自分の境地を開こうとするのは世の常であらう。測り知れないかなたへ向かって、マイペースを保とうと皆一心であった。

最初の一週間はお互いの気心が知れない生活だったためかぎこちなかった。が、二週間、三週間とたつうちに、我々一年六組も十二クラスのうちのひとつとして、そのユニークな存在を明らかにして来た。これからの十一カ月間を意義あるものとするため、張り切っていたのである。

結局、四月という月は、誰も彼もが希望を持って高校生活に早く慣れようとして、そういう中で過ぎた月であった様に思われる。と同時に、戦争とか試験地獄とか世間が騒ぐ中で、無我夢中に戦って来、入学の喜びと共にそれからくる圧迫からは解放された我々である、が、しかしそれは本当の意味での解放ではなく、厳しい現実には我々の力に余る試練が、我々に過去十五年間の反省、人生に於いて自分達に課せられている使命の認識、そして、それを達成する所の堅固な書芸、若いエネルギーを要求しながら、手ぐすね引いて待ち構えていた。我々はそのため、少なからず、未来への不安感をいだいていたのである。

五月 四 日 (土)

芦 沢

今日は待望の一万メートル競走である。

高校生活における初めての一万はどんなものであろう。コースほとんど知らないで、力の配分など全く分からない。だが力の限りがむしやりにがん張ってやろうという気持だけはあったが、それだけに期待は大きかった。

シヨートホームルームの後、校庭に出て先生方の諸注意を受けた後、準備体操。皆「やるぞ」という意気にあふれているのが、ありありと感じられた。出発の合図でまず三年がスタート。そして二年それから僕らであった。

準備体操からスタートまでの時間が非常に長く感じられ、また大変もどかしかった。スタートから暫くの間はやたらに手足が怪しかったが、それもつかの間で、北中の附近を過ぎる頃には早くも疲れを

感じ、厄除地蔵の周辺では駆歩を止め歩きたいと何回も思った。登美の坂にかかる頃には体は大変疲れを感じていたが、周辺の景色は実にきれいであった。空は雲一つない快晴で甲府盆地のみなたにはくつきりと富士が雄大な姿を見せ、前方には南アルプスの連山がきびしくそびえ立っていた。ターンから後はもう始めの意気ほどこへやら、ほとんど歩いてやつと学校へ辿りついたという感じであった。しかし大変楽しく、又良い思い出の一つでもあった。

五月 上旬

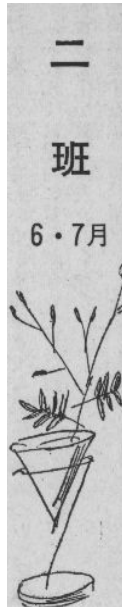
一高に入学してからはやくも一月過ぎ学校にも友達にもやつとなれてきた感だ。

一高生活の感想はまず第一に、たいへん自由の空気があるということだ。中学生生活では一つ（先生方に細かい指示を受けてきた僕らにとつてそれは大変魅力的なことであった。「義務を忘れた自由は放任である」という言葉があるが、上級生の中には自由と放任をはきちがえているような者も少なからず目についた。せつかく先生方が僕ら個人の人格を尊重し、自主にまかしてくれているのでその期待にそえるような生徒になりたいとよく思ったものだ。

五月二十七日 (月)

いよいよ今日から三日間は高校生活最初の中間考査である。中学校とはいろいろの面でだいぶ違って違う。皆夜遅くまでも勉強していそうで、何か心細いような気さええる。

せめて最初の一科目だけでも考えたが、それも問題用紙が配られるまではかない夢にすぎなかった。そんな風に苦になつていた三日間もなんとか過ぎ、のんびりして、校庭の片すみで一人でしみじみと考える。答案の返ってくる日が恐ろしいと。



六月 一日

山 崎

一高に入学して早二か月、きょうはもう衣がえの日となった。教室は昨日とほうって変わり夏の雰囲気にあふれていた。白がとてもまぶしく光っていた。

そして思い出すのは制服に初めて袖を通した日の事だ。ぼかぼかと温かくとても気持の良い日だった。それを着て鏡の前に立ち、写った自分の姿を見て、

「とうとう一高生になったんだ。」

と実感をもつて感じたのだ。

あれからの二か月はあつという間の出来事としか思えない。とにかく学校生活にもだいが馴れ、友だちの顔もわかる様になったきょうこの頃だ。

六月 十五日

飯 田

講演会

「人生をどう生きるか。」この問いは私の心の中でさざめいた。

人生においては精神的なことと実証的なことが伴っては表われに

くいような気がした。自分がまったく無力だった。しかしそう考えるのは私がまだ感動的な生や死に直面したことがないからかもしれない。人間はもともと強い者であるに違いないと思った。私が経験していくことは良いことも悪いこともすべて私をつくっていくだろう、そして経験から得る考えは、たえず頭の中で入れかあり入れかわりするだろう。それがパスカルの「考える葦」かもしれないと思った。

人生は大きいかもしれない、小さいかもしれない、しかしつつた今、この瞬間さえも人生の一部、かけがえのない一時であるということが私には不恩義なことのように思えた。

六月 十八 日

古 屋

朝、教室へ入っていつもと様子が違うのに驚いた。みんな机に向つて静かに勉強している。それもそのはず、きょうは学力テストだ。一番から六百何番まで順位をつけるとあつては、目の色を変えざるを得ないだろう。監督の先生が入って来られた。一瞬みんなの顔が緊張した。答案が配られた。あとは鉛筆の音ばかり。みんなの眼が答案の上を走る。真剣な限、限、限。重苦しい雰囲気。チャイムが鳴った。「もう一度名前を調べて後の人は集めなさい。」と先生。クラスもすぐにもとの騒しさにもどった。

六月二十一日

小 林

初夏の太陽をいっぱい浴び、絶好の日和の下、きょうは先生と

生徒の親善ソフト試合である。低いバットの音がひびく青空に白いボールが乱れ飛ぶ。カーンという快音と共にボールが青空に吸い込まれた。みごとなホームラン。先生方、年令の差をフアイトでカバー、童心にかえって大奮闘。とかく疎遠になりがちな先生と生徒の中で、お互いの親密間を増すためにも、先生方の暖かいお人ならにふれることができるようにするためにも、こういう試みは実に有意義であると思う。きびしいと思っていた先生に、ユーモラスな一面をみだし、安心したり、先生方を身近かに感じうれしかった。

七月 二日（晴のちくもりのち雨、やっぱり晴れらしい）
山本

あすはいよいよまことにまった期末テストである。よく考えてみたところ、やっぱりテストはない方がいい。しかし半日というのは魅力である。今日は、いまから徹夜で勉強だ。昼寝は、十分とつてあるし、きのうは十時間ねているし、我らお得意の一夜づけするにはぜつこうのコンディションである。さあ、みんなガツタリいこう。結果はどうであつても……。

七月 三日
大相撲夏場所初日、つまり期末テスト第一日目、地学、現国、幾何の試験である。

ふだん教室の隅でさわいでいる連中までも机にしがみついて猛勉強。（ふだんでは絶対に見られない光景だね。）

監督の先生が教室に入ってくる。
一瞬緊張する顔、顔、顔。
問題がくばられる。皆一斉に簡単な問題を探す。その後サラサラ

しかも入学してから初めての期末テストなので皆緊張しているようだ。最善を尽くしてよい成績を勝ち取るうとは思っているのだが……

七月 五日
きょうでやつと期末テストが終わった。思ったようにはいかなかった。なにしろ、まだ学校に慣れてないのだから？

七月 九日
いよいよ野辺山へ行く日となった。甲府盆地は暑すぎるので長野県へ一日避暑に行くのである。バスに揺られて一時間半、やつと目的地に着いた。昼食後、記念写真撮影。みんな元気一ぱい遊んだ。さすがに涼しかった。強行遠足のときには、今日と同じコースをたどって行くわけであるが、さて野辺山まで行けるかどうか？

七月 十八日
今日はスポーツ・デイで校内球技大会が行なわれる。種目は、ソフト、バドミントン、バスケット、バレー、ピンボンの五種目である。明日も引き続いて行なわれるわけであるが、選手諸君には十分頑張っていたきたい。

七月 二十日
終業式。いよいよ明日からは夏休み。海に山に若さをぶつつけて大いに楽しもう。ちよつと地理の宿題が気になるが……。

【球技大会内容】
卓球Ⅱ第一試合は2対1で勝つ。剣道場の中は応援者でいっぱい。

見ているだけで汗が出てくる。第二試合には惜しくも敗れたが、力一はいやってくれた。
バスケットⅡ屋体の南側コートで激戦。残念ながら敗れた。
バレーⅡ第一試合には相手が一年なので問題がなかった、第二試

と書く者、あきらめて鉛筆をコロコロところがす者等十人十色のスタート。

一時間もあつと言う間に過ぎ空自の多い答案を情しそうに出す。現国、幾何とたちまち終り、第一日目は無事（？）に終了。

七月 四日
社会、英語、古典の試験、
鉛筆をころがす。（○×式や番号を入れる所以外は空自）
又惜しうに答案を出す。

七月 五日
いよいよ千秋楽代数、生物の試験。
再びコロコロと鉛筆をころがす。

、もう鉛筆をころがすのもあきた頃、目がとろんとしてきて姿勢がぐつと前に傾く。とたんに待望の終了チャイムの音。
かくしてテストもやつと終り後は久しぶり（？）に息抜きとばかりに映画を見に行く。

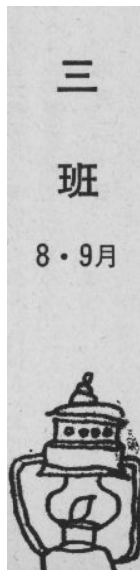
一高生の多い事といったらすこいね。

七月 十八日
プレイボールのかけごとともに、今日は校内球技大会のはじまりだ。わが一年六組のホープたるメンバーでつくられたチームが強敵に対し真正面から体あたりした。「カッタ」の声は敵軍にあがつた。残念……上には上があるのは世の常である。

七月 二日

明日から一学期々末テストが始まる。中間テストと共に大切な土橋

試合では上級生との力の差で敗れた。



八月二十日～二十九日

飯室哲也

「英数国」の課外ある。ある君の授業風景。二校時。今まで真面目に受けていたが。「あああ／ つまらない。休暇中というのに授業とは。帰るか、帰らざるか。うん／難問だ。」彼は考えているのか。窓の外をながめていた。三校時。彼の席はからっぽだった。次の日から最終日まで彼の席は彼の出勤を待っていた。これはM君の心だが、皆心の片すみにひそんでいる心である。

九月 七日（土曜日）晴れ

斉藤遼子

放課後、県民会館で開かれている一高の書道展を観に行く。地階の展示場へ入って行ったら、友人が、ちよつと、はにかんだような微笑で迎えてくれた。彼女は書道部々員であり、私はその出品作をじろじろ入念に観察するために来たわけである。

彼女の、ぎこちない覚えたての説明に案内されて、作品を順にみていった。実のところ、私は書道について、その歴史や書体についての知識は皆無で、彼女の専門的な説明もほとんど理解できなかった。

た。しかし、渡文あり、詩歌あり、創作ありの多様な作品の中に、芸術への意欲に燃えている生命の息吹を強く感じずにはいられなかった。上手ではなかったが、熱心に説明してくれている友人の顔には、何かしら誇らしいものがあつた。

見終えて帰路をたどる私の心に、何か得体の知れない虚しさが襲ってきた。心の空虚さに気付くために、あの会場へ入ったような気がした。

九月二十日

官本

今日は壮行式があつた。中学時代経験済みであるが高校では初めてである。みんなの前へ出ると足がガクガクしてきた。自分ではだらしなうと思つた。しょうがないから前の大きな奴の後で小さくなつてた。

九月二十一日

今日は体育祭、男子はマスゲームで最後に行く。最後だから前のは見れた。高校女子の時は自然とまわりから歓声が上がつた。自分の時は見物人は少なく、あつけなく終つてしまった。

九月二十一日

井上

第十六回山梨県体育大会は高松宮様を迎え、盛大に行なわれた。空はぐずつた、あいにくの空模様であつたが、いかにも若人の祭典らしく、競技場は活気に満ちあふれてた。高らかなファンファーレとともに入場行進が開始され、私達一高生代表も先生を先頭に

力強く入場した。ついで開会宣言、そしていっせいに風せんが放たれ、小雨模様の空へ、まさに雨に咲いた花のごとく上つた。するといよいよ、当日最大の見ものであるマスゲームが始められた。はなやかなバトンガール、自衛隊の合奏などが、いっしんに観客の目を引く中で、私達一高生も出演。他校生とともに、女子はダンス、男子は体操と、日ごろきたえた演技を競技場いっばいにくりひろげた先生方の熱心なご指導と私達の努力が実をむすんだ有意義な体育祭だった。

九月二十八日

小林 弘

ホームルームの時間、身延山での研修の話題を決めた。皆前々から何が決まるか期待してただけに、ホームルームはいつになく活発だった。高校生活について考えよう、とかそのほか勉強、部活動友達、校外での態度などいろいろな意見が出てまとまりがつかないほどであつた。班に分かれて話し合おうという意見で、賛否両論が鉄砲の弾のようにかわされた。結局、時間の半分を班に分かれて話し合い、後半を全体で討論する。話題は各班に任せる。という事でホームルームを終つた。長い時間かかったが、互いに胸を開いて思いきり自分の考えを発表した楽しい時間だった。みんな自分のホームルームの良さを感じたであらう。

九月三十日

堀口

駅前には、もうかなり多くの人が集まつてた。空はいまにも泣

き出しそうに、どんよりと曇つていたが、みんなあかるい顔をしてた。きようは、身延山へ宿泊研究に行くのだ。この会は、進学という重荷を背負つて、毎日を勉強に明け暮れている生活に潤いをもたせ、悩みを話し合い、教師と生徒、生徒と生徒の間がより親密になるようにとすることで計画されていた。身延へつくころには、雨も少し降り出していた。宿へ荷物を置いてから、本山大客殿に集合し先生方の講話を聞いた。正座になれないのでしびれがきれてこまつたが有意義な講話だった。宿に帰り、夕食を済ませてから話し合いを始めた。初めのうちは緊張した空気が室内を満たしていたが、そのうちにあちこちのグループから笑声がきこえるようになり、みんななごやかに話し合つていくようだった。各グループとも、ほとんど同じような内容のことを話し合つていたようだ。



強行遠足

1 佐藤

十月十六日……強行遠足の日、この日私達女子は朝早く学校に行きバスで箕輪新町へ、そしてそこから海ノ口までの信濃路を歩くことになつてた。学校から中まで歩くことになっている男子は、もうすでに出発している。夕方男子が歩いた道をバスにゆられて約

一時間、箕輪新町についた。いよいよ歩き始めた。最初のうちはあたりの景色に見とれたりしながら元気に歩いてたが、三軒茶屋を過ぎるころから疲れ気味、頭の中にあるのは清里へ早くつきたいという事だけだった。しかし一番閉口したのは野辺山の踏切をわたつてからの一直線にのびた道、あれにはまったく泣きたかつた。やつとの思いで野辺山へつき、そこでのんだしじみ汁のおいしかったこと。今思うとどれもこれも楽しい思い出ばかり、毎日勉強、勉強であけてくれている私達にとって、年に一度の強行遠足は大変重要な意義をもつていゝると思う。

2

遠藤

今回で第37回を迎えることになった強行遠足。この間、コースの変更もあつたが、現在では本校の名物ともいふべき行事となり、全国でも実施している学校はほとんどないという。私達一年生にとつて、初の試み。十・十一日の予定が雨で順延になつていたのでまじどおしいかぎりであつた。男子は昨夜九時、一斉に一高体育館を出発、一路中込にとその意気を新にした。一方私達女子はきようの朝七時半箕輪新町を後にした。六時間の範囲で、海ノ口まで歩くのである。みんな、足にせけんをぬつたり、靴下を二枚履いたりして意気こんだ。でも六時間に45キロはともつらくてほとんどが野辺山どまり。海ノ口まで行つた人は十八人しかいなかった。しかし途中でのサービスはとてもよく、何か本当の人々の先生の心に触れた様な気がした。又友情のありがたさもしみじみと感じられた。心身ともに一段の成長がみられた有意義な強歩であつた。

あたりはまだ薄暗い、冷気がヒヤリとして顔にしみる、この朝もやの中を僕はもくもくと歩く。昨夜からの疲れが一步一步進む足に現われる。けれども心はすっきりしている。何といっても気持ちがい。顔をあげると遠くの山々がみえる。標高千何百メートルのこの地にも、こんな広い草原があると。ここは野辺山高原である。陽が登りだした、東の方角の雲が赤い。朝焼けである。赤、だいたい色、紅色、レモン色、どんな言葉でも言いあらわせないような色、一瞬感傷的な気分になる。朝焼け、遠い山々のシルエット、道の両側の紅葉。この時シミジミと生きているという事はいい事だなあと思った。これは本当である。誇張ではなしに、とても純粹な、混じり気ない心になっていた。

歩きながら昨夜からの事を思いだす。学校から出発した時の事、清里に着く前の苦しさ、清里からここまでのまわりの自然の美しさ。

今、歩いている道は一本道である。前の人の後ろ姿が見えている。だるそうな歩き方である。

やがて谷川を渡る、といってもすばらしい鉄橋を渡ったのだが。もう少しで野辺山の本部である、ここらは日本でも最も高い農業地域である。牧場が多い。青い草原がズーツと続いている。サイロもみえる。朝の早い人々はもう起き出して仕事をしている。

とうとう野辺山本部に着いた。そのしじみ汁のうまかった事、今思い出しても〇〇〇が出そうである。

十一月一日 天気(晴もしくは曇)

佐藤

午後県民会館にて、文化祭の幕が切つて落とされ、続いて音楽会が開催された。

校長先生の訓辞に始まり、さらに湧き出するハーブの音色に全員魅惑された。かくして第一日は終了。

十一月二日 天気(晴、風強し)

よくここまで研究、観察したものだ。それにもまして、また見事に陳列したものだ。さながら博物館へでも来た感じである。一高の文化祭もたいしたものだ。

夕方強風の為、屋体にてフオークダンスを開催。

手と手を振り合うほほえましい顔と顔、それにまして、見物人のぶすつ面、かくして文化の祭も完了。

文化祭

山本 登志子

昨年十一月当校の文化祭が開催された。

部によつては、単なる展示や羅列ではなく、特長を生かして内容的に新しい豊かな活動をしたことは、新鮮味があって良いと思つた。しかし、全般的に参観者が少なかったのが少々寂しかった。内容においてもう少し意欲を盛り込むとか、周知の点で考えるところかなどに力を注ぐことが望ましい。なかにはずいぶん手の込んだものも

そこから友人三人と合流して四人で出発した。広い牧場の中の一、本道がつづいている。手をひいた人や自動車などと出会う。昨夜から今まで、出会った人がなかったのでもなつかしい。「市場」で少し休む。くつ下をぬぐと足に大きな血マメがでている。休んでいる間に雨が降ってきた。にわか雨らしい。雨をおしてまた出発。しばらく進むと下り坂になって来た。もうまわりは牧場ではなく山林になっている。さらに進むと、視界がパツと開けた。そこからはものすごい急な坂、導その向うに山並がえんえんと続いている。山と山との間に谷川が流れている。島崎藤村によつて名が知られた千曲川だ。また、山の紅葉が美しい。しばらくそこで休んでながめていた。

坂道を下り始める。登りよりも下りの方がえらいとは思議な事である。坂道を下りおわると急に疲れてしまった。それから川に沿つて道が続いている。足をひきずるようにして歩く。海の口駅へとうとう着いた。とても前へ進む力も気力もなかった。そこでそこから帰る事にした。思い返すと昨夜から約半日、歩きつめて65キロも歩いた事になる。自分でもよく続いたと思った。今はもう綿のように疲れきってしまった。

この「秋の散歩」は本当に美しいものだった。

肌で自然を感じたと思う。あのまっかな朝焼け、山々の紅葉の美しさ。途中で降られた雨のみずみずしさ。青い草原。すみ切った空気のおいしさ。僕はこの「秋の散歩」が本当に有意義だったと思う。また来年行く事を楽しみにしている。

あったが、全般にもつと興味をひくように趣向をこらせば、さらに成果をあげることが出来ると信ずる。説明者を要所に置いて、親切な解説を加えてくれたことは、この文化的行事へ生気を与えて文化精神を高める上で効果があったように思う。

最後に、文化祭は一年間の教育活動の成果を表わす重要な催しなので、年を追うごとに充実した内容のものとして、この行事が黄金の実を結ぶようにしたいものである。

三浦道子

文化の日を中心として行われた文化祭。その一端の講演会、音楽会は有意義だった。ことに音楽会のハーブの演奏、魅惑的なハーブの音色にすっかり聞き入ってしまった私だった。あの幻想的な音色、中学時代にもハーブの演奏を聞いたことがあったが、それにもましてすばらしかった。二日目、三日目の各部の展示は、全然といってよいほど見なかった。自分の部が忙しかったのもその一つの原因ではあるが、他の部の展示が私をひきつけなかったのもその小さな部分を占めている。後片づけの時に見た机の上の紙へのらく書き、なるほどと思うようなことも書いてあった。こんならく書きで、不満をぶちまけるのもいい方法だと思つたりした。文化祭最後のフオークダンスの集い、なかなか盛会で楽しかったようである。

望月

高校に入学してからの一年間の数多い行事には、私にとって中学時代、未経験のものが幾つかあった。文化祭もその一つでありました。僕も初めてであるための好奇心と前宣伝(つまり生徒会の文化

祭りマンネリ化からぬけ出ようとした呼びかけ」とで少なからずとも期待をかけていました。なるほど最初の日の新しいころみとしておこなわれた演奏会と講演会は大変良かったのですが、次の日からおこなわれた各部の研究発表がみごとに私の期待をはずしてくれました。新鮮味のない内容のとはしい発表、読みにくく理解しにくい掲示など、一高らしさが少しも現われていませんでした。文化祭の開さい日、縮小案に賛成したくなるようなつまらない文化祭でした。

今泉

主に園芸部にいたが、仕事の間に友達と各クラブをまわらせてきた。赤十字部だったか、よくおぼえていないが、きふ金を入れる箱がおいてあった。一円でもいいから入れて名前を書いてくれと、たのまれたので、ちょうどポケットにあった一円玉を入れて名前を書いたのはめんどくさいからそのままきってしまった。あとから友達が出て、聞いてみると、彼は十円玉をいれてきたそうだが、そばにいた人が何て考えたかなあと思ったら顔が赤くなった。それから食べにいくときは、いつも先輩といくことにしていた。おかげでこちらのさいふはあまり軽くなかった。

MY LONG TRAVEL

田中征夫

春が去り、夏も去り、秋も冬…今この一年を回顧している。ずいぶんいろいろな事があった。その一つ一つが僕の頭の中で現われ

を有意義に…。強く心に決意して…。

十二月七日 土曜日 四校時

今日のL・H・Rは研究授業、ラッキースペンだというのに、まことに不幸な日となった。前校時が体育だったため、空腹状態、おまけに緊張していなければならぬとは身体もやせる思い。今日の議題は「学校生活について」あまりにも抽象的すぎるのか、悪い頭にはなかなか良い意見がまとまらない。

後ろにいらつしやる天下のおえら方はいかに感じあろうか。おや、もう御退散？ そんなのいけませんよ、生徒の思案中の顔をもみていつて下さい、時間と空腹に板ばさみにされているのを。

十二月十三日 金曜日 午後一時

今日が冬場所の番付け発表の日、初日まであと一週間、ああ、ゆううつになってしまふ、お正月のためにも、今度こそは全勝優勝するようがんばらなければ。(強い決意をして)

十二月二十日 午前八時三十分

英語をもって今日が冬場所の初日、すこしも暖気のないこの教室に一瞬緊張感がみなぎる。夕べの努力を十二分に発揮しようとしているクラスの人達。これが「灰色の生活」だった？ とんでもないみんな希望に輝いているではないか。でも今日からあと三日も続くことを考えると少々うんざりしてくる。しかし弱い気持ちにうち勝つて、勝利を目ざして突進するのだ。これが学生の運命ではないか。

十二月二十五日 水曜日 午前十一時

いよいよ十二月も残り少なくなり、今日は二学期の最後の日。通信表をもらわないせいか、なんとなく終業式の感を受けない。今年はずらしい正月が迎えられそうだ。

では消え、消えては現われている。そのどれもこれもが今ではみな楽しい思い出となっている。僕はこの一年を航海にたとえてみた。荒れ狂った海を怒とうにもまねながらもやつとの思いで渡ったあの日、澄んだ青空のもとさつそうと航海したあの日、また来る日も来る日も同じ海を見るだけであきぎきた事も、あんしようにのり上げ半分あきらめかかった事もあった。そして今、僕の第一の航海が終わろうとしている。全く「渡水復渡水・看花還看花・春風江上路・不覺到君家」というような一纏ののだ。いつのまにか一年が行ってしまったようにしている。だが、何か物足りない気もする。なぜだろうどうしてそんな気持ちが起ったのだらう。そうだがそれは晴れた日があまりにも少なく、いつも嵐の心配をしなければならないなかったからだらう。だれその航海も終りに近づき、もう目的の大陸が見え初めたもうすぐだ。一瞬僕の顔はほころびた。しかし喜こんではいられない。大陸に上陸してしまうとそこに長く腰をすえてはいられないのだ。すぐそこに山の旅がまちうけているのだ、海のそれよりもいつそう苦しく、いやな旅が。それには雨の目も雪の目も嵐の目もあることだらう。しかしそんな日も一時として休んではいけない。歩きつづけるのだ。再び海が目の前に現われるまで、まっすぐにどこまでも、どこまでも……。

十二月一日 日曜日 午後三時半

横内、谷島 小沢、武川

町の角からジングルベルの音が鳴り、いよいよ師走のあわただしさを身にしみて感じる時となった。一九六四年もあますところ一カ月寒さが増すにつれて兎年もだんだん短くなっていく、「最後の月

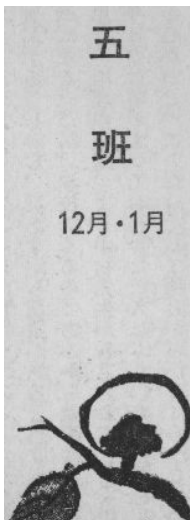
十二月二十六日 木曜日 午前十時

終業式をしたというのに、今日から四日間補習授業が続く。数学英語、国語と、クラス仲間がはなればなれになろうともやはり勉強することににおいては変りない。しかし何と寒い日だらう。おまけに女子が北側とはあまりにも無慈悲な男子ではないか。(数学教室において)

十二月三十一日 火曜日 午後十一時

もうあと一時間で一九六四年の夜明けが始まる。今年一年をふりかえって見ると「新しい人生の門出」というべき年を有意義にすごしたかどうか疑問だが、まあどうにかこうにか過ぎて来たのだから後悔することもないであらう。あと三十分で、多忙な一年をいろいろと反省するのはめんどらうだ。それより今までの睡眠不足をおぎなう方が利口なやり方ではないか。

(二十九分ねむる) ああもうすこしで新しい年だ／ 八秒、七秒六秒、五秒、四秒、三秒、二秒、一秒、A Happy New Year／



一月一日 (晴れ)

飯室、森川、岩間、丹沢、橋本、佐野、渡辺

太陽が山の上から顔を出した。一月一日の太陽である。彼は私達を照らしてくれた。それは母のような暖かさをもって、私たちに「今年は、パツチリいこうぜ」と言った。

私たち優秀なる五斑のメンバーは、この日の日記に所感を書いた。A君は次のように書いている。「一月。だれにとっても新鮮なたのしい月である。希望にもえ、この一年に期待をかけ、今年こそはと心にちかう。まったく良い月だ。」

次にB君はこう書いている。「過ぎ去った一年を反省して新しい年に思いをつないだ。入学してから勉強もクラブも、とにかく一生懸命やった。友というものも何人かできた。だけど、どれもみな不完全だったようだ。」

もうすぐ二年だ。高校二年という時期は、高校生として最も有意義に過ごせる時期ではないだろうか。今年をどのように過ごすかが自分の将来を決めるだろう。今年こそは大いにハッスルしてやって行こう。次にC君。「十二月のあわただしさから解放され、やっとのんびりできる。十二月下旬の講座が終ってほっとするひまもなく、また二月上旬にテストがあるという。まったくゆううつだ。十時から式があるので学校へいき、先生の話を聞いて歌を歌い、あと友達と雑談しただけで帰った。中学時代と同じであるが、なんとなくどこかものたりない感じだった。校長先生に手紙を出して、家でお茶け（又は？）など、のんでいたほうが利口だという考えが頭をかすめた。しかし、きょうは一月一日だ。一年の最初の日くらいいじめにいこうという考えが心臓からわきでた。そしてその方が強かった。そして学校へ向かった」。

三学期

一月八日（暗）

今日から三学期だ。久しぶりに学校にきてみるとなんだか新しい気がする。しかし、又あすから授業があると思うとなんだかゆうつになる。だが、学校に行くのであるから勉強はしっかりやろうと思う。地理の時間、よく中村先生から言われる言葉を思いだした。今日の行事がすべて終わった。久しぶりに友達と話をした。なんだか心がおどつていた。そして明日からがんばろうと思った。

「一日一日信心をもつのだ。一日一日を愛するのだ。一日一日を尊敬するのだ」。——ロラン——

一月十三日（暗）

二学期の通信表を今ごろわたしてくれた。どうという事はなかった。「男なら、七つころんで八つでおきよ」というのがあるが今の所ころびばなしだ。早くまっすぐ立ちたいものである。家で色々いうと「一事ことを言う前にホレ何とかというのを歌って逃げる。新聞に社長連の経歴がかいてあった。〇〇空港、〇×銀行、そのほか多ぜいでいたが、高校時の成績はみんな悪い。私は安心した。今は学歴がものをいう時代だ。しかし、大ものになるには成績ばかりの問題ではない。

「我と同じものよ／安心しろ／人世をうまく切り抜けるのはその人の腕しだいだ。」ファイトで行こう。

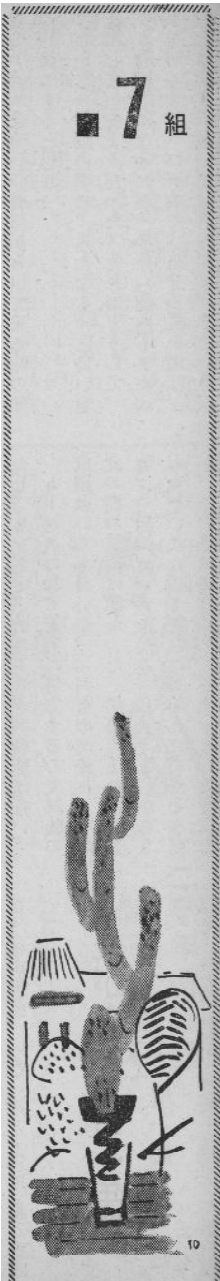
このようにして一月は過ぎていった。それにしても寒いなあ。カアちゃん、風呂わいた？ええ。さて風呂はわいたし、もう書く尊がないので筆をおこう。

七組の諸君へ



秋山美彦

早いものだ。この一兩日の暖かさはまさに春である。私達をとりまく山々——この美しい甲斐の山々も、春の雪解けをはじめとして四季それぞれのたずまいを変え、今再び春を迎えようとしている。例えば昨春一年七組の担任となつてから、HR経営について常々あれやこれやと考え、多くの計画をもった。しかしその実行した事の極めて少なかった事を、今こゝに深く反省し残念に思っている。所詮は自己の至らなさ、力のなさによるものとはいえ、誠に遺憾であり、今更ながら後悔



している。たゞ、月並みな表現ではあるが、

「何とか大過なく過し」得た事を唯一の慰みと感じている。先日、久しぶりに机の中にある入学式の記念写真をみた。そして思わず微笑した。皆、身体こそ大きいが可愛らしいからだ。皆、自分の弟とか子供のような気がするからだ。入学式後の感激と緊張にみちた顔、喜びと希望に胸ふくらませた姿、どれも皆、誇り高い顔々々である。こうして一年を経た現在の諸君と比べると、どれだけの変化がみられただろうか。私は暫し瞑想した。学問的には非常な発達をしただろう。しかし精神的にはどうか……等々、様々の考えが頭の中を去来し、暫し困惑した。ともあれ、諸君あゝの入学式の感激と決意を事ある毎に思い出して貰いたい。君達の入学を心から祝福なされた親兄弟の方々の、あの喜びの笑顔を忘れないで貰いたい。そして一年間、七組で培い

わがクラス

野沢正史

宮坂 紳一郎

「立てば狼、すわればトックス、歩く姿はチューリップ」

いとしい我が七組を一口に表現すると、こ

のようになる。

狼は性、狂暴である。一度見学？ に来て下さればピンとくる。カーテンはポロポロでその上縫おうという殊勝な（女性的な）者は一人としてない。ガラスは怪人を中心として皆割る事に精を出したので、通風が良くて、ガス中毒などほ、どこ吹く風である。床の穴の板でふさいである所では、つかつかってギヤアギヤ騒ぐし、ふさいでない所へまで、清掃の時ゴミを入れる。又、戸はなかなか開かないので、授業時間の短縮に貢献する事大である。正常な人間なら、すぐ頭のおかしくなるような所だけれど、皆これ以上おかしくなれない限界までできているので、その点心配はない。四校時の終る頃になると、皆ソワソワキラキラし始める。「キリッ、レイ。」ドカドカバラバラ皆食わんが為に、日新ホールへ飢えたる狼の如く、ひた走りに走る。いつも僕のクラスは早い。食堂から出て来る時の顔が想像できると思う。

しかし一学期の頃は、みんなもつと良い地を出していたようだった。それがどうして、こう動物的になったかは多分「能あるタカは爪をかくす。」のデンで、自分の良い所は、内部は穏す（悪い所は外へ表す。）という、

てくる。

五月 一万メートル競争は皆いい線にいった
ようだ、始めての中間考査に皆緊張。
六月 最も騒いだ。先生からの注意頻繁。
七月 通知表をもらった時の皆の顔は？
八月 夏休みは皆みっちり勉強したようだ。
九月 身延山での話し合いは先生と生徒がう
ち解けて楽しかった。
十月 強行遠足はフアイトをみなぎらせて出
発
十二月 校舎が校舎だけにすぎ間風が入って
きて寒さが身にこたえた。
三十九年一月 皆元旦にはどんな決普甚した
か

一高生活を顧みて

1 鎌田 豊

一高入学以来、もう一年が過ぎようとして
いる。実に短い一年間だったと思う。この一
年間全然話をしなかった人もいるので、「組
み分けをしなればいいな。」と最近では思
うようになった。中学時代に比べると変化に
乏しかった高校生活ではあったが、身延山の
研修旅行や強行遠足などはいへんいい思い

おくゆかしい傾向があった為、このようにな
ったものらしい。「雄弁は銀なり。」とばかり
授業中二人で感想を述べ合っていて注意を
うけたり、時計ばかり気にしていておしかり
をいただいたりしていた。（決して時計を見る
な。これが若い人に覚えてもらいたい私の
忠告なのであるーエジソン）しかし最近は何
故か静かになった為、先生が気持悪がつてお
尋ねになるのだから世の中は不思議である。

「すわればトークス」というのは、学習面
においては亀の如く一歩々と確実に前進し
ているという事で、決して秋山先生のあだ名
ではなく、又、知能が低いという事でもあり
ません。（最近気候不順の為か、オモチャの
ピストルを持ち出して、撃ちっこしていた者
がいたが、これは知能とは関係ない。）

「チューリップ」は、明るく純情である。
（カケコトバだから裏の意味をも、想像され
たし。ヒント……チューリップの茎は長い。

トークスの如く着実に努力するので試験の
成績はいつも良いが、「河童の河流れ。」か
此の間の試験は悪かった。学級担任の秋山先
生は、純情カレンな僕達をピリッとしきろう
とお思いになって教室に來られたのだそうで
が、この日は運悪く？ パリッとした背広を



二学年進級を

間近に控えて

委員長 依田省吾

何かと忙しい日々を過していることと思います。勉学の合間には又一年間の楽しい思い
出や、二年進級の希望に胸をふくらます一時もあると思います。私もPTA委員として
本当に諸君のお役に立つことが出来たかどうか振り返ってみると誠に慙愧に耐えません。
なんと言っても大学進学が諸君の本命なので、学校当局も真剣に種々計画を立てて下さっ
ているので私共出来るだけお手伝いするつもりです。

学校から帰ると家の人達からは口癖のように勉強勉強と言われてさぞうんざりすること
でしょう。私も昔の甲申時代のことを思い合わせると、諸君と同じ思いでした。高校、大学
進学がどんなに苦しいものか自分が鈍才だっただけに身につまされて諸君の心境が良くわ
かるような気がします。然しどんなに苦しくとも、又突き当る壁がどんなに厚くとも自分
自身の手で突き破らねばなりません。男子志を立てたら初志は貫徹したいものです。私、
大学の研究室で中々思ふように研究が進まず一時は研究を放擲しようとしたことがあり
ました。その時恩師一いつい先程まで京大総長だった平沢興博士「が次のようなことをメモ
に書いて、家へ帰って読んでちゃんと渡してくれました。

Dig deep the very place where you
stand on, then you will find a good Spring.

我哲人の言葉だそうです。私にとつてはまさに奮起の指針でした。何かに迷ふ時はいつ
もこのことを思い出します。今でも英語でスラスラ暗記出来ます。私事にわたるこんなこ
とを書いたのも諸君の一高の一先輩として、又父兄の一人として何時か御参考の一にでも
なればと思つたからです。

高校二年、この時期こそ一番大切な時期と先生方はおっしゃっています。父兄の方方は
諸君をやさしく見守つて居ります。呉々も健康に注意して勉学にいそんで下さい。

着て來られた。いち早くそれを発見して同胞
が「アーア。」（尊敬と劣等感の混じった複

雑な表現法で、人が変った事をやったり、言
つたりした時に用い、アクセントは真中へん）
と唸りだした。それが例によつて教室中に
伝染して騒然としてしまった。中には何も分
からないで唸っているものもある。出足を抑え
られた秋山先生は思わず「今日は見合だ。」
なんておっしゃつたものだから大変であり、
唸りは数段高くなり、とうとう先生は苦笑し
て予定を変更せざるを得なかったのだそう
だ。（秋山美彦先生回想記より）

まったく何と皆素直で明るくサツパリして
いる事よ。だから三人として（誤植に非ず）
つき合はずらいとか、いわゆる変な奴はいな
い。団結力が強く、よく笑い男子クラスの持
味を遺憾なく發揮している。この変なクラス、
約一年間生活を共にして來た友達、皆大好き
だ。秋山先生、いろいろと本当にありがどう
ございました。

我がクラスの一年間

塩島正紀

四月 静寂、静寂、静寂：後半やや活気が

出になった。四月からはいよいよ中堅学年である。一年の高校生活を基礎にして充実した生活を送りたい。

2 岩田 茂久

この約一年間をふり返って見ると、あつという間に過ぎた感じがしないでもない。これはテストの回数が中学の時より多く、又その比重が大きいせいもあると思う。試験の勉強をしている時は、その一日、一日が短かく感じられる。しかし、授業の方は、いつになっても長い。おかしいものだ。一高生活にも、かなり慣れてきたが、この辺でふんどしをしめ直してがんばることにした。

3 中村 幸男

この間入学したかと思ったら、もう一年も終了だ。今一番脳裡にこびりついているのは身延山での研修会である。ちょうど真夏の太陽が照りつけていた頃、あの静かな山奥で先生を交えた級友との話し合いは、実に忘れる事ができない。「ガリ勉はよいか」、「交際はどう行ったらよいか」など、議題は実質的なものばかりだった。とかく勉強に追いやられる一高生にとっては、このような会は実に

8 折居 和雄

この一年間をふり返ってみるとあまり充実した年ではなかったように思う。あの入学した時のことを考えると、今の生活は、入学したばかりの時に見た上級生の生活と、ほとんど変りがない。自分でいけないことだと思っても、意志の弱さのために、ついやめてしまう。もう二年生、高校生活の最も大切な時期である。何とかしてこの意志の弱きに打ち勝ち、より充実した高校二年生としての生活をおくりたいと思います。

9 中楯 洋

この一年、
俺はどうしてこんなに変わったのだろう。
思想も、行動も……。俺は、まだ変るんだ。
そして、生きて行くのだ。
俺は、生きて行くのだ。

ためになると思う。まったく一年たつのは早い。しかし、誰かがこんなことを言った「人生は退屈すると長くなるよ」と。

4 遠藤 和男

この一年間をふり返ってみて感ずることは第一に「何と一年なんて短いものだろう。」ということです。第二には、無為なすべし方をしたということです。今になれば「あの時これをするのであった。あれもなかった」と悔いすることはいっぱいあります。二年生時代にはこんなことのないようしつかりがなばつていこうと思います。

5 中村 正人

僕がこの学校へ入学して、一年七組の一員として過し始めてから、はやくも一年たとうとしている。この一年をふり返ってみると、いろいろな人と会った。そしていろいろなことを経験した。楽しかったり、悲しかったり苦しかったりした。しかし、それらはもうただの思い出であり、少したてば忘れてしまうだろう。つくづく無常という語を思い出す。だがそんなふうには感傷的にばかりになってはいられない。未来に向かって、たえず進まね

身延でのこと

1 宮川 安法

一泊二日のこの旅行。朝起きてからのあわたしきは、今までのと一向変らない。それでも事故一つ起こさず夕食を食べ終え、高校へ入ってから親しくなったM等と一番最後に風呂へ入った時、この中の誰かの提唱で、みんなて語り合うという事になり、風呂から出て困りの者を呼んで話を始めた。「政治経済論」「人世論」から「国民としての認識」、そうだ！誰かが「夫婦愛」？
どれもこれも尻切れトンボのような感じがなかったではないが、話し終えた後の心は、何とも言えぬ満足感があつた。

2 佐野 修一

身延山へ行ったことは僕にとって最も良かった。先生の考えもある程度理解する事ができたし、又友達とのお互に親しくする事ができた。自分としては、自然というものが少し理解できたように思われたが、やはり友達と話し合ったりして、理解の浅いことがわかった。自然というものを僕は山で理解して、

ばならぬ。

6 斉藤 俊樹

月日のたつのは早いものである。この間まで高校への受験勉強をし、やっと合格して安心したのもつかのま、今度は大学への受験勉強をしなくてはならなくなった。二年生になろうとしている今、一年の生活をふり返ると非常によく遊び、非常に時間を無駄にしたと思う。今まで一体何をしてきたか。友人との交わりはどうだったか。このようなことを考えると、もう一度高校一年生になって初めから何もかもやり直したい気持ちである。

7 宮崎 進

僕がこの学校に入った時、知らない人が多く、又学校の様子もわからないのでかなり心配だった。しかし今になって考えてみると、そういうことがまったく感じられない。それだけみんなとなれてしまったのだと思う。高校生になって最初の一年間だけれども、まったく高校生という感じがしない。だから、あと二年の間は高校生らしくしたい。

これからの人生に役立てたい。

3 古屋 郁夫

一年間の思い出として、やはり、身延山研修旅行がある。クラス単位で、個々の問題について話し合い、又先生も非常に参考になる話をしてくれた。自由時間、トランプなどをしたつて。

身延山研修旅行は甲一生活の楽しい思い出の一ページとして残るであろう。

思いつくこと

強行遠足

橋田 尚之

一足一足歩くごとに、足が石にあたってしびれる。定期的に歩くことがいやになる。しかし僕は歩き続けた。・眼前の山々が其赤に紅葉している。藤村が千曲川のことをいろいろ書いたが、そんな情緒にひたっている気分にはなれない。ただ機械のように足が歩く。ついに目的地に着いた。ただうれい。
今考えると苦しかったことが楽しい思い出になった。それに、その長い距離を歩いたことで、やればできるという自信がついた。

僕たちの教室

1 本田 政元

異常なまでも混乱した教室、それにも増して、クラス人のすさまじさは大変なものである。成績が悪いといわれても苦にならない。こんなクラスで一年間、本当に楽しく、面白く過した。男子クラスだから、それも出来たのだが、二年になると、新たに組換えをするそう。男子クラスは本当によい。何でも話せる。気がねなどいらぬ。こんどもこんな楽しいクラスに入ればよいが。

2 山田 忠

教室を紹介しよう。

正面にはぐつとWIDEな里板があり、前には穴ふさぎの板で段がついた大きな箱がある。後にはけつたり、バンチをくらわせた跡を持つロッカーがある。入口は二つあり、後の方は取手を引くと前に机が現われ、取手のない方を引くと後の空地になる。これが僕たちの教室である。

3 谷戸 文広

四月に一高へ入った時は、教室かあまりボ

ロなの驚いた。歩くとへこむ教壇、つぎだらけの床、ポロポロのカーテン、すきま風かどんでん入ってくる。こんな教室ではあるが一年たった今ではたいして感じなくなってしまった。

見えていよう

わからない

井上喜由

色が白くて小さくて、はちされる若さの中に一筋の誠実と……らしさ。ましてや笑顔は日本一、こんな完全人間像を描いていた俺に運悪くあいつは理想の以上、素顔も声も日本一、だけでも俺は学生身分、人間疎外や能動体、ペンペン草や地球の自転、清少納言に三角関係、やつぱりこれでいくでしょう。

リマーノン詩集より

冬の思い出

小林 正、吾

甲府一高での一回目の一年の三学期のある五校時。右の方よりすきま風が入ってくる。少し涼すぎるよう。南側の野郎共は気持良さそうに昼寝などしている。寝こち満点のよう。まったくうらやましい。

教壇では先生が何やら話している。「たまには聞かないと悪いから聞いてやろう」と思つて顔を上げると、終りのベルがなった。

無題

三沢栄一

「十四日までに提出せよなんて困るなあ。いくら考えても良い文がうかばない。あー、いやだ。やだ。作文はいやだ」なんて言っているうちに文ができた。変な文だなあ。我ながらがっかりするよ。だが書かないよりましだろう。これを編集委員に出そう。

うれしい時、いやな

志村二郎

うれしい時

- ・テレビで政府に皮肉を言っている番組を見ている時
- ・日本に都合の悪いニュースが起きた時
- ・日本の何かの実験が成功した時
- ・国会で非難されて困っている大臣の顔
- ・いやな時
- ・統計で日本の悪い所がわかった時
- ・交通事故で大勢死んだ時
- ・やな奴と町で会つた時

・きれいな女の子と会った時

アリの会話

山田 時男

アリは真実のみ語る動物である

A「甲府一高の『一』は何を意味するか知ってるかい？」

B「成績が一番かい。」

A「いやちがうよ。」

B「伝説かい。」

B「じゃ校舎のボロさだろう」

A「わからないかなあ、あれだよ。」

B「それじゃ美人の数だろう。」

A「とんでもない！ 美男子の数だよ。勿論男子組のみ言える事だがね。」

B「ああそうか。どうりでこの学校へ女生徒が来たがるわけだ。」

A「我々のアリの雌雄の間では評判だよ。」

日記帳

小林 憲次郎

日記帳、それは過ぎし日を顧み、より良い明日をつくる為の心の記録である。中には生

活、人生観、理想等のいろいろな喜怒哀楽が記されている。詩や俳句などもはさんである。日によつては空自の頁、きたなく汚れた頁もある。これこそ誰も裏切らない、そして裏切れない其の心の友であると思う。

木立の影

戸島雅彦

木立の下、それは若人にとって憩いの場である。太陽の下で汗を流し、勉強をし、それをいやす所がすなわち木立の下の日陰であるある時は議論し、ある時は思いにふける。木立の影は生きている。今日も明日も、あさつても、若人の未来を語り合う場として生き続けるだろう。

福寿草

早川克彦

朝、庭に出てみると、昨夜からの雪はやんで、木の枝で雪を避けたかわい福寿草が、まるで自分だけの天下のように咲いている。ふと見上げると、枝の上の綿のような雪が見る間に朝日に溶けて湿り気を帯び、あつという間にすべり落ちて福寿草を押えつけてしまった。福寿草には払いのける力はなかった。

小さく息をしながら、もがいているように見える。数時間後には雪を消すことだろう。

サボテン

春日 宗麻呂

一つ一つ鉢に植えられたサボテンがいくつもある。たくさん種類になるがその名前はわからない。きれいで大きい物もあるが、小さなものもある。美しい物は一層美しく、またこれに劣る物も、より大きく美しくさせたい。だが、なかなかそうならない。しかし、これからよりよく成長するかもしれない。

西城へ

笠井智明

僕は中国大陸の西域に興味をいだいている。そも（そのきっかけは、井上靖の「楼蘭」を読んだからである。剽悍な遊牧民族と強大な漢帝国との争いに捲きこまれたオアシス帝国楼蘭の苦悩と、それに加えて、常に大自らの暴威に適応していかなければならないこの西域の中国民の悲劇に、心を打たれたからである。無論小説だ。しかし、僕はこの説話の

存在を仔細、一度でいいからこの樓閣に行つて見たいと思う。

北風

雨宮俊夫

「北風：寒い朝……」。寒い。電車内の暖房から、急に外の寒さにあたる。いつもの道を登校。目の前の山が影と雪の白さでくっきりと鋭い線を描き出している。山から空に目がうつる。その時、心の底から清くなった気がした。すっきりと青く澄んだ空、冷たく鋭い空。しかし、その中に心の暖まる何かを感じた。何だかわからない。僕は好きだ。清く澄んだ空。大きな空。この空のような清く澄んだ心、大きな心になること。それが今の僕の理想である。

X 君

荒居正次

僕の友だちにX君がいる。彼は、休み時間には一時間おきぐらいに大いに暴れる。その他は、じつと静かに本を見ている。そして、いつも静かな闘志が燃えている。成績は良く

極度の顔面積儉約型。高さ〇・八ミリ、大きな大豆の四倍内外。かわいくて、うまそうなくらいの豆鼻だ。今度は私の奴、高さ大きき共バランスがとれてグツと良い。ちゃんと顔中にあぐらをかいて、高さも高くなく、グツといかず。何といつても、鼻は私に似たのが良い。なぜなら、ある種のデブの動物に似た食物のとりやすい合理的なスタイルだからだ。しかし、私の奴の、排出ガス流通の音の大きさには自分自身困ってしまう。夜、隣百メートルの内では、耳にふたをしなくては眠れないのだ。しかしそれで私が眠れぬわけでない、私の鼻はやはり合理的にできていると思う。

ある話

飯沼明

進路決定に関する、某職業安定所の男の話「諸君は、自分の進路を考えて、いるだろう今日技師は各職場で歓迎されているが、諸君の中にも技師を希望する者があるだろう。しかし現実には厳しいよ。鼠のチュータ先生に教育してもらわなければだめだ。それでもだめだった者、米がなくて教育をうけられなく、破れた悲劇の主人公は私の所へ来たまえ、まと

はないけど秀才のように見える。話をすると面白い。将来彼は変るだろう。「今に見ている僕だつて……」といっているように感ずる。彼は偉人になるだろう。僕にはそんな気がする。

思ひ出そうぜ

愉快的奴を

依田秀夫

彼は生れのせいか品の良い顔立だ。生活態度にもよく現われている。掃除も実によくする。そのせいか自称〇〇〇で通している。だが、他人は認めようとしない。小学生程度の悟りも開けていないようだ。まったく単純な彼だ。だが奴は違う。不屈な精神と強い意志を持ち、そしてあらゆる精神的問題と取り組み解決していく。実にたのしい。私も奴のような心境に達するように努力している。

なんのこれしき／

奈須一

新藤久和

そこに一つの栄光があった。それに向かう

めてめんどうみよう。職業にもいろいろあるが、やはり技師になりたいだろう。よろしい僕を信じなさい。だが、技師といつても、建築、造船、代議士、詐欺師等いろいろあるがその中で代議士はどうだろう。これになるには金がいる。立候補しても他の候補者が金を使つて票をかせぐので票が集まらない。では詐欺師がよいだろう。しかし詐欺師は簡単ではないぞ、口頭技術を要するが、大丈夫わしが教育してやる。しかし軽卒な事をしてケイソツ（警察）に迷惑をかけるなよ。悲劇の主人公になった者はわしの所へ来い。めんどろ見よう。」と。

思ひ出

長田義人

心は灰色。心は赤色。心は水色〇
若葉がまぶしい。
空は真青。雲は裏白
遠くに山がはつきりしていた。
ルルルル……………
物悲しい歌。
でも何か震んだ。

二人の人間がいた。一大は素晴らしい才能の持主。一人はすばらしい努力家だった。運命の神は既にいづれがこの栄光を勝ち得るか決定していた。しかし現実はいきびしかつた。最後にそれを勝ち得た者は努力家だった。創造の神は「努力家」をもつて運命の「天才」を破った。「努力」は「天才」にまさる。

鼻

青木晴秋

秋山安彦

武井勉

いろいろあります。まあ一番一般的な形の奴は、高くなく、低すぎて、ペツチャンコの極質素の物。次へ行くと、まあ、高さは普通で。チョッピリでもないが、大きくもないほどの大きさのやつ。まあこれらは、皆一般の物。次に特殊なの、まず、クラス一のを休み時間に物色した結果を見ると、高さは一寸五分とちよつと、大きさは赤子の頭とはいわないまでも、普通の質素けんやく型の三倍。丸いダンゴに似ている。三校時から四校時にかけてのこれを見ることのつらさ。とんでいって飲み込みたい衝動にかられる。次に

大きいものがあるようだった。
入学当時の頃。
まるできのうのようだ。

快朝の日

塩島文博

雲一つない青い空
一万メートルが行なわれようとしている
調子極めて悪し 皆自信ありげだ
何か私の前にまちうけているようだ
しかし私は走ろう 力の続くかぎり
私の前に幸あらん事を祈る

石川文生

男女クラスにあこがれたオレだが
今の反省としては

自由な男子クラスを好きになった

面

田口英一

自分には二つの面がある。
一人、自然の中や静かな場所にいる自分。
この時、もの実しきを感じ、心が安らや。

友達を求める自分。

寂しがり屋で、一人でおれない自分。

この時、談笑で寂しさを紛らわす。

どちらも気の弱い自分。

笑 い

佐野 健三

皆が私を見る

糸のようにひよろつとのびた松の枝の私を

そして皆が笑う

他の木も石も土も皆が笑う

そして私も笑う

その笑いにはいろいろある

顔を変にくずして笑うもの

大きな口をあげて大声で笑うもの

しかしその内容は皆同じだ

人をばかにした笑いだ

私はいったん自分を許す

そして後で自分をいためつける

太ろう大きくなろうと努力もせずに

自分をいためつける

瞬 望

山本 秀彦

夢破れても虚栄心あり

学舎午にして生き甲斐探し

人生無情を感じては鼻にも涙を注ぎ

虎の子を温めては壺円にも心を躍らす

試業三日も連なり

虎書万金に価す

薄頭搔けど解答更に浮かばず

総て真に努力せん事を欲せらる。

先生と生徒

長田 謹造

先生と生徒の関係は、永久不変のものである。

中学までは、先生と生徒の間は、父兄母姉と子弟妹の間であった。しかし、高校になると、その関係は、その場だけの間がらとなり、冷く、そして厳しい。まるで北風のふきしきる生活の中での関係となる。授業をうける時だけ、先生に礼をするが、一旦その場を離れて、廊下等で相対すると、もうまるで他人の、これまで一度も顔をあわせた事のない

ような、もつとはつきり言えば、けんかをしている犬猿の仲のような関係となる。これでは、絶対に、生徒の義務の勉学も進まないであろうし、又先生方も、教える事による喜びは生じてこないと思う。

私は、この悪状をなくすために、先生と生徒個人間の話し合いを、月に数度と言わぬまでも、最低一度持つ事を希望する。

先生と生徒との間がうまくいけば、その時こそ、我が一高は本当に県下の、いや日本の一高となるのだと思う。生徒と先生、先生と生徒の関係がうまくいく事で、一高はきっと多くの東大生、その他の名門大学生を生むだろう。

三井 正己

集会の時、皆が着物を着ている時に、自分だけが洋服だった。恥ずかしい思いをした。

日本の文化は恥の文化であるという。外国の文化―特に欧米―は罪の文化であるという恥の文化と罪の文化と。「恥」は、良心に背いたり、プライドを傷つけられたりした時に感ずる。では罪とは何だろう。もちろん、法律上の罪とは異なる。外国人は、日本人と比べて罪悪感が大いという。もちろんそれぞれ

の時間などには、服装も非常にみだれて三年よりも悪い状態である。もうすぐ二年生になる、のであるから、一年の手本となるためにも、もう少し学校生活における態度をしっかりすべきである。

甲府第一高等学校

北村 敬

私達が毎日使う教室、その中は、ほこりっぽく、砂だらけ。床板は破れ、風が吹けば窓はガタガタいうし、一歩外へ出れば、便所の悪臭。手洗いもないのだから、やむを得ず不潔になる。ちよつと雨が降つても、地面は、ぐちゃぐちゃになり、普通では、歩けない状態の所が大部分である。

先生方は、まず勉強りと毎日おつしやるが、こういった環境の悪さを、まず第一に改善すべきではないだろうか。

一高一年生

山尾 久義

入学半年を経て学校に馴れ、今はいい加減になつてきた。某先生曰く「お前達の行動は

雑 感

浅川 文彦

枝や葉が、いくらたくさん生い茂つていても、かんじんの根がしっかりしていなければその木は少しの風にも倒れ、やがては枯れてしまうであろう。

僕達の学校生活でも、同じ事がいえると思う。各自が心をしつかり持ち、学校生活をおくるならば、その学園はより明るく、楽しいものになるであろう。

最近の生徒の態度

林 幹雄

入学の時と比べ、つくづく生徒の態度が悪くなっているのを感じる。授業時間と休み時間の区別がつかないで、となりと話をする者先生方の質問にまじめに答えない者、又体育、

高校生活

深沢 敬栄

高校生活とは、毎日「何者」かに追いまわされるための生活なのだろうか。

「冬の冷房完備の教室」。「広い黒板があるだけの教室」。「講義するだけの先生」更に友達同志の間でさえ、中学とは違う「モヤモヤ」したものが感じられる。このような環境においては、楽しい生活どころか、まったく正反對な「何者」かに追われているという感が深まるだけだ。

受験シーズン

に思う

小林 誠

今年も、いよいよ受験シーズンを迎えた。顧みれば、去年の今頃は僕も一生懸命だった。

高校入試は人生の第一関門である。それに
り、各自の将来が約束されるかの様に思
う。一年経た今も、あの頃の様子が頭にうか
んで、今はなつかしい思い出となった。こ
れからも受験という機会は何回あることだ
ろう。しかし、それには必ず辛苦が伴うが、
それをのりこえて行く時にこそ、生きがい
がある訳だ。夢と希望を持って、正しく進
んで行く。

たいくつ

長田寿彦

病院の朝は
六時に看護婦が廻つて来て
脈と体温をはかる事からはじまる
この頃窓の外は暗い。
ベットの
長い長い一時間を過ごす。
元気の時は五分、十分と
少しでも長く寝ていたい
長い間寝ていると
寝ているがいやだ、いやだ
それから朝食まで
待つ 待つ
「ああーたいくつだ。」

進学と学習について

二年後は今までにない受験地獄だと云わ
れている。昨年春やつとの思いで高校の門をく
ゞり、ゆとりもなく、卒業後の大学進学、就
職の心配である。激しい受験準備に明け暮れ
しなければならぬ。一年生の置かれている
実態と、大学入試制度の見通しと、学習態度
について、以下述べて参考にしたと思う。

進学者数について

大学入学志願者の急増は四十一年春からは
じまる。現在は四〇万人台だが、約五〇%増
となつて六〇万人を超える。四十二年度から
はさらに七〇万人を超えるかもしれない。勿
論、大学生急増対策がたてられようが、現在
の所業観出来ない。入学率について過去の実
績を示めすと、三十八年度六三・四%、三十
七年度は六一・五%、三十六年度は五十九・
九%になっている。この実績からみて今後六
十五%以上に入学者を高めることはかなりむ
ずかしいとする見方もある。

四十一年度入試に

ついて

文部省から各大学あての通達の中に概要が

示めされている。これは、一年生の高校にお
ける履修科目やその内容が従来と著しく変わ
つてきたことによつて、大学入試も変化する
ことを意味する。

① 主要な科目に、甲乙などの二種類の
区別があり（進学希望者はB・乙、実業課程
等ではA・甲）乙またはBは科目の程度が高
くなった。

② 理科・社会が自由選択でなくなった。こ
れが従来と相違する主たる点です。

従つて理科・社会については、昭和四十年
までの入試では、「選択受験」ですが昭和四
十一年からは選択がなくなる。もつとも、文
部省では従来のように二科目以上出題して受
験生に選択させることも出来ると規定してい
ますから大学によつては選択可能な所もある
でしょう。しかし、選択をさせない大学が、国
立の場合が多いようです。（文部省で調査中）

試験科目を前年の十月一日以降に発表する
のは、高校教育に与える混乱に対する配慮に
よる。たとえば、理科の場合、物理・化学を
受験科目とすることがあまり早くから発表さ
れると他の生物や地学を勉強しなくなるとい
う偏向を排することが根本的な考え方です。

四十一年度の入試は、新課程による入試と
浪人に対する旧課程の入試との二本建てにな
る。（係より）

一高生は どうあるべきか

高校生活にどんなことを考えたか。それを記したのが我々八組のものである。これはある題目のもと八組
生徒全員が考えたことをのせたもので、一高生はこうあるべきであると主張するばかりのものでない。同じ
問題に対して他人はどう考えたか知ることによつて、自分の視野を広めようとするものである。一高生かく
あるべきという主張はその副産物にすぎないといつても良い。とはいえ、自分の気が付かない所を他が指摘
し、批判しているものは、いままでを反省し、残された一高生活に役立てるにはプラスである。個人個人の
スペースはごく小さいものである。もちろん一人が自分の思っている事の何分の一も書けなかったであろう
しかし、それは常日頃考えていることの核心を言つたものと見ることが出来よう。あえて無記名にしたのは
自由な立場から批判できるようにした為である。

今の一高生は、『お高くとまっている』と

いう感じである。これは他高生に対して、大
変いや味を与える。また利己的な「自分さえ
良ければ」という面もある。事実、図書館
で、多くの生徒が勉強をしているのに、大声
で話しをして、他人に迷惑をかけていた。こ
んな事さえなければ、一高生は頭も良く、良
識も有るのだから、立派な学生になれるのだ

と思う。

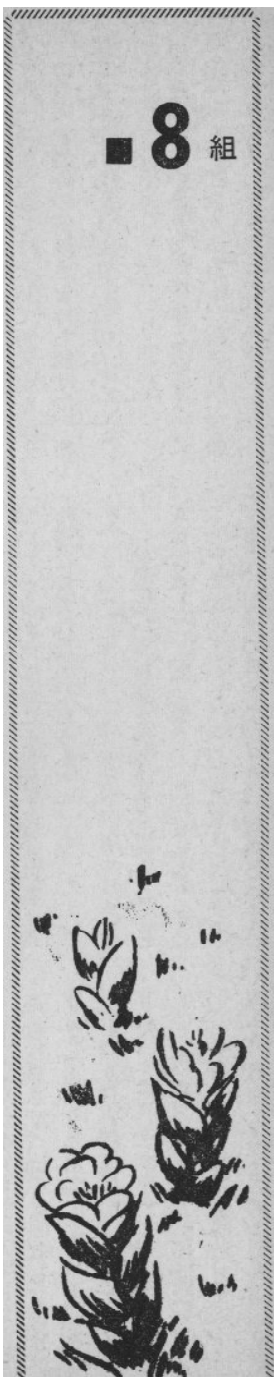
× ×

「よく先生に言われることだけ、現在の
在校生、特に一年生は、入学する時いろい
ろと目標を立てた。その時に、先生から過去
の二、三年生のことをよく聞かされたはずだ
このようなことでは、今までのようなこと
をくり返しているにちがいない。その点をよく

考えて、もつともつと自重してもらいたい」

× ×

「一高というと県下には、非常に聞えが
いい。しかしその中に学んでいる私たちは、そ
んなに立派な人達ばかりだろうか。学校への
登下校時に先生に会つてもあいさつをしない
人があまりにも多いではないか。また上ばき
下ばきを兼用している人もいないだろうか



こうして見ると私達の学校は本当に県下の右名校なのだろうか。私達一高生は、この「一高」という学校を本当に其の有名校にするために努力しようではないか。」

※

『一高』いかにも伝統と風格を備えているこの名に誇りを持っている人が、一高という名に傷をつけるとは残念だ。もし持っていたならば、自分の校舎を、むやみに壊しはしないだろう。教室や廊下には、いたるところに穴があき、ガラスなどは割られている。これは明らかに誰かが手を加えたものにちがいない。人は、よく「一高は伝統がある」という私もそう思う。しかし今の一高に残されているものは、悪い伝統が大部分だろう。私は伝統なんかどつちでもいいと思う。必要なのは現在なのだ。入学当時、感想文の中で上級生を批判した人が多かったらうと思う。私達はもうすぐ上級生になる。そして新入生を迎える。あの入学当時の新鮮さを持ち続けて、新入生に批判されない上級生になりたい。」

※

「私達は学生のあり方の手本となるように他高生からも、社会人からも、愛され、信頼されるよう努力しようではないか。」

に最高のものだ、より活発にしよう」

※

「この頃一高生の評判はあまり良くないようだ。良識を外れた行ないをする生徒がいるからだ。；同生はどうあるべきか、なんて考えると、少し固苦しい感じがするが、これは結局、一人一人の生徒が一高生として、いや高校生としての良識をもって行動すればよいことだと思う。言うのは簡単ですが、行なうのはむずかしいかも知れません。しかし、一高へ来る生徒はそれができるのではないかと思います。では、一高生以外の生徒はだめであるなどとそんなことを言っているのではありません。まあ、できる限りの努力をしましょう。」

※

「今の一高生には夢がないと思う。一人一人見ると一日一日に生きていてまったく現実には生きている感じだ。しかし学校全体で見ると案外、他校とくらべて自由な空気の中で生活していると思う。しかし昔に比較すると一秒一秒に支配されて自分たちが行動するのではなく、時間によって支配されている感じである。もっと伸びのび行動をしたいものである。」

× ×

「『一高』この名に世間の人は過大と思われるような要求を持っている。我々もそんな要求を持ってこの学校に入ってきた。その要求は我々にとつては少し重荷かもしれない。しかし我々はこの要求に応え得るだけの能力を持っているのではないだろうか。だからこそ世間の人は我々にそのような要求を持っているのではないだろうか。もし乗り物の中で立っている老人があつたら、だれでもかわつてやりたいと思うだろう。それは人間の純粋な心だ。しかし文明が進むにしたがつて、その純粋性は失なわれていく。いやその純粋な心をカモフラージュしようとするのだ。比較的成績のよい人が集まっている一高では、その傾向が強いのではないだろうか。そのため席を譲るだけの勇気がでないのではないだろうか。我々に必要なのはこの純粋な心ではないだろうか。これこそ世間の要求に答え得る遺名ではないだろうか。」

× ×

「勉強という言葉を国語辞典で見ると「心を上げまして、習つたり、学問をしたりすること」となっている。「心を励まして」という事は、何かの目的に向けて、勉強という手

× ×

「一高は自由をモットーとしている。それはよいことである。しかし、自由、自由といつてそれを悪用してはならないと思う。服装をみだつたりする。これは皆その表われだと思ふ。しかし一高という団体の一員である以上、そういうことをする前に考え、自制というようなものが必要だと思う。」

※

「一高というと、県下の優良校、優秀な生徒の集り、と一般には思われているようだ。私は、そのように考えている方に、こう聞きたい。『優良校とは、優秀な生徒とは、一体何を指しているのか。もし、勉強のみよくできる生徒を優秀な生徒といい、その生徒の集まる学校を優良校というならば、何と、意味薄弱なことであろうか。』私の考えるところによると、一般には、無意識的に、ある程度一般常識化して、勉強のよくできる生徒のみが優秀な生徒であることと思われているようだ。しかし、優良校、優秀な生徒について、一般の人々が、じっくりとその意味を考えたならば、このような軽卒なことは言わないであらう。そして、優良校、優秀な生徒とは、少なくとも、一般社会にとって害を及ぼさず

段でそれに近づくために自分の意志で励ます事である。だから、目的がなかったならば、又自分の意志でなかったならば、そのしている事は勉強と言えない。では何か。私個人で考えると、それは、ネズミを採らない猫か、鳴かないウグイス位いの存在と等しい。その物としての機能を持たない、くだらないものだ。」

× ×

「一高生はもっと大きな気持ちを持って、目先のことばかり考えず、より広い視野を見、また強い根性を持たなければだめだと私は思う。具体的な例を上げて見ると、クラブ活動の面に出て来ると思う。青い顔をし、ガリガリ勉強し目先のことを考えている人が、「自由」という解釈を誤つたり、あげくのはてはくだらん服装をしたり、タバコをのんだりするのである。私の場合、多くの人に接し、その人の良さや、悩みを吸収し、自分の考えがよりしつかりした者になり、かつその悩みを友と語り合い解決していくような高校生になりたいと思います。」

× ×

「一高のクラブ活動は私を失望させたものの一つだった。クラブこそ人間形成をするの

ときとしては、利となり得る学校、生徒であると考えつくであらう。たしかにその通りである。たとえその一般社会が衆愚政治をもつ社会であつたとしても、今迄述べたことより現在の「一高生にこう言いたい。『常に自己を磨くべく努力せよ。』『磨く』とは、実行をともなつて、はじめてその意味を発揮するであらう。」

※

「現在の「一高生はどんな考えで学園生活をしているのか。それは大学受験のための予備校としているのか。ぼくにはよくわからないしかし言同はそんな気分が生徒自身の間で、口ずさまれている。それから、なごやかな笑いが少ない。生徒総会の態度ではつきりと示されたのではないか。生徒の非協力的な態度ヤジのおうしゅう、ざわざわとおちつきのないことでは、一高はよくならないと思いますもう少し笑いのたえない生徒自身の親しみのある学園生活を希望したいものです。」

※

「我々は桜咲き乱れるあの四月本校の門をくぐつた。私のむねにはあの時の感じは今でもありありと残されている。あのときの堅い決意は、はたして今どれくらい、なされてい

るか、そう思うと、なんともいえない気持ちである。さて我々は、現在乱れがちな一高の規律などをどのように考えなければならぬでしょうか。私はそれは、一人が、自分個人という存在だけでなく、自分達には、一高というもっと大事な存在がありはしないかと考える事が大事ではないかと思う。ようするに、我々は、奥山でかすみを食べて生活しているのではないのだ。一高という、一つのスペースの中に、生活しているのだ。であるからして、一人がってな行動は、されないのだ。まして、一高は、県民のみなさんからも、より注意されて見られているのではないだろうかようするに、我々には、多くの人々の期待があるのだ。よってもっと各個人個人が、自覚すべきではないか、と私は考えずにはいられない。」

※

「今、一高生は和の精神に欠けている。なぜなら、先回の生徒総会は二度まで流会になりかけた。それも多数のエゴイストの為に、彼等は会場で悠々と勉強していた。和の精神のない所に学園は存在しない。なぜなら学園の主体は生徒であり、生徒の分裂は学園の崩壊である。しかるに学周が存在するなら虚の

学園である。一高生から和の精神が欠けているのは、すなわち一高生徒会の崩壊への邁進であり総ては一高の無である。今一高生徒会はこの危機に直面している。我々一高生はこの危機を脱却すべく一致協力すべきである」

※

「現在の一高生における最大の欠陥は「我は一高生なり」という其の一高生意識の不足にあると思う。それが大学入試、校内外活動の不足を招く。では真の一高生意識とは何かそれは、我こそ天下の一高生であると秀才面をし、思いあがることでも、一高という山梨県下での名門の名に満足することでもない、それは一高生としての誇りを持って自分も切磋琢磨して進歩向上することである。何よりも個々が一高生としての強い自覚を持つことである。その個々の自覚が集大成して一高を動かす。その時一高が進歩し、現在の停滞状態から免れるのである。」

※

「先日私達のE・Pで「一高から泥棒をなくそう」という意見が出された。話し合った結果、それが起る原因として次の二つが出された。第一として一高全体が受験モードに充ちていてつまらない。自分はそんな勉強は嫌

ないだろうか。こんなふうに私達の一高を私達の手で楽しいものにする事ができるのだ。」

※

「現代の世の中の多くの人は、余りにも自分の「心を生かす」ことを忘れ過ぎてはいないだろうか。また、そうすることを怠ってはいないだろうか。混濁、煩雑さが人間意識を埋没していく現実を見るにつけても、こう私は問わないではいられない。世の多くの人は、自分達の事は棚にあげて、その原因と責任を社会に押しつける。しかし、それでは無意味である。努力がないところには進歩はない。私達の住む世界が醜い面が多いからと言って、私達は現実を目を瞑ってはならない現実の社会が、人間の純粋さを失なわせることが多いからこそ、より私心を生かす「ことが大切なのである。自分の心を貴くすることは、一朝一夕では出来ないであろう。けれども、それは現在の努力によつてのみ可能出来るのである。人間の心は、ほんのわずかのことで美しくもなり、醜くもなるのである。純な心の持主に巡り合うことは、この世で一番の慰みであるように思います。こうしたことから、私達は、一人一人がまず己れを知り

自分の心を高めていくことが大切である。学生は、学問という特権を与えられている。しかし、それだからといって「人の遠山を踏み外しても良いことにはならない。「一高生だからこうあるべきだ」と論ずるのも無謀であり愚論であると思う。青年は、純な理想をもつて、自由の天地に其の意味での人間形成を目指すのが、ほんとうではないだろうか。」

※

「僕たちがこの高校時代三年間に最も一生けんめいしなければならぬことは、何と言つても確実な勉強をすることであると思う。しかし、これとともに一高生として守らなければならないこと、しなければならぬこと、きちんとしなければならぬと思う。以上のように、えらそうなことを申し上げましたが、最初からこんな気持ちになつていたわけではなかった。僕は入学したころは勉強さえてきれば行動など少しはおろそかになつてもよい、という気持ちが強かった。そのために、自分がいやだと考えた授業や集会などをさぼつたことが数回あつた。しかし、その結果というものはほとんどがおもしろくなかつた。そして、このために悩んだ。こんなことを思っている日が何日も続くと、学校へ行つてい

いだし、物凄く勉強しているものにはついていけない。故にそのうつぶんをはらすために校内において、物を盗んだり、昼間から喫茶店へ行ったりする。第二として、もともと素行が悪くて、盗むことを自分の心にはつきり写させないで盗む。第二の方は根本から直すとして、問題は第一にある。このテーマを提案したM君もおそらく第一の後半部を強調したかつたに違いない。ここで第一について考えてみよう。結論は結局こういう者は意志が弱い。俗に言う根性がないということにはかならない。ある生徒は予備校化したのは学校が悪いという。しかし私はその他にも何かがあるのではないかと思う。というのは私達自身が予備校化モードをつくっているということだ。

結局私達一高生がこれから歩む道は、自分達が積極的にクラブ活動などに参加したり、いろいろなことについてクラス全体が話し合つてみる。そして勉強すること自体を楽しむにすることだ。そして学習面ばかりでなく、すべてのことについて県下の一高になることだ。そうすればこそこうした受験モードからも解放されるし、第一にみられるようなこともずつと少なくなり、やがてはなくなるので

ることが、ただ機械的なことだけに思えて少しもおもしろくなかつた。僕は一学期の終るところからこれにきづいた。そして、その究極としてたどりついたことは、何といつても最初に述べたとおり、守らなければならないことはしっかり守り、しなければならぬことはあくまでするということであると思う」

※

「僕は『一高生はこうあるべきだ』とはいえないが、こうあつてほしいと思う事はたくさんある。ぼくらの周囲の人々はとくに僕らに期待しているそうだが、僕にはその期待がどのようなものであるかよくわからない。しかし現在の状態ではどうもそれにこたえられそうもないように思える。なるべくその期待にこたえるべく努力したい。又一高は特に理屈よく、頭でかちのようだが、行動的な人間になりたい。又体も鍛え勉強ももっとやつてほしい。」

※

「入学する前は一高生に対して強烈なあこがれと尊敬をもっていた。しかしいざあこがれの一高生になつてみると、世間でみるほどにすばらしい人々ばかりだとは思われなくなつた。登校するのに帽子はかぶらない。つっ

かけでくるなど、ほかの学校で見られない光景が見られる。一高生は世間でみている「其の一高生」になってもいい。」

×

×

一高の今の姿が、真の一高の姿であるといえようか、ほとんどの諸君も、この事を考えているであろうが、僕に言わせれば、今日の一高はある危機に陥りつつあるということだ。学業の面については言うまでもない。一高生は、一年の後半からその姿を失なうと言われるが、それはある物が作用しているのだと思う。そのある物とは、諸君達のうぬぼれと学校の伝統ではないだろうか？ たしかに

一高は県下随一の学校だ。しかし一歩別の世

界をのぞいて見ると、一高ぐらいの学校は日本にも数百校もあろう。過去の歴史が作り上げた伝統のもので、安楽椅子に座っていられようか？ ある新設校では、整った設備の中で、ある目的を持って向上している。しかるに一高は、下り勾配になっているのである。

つまり二次函数に於いてその最大である頂点は数年前の過去になってしまった。これからその向きを変え、三次函数として、無限に伸びてほしいものである。

りみない。こんな態度を一刻も早くなおしたい。高校生らしい自覚を持ってもらいたいものである。とくに一高生はこうあるべきではないか？」

×

×

「自分は一高生ではない」という立場で書いてみる。次の会話は、自分の耳で聞いた物である。①「あいつは、バカだなあ、必死になつて紙を拾つていらあ／　オレが又紙をまきや同じだ／　ハツハツハ」②「体育の時間なんか、疲れちゃあ損だ。アホラシイ。」③「明日は生徒総会か。休日ダナ。」④「オレ達二人で、後から押せば、列がくずれるからオメエ、カレー三個買つてこう／」⑤「オイこの板割れるかなあ？　やつてみる。タアーあつ、割れた／割れた。バンザイ／」⑥「おまけに最後の名文句「校長は男生徒が変な氣を起こさん様、選んで女子を採つたな。」以上の様な非常に興味がある言葉／　しかし、一高生は、もつと良い生徒のはずである。人生とは、良き物に向かった方が、自他共に喜ばしい事ではないだろうか？」

×

×

「この問題で特に一高生はこうでなければならぬ」ということはないと思う。もしある

「近頃高等学校の予備校化という事がさかんに言われている。言動も進学校である以上、その傾向が多分にある。高校生活がこんな状態ではないはずがない。しかしなんといつても、我々の目標は大学に入る事である。そこで問題になるのは、いかにその予備校化を緩和するかである。今一高には話し合いの場というものがない。今一高には話し合いの場というものがたいへん少ないように思う。もつと皆で考え話し合う機会を多くもつ事が予備校化緩和に必要だろう。E・Aの時などに活に活用し、いろいろな問題について楽しく話し合いたいものだ。」

「二高生の第一印象として人間がこせこせしている。いつも時間と勉強に追いまわされ授業終了のチャイムと同時に下駄箱へ、停留所へと殺倒する。これで高校生活が有意義に過せるだろうか。誰もが「大学合格」の四字を目指し、六で十分であるものを、十にも十二にもして三年間を勉強一筋に生きている様だ。最後の人間望成の場である高校生活を楽しく送る事ができる様な学校、生徒でありたいものだ。」

✕

「二高校はとかく登校や下校のさいに、先

とするならば、それほどの高校生にも通じる
ことではないでしょうか？ このごろの高校
生は「あいさつひとつ知らない」といわれる
が、これはMissのようにいわれるか考えて
みよう。まず一般的に見ると、礼儀作法がま
るでなっていないということである。今の大
人の様にやる事は無理かもしれない。そ
れは昔に軍人たちの為にその様にされたから
しかしそれは無理としても、それになるべく
近くなるような礼儀作法をすべきではないか
次に権利だけを主張し、己れに与えられた義
務を果たさなさいということではないか。義務
を果たしてのみ、権利があるのではないか。
自分の益になる事だけをし、自分のためにな
らないことはしない。それではだめなのであ
る。」

×

×

「校友会などの活動をしていませんから視野が狭いのですが、道徳的にみて一高生も一般の人々と大差はないと思います。ただ個人的には違います。霜の降りた朝登校しますと二、三人の生徒がオートバイからガソリンを抜き取り、燃え上がる炎を笑って見ていました。たとえ寒くても自分の物であつても校内で燃やす事が許されるのでしょうか。このよう

生に對して、あいさつをしないといわれるが一人一人にはしようという気持ちはあるのだからなとなくしにくいというのであろう。自分が良いと思ったことは、恥しがらずに積極的にすべきである。そういう雰囲気をかもしだそうではないか。」

×

×

「高は予備校化している。皆はそれを批判している。これを僕は不思議に感ずる。なぜなら、中学の時僕は高校へ入るためにいっしょうけんめい勉強してきたと思う。ましてや僕達の高校は普通高校だ。工業高校や商業高校とはおのずとちがっている。中学の時の緊張かももう三年間続くのだ。上級学校があるかぎり、これは仕方がないことだ。マゴマゴしている和其他の高校に負けてしまうだろう。だからボク達は受験のためにいっしょうけんめい勉強することだ。ゆつくり落ち着くのは大学に入ってからにしようではないか。」

×

×

「特に二高生というわけではないが『今の学生はあいさつひとつ知らない』といわれる校外で先生に会ってもそれ知らぬ顔、権利だけを主張し、義務をはたさない。それはなぜか自分の行動に責任をとらず、自分の行動を省

な常識はすでに知っているはずで、これに対し、松原湖へ痛む足で歩いている時に雨が降り出しました。通りかかった上級生が雨具を着るようにと親切に声掛けてくださいました。このような良識が持てたらと思います。

に高い
ます。」

「高は予備校化していると言われ、その結果人間性がなくなり、冷たい人間が多くなり不良化の原因にもなっている。これを解決するには予備校化をなおし、自由な学園にすればよいが今の社会ではできない事である。だからこのような生活の中から何か自分の気持をいやし生活にうるおいを持たせる物を見つける必要がある。たとえば良い友を得、共に考え遊び悩み事も解決していったり、クラブに入り同じ事を好き者同士が一つの事に集中する事も楽しい高校生活が送れる。つまりどんな悪い環境の中でも強い意志友だちとの団結によりそれらを解決出来るのである。だから、からの中に閉じこもり一人で悩んでいる事はつまらない事である。ぼくたちの前には輝かしい未来がある。皆で正しい道をまっすぐ進もう。」

× ×
二年生になって幾回となくテストを受けたが試験を始めて、むずかしい問題になるとそれを少しやつては次のをしたり、やたらあせつてしまい結局両方とも良くなかったということがたびたびあった。そこで「決断力」を強め何事も能率的にやることが大切なことであると思う。これは一高生だけでなく、誰でもそうだと思う。「アブハチ捕らず」にはなりたくないものである。」

× ×
「我々学生として行なわなくてはならないこと、直さなければならぬことは沢山あるが、やはり一高生だなあ、といわれるようにするには、一高という名に酔っているだけでなく、自分自身を直視反省していかなければならないのではないか。たとえば自分はこんなことぐらいと思う安易な気持でいると、他校生に追い抜かれ取り返しつかないことになるのではないか。一高生という誇りを持つことも大切であるが、もつと朗らかに大きな気持をもって胸を張って学生街道を進むべきである。」

× ×
「一高生は一口に言って山梨県の社会の

あらゆる面から注視されている」についても過言ではない。なぜか。なぜだろうか。一般の高校生と同様に、長短所はある。本校は数年前から短所を直しつつある。しかし、その効果は芽ばえているだろうか。いつ芽ばえるのか。長所はこれといってない。目だたない行為であるかもしれない。一高生が、短所を長所にする日は過去の中であり、また想像の中の世界だ。過去にあまじ、想像にふける一高生だ。だから現在の実態に目をやるべきだ。そしてその一高生らしくないものに驚ろくだろう。だから現在の単なる行為に対して一般の高校生以上の何かを見いだすべきである。そこに其の一高生の高校生活が開かれるだろう。」

× ×
「よく一高生は、＼お高くてつき合いにくい」などと、耳が痛い事をいわれる。確かに一高生（おいどんも含む）は、＼甲府一高＼という四字におぼれている。大事な事はおぼれる事より誇りを持つ事なのだ。誇りといっても教室にあるゴミではなくて、英語で言えばプライドです。プライドを持って各自が、責任のある行動をとれば、誰も一高生について悪い事を言う人はいなくなるのではないか」

てはならないと思う。

× ×
「一高生はどうあるべきか、これを考えると、学習本位でまじめあるいは自己本位でなくおちついていて上品で……。」

× ×
もつともそれに近い人もあるが、其の一高生はこのようなことにしづられず、自由に自分の考え、意志、において、それを行動に現せる人である。残念ながら自分自身現在このような状態ではおらないことを、痛切に感じられるのである。

× ×
「私は一高に対していささかがつかりした気持ちを持っている。一高生である本人がこんなことをいうのはおかしいだろうが一年入学当時にもどつて一高についての感想をのべてみようと思う。

私が一高のおごそかにも感じられる門をくぐり何よりも一番印象づけられたのは、軽蔑に値するような先輩があまりにも多かったことである。そして日がたつにつれて一高に対する批判が新聞にまでできるようになった。同じ一高生である新入生にまで批判されるのだから当然のことだろう。私はこの文の題であ

× ×
「一高生はあまりに自己を中心にし、勉強という言語に縛られていすぎる感じがする。話題はテストの点のことであり勉強のことである。一番ひどいのはテストに近い生徒総会の時など、人の意見など聞きもしないで本を読んでいる。それで少し長びくと協力もしていないで議長は何をしているなどと言っている。一高生はたのしい話題を、自己中心でなく、自分達の学校全体を考えて、総会その他などに協力したらよいと思う。」

× ×
「一高という学校には人種が多すぎる」近頃つくづく私は思う。物に対する考え方の多い事は決して悪いことではない。しかし一高生のそれはあまりにも自分勝手すぎる。他を評しては、大評論家の如くを言う。しかし自分はどうかであるのか。他人の酷評するその人ほ、そのまま自身を非難しているに過ぎぬと私は感ずる。実に利己的である。議論をする。決して人には妥協しないのが一高生の常である。これはある面から見れば最も尊重すべきものであるかもしれない。しかし、私はこの妥協性のなさが現代をより複雑にしていると思うのである。自分こそ最高の者と思つ

る「一高生はどうあるべきか」ということについて考えてみた。男子校にしてしまえという考えが浮かんだ。しかしこれは私自身もあり賛成でないし、皆に笑われて終るのがセキの山だろうと思ひまた私の胸におさめた。

予備校化を防げとかいろいろ考えが浮かんできたが、私は最も重要である一高生自身の自覚ということ忘れていた。それを思いだした時、私は思わず笑ってしまった。こんな簡単なことがなかなか頭に浮かんでこなかった自分の愚かさ。一高生の自覚、これこそ今の世間の冷たい批判を打ち破る唯一の対策であると思う。一高生は先輩を見、自分を反省する。そして一年生だけでもいい、今年の新入生に軽蔑されるような生徒を一人もいなくなるようにしよう。一高という名前におぼれないような強い意志を持った人間に皆がならなければいけないと思う。個人からなる集団である。一人一人がより一層自分を高めようと努力するなら、きっとそこには新しい一高が誕生するだろう。」

× ×
「一高は予備校です。信念のない不安な学校です。そこに住む僕らも不安な毎日を通します。不安からのがれようと勉強します。」

× ×
「今年一部の一高生が世間から批判を受けた。それについて二日間は最近質の低下がめだつて来ている」などと校内においても騒がれた。しかし騒いだ人達も一高生だ。批判を受けた人だけが一高生ではない。それが「一高云」と一高をかかげたのは、不可解なことだ。騒いだ彼らは「自分も質の低下した一人だ。」と認めているのだろうか。一高自体が墮落したのではなく、あくまでも一部の生徒であつたはずだ。彼らの行動に起こしたことも、何か上すべりな形式的なものであつたと思えない。

騒いだ彼らを批判するつもりはない。ただ彼らの行動は一高生の考え方の重ね写真のように思えるのだ。一応は学校を良くしようと行動をおこしたように見えても形式上のそれにしかない。

一高生は、そんな偽善的精神の人間であつ

勉強で消えなかつたら、やっぱり勉強です。勉強さえすれば——ようやく一人追い抜きました。ときおりみだらなことが頭にうかびます。生白いものが僕を誘惑するから——勉強が中断されて、また一人女の子が犯されました。僕は痴漢です。でもそのあとは不安が増すばかり、自己嫌悪に陥ることもあります」

×

「二高は良い学校だ、校舎はボロいけど、そこに学んでいる生徒は県下の優秀な者が集まっている。そして大学をめざして勉強している。皆連体感を持ち合せない。利己主義が徹底している生徒総会なんか時間をもったいないから本を読む。持っていなければまわりと話しをする。たまにやるからいいリクリエーションになる。採決があると初めのうちは手を上げるが、だんだんめんどくさくなつてやめてしまう。ただ休憩動議は別だ。いったん休憩になると定足数の不足で再会不能に陥る。元々総会なんて一高生には関係ない事だそれでも時々一高は予備校化しているという寝言を聞く。

一高バンザイ／ 利己主義バンザイ／
寝言バンザイ／

X

X

「以前に比べ遅刻者は相当減ってきたが、しかしまだ予鈴に間に合わない人が、必ずといつてよいほどいる。この人達の理由を聞く」と寝坊が圧倒的に多く、次にバスや電車の遅れである。バスや電車のほうは仕方ないにしても、寝坊で遅れるということは考えもんです。学生時代に遅刻の癖つけると、社会へ出た時たいへんマイナスになるでしょう。一高生である以上規則は規則としてしっかり守るべきである」

X X

「二高生はどうあるべきかと言っても意味が広いので僕は勉強面から考えたい。まず普通高校にありがちな予備校の問題に関して考えると、僕は高校へ入学できたら少しほのんびりできるだろうと思つて入学してきたが、そんなものではなくかえつて勉強勉強の雰囲気はどこからともなく流れているようだが、自分にも責任がないわけでもないが、学校全体としても考える余地はあるはずだ。例えば勉強の進み方が速くて、少し勉強をなまけるとわからなくなり、またおもしろくなくなるので、それ以外の面に足を踏み込む場合が多いようだ。生活面からしても、遅刻をするとか服装が悪いことはその様な場合から起こるの

「二高生は如何にあるべきか」を読んで

七 草

書いてくれと云われる程困る事はない。この年になって物事に対する定見がない。「こうだ」と思ふと逆の方が又正しいように思へるから困る。一年間芳の先生として全く定見のない事つて申し訳ない。昨日と今日では矛盾した事を云つた事もしばし。諸君は賢明だから適当に受取つてくれていると思うが、今にして冷汗の思いだ。「二高生いかにあるべきか」を読んで諸君の其撃の悩みや希望を知つて多くの教へられるところがあつた。「斯くありたい」と云う希望を述べてみたい。この希望も唯個人の窓を通しての主観的のものでなく、不偏的のものでありたい。これにはまず現代を解剖する事から初めよう。現代を形而上学の狙上にのせる事です。この世界の総ての現象は単独では存在しない。光と影、作用は反作用を伴い、(一)の電子には (十) の電子が存在する。又長所は欠所につらなり勝利は敗北と背合せであります。物質文明の進歩は人間性の退歩の上に成り立つてい

に振れる振り子を中庸の位置に戻さねばなりません。それが諸君の使命です。

「一高生いかにあるべきか」は此処に出発点を置かねはなりません。——朝早く起きて小さな庭を耕し花の種子を播きなさい。ときには隣の孤独のお婆さんの話し相手になつてやりなさい。廊下のごみを拾う、牛乳ビンの破片を処理しなさい。「暖い人社会の復活」の萌芽を今育てなければいけません。愛情の欠けた情緒のない電子計算機のような秀才を想像して下さい。こんな青年に好意をもつ娘があつたら人類も終末に近いでしょう。混んだ汽車の中で老婆に席を譲つた青年に人間の将来を託せるような気がしてなりません。一高生活の成果は所謂よい大学への入学のみではありません。この三年間を感激と誇りをもつて追慕し得るか否かにあります。青年の情熱を火花のように散らさねばなりません。

諸君は「大正生れのロマンチスト」と笑うならば、スミルドンやマンモスの牙の悲劇を繰り返すだけです。諸君は幸福な子孫のために、尊敬さるべき祖とならねばなりません。間違つた方向に人類を導いてはな

ます。日々の交通事故の増加を御覧なさい煙草屋の娘の愛嬌笑いもう長い間見られなくなりました。娘は自動販売機のようにです。長い葬式の列も悲しみの声も聞えません。霊柩車が五十キロメートルで走り、ガスパナーは喰りながら、二千度の温度は一瞬にして肉体を蒸発させます。動き出した社会機構の歯車の一つになつた個人は遅れる事も休む事も出来ず、死か老齢で取捨てられる迄働きます。人命は芥の如しで魂の自由は嬉びや悲しみすらも現代はゆるされません。原子力の生み出した巨大な都市に無表情の顔がうごめいています。これが欧米化した日本の現状です。西洋の哲学者は救いを東洋に求めました。東洋は自からの教を捨てました。ネール首相は言っています。「工業化は進めぬばならない。しかし練筆を忘れる事は出来ない」と、彼は物質文明は人間性の犠牲の上にのみ栄へる事を知っているのです。人間らしさを取り戻さねばなりません。精神と物質の間

りません。一高を予備校と化すか否かも諸君の自由で、将来は諸君のものであり、誤ちは諸君が負わねばなりません。——夜数学や英語の勉強を止めて静かに思索する事です。星や月や風や雨も、生や死や、幸福や生存の意義について語ってくださいます。昼休みに地名の一つを暗記する代わりに友と語りなさい。人生の一片の味が判つて来ます又母校の向上の為に努力しない人が社会に貢献する筈がありません。今社会に奉仕することは学ぶ事です。世間や大人は無責任です。批評や褒配に迷わされてはなりません。二月に入るとすぐ水仙の芽が凍土を割つて出る。クロッカスの小さな太陽は霜柱の陰に輝き初めます。一年の輪廻が初まる、この年毎の繰返しの中に少しつつの変化が藏されている。一つの大きな流れ(神の意志が)に向つています。人類も又この流れに従わねばならないのでしょうか。人間を破滅の淵に追い濁す巨人の創造に狂奔するも神の普蓋でし、ようか。この意志に適うのは蟪蛄の斧でしょうが、私達はしなければなりません。

ではないかひきそれゆえ一高生は自覚して行動すべきだ。また、一高生は県下の優秀な生徒が集まり、県下から期待されているので、つまらない批判を受けないように、なお一層努力しなければならないと思う。

× ×

「一高、県下にその名をはせる名門、私は高等学校「一高」は勉強以外の何もするところではないと思う。(もちろん私は其の一高生としてはずかしいわけではない。しかし、自分への叱咤のつもりでこの文を綴っていくことにする)もちろん勉強といっても、ただ、学科のみの意ではない。学科のみの勉強なら、他でもいくらでも出来る。しかし、私が特に強調したいのは「勉強以外の勉強」と呼ばれているものである。高等学校は勉強以外の勉強の出来る最後の場である。そして最高のものである。それ以後にはちよつと不可能ではないかと思う。にもかかわらず一高生は、宝石「勉強以外の勉強」を捨てているのではないか。もったいない限りである。一年のうちから大学を目ざして学科の勉強のみをする。本当にもったいないことで、私はその人に同情する。話し合いを友とやつたり、クラブ活動をしたりすれば確かに「学科の勉強」時間は減る。しかし、決して勉強時間は減っていないのである。

人生は長い、一生の計画を立てて歩んでいる人は少ない。しかし、無意識のうちに、一生の計画を立てている。さもなくば生きていくことは出来ない。その意味で、今「学科の勉強」のみをする事は、私はどうしても肯定できない。私の「計画」によると高等学校時代には確かに「学科」以外の勉強をすることほプラスである。大学入試に失敗をしたとしても、何も学校へ行くばかりが能ではない。長い目で見た場合にはつきりと言える。現代の社会は、学校を出てこなければその人間は使いものにならぬが如く錯覚をしている。大きな誤りである。大学へ入るため利己的に勉強ばかりしているような人間が社会へ出て、何が出来るか。社会へ出てやはりその人間は、自分のためのみの生活をするであろう。そして社会はより複雑化していく。妥協性のない社会が形作られていく。しかし、決して社会は進歩していない。複雑化し進歩ではないのである。

高校生は今、勉強のみをすれば良いが、仮に今、その人間が死んでしまったとしたら、その人間は世の中に何をしたらであらうか。たとえ成績は良くなくとも、散らかっているゴミをかたついたり、やさしいことばを人にかけてやる、その人間の方がはるかに立派であると思う。それには私のいう「勉強以外の勉強」である。

扱)をする事が最も大切である。人間の正し、いあり方を真剣に考え話し合い、少しでも実行していこうと努力する人間、そんな人間になりたい。そして皆になつてもらいたいと願うものである。危険はともなう。しかし多くの人の力がなくはこの歪んだ社会を是正することは出来ない。大学卒の人間でなければ通用しない社会は恐れるに足らぬ」

× ×

後記

どうあるべきか——考えるべきである。考えない奴は人間じゃないといって、こんなにも大げさな題を「一高のほこりだらけの物置きの中から捜してきた。メッタまとまって行動した事のない者どもが、かくもつかみどころのない怪物に挑戦して、何とかカッコつけようとしてみた。結果がどうであれ、この種の文集にありがちなマンネリズムを打ち破ろうと。又クラスの特徴を出そうとした努力ははめられこそすれ、非難されることはあるまい。もちろんこん程度の文集の趣旨からはずれていることは認める。しかし、ひとつの足跡として悩める後輩に何とか役に立つだろうと思っている。

本音をはくと、限られた日数、スペースと硬化してきた頭脳のためか大分食いこしてしまった。

■ 9 組

ぼくは時折、自分をたとえば小海線の寒駅の駅長だと考える。夏の終りの汽車が、登山客や避暑客をいっぱい乗せて去ってしまつと、八ヶ岳の空高く広がる朝雲が何か目がしらを熱くさせる。もうこしの葉ずれの音が、取り残された孤独をひしひしと感じさせるのである。駅長は、この駅で、青春を送り、老年を迎えたのである。妻と子供とこれからは冬こもりしてさみしさに耐えなければならぬ。出迎え、見送り、何回それをくり返したことだろう。ただ思い出が雪にこもつた駅長の心にあたためてくれる。

——ところが、ぼくはやはり一高の教師である。一年九組の担任である。みんな元気にあふれた、

若さいっぱいの生徒たちがこれから山登りするのだと命がけの努力をしている。疲れたらしい顔をするのはまだ早い。山は高いのである。山の上には澄んだ空がある。白い雲が浮いて招いているではないか。水はあるか、食糧は? 装備は完全か。計画はどうだろう。ぼくは世話役、相談役であ



る。——だからぼくは寒駅の駅長であると考え。間違つて登りはじめた山道で迷わせてはならないから、適切な案内も必要だろう。青春の若い生命は燃えなければいけない。だが燃えた炎を自分でセイブする理性も必要だろう。野放図な山行きは必ずや失敗を招き、とり返しのつかないこと

ある日突然に

宮沢雄二

風が突然に僕を

川辺に押しこめた

川は突然雲を呼びおこした

雲は僕を見上げ

黙って雨を呼んだ

雨は突然僕をずぶぬれにした

雨は突然僕を我に返させた

僕は家に帰った

家は僕が帰っても

黙っていた

——ぼくはやはり寒駅の駅長である。そして若者たちが歌声高らかに行くのを見送るのである。汽車が来る。汽車は去る。ぼくは駅長である。

クラスのこと



もう一年たってしまった。いろいろな事があった。僕等は真剣に生きてきた。この一年は僕等の成長への大きな力であった。思い出はつきない。皆でふり返つてみよう。僕等の友情をいつまでも保つために。僕等の栄光への翼をはばたき続かせるために……………。

全く純粹の男子ばかりそろいもそろって五十四名。クラスの中は笑い声が絶えない。ほこりが絶えない。落書がたえない。しかし花びんの花は絶えどうし。いかなる面でも男子クラスの要素を十分に保持している。休み時間となれば、となりが職員室であるのにもかかわらず、大声でさわいだり、あべれたりする。ときたま先生の「怒り込み」があることもある。そんな時一時はしんみようにしているがすぐまたきれいさっぱりと忘れ去ってしまうのである。しかし三校時終了後の休み時間は例外である。なぜならそれは給油時間？ であるからだ。

こんなクラスであるが、みんなの心は一つにまとまっている。九組精神が結びつけているのだ。これからクラスが分かれてしまってもこの精神はきつと僕達を結びつけて行くだろう。

九組

辰巳憲司

僕達九組は、意外と面白い奴が多い。面白いと言っても、ピンからキリまであつてとてもここでご披露することはできない。たとえば、授業中あられもない事を言い出す。どんな事かと言うとそれは、人権侵害になるのでやめておきましょう。野郎ばかりなので、どんな事を言っても遠慮するような事はなくて良い。だから男子クラス、九クラスは面白い良いクラスだ。

無理をした話

小 牧 一 民

一年九組は男子クラス。四月のクラス発表のときはただ一筋に男女クラスを願っていたところが、神は野郎クラスへ納めやがった。それからというもの、窓側に集まり、女子の話をしたり、そばを通る女子をひやかしたりして、我々自身を慰めていた。しかし今ではもう皆観念した。むしろ「女なんか」という気持ちにさえなっている。（少し無理を上

わが九組

清 水 喜美男

国語科職員室のすぐ隣りに僕達の学ぶ九組がある。他の一年各組と孤立している為何か特徴のあるクラスでもある。おまけに各種スポーツに於てズバリと強豪（っ）を並べている。その為か若さの発散が少々多く隣の先生方に注意を受けることもチョイチョイある。しかし何と言つても男子組だけにその点ほ仕方ないことである。ところが「イザ」となると持前の団結力で押し通す底力を持っている。全くたのもし。又ユーモアのあるクラスである。

わがクラスの財源

中 込 久 剛

教室のうしろに牛乳ビンが並んでいる。こ

たかな。一年九組は男子クラス。

ハッスルボーイ

古明地 秀 正

男子クラスである九組に一人のハッスル男子がいる。休み時間などになると必ず彼の回りに数人が集る。それはなぜかというと、彼がまじめな顔をして皆を笑せるからである。

また彼はまじめな一面もあり卒業してクラスの仕事に取り組み、またスポーツも得意でゲームのあるときはいつもハッスルしてチームの中心となつて働く。だから彼はクラスの人気者であり九組にかかせない人物である。

九組の横顔

代 永 光 春

男子クラスであるゆえなかなか派手なクラスを造り上げている。学年でも折紙つきである。漢字のテストがあるといつては後の黒板が白くなるまで漢字の練習やらくがきをした、牛乳びんをバケツにためることに興味をもちときには後の黒板に一列に20〜30本並べてよるこぶようなクラスである。皆が一年のうちはやりたいことをするという主義を持つ

れがわが一年九組の財源である。クラスの者一人一人の飲んだその牛乳ビンがクラス全体の物として、クラス費として取扱い始めて以来わがクラスの経済状態はひじょうに楽になった。カーテン、窓ガラス、帽子掛けなどとクラスの修理はすべてこれで費用をまかなつたのである。一本一本の牛乳ビンがわがクラス費となり、クラスを明るく住みよいものになっている。

我等一年九組

小 菅 和 仁

本館の裏に位置しているやや新しい校舎のほぼ中央にあつて国語科職員室と隣接しているクラス。これが我等の一年九組である。総勢54人の男子クラスである。皆の性質は多種多様であるが皆明るく朗らかで伸び伸びとしている。その上教室にはいつも笑声が絶えず男女クラスとは又違った雰囲気がある。それに皆誠実で信頼出来る仲間ばかりだ。この様にすばらしいクラスは何処を探してもきっと他にはないだろう。

てかのである。ただ欠点は授業中なごやかすぎるのだ。この欠点が学力低下に大きくむすびついている。しかしどこかの教授が「今の大学に入つて来る学生はなるほど専門的知識はよく知っているがあまりに底辺が狭い」とおっしゃつたそう。そこでこのようなクラスから二、三年先にダークホース的存在の人が幾人出るか楽しみであると思う。

野郎の弁当

斉 藤 宏

高校に入つて第一の楽しみは、弁当を昼食時より前に食べる事の方である。入学当時は、数人で珍らしい存在だったのが現在では逆で、三校時は当り前、早い者だと二校時に食べ始める。自分も三校時組の一人になった。

こんな事ができるのも野郎組であるからで乙女のいる組ではなかなか勇気のいる事ではなかるか。この食欲、この若さを黙認していただきたい。

九組

加 藤 秀 雄

我等クラス、全一年の最高線は進んでいな

い。しかし、その態度及び気品といい、他と較べものにならない。江戸っ子のようにチャキチャキである。全員いつでも夢を持ち、歩調をそろえ、胸をほって前進する。いつでも打切りのみを期待せず、自習と言つて騒ぎはしない。若さあふれる愉快な我等クラス。

牛乳びん

大沢良一

ぼくらのクラスでは、牛乳びんをためて売る。というならわしみたいなものがある。これは、一学期の始めに、われわれ生徒によつて提案されたことだ。教室の後に、たくさん牛乳びんが並んでいる。授業に来る先生がしばしば驚くこともあった。売つてできた金は渡辺先生の所にある。九組の金庫ともいうべきところにしまつてある。もう相当たまつてゐる。この金は、病気の友の見舞い金や、カーテンの修繕にも、その他九組のために、いろいろ使われた。そんなためか、少し減つたようにも感じられる。しかし、ぼくらのために売上金が、有益に使われてなによりだと思ふ。後を見ると片乳びんが相当たまつてゐる。売りに行く時が来たようである。

教壇と黒板

清水憲治

我がクラス的环境、それは他のクラスのものそれより良かった。そのひとつは、教壇である。この上にいるだけによつて僕らは将来への強い力をつけられた。そして他のクラスに見られないであろうような真剣さ、またいきいきとした授業がおくれた。もうひとつは、黒板である。この広い他のクラスにみられないきれいな黒板で、日々教えこまれた僕ら九組の勇猛な粒子は、いつか爆発するであろう。

この一年のクラス

古明地 勝美

チャイムがなり、かけ足で中館に向かう。「オス」、二階の教室を見ながらいう。はじめて中館に入つてからもう一年近くになるわけだが、初めは誰とも話をしなかつたのに、今では、なつかしい思い出である。授業中にユーモアを差しはさむ者もいて、時には先生にも注意を受けることもある。

六つの破壊因子

田中健二

彼らは六人の侍である。勉強は恐ろしくできる奴等である（おわかりかね？）スポーツは万能で、特技は野球の安部。水泳の古屋、石川、バスケットの田中、長距離の三浦、ユーモア育ちの素久。ざつとこんな面々である。〇〇の時間、みんなそろそろ退屈の色をみせ始め、六つの因子が活動開始―爆笑―。みんな明るいすがすがしい気持で勉強に向う。何んと素晴らしい破壊因子であろうか／＼

内藤素久

我々の因子は破壊ばかりを形成するのではない、楽しみを促進し悲しみを抑制する立派な因子でもある。一高入学当時はただ六個の物質にしか感じなかつた因子は友情を帯び、愛情さえ感じる様になつた。気軽に何でも話せる様になつた。（色々なことをネエ）友情は悲しみを零に、楽しさを6倍する、胸にグツトくる様な文句ではないか。

石川伸行

それからというもの、この六個の破壊因子の活動は目まじくなり、校内又校外へと発展を続けている。ある時は紳士のごとく、ある時は救世主のごとく、又ある時は悪魔のごとく（これが最も真実味にあふれている）行動しているのである。いたずらはする。しかし、それは決して他人にめいわくのかかるいたずらではない。自分で自分へ（いや因子が因子に）いたずらして、そしてその集合である分子の中で楽しんでいるのである。

安部道弘

電車は身延へ向つて突進する。それはあたかも因子の未来への爆進のごとくである。車内での因子は、分散していたために特別な破

学校にきて、最大の楽しみは弁当を食べる事。男子クラスのせいしか、二、三校時終了後にほとんどの者が食べはじめ。ひどい奴は、朝、学校にきたばかりでひろげる。昼は昼でホールに食べに行くのである。その他、男子クラスでなくては味わえない楽しさも、いろいろと感ずることができた。

肝心の学習方面においても、最近は良くなりつつありということである。いろいろな面でプラスになつたこの野郎組での生活。

「離れはなれになろうとも」このクラスの雰囲気は離れはなれにはなりたくないものだ

佐藤吉元

イチネンキュウクミノコト

コノクラスハ トテモオモシロイクラスダ ユカイナヤツガイッバイル コノアイダモセイブツノジカンニ「ユビバ テブクロラハメルタメニアル」トイッタヤツガイタ コノクラスハ ジュギョウチュウモコノチョウシダ ダカラ クラスニ ワライガタエナイ ボクハコノクラスヲダイスキダ コノクラスニナックコトヲウレシクオモツテイル ココニイタノデ トカク ハイイロニナリガチナ イチコウノ イチネンヲ タノシクソゴセタ コレハ ボクニトツテウレシイコトダイマ ニネンニナル タノシカッタ ミジカカッタ イチネンガオワツテ。

花のこと

内田耕三

多くのクラスは男子クラスだ。そのせいか教室はよごれ風景だそんな暗い教室の中にぽつんと白い花を誰かが持つてくることがある。しかし、その花も一日たつといたずらされ、その花がなくなつたりする。これでわかるように多くのクラスはいつもガサガサしていて落ちつきがない。だけどぼくはこのガサガサした雰囲気が好きだまたこれが男子クラスの特ちょうであり、ぼく達のクラスもその中にはいつているようだ。

流行

土星 裕

いつから始まつたか忘れたが、ふとん回しには驚いた。大なり小なりのふとんを休み時間ともなればくるくる回してまるでサーカスの皿回しに似ている。僕も最初のうちは下手で三秒が限界だったが、二学期の終盤には一分ぐらいできるようになつた。しかし今では消滅してしまつたが、又、新しい流行が、やがてはやり始めるだろう。ああかなきものに身をやつした愚かきよ。

わが野郎組

武田光仁

「野郎組」なんて言い方は、チョット人ぎき悪いかも知れないがそんなことはどうでもよい。このクラスの野郎達は、戦国時代の野武士のような芯の太い意気を持っているのである。他人に何と言わ

壊活動は起こさなかった。そのうえ驚いた事に、ある因子は「小さな親切運動」をも推進していたのである。『老人に席を譲る』（誰にも出来そうで出来ない事である）いろいろな破壊活動をして真底には『善』というものが流れているのだ。われら因子は孟子の性善説を信じてやまないものである。

三浦 治仁

旅館に着いてからの破壊因子の活動はすさまじいものであった。その半面良いことのいろいろは数えきれないほどであった（ホントカナ？）我々因子は特別に一つの室に集まることができた。それからの因子は分子になり、個々の性格を充分に出し、未来への欲望、考えなどを話し合ったり、また愉快な話しをし始めた。このようにこの因子の集まりは、時にはまじめな話しをし合う機会をも持っているのである。

古屋 哲雄

さて、とりとめのない事を綴ってきたが、原題の名付けの親としてこの辺でしまりをつけなければならぬわけである。
我々は、いつまでも破壊因子でいるつもりはない。六つの因子が結合して全世界に、いや大宇宙の発展に大きく貢献する時も、そう遠い事ではないと思う。——この瞬間、一抹の不安と不信の念が脳裏をかすめる——少なくとも我々は破壊を愛する人間で終りたくないのである。多くの人生経験を持ち、情熱的でいつも不変な建設的意見と信念を持つ人間。これが我ら微力な六つの因子の共通な理想像なのである。そしてこの理想に近づくために、お互いに競い合い更正し合ってきた。

我々がお互いに五つの因子を得たということが、この一年間の高校生活での最大の成果であり、その因子は一人一人の心の糧となり永久にその灯は燃え続けるであろうと信じている。

完

れても自分の意志は書芸心で貫ぬき通す。尊敬できる人が居ればその人のそばに行き、いろいろ指導を受ける。弁当は「腹がへつては戦はできぬ」という考えより三時間目の休み時間になると食べだすのである。食べ出すと休み時間が終わるまで休む間もなく食べつづけるのである。が、授業中は決してそのような真似はしない。授業中は特に国語の時間などではどんな質問を先生に浴びせるのである。このようにわがクラスは意志強固な野郎面々の集団である。

ク ラ ス の 顔

藤巻良平

冬の弱い日差しを求めて、北側から南側へと移ってきて大きなかたまりを作って話をしている。私が一年間、好むと好まざるを問わず、共にする顔、顔、顔、この顔を持ったみんながどうなるのだろう。現代社会の中であるものは立身出世を、あるものは一生涯平凡に、あるものは不運な一生を送るかもしれない。「寧ろ鶏口と為るとも牛後と為る無かれ」私はこのように生きてみたい。たとえそれは可能でなくても、可能になるように努力しなければ（わが漢文担任渡辺先生の影響かな）私の今から一歩一歩ふみしめていく人生について、私なりのかつてな感じを、言わせてもらいました。

三井正巳

霜だけのトタンの屋根にしずく落つ
夜寒中思わず震える我が床に
も一つかけたりたれぞうれしや



力強い第一步

塩谷 政之

今、一月余りで一年生を終える時に、この一年を顧みて一番自分の心に残っているのはやはり入学式の目のことです。桜の花が咲き乱れ、ツクシのぼうやが顔を出し、すべての生命の活動が始まろうとするそんなうらかな春の日でした。そして一高生としての自覚と日に新たな決意をひめ、高校生活への足を踏み入れた力強い第一歩でした。

入学期の回想

石原 秀昭

入学して第一に感じたことは、初めて自身で、努力で目的を果たせた喜びであった。ひとり日新ホールの屋上から、いかめしい校舎を見たり、また校庭の隅々まで響き

渡るチャイムの音など聞き、本当に満足した気持ちであった。そして、いよいよはじまる生活を想像し、何となくしつかりやろうと心に誓ったものであった。

いつまでもその感慨を忘れずに、「日に新たな気持で努力していこうと思う」

合宿の思い出

上田 憲一

合宿が終ると、くたくたに疲れる。しかし今となつては楽しい思い出になる。夜、先輩に恐い話しをされて便所に行けなかったりゲームに負けて、歌を歌わせられたり、食器洗いをさせられたりした。体操して疲れた体でそんな事をするのだから感慨も一入である。

日新ホールの上から一さわぎしてから見る甲府の夜は、ネオンが輝き美しい。そんな時疲れも一度に消え去ってしまう。

ユーモア漢文

若尾和光

詩題「春曉」（授業）
盗眠、師にもかまわず
所々、寝息をもらす
突然、ベルの音、弁当を開き
飯食いたり、残り多少
「春夜」（瞬夜）
一夜漬、一刻直千金
配問前有し望、問題有難問
書幹狙室寂寂
所詮無理 心沈沈

身 延 山

若 林 宏

先生達は研修旅行だといったが、われわれにとってはここぞとばかりに遊ぶ絶好の遊び場所であった。坊へ着くまでは皆紳士ぶっていたが着くや否や本性を表わし、フトン、お茶などを奪い合った。その夜レクリエーションが開かれ、僕もジェスチャーを楽しく過した。そこまではよかったが眠ろうとするときマクラの雨が降り、おかげで一時間まで眠れ

なかった。その翌朝から帰りまでトランプをやり続けた。その間に寺などを見学し、又討論をしたが、僕にとつての成果はトランプの手をマスターしたことだ。

車中の高校生

井上和男

身延線で甲府の高校へ行っているやつは多勢いる。彼らはみな多種多様である。彼らはまず自分の乗るべき駅に電車が入ると、サツとドアのところにくつつく。そしてまっさきに乗る。また彼らは電卓の中で、一女生徒がすわっている横の席があいている場合、めったにすわらない。なぜなら彼らははずかしいから、女生徒にとつても同じである。また彼女らはそんな時、彼らの横へカバンを置いて、自分はそのことにすわらない。すると彼らは自分がきらわれているようで気を悪くするものである。電卓の中の一高生はたいていはいつも勉強している。しかし、彼らとて人間である。時々手を休めてはチャリチャリと女学生の方へ目をやり、それからまた勉強し始めるのである。また一高生は一般に真じめておとなしい。他校の生徒がタバコを吸っていたり、さ

わいでいると、一人の場合はだまって本を見ているが、二人以上だと、彼らを批判する。しいて注意はしない。

彼らとて不満はある。せつかくおばあさんに席を譲つても、当然といった顔をされたりひどいことになる、パバア同志で席のひつとりつこをしたりする。そういうのを見ると幻滅を感じる。ヨッパライにも批判的である。こうして彼らは毎日そんなことをくり返しなから高校生活を楽しんでいるのである。僕もまた彼らの一員であることはまちがいない。

起床

道村 富美男

この冬はまったく落着かなかつた。そして現在も相変わらずである。中学の時は相当遅くまで寝ていても、ふとんもたたまない、朝飯もゆつくり食えない、などとゆう事はなかつたが、高校に入つてからは一時間近くも早く起きなければならぬのでつい無理が生じてくる。入学した当時はうれしさと新しい生活への意気込みが起床のつらさなど感ぜさせなかつた。それからばつぽつ陽気もよくなり、お早朝の気持よい日光を求める気にもなり、お

のずと起床も早かつた。しかし冬に近くなると、からつ風は吹く、霜はおりるので、どうしても寢床の威を借りなければならぬようになつてしまつた。時間に余裕をもつには少しぐらい冷たさにこたえて、がまんして早く起きなければならぬのだが、意志が弱いのだろう正直をいって自分はそうなのだ。なおしたい自分の進歩には上ばかりみつめないでこんな小さな問題をあらためることも大事かもしれない。

マト

西村憲一

この一年も終りに近づいた。先生はもう将来に目標を決めたほうが良いとおっしゃつた大学入学を志ざし、一高へ入学した人もある。ぼくは一高へはいりたいとは思わなかつた。ただ、何をしたらよいかわからずに入つてしまつた。つまり目標がないのだ。それでこの一年勉強に身が入らなかつた。将来どんな職業に従事したらよいのか、何系統の大学へ入つたらよいか考え過ぎて、寝られない夜があつた。外国で働きたいと思つたが、どんな職業を身につけたらよいかわからない。こんな職

現実

上笹 秀男

人生において、高校時代はその過渡期であり、あらゆる面の成長のために、いっしょうけんめい勉強するはずである。ところが今、「いっしょうけんめい」ということが、ハッキリとあてはまらない。いまさら振返つてみるのおかしいが、まるで中学時代の続きとしか思われない。それでも一年間やつただけのことはある。やはり自身の形成にプラスしていることは確かだから。

強行遠足

1 石川 保

一度は延期されたが予定通り実施された強行遠足だった。最も記憶に残っているのは、国界橋を通り過ぎて西の方向の今まで見たことのないようなまっかな空、それにくつきりと浮び出たような青い山が印象的だった。

野辺山で少し休み、また歩き初めた。市場の付近で足が痛くなつたが歩き続けた。市場を過ぎてからは自分との戦いだと思つた。休む

業につきたいという考えが浮かんでこない。

年上の人はぼくぐらの時、やはり将来どうしてよいのか、どうなるかわからなかつたと言う。目標を決めようと考えているうちに、勉強がつまらなくなる。勉強が軽薄な物に思えてくる。サア、早く、すばらしい職業よ、目標よ、ぼくを射止めてくれ／

俳句二題 平野和春

冬の日死に近きハエとびいる家の中秋晴れの空を舞い行くハトのむれ

俳句二題 目野原道夫

葱取りて手を吹く風のにおいけり
冬の風強行遠足の夜寒し

教科書

高原宮司

うすよくれた教科書か、役目を終えるのを待っている。四月からの付合いも、あと少し

くつもりである。

角田 末治

で申し訳ない。よくれた部分に思い出が浮かぶ。ああここで苦しんだつけ、ここができなくてくやしかつた。でもここは、よくできた。苦しかつたといえば、強行遠足も、いくつかのテストもあった。しかしあの時の遠足や、文化祭は楽しかつた。いろいろの思い出が次から次とうかんでくる。これらの思い出は、皆この本と一緒に残るだろう。もうこの本とお別れだ。しかし、ぼくには、もう次の相棒が待っている。それといっしょに新しい二年が、もうすぐ始まるのだ。

一年間

この一年間私は高校生徒として絶対必要条件の遊び、運動、勉強、片思い、これら全部を満足とまではいかないが一生懸命にやつてきたつもりである。しかし先生方は私に「もっと勉強しろ」とは言うが「もっと運動を、もっと遊べ」とは決して言わない。なぜだろう。私は高校生活で遊び、運動、勉強、片思いは大いにしているのだと思う。だから次の一年間も、その次の一年間もこの方針で行くつもりである。

と歩けなくなるので歩き続けた、市場と海の口の中間付近でもうだめだと思った。自分との戦いに負けたのである。それでも海の口まで行つた。今考えると楽しい思い出だ。

2

中山重雄

昭和三十八年十月十七日午後九時、始めての強行遠足に血は高まり、太鼓の音を後に学校を出発した。野辺山を経て海口までの間にいろいろな事があつた。中でも清里で見た日の出の光景は強く印象に残つた。まだ休憩所を出してくれたお茶の味を忘れられない。思ひ返すと辛い事もあつたが、それ以上に楽しい事の方が多かったと思う。それに自己の体力や意志を確認したことに意義があつたと思ふ。

3

清水幸雄

校長先生の打つ勇ましい太鼓の音と共に、我々が出発した。我々は四人一組になり、元氣よく出発した。足が速い、みるみるうちに

人を遠ざけた。葦崎を過ぎたところで、足の痛みを感じ始めた。

休憩所の灯が見えるたびごとに気が安まる。一杯のお茶が何とおいしかったことだろう。さらにピッチをあげる。ぐんぐん人を抜く、しまいに、我々はひとりひとりになつてしまつた。どこまで歩いても道はでこぼこ。足の感覚はいつの間にかどこかへ行つてしまつた。ただひたすら歩くだけである。清里に着く。東山はほのぼのと明るんでいた。

あの太鼓の音、あの足の痛み、あのお茶のおいしさはいまでも忘れることはできない。

4

島津信重

私は、机に向かつてこの一年を振り返つて見ると、あの苦しかったがそれでいて一番印象に残つた中込までの強行遠足が脳裏に浮かんで来る。葦崎でのお茶の味は今でもなつかしく思う。あの真暗な道を友達と元気づけながら次の休憩所まで黙々と歩いた時、そして何も見えない広大な暗闇の中で足は棒のようになり、ちよつとでも休んで眠つてしまいたいと思うのを、歯をくいしばつて歩き休憩所

が目の前に見えた喜びは何んとも言えないものである。後になつて振り返つて見ると、強行遠足こそは、私達学生 of 精神鍛錬、団決力、意志力の向上にかくことの出来ないものということがわかつた。そしてこの経験をこれから生かしていきたいと思ひます。

5

丸田啓二

体力と強固な精神力とを、必要とする強行遠足は、人生における一般の仕事と同じである。第一に、自分の体力にあわせて、綿密な計画を立てて、出発は予期せぬ事をも克服して、目的地に向かつて、邁進しなければならぬ。そして、目的地に到達する。その時の感じは、それまでに自分が、苦勞していればしているほど、いよいよその感は深いものである。

いわば強行遠足は人生航路の縮図のようなものである。

足下を一步一步確かめながら歩いた暗い道寒く美しい夜明け、荒涼とした八ヶ岳の高原の景観も忘れたいものであつた。



陰影

加藤清一

一体この寂しさは何だろうか。現代に生き現代に調和と喜びとが認められず、現世に不満と矛盾とを見つけて、一人煩悶し、遣る瀬無い心にこの小さな頭を支配されてしまつた自分は、一体どうすればよいのか。世の中にほ、自分のような疑惑を抱いて悩み、悶えてそれを追究しきれず、誤ちの許されない人生を、飽きらめて生きること慣らされた、力一杯生きてみようともしない人間が意外にも多すぎる。自分だけこんな空しい生活を、みじめな生涯を送つてはならんぞと言ひ聞かせてはみたものの、そうならない根拠はどこにもないのである。そう思うと、長い長い人生の平均台を初めて試みるような不安な気持

に陥る。人間失格となり、脱落せざるをえない人間、見放された人生の裏街道を生き甲斐もなく歩み続ける人間を想像することはおそろしい。絶対に自分にはなるまい、なるものかなつてはならぬ。

唾哲学

小河原 正 夫

教卓の前へ座つてから半年になる。この間先生の唾をかぶり続けた。たいがい教卓へ手をついて講義なさるから、こちらの顔と先方の口とは50糎と離れていない。時に大きな口を開けてどなられようものなら、それこそ唾の一斉射撃をくらう。顔をそ向けたい気もあるが、たいがいはがまんしている。唾を味わつてみると（？）なかなか面白いもので、それから今朝自分が使つた歯磨き粉の香を感じたり、弁当のそれと同じであつたりすると親しみがわいて色々考えてみたくなる。唾に喜怒哀楽を感じ、思考力が増すのであればまったく唾様である。

ひとり思うこと

堀口守雄

とにかく、もつと変化が欲しい。そしてもつと人間としての腕を磨きたい。自分として随分達人のつもりだけれども、ときどき我知らずこり悩みの種としてしよつているのはまだ未熟なのである。其暗闇の中で所々ほのかな明りを見つけては、そこを身を置く場としてゐる。今の生活にやささかいやけがさしはじめてゐる。奇跡でも起つて、もつと物のよく見える所へ移ればよいが。

足音

コツ コツ コツ

足音が聞こえる。

一步、一步強く固く

踏みしめて進む人の足音。

悲しみに泣き、怒り、狂う音

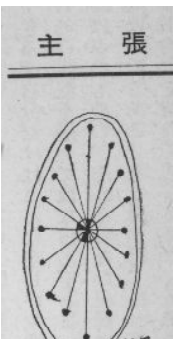
又、喜び、笑う者、

だが自然は四季をくりかえす

あまりにも静かな大きな自然の歩み

その歩みの中のほんの一瞬の人の生命

それだけに毎日を大切に生きよう。



生徒会への関心

織 岡 一 夫

私が、生徒会の副会長をしたことは、私にとって大変貴重な経験だった。

生徒会の仕事をしている時私は、最も強く「会員の生徒会への関心は、なんて薄いのだろう」と感じた。これこそ一高生徒会の不振の第一の原因ではないか。

私達は「卒業後大学に入らなければならぬいから、勉強に忙しいので、生徒会活動に参加する暇なんぞない」と言って、自他ともに許そうとしているのではないか。

私達の心の中には「生徒会活動は、わずらわしくめんどうくさい」と思う心があるのでほないか。

このままでよいのであろうか。いや絶対にいけない。

私達は「一高生徒会の一つの構成因子であ

る。よって私達がいなければ、一高生徒会は成り立たない。又私達の手で、私達の生徒会をよりよい、りっぱで、力のあるものにしよう」と自覚せねばならない。

それでこそ「私達は伝統あるこの一高の生徒である」と言えるのではないか。

厳罰について

雨宮俊彦

四月入学当時、入学できた喜びで胸が一杯だった。しかし現在では、こんなに一高生はだらしないのかと思って、うんざりしている者の一人である。禁止行為をしても、軽い罰で終る。自覚を待とうという考えからである。しかしなかなか自覚をしないではないか。その自覚をさせるものは厳罰であると考ええる。軍人達の態度のよさも厳罰にあるのではないだろうか。この一高に必要なものは厳罰ではないだろうか。それさえあればこの一高にも、昔のような規律正しい学校にもどるのではないかと考える。

ほら幸せが／

竹下清治

遠い峰の雪が日光に美しく輝いた
僕はその峰が前から好きだった
峰は希望を与えてくれた
それは激しいものではなく
たんたんとしたものだった
峰の向うにはどんな世界があるだろうか
その峰は近いようで、ずっとずっと遠く
のかたににある様な気がする。

これでいい

のだらうか

・種田源正

長髪のうえ無帽、げたはき、町を歩いているとよくこんなりの学生に会う。それはきまつて一高生である。一般の人はそれが悪いとは言わない。外観が悪くても内がしっかりしていると思つているのであろう。それにもかかわらず大学の入学率はけつて高いとは言えない。その上近ごろでは新聞にも悪

いことが書きたてられるようになった。大部分の一般の人が思つている一高生とはまるでちがう。伝統ある一高生がこんなことではないのだろうか。いまからでもいいのだ、こんな学校の空気をなくしてしまおう。

一高生のあり方

について

鶴田明雄

この頃の一高生はとかく世間から批判を受ける。新聞の投書欄にもよく苦情が出る。先輩の話をきくと、今の一高生はなにかにつけてたんでいるという。いったい原因はなんだろうか。たしかに世間の人々は私たちに特別な朝符をよせている。だから私たちのちよつとしたことでもすぐ話題にのぼる。これはしかたないと思う。一高のいままでの実績や伝統からみて朝符をよせるのはあたりまえである。いままでの私たちはその伝統や実績におんぶしてすこしも前進しなかったように思える。だから大学合格の点についても、毎日の学校生活にもその結果があらわれる。いつもいわれることであるが私たちはひとりひとりに新たな自覚をもつて進まないかぎり、

自分の目標を、達成することはできないと思ふ。

一高精神

末 木 健

一高は県下の精鋭ばかり集まつた故か大形小形の集會がスムーズに運んだ実例がない。便所は見事黄金に満ちあふれ、北風に波立っている。又、東大希望者が多いせいかエゴイストも多い。「汽車を待たせるといけないから」と言つては掃除もしない。が、残る者とするわけでない。これがどこへ行つても天下の一高生で通用するのだから不思議だ。ただ思うに、決して誇れないこの精神さえ我が校から削除すれば、希望だけに終らずに済む受思うのである。自覚にあふれた「歩一歩が新しい一高を造るのだ」。

長くて短かいこの一年間	辰巳	憲司
その場を常に確保せよ	上笹	秀里
夢を育てよう	若尾	和光
愚連隊純情派	角田	末治
たたけ、しからば開かれん	加藤	清一
明日はまた明日の、日が照るのだ	種田	源正

長い一本道

島津信重

Goings my way Wakabayashi
やるぞ見ておれ口には出さず 小河原正夫
夢だ勇氣だシンポウダ 代永光春
いつでも夢を／ 土屋 裕
闇に光を、地にほ平和を 平野 和春

It is better to think of the merits
of your enemies than of the defects
of your friends. K. MARUTA
The more we think for others,
and the less we think of ourselves,
the happier we shall be. K. Orioka

勝利の女神は自己を見捨てない者にほえむ

生

原尚

守権

何時も思考を手離すな 堀口
青雲の志 塩谷政之
永遠のジェームズデインソン 田中 健二

今日なし得る事を明日に延ばすことなれ

我輩は点取り虫である

古屋 哲雄

己の欲するところを人に施せ 古明地秀正

頭と足とはその人間を決定する

末木 健

頭の上の空がどう思うとも気にしない

雨宮 俊彦

どこに

寺田和男

時のたつのは早いものです。
君たちが希望にもえて入学してから早や一年、その間、私は何を考え、何を話したのか、とりとめのない時を送りました
が、若い君達にとっては、各人各様の収穫があったことと信じています。

初めの頃は、環境も変。一人判断に苦しんだ問題も、今日になってみれば解決できるだろうし、体も一段と丈夫になり、
それにも増して多くの友人達から知らず知らずの中に、得ていること、からなど、数知れずあるのではないかと思います。

さて、本来私達も自然界に住む動物の一種族です。ある規制の下で社会につくす使命をおびて今日生きていることは、自
然界の多くの生物と同じことです。とかく自我に落ち込み易い勉強に追われていますから、周囲の山々や花の香にこもる自
然のいびきなど見向きもしないことでしょう。肌をさすような厳寒の後にはやわらかい日ざしの春がきて、青空を背に山の
姿も程よく緑に変わり、形も色もよく調和した草花が美しく咲き出します。あたりまえのことですが、実はそこに深遠な大自
然の真理がひそんでいるのです。

めまぐるしく回るうずの中で、次第にマヒしていく自分を自覚できなくなり、ただ結論への到達を急ぐあまり失敗する例

真理は

は多いものです。やはり未知のものを求めて不安を抱きながらも堅実に、精進している過程に偉大なる進歩がひそんでいる
のです。ごく平凡な自然の流れの中に非凡への糸口が見いだされるわけです。自然科学における多くの発明、発見もこの例
にもれません。

原子力の糸口は今から三十年前、三十三才のイタリー青年エンリコ・フェルミによってほどかれました。中性子という弾
丸を多くの原子核にあてて調べてみると、銅は亜鉛に、金は水銀に変つていくのです。錬金術師の夢が実現したのです。そ
して最後にあてたウランの時、今まで見られなかった分裂が起きて、同時に多量のエネルギーが放出されました。このこと
は四年後にドイツのハーン・シュトラスマン、マイトナー達によって確認され、実に四年後、ふたたびフェルミによって米
国にて第一号原子炉の運転が始まりました。

最後に選ばれたウランの中に真理がひそんでいたわけです。

時には無限に続く空をながめて大気を呼吸してみなさい。そのとき万物をはぐくむ偉大な哲理を感じることができると
しよう。又草花でもよい、その香を呼吸してみなさい。きつときびしい試練と共に美しい成果の道を見つめることができる
でしょう。

毎日の学習、クラブ活動を通して自然は私達に多くの問いを投げかけているのです。よくみつめてごらんください。

勉学

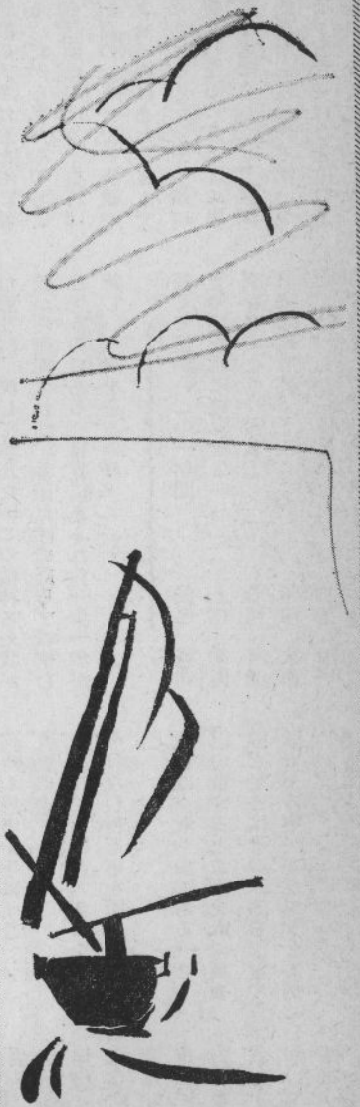
板垣和芳

ふと私は、高校時代での勉学は、どんな目
的のためにしているのか考えてみた。まず第
一に考えることは、数年後にひかえている大
学受験のためだ。人より少しでも勉強して知
識を自分のものにしてよりよい大学に入れれ

ば、卒業してから自分に適していて、しかも
少しでも待遇のよい職場に入ることができ、
さらには生活水準の高い家庭を持つことがで
きるであろう。この目的のために高校時代の
勉学にはげむということは、たしかに個人に
とっては、たいせつなことだ。しかしこの考
え方は自己本意であるに過ぎない。もっと大
きな目的を考えてみると、人間は世に生まれ
てきたからには、多くの人の世話になる。た

とえば、どんなに偉大な人でも今日の社会で
他人の世話にならずには生きていけない。だ
から私も他人の世話になるばかりではなく
世のため人のために貢献しなければならな
いのは当然である。知識の多少はあっても貢献
することにおいては変りがない。しかしより
多く貢献するためには、より多くの知識が必
要になってくる。すなわち、学生たる我々は
より多くの知識を身につけるためには、学生

■ 10 組



この一年間を
顧みて

環境に押されながら過した一学期、つらかったが思い出多いあの強行遠足のあった二学期、そして今過している三学期、一年も終りに近づいた今になると、あゝあの時にはこれをしておけば等と後悔の念が浮んで来る。その中でも一日一日が孤立して関連性がなかった様に思われるのが一番残念だ。囲碁の世界では、今打つ石が前の石と密接な関係を持ち、次に打つ石を発展させる石であればある程重要な任務を持った石であろう。

この事が勉強にも言える様に思われる。昨日、一昨日、そして明日、明後日に関連のある一日を過す事によって、目的が達成されるのでないかと。いやそうでなければ目的は達成されないのではないかと思っている。だから今後は毎日を十二分に活用させて送るつもりである。

世間一般の高校生の言葉をたびたび耳にします。案外こんなことが清掃をさばる原因になってしまうのではないでしょうか。またこの様なことで人間形成ができるでしょうか。皆さん自分だけよければよいという考えは捨てましょう。社会があつてはじめて自分があるのです。むしろ社会に対し感謝しなければいけないのです。それだからこそ皆手をとつて明るい社会を作ろうではありませんか。

真
の
友

鮎川 高

「真の友」なにとよいことばではないか。僕はいままで多くの級友と交わりをしてきた。しかしまだ「真の友」にめぐりあつたことではないようだ。自分の思っていることをそのまま言えて、理解してもらえ、なやみを一緒に考え、なやんでくれる友、このような友を高校時代にぜひ作りたい。そして一生涯の思い出となるような交際を試みたい。

「真の友」本当に良いことばだ。

望月孝之

私たちは一年生の教室はたいへん古く殺風景だが、今までずっと勉強してきた。今までをふり返ってみると、私たちの教室だけかもしれないが随分汚れている時が多かった。紙屑、パンの袋、鉛筆のけずり屑を無意識に捨てている。教室が汚れても気がつかないのか、知らぬふりをしているのか、ごみは掃除の時までかたづかない。ときにはそのままときもある。私は自分から進んで掃除をしようとはしないけれど、消極的だが自分はちらかさなようにしている。積極的な掃除もよいが、ごみをごみ箱に捨ててくらい苦痛ではないだろうか、みんなが教室を汚さないように心がけたらどうだろう。

現代社会と善に

ついて

深沢保憲

みんながお互に自分の能力を高め、その能力を十分に発揮し、同時に、お互にみんなの

或る日

齊藤 齊

或る五月の良く晴れた日のことでした。風さえなく、もちろん空には雲ひとつありません。きつとこんな日を五月晴というのでしょうか。自分は窓ごしに、美しくさいている藤の花をながめていました。池の上の棚に長い房をたれさいていた薄紫色の花は、水面にうつって、なおいつそう美しくみえるようでした。自分は何か、自分というものを忘れて、その美しさにとけてしまいそうな気がしました。自分にとってむずかしい公式や世の煩わしいと感ずることもすべてを忘れてしまっているようでした。全く自分だけの世界なのです。まるで夢のような気持もしました。

その美しさと、静かさを破るかのように、蛙が池に飛びこみ、ふと、自分に帰った時、どのくらい時間がたったのかも見当が付きませんでした。五月のあまり強くない太陽はもう西の空にかたむいていたのです。その夜、この光景が頭をかすめてなかなか寝つかれませんでした。

次の日も昨日におとらぬ良い天気でしたの

能力を高めてやり、その能力を十分に発揮させてやり、またお互いの能力を高めあい、十分に発揮しあえるような楽しく平和な協同のしくみを守ることが、おそらく善であろう。

しかし現在の社会は高校、大学と進学するにしても、たくさんの方の希望者の仲間をおしのけないと自分が入学できないし、また就職のときも同様である。…こんなことでもいいのだろうか。どこか社会の根本がまちがっていないだろうか。どこか拍子で私たちは、私たちの能力と行動が社会のために百%役だっていけないようになってきている悪い状態の社会をとりのぞき、そして其の一体の協同をつくり上げなければならぬのだ。

認
識

津久井 高 憲

最近一高生の行動には底にいた感があります。それは近頃の新聞の報道するところであることはみなさん承知のことと思います。

しかし、これは極く一部の人々の行動にすぎませんが、このような現実に対して校風の乱れをかんじないわけにはいきません。「一高生はかり」とか「一高生は点取り虫だ」とか

で再び、自分は同じ時刻頃そこにたつたので

すが、あの絵のような、自分を忘れさせた良い気持ちには、再びみいだすことはできませんでした。

HR
日記から

×月×日

二校時や三校時終つての休み時間、パンを買つてたべる上級生がいることには入学した当時驚いたが、このごろでは一年生もやつてゐる。そのだらしなゐ姿に目をふせたくなる。このようなことをしてもよいとは生徒手帳のどの項にもない。このまゝでよいのだろうか。

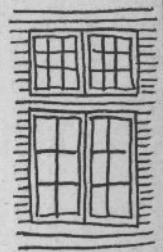
×月×日

H Rの時意見があつたらごちやごちや
言っていないで挙手して発言したらい
いの。

×月×日

男女クラスは、なにといいことなく、うらやましい、うらやましいと、一日が終る。

詩



僕の気持

佐野寿仁

道はどこまでもつづいていて
赤く燃えていた太陽が西の山に沈んで
日は暮れていった
その名残が
山の外形を型取っていた
夕焼が美しかった
静かだった
辺りには誰もいず、一人ぼっちだった
だが僕の虚な心ほ
それでも満たされなかった
何も考えず
希望を唯一の頼りとして
只々歩いた

遠くに輝く小さな光を求めて
どんなに歩いたろうか
それは中々手に入らなかった
見ることができて手に入らないのだ
辺りがどんなか
全く忘れてしまっていた
あの光の許にゆけば
どうにかなると思っていた
しかしそこにはなかなかゆきつけない
その淡い光を手握るため
どんな誘惑にも打ち克つて
今日も同じ道を
こうして歩んでゆく
道はどこまでも続いている
尽きることを知らぬ
それでもなお僕は歩む
ああ、道はどこまでも続いている。

平和への夜明け

岡 敏彦

黒いベールがつぎつぎとはがれて
希望に満ちた朝が来る
明るく輝く太陽が地球上に顔を出す、
三十億の兄弟が動き出す
ぼくもいつしよに動き出す
海に山に
空に陸に
平和への使者は動き出す
一つの目標に向って……
ふと小さいころを思い出した
あのころぼくはおとなしく、いくじがなく
そして消極的だった
しかし、ぼくをとりまく空気は明るく
楽しかった

そんな時、今のぼくを見つめる
物心はついたけれど
あのころの気持ちが残っているのか
自分にはまだ何か活気がない
今の世の中の空気はどこか気になる
暗く何かぼくにひつかかってくる

世の中が急に進歩して
ぼくの考え方がおくれたのか

新聞をひろげて見ると

どこかでかならず紛争や犯罪がおこっている

どこが悪いのか

だれが悪いのか

だれでもが解決を望んでいる
だれでもが平和を望んでいる

そこで兄弟が立ちあがる

団結・友愛を信じ会って

動き出す

動き出す

明日きつと平和が来るだろう

春よ早く

相 沢 一 徳

北風に背をむけて
白い羽根を ふくらませ
あのスズメらは今日もなにか考えている
緑を失った枯木に二つの実となつて
冷たい風が吹くたびに

純白の羽毛が、こきざみにゆれる

スズメはまるで

「春よ早く」と祈っているかのようにだ

道

渡羅栄次

この青空の下どこかで

誰かが泣いている

誰かが笑っている

この青空の下どこかに

私の歩む道がきつとある

どんなに狭い道でも

私は見つけねばならない

大空が危険な色を流さぬうちに

私の歩いている道を

渡りきらねばならない

あの山の向こうに光が消えないうちに

私は道を見つけねばならない

けれども光がそんなに早く消えたいのなら一

私は闇の中に一人残されるのを恐れない

しかし、しかし

紅色の光が私を照らしているうちに

私は道を見つけたのだ。

草

石井俊彦

足もとの石を取った

石の下には 草があつた

草は、上からの圧力にたえながら

細く弱く伸びていた。重さと戦いながら

ふと自分をかえり見た

希望に胸をふくらませて入学した言同

その苦しさ、その激しさに

思わず失望しかけていた自分

それでいいのだろうか

あの石の下の草は

自分に何を教えてくれただろうか

苦難をのりこえ、強く生きること

そうだ、苦難を乗りこえ強く生きること

それが、これからの生活の目標なのだ

僕は大きく深呼吸してから、草を離れた

回 春

小林久也

青木の葉に、冬の昼下がりの日が

いましばらくのしんぼうだよとささやき

そのそばを通りすぎようとする風に

早く春のいぶきをときいそくする

そんな情景をかえつてもものうげにながめながら
縁先から犬を呼ぶ

汗くささと薬の香とで異様な臭気を発散させる
骨ばった身体をさらけ出し

青木の葉へささやきかけたと同じ日の光に
再度めぐり来た冬も「もう明けるのか」とつぶやいた。目の前の青木は、その姿をほころ

ように肩をそびやかせ

緑の、黄の、日の光をうけてなお白い

その葉を広げていたし

その下の土は、自分の力で育った

大きな子供をまぶしそうに見上げた

からりと晴れた空の深さと裏白な雲

それらの調和を保つべく三羽のすずめが

「お日さまがまぶしいね」「もう春よ」と

話しながら飛んでいた

そんな情景をかえつてもものうげにながめながら

筆をとり、白紙をよこす

「春よすでに、至り」と。

星の天使

山内秀文

星の清らかさに耐えかね

月のけ高さが

心に浸透するのを知り

一人、暗やみの中で

眉をかんだ

はげしい悔いの心が

やみの中に呼びかけ

月の光に照らし出された

星の天使が

その白衣で

心の中のわたかまりを包み

涙のさわやかな小川のせせらぎのごとく

深く澄んだ一粒となり

笑いに形のくずれた

その眉のわきを

おごそかな賛美歌にのつて

しずしずと降りた

暗い夜のやみの中で

泣き笑いを演ずる

一個の人間を

寒い朝

早川仁郎

星も月も笑いはしなかった
何も笑うものはないのだ

はく息が白い

遠くの方々も裏白だ

ざくろの小枝が小刻みに震えてる

やがて来る春を待って

じつと此の寒さに耐えているのだ

零下 八度

流石の犬も寒そうだ

手袋を通して来るハンドルの冷たさ

さあ元氣を出して出発だ

春はもうすぐそこまでやって来て居るから

晩の雪

早川正美

朝からのくもり空が

雪にかわり

窓からのぞいて見ると

真黒い屋根はもう一面に真白く変つて

小ぶなも生物も

インキの中には住めないだろう

人間さえも

むかしは、流は

清い白い流れ

私と宇宙

渡辺康三

この広い宇宙は私を中心に動いている

そして、私と関係なく動いている

私を困らせ

私を喜ばせる

私に悪を教え

私に善を教える

私にこうしろという

するなという

この広い宇宙は私を中心に動いている

そして私はそれらを中心に動かされている。

銀の舗道

松村健一郎

静かに灯を消す

一瞬にして流れる 夜の戦慄

今、まさに訪れようとしている

生命の歡喜の時間に

僕は震える胸をおさえて窓を開く

鋭く流れ込む、夜の冷気

岡光臣

黒い液体が

点々と浮かぶ個体が

独特な臭気を放ちつつ

流れている

胸の奥深く

しだいに浮かび上る銀の舗道

耳の底をくすぐる、甘美な旋律

それにもまして甘美な金管のトーン

彼方の白い光はにじみ、やがてぼやけ

黒々と繁る森の北側に、星は走る

死に値するであろうこの瞬間に

待つていたものがやってきた

背骨を走る快い痙攣

脳裡をかすめる、青いエメラルドの雫

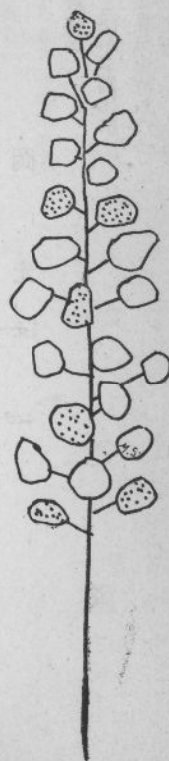
二度と戻つてはこないだろう

この生命の瞬間を

僕は心ゆくまで泡きしめる

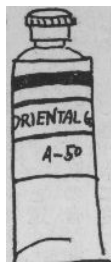
泣き笑いを演ずる

一個の人間を



気持ち次第

根岸 昭



「煙草と肺ガン」とか「煙草と寿命」とか愛煙家にとっては、気にしない、気にしないと言いがらやはり気になる問題である。小生が煙草を覚えたのは今から十四・五年前で、それ以来つい最近までの五千何日かの間、一日の例外

もなく毎日十何本かを煙にして来た訳である。自分で喫った煙草の数を考えてみると何か感慨深くまた懐かしい様な気がする。肋膜炎で入院した時も、胃潰瘍で医者や知人から禁煙をすすめられた時も、大好きな酒はあまり苦にしないで止めることが出来たのだが、煙草となるとてんから止めようと言う事を考えた事もなかった、と言うのは自分で煙草は止められないものと最初から決めてかかっていたので、どうせ止められないものを苦勞して止めようとしてみてもしかたがないと言う安易な大ぢやくな考えからだった。それがつい一ヶ月程前に体の調子も悪いし、世間でも煙草の害についている論じられている、考えてみれば煙草は吸はなければさみしいかもしれないが、まあ少なく

とも直接益があるわけではなし、涉とつ止められるものなら止めてみようと考えた様になった。

今迄ボケットに入っているタバコが残りが少なくなると予備のタバコを入れておかないと気がすまなかったり、たまたまタバコがなくなったりすると寝静まった街をタバコを求めて自転車で行きまわったりした。自分に禁煙が出来るだろうかなどと考えてみたが、結局いくら考えてみてもしかたがない、とにかくあまり固苦しく考えないで止めてみると言うことに決めて、禁煙を実行にうつした。

最初の二、三日は意識したが、その後はあまり気にならない。タバコをすいたくなつたらかもうと思つて買ったガムも時々思い出しては口にする位で、こんなに簡単に止められると思ひもよらなかっただけに、かえつて拍子抜けしてしまつた。

我々の生活にはいろいろと自から改善しなければならぬ問題があるが、それらの解決に當つて大切なことは「やるう」と言う気持ちだろう。やつてもみないで「おれは意志が弱いから」とか、「おれには力がないから」とか言つて最初から「それは出来ない事だ」と決めてしまつたり、「あゝでもない、こうでもない」とあまり固苦く考えないで、楽な気持ちで実践することである。まずやつてみよう。

この一年間



(1)

吉田成美

先生「さあよく聞いて、あと××日みんな二年生になれるんだ。」

ほんとうに短かい一年間だった。それは環境の違いや、気持ちのゆるみから自己を失つて宙に浮いたような生活だったからではなかったろうか。入学当時は、先生の話、クラブの先輩などの話がみんな新鮮なものに感じられて、まるで赤ちゃんが物を覚え始める時のような気持ちだった。しかし今頃では何も感じな

くなつてしまっている。最初そのように感じたのは、一高へのあこがれ、敬意とかいうようなもので批判的に見なかったということもあつただろうと思う。しかし『初心忘るべからず』ということとは忘れてはならないことだ。学校の行事、例えば遠足、強歩大会、そして試験などが事務的に結果的に行なわれているように好感をえない。

一万メートルにおいても、最善をつくすというよりも先に、評価において見学は何だ、歩行者は何だなどということを考えていることは、残念だと思う。

(2)

望月悦子

入学式：今日から三年間この学校にお世話になる。よろしく。

遠足……つまらなかった。誰だっけ？歌をよく歌つたのは、

夏休み……海に山に大いにハッスル、夏やせもする？
身延……さわさすぎた、自己嫌悪に陥る。
文化祭……オデンを作る。一皿二十五円
正月……寝正月、皮下脂肪をたくわえる。
スキー……「白銀は招くよ」大穴を造る。
現在……灰色の人生

進級……X

(3)

本 沢 誠

ぼくはこの学校に入学する時、あこがれと期待とをもっていた。しかし今一年過こしてみて期待どおりにならないことが、あまりに多い。その一つとして我々（ぼく自身）何か一本つよい針金に通っていないように思われる。そこで来年（二年）こそその筋の通ったほこりのもつことのできる人間になることをぞむ。

(4)

阪 本 稔

僕は入学した時、ぼくかなりの一高に対する考え方と、高校生活に対する期待をもっていた。しかし現実には全く僕を失望させた。

なんとなく殺風景で味気のない毎日、中には身延山研修会のように短期間ではあったが成果をあげたように思われるものもあったが全般的にみて、とても有意義であったように思われる。あと二年間の高校生活で過ぎさろうとしている一年間のブランクをうめるように努力しようと思っている。

(5)

斉藤雪男

この三月で早一ケ年である。「光陰矢のごとし」と言うけれども、早いものである。希望に胸ふくらませて、四月にあこがれて一高へ入学したけれども、一高にげんめつしたのは、確かである。しかし良い友達ができただけで、いろいろな行事で「泣き」「笑い」「楽しんだ」。この一ケ年の貴重な青春時代の一ページをめくるのである。この一年を悔いない、「明日は明日の風が吹く。」と言うが、僕は未来を求めて進もう。

(6)

小泉光久

一高へ入学し、自分が感じたことは、やることをやり、提出しなければならぬものは提

ということであった。

ここに僕は少し反発感をもった。

「そんなことで僕はへこたれない。」と……。

しかし現実的に考えてみるとはほり無理なことかもしれない。運動部に入り勉強がおろそかになった先輩の話を何度か耳にした。

先日校長先生が一ノ瀬君のことをいわれたが、一ノ瀬君のような人は、校長先生がわざわざ集会で言われるぐらいに、ほんの少ししかないのではなからうか。

僕も高校生活を楽しく健康なものにしたいしかし、目の前にせまき門がそびえ立ち、そういった理想が破れることは残念であり、また自分の微力さを感じ悲しく思う。

これからは、ただ大学入試をむきして、ばく進するだけである。好きな運動をせっかくやめたのだから、それが無駄にならないよう良い友も速く見つけ、たがいにはげましあいながら大学入試に備えたいと思う。

(2)

市川ひろみ

入試という難関につきあたった自分の生活は、急に一変した。今までの「困難」という

出しなければ、そのむくいが成績表をもってくるということだ。しかし私はこの一年間で前述のことで、てきを作ってしまった。このようなことをし、一年間、てきを作り、友を作ってきた。しかし以後友のみを作りたい。

(7)

奥山 克

ぼくらが入学して早くも一年が過ぎ去ろうとしています。今考えるといろいろな悔いがあるのこります。時間は決して待つてくれません自分たちでこの時間を有意義に利用しなければならぬと思います。何もしないでだらだらと時間をむだにすゝすのは実にたやすい。しかしその後で必ず後悔の念がおこるにちがいありません。だれしもこれはわかっていてと思います。意志を強くもち、後で後悔しないようにのこりの二年間過したい。

(8)

伊藤 豊

一年間自転車で通学した。はじめは長い距離ペダルを回すのはえらかったが、だんだん慣れてもういまではえらいとは思えない。家を八時ごろに出て竹原の時計を見る、ちこく

事の少ない、又きびしさのないあまやかされた自由な生活、いわゆる「温室の中」から外に出された自分は、ここに来て始めて社会のきびしさという風に、あたったような気がする。

私は自らこの学校を選んだが、その動機というものは、今考えてみると、全く浅く単純な軽そつな考えなのだ。しかし、「私は思う存分勉強したい。持っているだけの力を出し自分自身をためしたい。」そんな考えは今も憂いをいだきながらも持っている。この考えを信念として育てあげなければならないだろう。

この学校に入学してから、まず得たものといえは、「不安や心配」である。私達は何度も何度も「努力すればいい」とか「自分に信じて」とか「ベストを尽くせ」ということばを耳にしているのだが、「果たして自分にはみんなについていくことができるだろうか。努力が最後まで続くだろうか。」とこんな不安が消えない。「努力」私は本当にこのことばがすばらしいと思う。それならばそう思う限り、その「努力」を信念としてつらぬかねは、自分の不安や憂いというものは消えないに違いない。今私の頭にあるのはそんな

するときはいつも三十五分を過ぎている。道中信号がいくつもある。赤の信号を待つていてちこくしたこともいく回かあった。この一年ろくなことはなかった。

入学のころ

(1)



福田秀夫

入学する前から困っていた問題にクラブ活動のことがある。中学校三年間バレーボールをやっていた僕は、先輩から是非バレー部に入る様に言われていた。僕も、ここでバレーボールをやめることはつらいし、勧誘もあったから入部しようと思い、K先生に相談してみた。しかし意外にも、

「絶対運動部には入るな。」

といわれてしまった。理由は、

「高校の運動部はなまやさしいものでなく、死にもぐるいだから勉強なんかできない。」

ことで満たされている。

私達は立派な人間になる為に勉強に専心するのであるが、この三年間は人間的成長、人間性に対しても大切な時期だと聞かされている。努力を持つて真の自分を発見したい。

又、他人からみてみにくい人間になりたくない。

(3)

小沢 譲

三月十七日正午入試の発表であった。はじめの方から見えていった。胸はドキドキなつてやまない。空相「……あったー438 私はうれしかった。夢であろうかと、もう一度見た。やつぱりあった。県下の名門校甲府一高に入れたのだ。」

その夜はうれしくてうれしくてなかなか眠れなかった。一高に入学したからには勉強第一主義でいこう。そして一流の大学にパスして、それから……とだんだん進んでいった。

四月三日入学式。校長先生の入学許可が終った時、私は一高に入学できた感謝を新たにした。そして意欲に燃えて出発したのだった。

山梨県一の高校、いや私には日本一の高校

にさえも思える甲府第一高等学校、あこがれの甲府第一高等学校に入学して私はこう思う。

一高生はとにかく自分の力を誇ってだ落するそう。遅刻者も多く、悪い行ないをする者も少なくないそう。そんなことではいけない。ついには勉強がおろそかになる。私はそうなりたくない。一高生として立派に生活し日本一の高校に泥を塗りたくない。またそんなことをする者は高校生の資格はない。私は一高生の誇りを失いたくない。然るに、私はそんな良くない行ないはしない。このような考えで高校生活を送っていきたいと私は思う。

勉強ばかりでもだめだ。クラブ活動も一緒にやっていかねはなるまい。私はそれで思案に暮れているがどのクラブに入っても悩みはあるだろう。また楽しさもあるだろう。それによって高校生活を楽しくやっていけるならなんでもよい。その中で自分の特技、趣味を加えて選択すればよい、と私は思う。最後までしつかりやっていこう。

思い出すこと



収穫二つ

雨宮 千永子

今、一高入学後、どんな点で、私は成長したのだろうかと考えてみたが、何も思い浮かばない。つまり、私は、ただ学校という一集団の中で、ほとんど機械的に行動していただけではなかったかと思う。しかし、その内に、ただ一つ例外がある。それは強行遠足だ。この時は、自分でも気押のよいほど、計画的で積極的だった。その上、私はこの経験によって、がんばりぬくことの尊さと、友を持つことの重要性を知ることができた。

タフな一高生

風間省二

しているから謙虚な気押でやってもらいたいと思うのではない。あくまでも利己的である。そこには人間性はない。しかし誰かにどうしてもやってもらわなければならぬというので、そこである人がその役にさられた場合、その人は少なくとも不快を感じるだろう。その不快を狙って無理とその人にやらせようとする人もいる。しかし進んで何でもする人は偉いだろう。とにかくぼくたちはほとんど全部が自分に氣にくわないことはやりたがらない。

ところでぼくはこの一年間ただ過ごしたにすぎない。それは人格がまだまだであるからである。人格とは人間の調和的発達の状態をいうので、その調和とはそれぞれの部分がその本質を十分に発揮し他をおかさないことだと本に書いてあるが、その向上発達という点でははなはだ残念極まること疑いなし。しかし多に向上した人もいるようだ。ぼくたちが向上、停滞、後退するのもそれはその人の？。ぼくたちは学業によって人格過程を計られる。それはしかたのないことだ。それは今の世の中において正しいとされているからである。なぜならば、その人の欲望が純化され、人間的意志に基づいて規律正しく生活し

高校生活

弦間秀仁

文を作ることは、真から書く気になったのでなくては非常に面倒で、また難しい。高校一年も終わろうとしているがなんの収穫があったか。ぼくたちの高校生活はぼくたち自身の自発的に物事をする態度によって成り立つ。しかし今までは、ぼくはすべて受動的であつたような気がする。それでは何の意義もない。ぼくたちはとかくいやなことを人にやらせたがる。それは真にその人がその事に適

大である。それだから悪い者は奮起一変しなければならぬだろう。社会が悪いから自分も悪い、もつともだろうが、もつともでもない。何しろ一変改造できたらいいがそれは空想。不言実行という言葉があるがそれもそうかもしれない。

とにかくいつたい目的がないと世は暗い。生きがいがない。それだから目的を持ってとやかくいわずに自分の仕事に精ださなきゃならないだろう。今まで良い成績で果立っていた先輩も、また今良い成績にいる人たちは少なくとも、みんな目的を持ってある幸福に向つて、自分を高めていつているのだろうと思う。なにしろみんなうまくやっていようがかなわぬ。

一高哀歌

佐田 要

思い出すなあ、あーこがれの甲府一高新入生の頃はおいちも若かった。

それが今ではなんたることか。いやなそうじのさばったこと、さばったこと。だじな授業時間には弁当のつまみ食い。もちろん成績は降下。あー、こんなはずではなかった。

それがもとで、存きな器枕体操を涙をのんで
すて、恋人にはふられ（ウフフ、これはう
そ）。毎日ボートとしているばかり。人生、
なんと空虚なことか。

〃俺は河原の枯すき、同じおまえも枯す
すき、どうせ二人はこの世では、花の咲かな
い。枯すき〃

でも、もうすぐ春、春には新しい一年生が
二やつてくる。『その時おいらは二年生』こり
やいつまでもこうしておれぬ。そろそろ新た
に決意して、再出発せにやらぬ。グータラ
なおいらにしては上出来の、誠にできた考え
でした。それもいつまで続くものか、とにか
く〃男ならやつてみる〃

さらば、一高一年生の生活！

放課後

佐藤 明

放課後、生徒の大半が家に帰った。その校
舎の片すみに、今日も汗にまみれて練習には
げむクラブ、その中には笑いもあり苦しみも
ある、それを共にわかちあえる友が集まった
場である。そこは、又今日の苦労が明日への
喜びに変わるための努力の場でもある。人間

一年の収穫

斉藤 妙子

この一年、最も心の動揺が激しかった時で
ある。だがその為に多くを体験し、多くを考
えることができた。

人を理解することがいかに難しいことか。豊
そして本当に人から理解されることがどんな
に少ないことかを知った。1何年か前、現
実の世界を、矛盾ばかりの歪んでいるもの、と
して反発していた。ところが現在その中に足
を入れた。そんな自分を嫌になり、また
結局は自分だけで自身を生きねばならない
という孤独感にも悩まされた。

今、何か不安な気持ちでいて精神的な安らぎ
か欲している私は、その不安から逃れるため
に体ごとぶつけられる何かをもとめている。
そしてこの一年で収穫できた体験と考えたこ
と、もとめられた何かを十二分に生かして次
の一年を生きようとしている。わ

ある授業の一ページ

名取仁美

が内外共にきたえるべき時期、青春をおうか
する若人の大事な時期を費やすに値するべき
時間でもある。

後二年を不安に思う

土橋 洋

期待外れの一高への入学であった。 巷
で騒がれている名門校とはこんなものであつ
たのか一年たった今思う。世間で言う名門校
とは以前の校風の事ではないのだろうか。事
実校内の雰囲気暗さ・全体の不統一の状態
のひどさ、特に全体の集会、生徒総会は自分
本位のかつてきままの行動は考えるべき点が
多過ぎる様に思う。自分もその一人かもしれ
ないが。

校風について

花田 善治

希望に胸をふくらませて入学してから、も
う一年たつてしまいました、か、その間にこの
学校で生活して感じたことを、述べたいと思
います。この学校に入学した人は皆、良い大
学に進み良い職業につきたいと願ってだと思

朝、チャイムの音と同時に教室にすべり込
んで、あわてて席に着く。（私はまた遅刻。）
やがて一日の授業が開始される。緊張した
授業。みんな熱心な態度。しかし、突然緊張
した授業をひっくり返すような言葉。続いて
爆笑。中学の時、想像した一高生よりも朗ら
か。ユーモアにひじように富んでいる。そこ
に一高生の別の一面も感じた。

高校一年という年に

思う

竹之内 憲子

私は、前から甲一生というものにあこがれ
を感じていた。だから、その望みが達せられ
た時は、ことばでは現わせないほどの喜びと
しつかりやろうというフアイトが、心の中に
広がった。しかし、一学期も過ぎ、二学期と
もなると、自分のおかれた家庭環境と、学業
という二つの壁の間で、何となく息苦しさを
感じ始めた。そしてその度に、今迄これでや
り通して来たではないかと思ひなおしてはみ
た。それでも、無意味な不安と空虚な孤独感
とは、どうすることも出来なかった。そして
いつか甲一への入学は方向決定をあやまった

いますが、あまりに学力のことについて考え
すぎ、こせこせした生活を送り、生徒と先生
生徒と生徒の距離が離れすぎているように思
います。もっと明るく自由な校風になつてこ
そ学習に身がはいるのだと思います。

思い出

小野 信子

雨の日も風の日も友と自転車と並べ通い慣
れたこの横沢の坂を上る。何もかも一年前と
同じなのに、今の私は赤いリボンを付けた一
高生。しかも一年前には知るよしもなかった
新しい友と希望を語り合い、いっしょに笑つ
ている。こんな事が私は不思議でならない。
嬉しい時、悲しい時、ふと、うかが思ひ出
は喜びを倍にし、励まし元気づけてくれる。
だから思ひ出は私の大切な宝なのだ。そして
この宝をより美しいものにするために、再び
巡つて来ない今を、この今を私は大切に生き
たい。



のではないかという様にも思えて来た。そん
な風に悩んでいた時、ふとしたことから、将
来の職へのあこがれと決定が出来た。この様
にして、悩みの解消が出来た。だから、来年
は、それなりに頑張り、私なりに、少しでも
成長したいと思う。

自覚・反省

樋口 和子

二学期当初世間の一高に対する批判の声が
高まった。私自身新聞などで見て実のところ
非常にびつくりした。今迄も色々よくない
ことも見たり聞いたりしているけれども今度
ほんとうに愕然とした。どうしてこんな考
えなしのことをするのだろうか。考えるといつ
ても一般の常識的なことであり、わからない
はずもない。やはり自覚反省がないためなの
だと思う。私達はずっと自分を反省し自覚し
なければならないと思う。

野辺山遠足

斉藤 妙子

七月九日、いまにも降りそうな中を、バス

で野辺山高原へ向った。甲府から離れるに従って、空気の冷たさとすがすがしさが感じられた。弘法坂をすぎたあたりから急に高原らしくなった。白樺も時折見えた。

バスから降りて一キロ歩いたか、二キロ歩いたかは覚えていないが、途中の牛やサイロの北海道を思わせる光景はありありと目に浮かぶ。ちよどさしてきた薄日のために黒い土が光り、六百数十名がえんえんと列している道のわきにある畑で、まだ黄緑色の葉が光った。私達は、黄緑色の葉や、建物や牛、それからひんやりした空気のそれぞれに、感心したり、嘆息をついたりした。

十一組は列のおわりの方なので目的地へ着いた時は、もう先着の連中、があらこちにかたまって座っていた。私達も気の合った仲間と、いい場所を選んだ。落ち付くと同時に、ナツバサックの口は開けられた、だが、周囲の自然に目をやることも忘れなかった。三十センチほどの草が一面に生い茂り、そのかげには小さな白い花ものぞいている。遠くは霧にかすんでいる。この自然美を何と表現したらよいかわからないので「いい形容詞が見つからないわね。」ということでごまかした。その後、数人は飯盛山へ登った。各クラス

く意見を述べていたようだった。現在全部この時話しあったことが守られているとはいえないが、各人が各人なりの自覚をしてやっていると思う。

最後に研修会についてはあるが、先生と生徒の関連を深めることについては、上出来と思うが、クラス単位の話し合いとなると価値が薄い。でもないよりはあった方がよいのではないだろうか。

身延山へ行つて思う事

内 藤 みつ子

縁の木々に囲まれた坊に着いて、甲府からたった二時間ぐらいのところだなどと思えないような環境に驚いた。目の前に見る山の生き生きした美しさに、いつも見る山と違った感じを受け取った。前日までの「行つてもつまらない。」と思つていた気持ちだが、「へんにくつがえされてしまった。新鮮な空気を胸いっぱい吸って今までの汚れた空気を吐き出した時、心の奥底までが清くなったような気がした。窓から見える木々が人間一人一人を描き出しているように感じられ、不思議に思つた。刃の話し合いに、最初のうち何か、か

十一組

ここでは、根岸先生を中心に、フオークダンスをした。今まで知つていたダンスのほかに、先生から『ラインワルツ』を教えていただいた。

草が踏まれて、サークルの跡が残った。踊り手に男子が少なかつたので「一高の男子は消極的なからね。」と無責任なことを言つては笑つた。山から帰つた人がユリを持ってきたのを見て、早速に花探しをした。休んでいたところから三分ほど歩いて、ずっと向こうまで花の咲きみだれているところを見つけた。やまぶき色で直径五センチほどのが、非常に目立つた。あざみの赤紫色も印象的だった。

バスに戻る頃、ずうつと霧がかかつてきて私達は灰色がかかつた乳白色の中を歩いた。ところどころに見る木立が黒く、家がぼんやり見えた。私はこんな風景が好きなのでうきうきした気持ちになつた。

葦崎まで帰つてくると、夏の日が痛いように感じられた。いつもの私達の環境へ戻つたのだ。このまま、またあの寒いくらいに涼しい野辺山へ行つてしまいたい感じ。

——この遠足の目的である生徒間の親睦を深めるということは、立派にその目的がなされたと思う。

研修会を顧みて

三枝 栄三

身延山研修会を行つてからも十数日立つたが、研修会をする前の生活とほぼ変つていない。

岩間先生のお話しには、確かに興味を感じた。しかし毎日をなかに抑圧されている僕達（若しくは僕だけ）のことだけに、難しく感じた。

遅刻寸前に教室へ到着。それから六・七時間真面目な顔をして過ごし、授業終了と共に鞆を小脇にかかえ教室を後にする。わき目も振らずに家に向う。秋の空がどんなに青く澄みきつてもとても目にはとまらない。家に早く帰つて勉強するのかというと、とても勉強なんて全々。そんなスピーデイの時代の中でこそ失われそうな人間の心と心とのふれ合いの暖さが特に尊いと言う教えに、今まで心の奥底で眠っていた良心又は人情というようなものが、たたき起こされたようだったが……。これが最高の収穫だったと思う。

次にクラスの議題についてだが、みんな良

んにふつ飛ばしてくれた。初めての事であつたが、ほんとうに自分の力をためす、いい機会だったと思う。

高校一年間を振り返つて最も印象に残っているのは強行遠足である。みな寝しずまつている中、真暗な大地の上を、その暗い中から僕は何かを求めて黙々と歩いた。やがて夜明けの身を切るような感触の中で僕は求めていた何かをつかんだ。雄大な八ツ岳、あたりの紅葉、朝霧がかかつた光景をバックにして真赤な太陽が昇つて行く、それは輝く、前途を暗示しているかのように僕には思えた。

強行遠足

2 保 坂 憲 治

葦崎までは調子がよかつた。葦崎をすぎると疲れが始め、次の長沢でやめようと思つたが友達のを励ましに促して、せめて三軒屋までと思い、やつとのことをついた。そこで飯を食べていると元気が出て来た。このぶんでは清里まで行けるかむしろないと思ひ元気を出して歩いていった。清里について休んでいた、一諸の友達が、のそのそと野辺山の方へ歩き出した。僕もせめてというわけでびつ

こをひきながらとうとう野辺山についてしまった。始め長沢でやるつもりだったがなんと野辺山まで足を運んだのは今さらながら驚いている。

まめのあと

矢崎一三

消え去りゆくまめのあと。瓜のあと。
みんな強行遠足でつくった傷だ。

秋の野辺山の紅葉を、右に左にながめながら杖をつくつと、びっこをひいて、

痛さをこらえ歩っただけ

消え去りゆくまめのあと、瓜の傷、

だが、あの苦しみと喜び

それは永遠に消えないだろう。



私は、しっかりした心構えを持って、正しい行動をしたいと思っています。

下駄履き

今沢政秀

下駄履きについて僕の感じたことを述べてみたい。これは県下で一高だけと思うが非常によいことである。足音高く、いや下駄音高く登校する生徒はいつ見ても清潔ですががしく感じられる。それに加えて他校の生徒の夏の日中で靴をはいている姿はすこしオーバーな表現だが痛ましく思う。毎日靴下を取り換える必要もなく、衛生的であるばかりでなく面倒も少なくて済む。しかし冬の間は、自転車通校なので冷たくて履けないのが残念です。

空虚

河野清二

朝、起きる。

いやたきおこされて飯を食い汽車に乗って学校に行く。わけのわからぬ講義を聞いて、さされた時には借りたノートをもって黒板に

随想

ザブトンまわし

石原修

入学してからそろそろ一年たつが、この一年間勉強はサツパリだめだった。しかし「フトン回し」だけはうまくなった。二学期から休み時間にたゆまず練習したので今では両手に腰ブトンのをせて一度に両方まわせるようになった。またまわしすぎて指にタコができてきたし、腰ブトンがすりへって穴があいてしまった。このごろでは腰ブトンだけではなくカバンやスケッチ、フックもまわせるようになった。このことから何事も熱意をもってすることが大切だということがわかった。このことがこの一年間で学んだ最高の教えだと思う。

行動について

大木節子

私は四十余分バスに揺れて通学している。普通、朝はとても混雑して、カバンを持ったまま、立つていなければならない。そんな時、持ってくれる人が居ると、とてもありがたい。また、老人や小さい子に席を譲ってあげた態度を見ると、良い感じを受ける。その人の親切な心は美しい行動として現われる。自分がしようとする、勇気が必要としてなかなかできない。こんなちよつとしたことも、心持ちによって、良い行動をするのか、誤った行動をするのかが決定するのではないだろうか。環境が悪かったので、誤った行動をしてしまったということがある。しかし、悪環境であつたからというのでなく、その人の心が、環境に負けたからではないだろうか。

行く。休み時間に飯をくう。せめてもの自己疎外からの脱出。ベルが鳴り終つて汽車が出る。単純な毎日のくり返し。むなしさ、わびしさ、そして不安とあせり。

なんとかしなくちゃあ。

兄弟

山田七利

最初まわりの人が、みな落ちつきはらつてすましていたころ、妙な学校にはいったものだと思つていたが、なんの、すぐ兄弟になれだ

世間一般暗い生活といわれるが、学校ではそんなふうには見えない。よき兄弟であつた。

中学より、友人の環境のちがいがすくないせいもあつて、互いが互いをしたいつ、一年間なんとなくすましてきたが、みんな一生の兄弟になりたいものだ。

電車の中で

岩崎法子

平日の朝の電車はひどいものである。にこやかな顔をしている人などはまずないだろ

う。電車が発車する時、止まることに、各人各様な表情で不快さをあらわしている。私も負けずに、いやな顔をしているにちがいない。また、昼頃の電卓の中はのんびりしたもので、外の景色さえものんびりしているように思えてくるから不思議だ。朝の雰囲気とは正反対である。電車が揺れると一諸に居眠りをする人もいる。私もねむくなつてきた。

拾い物

大木裕子

卒直にいつて協同生活では人の和ということ、が、いかに大切であるかを知らされた、というひろい物である。これはこの半年間、生徒会本部の仕事にたずさわつての感想であるが、音楽会のことにしても、映画前売券販売にしても多くの人々の協力のありがたさ、尊さを身にしみ感じた。と同時に、そこに生涯忘れ得ない教訓を学ぶことが出来たように思う。

希望

河阪幾代

生徒の多さに目を丸くし、高い窓の板壁に見おろされる様で、ちよつと、肩をすぼめたり、また、そうしたりしていた私も、今では自他ともに許す一高生となり、中学時代に思いをはせる事も少なくなり、ました。席のまわりの友達とも心から笑い合う事ができ、手をひかれる様にして、一年ぼつくりの時も過ぎていきました。そして、小鳥のチィッチィッという鳴き声と、冷たい風が運んでくる明かりの光が、私の心を希望でいっぱいにしていきます。

春

五味恵子

とかく私たちはテストが長くつづいたりすると、その競争への抵抗のために目標を狂わせたり、努力をほうきしたくなったり、その場に人間疎外を感じたりするものです。でも、あの美しい夜明けの前に、まっ暗な

ナリタクナイヨーオ。

T・V

遠山和男

「テレビは目を悪くする、成績もおちる。」などと云う人がいるが、単純に考えると「なるほどそうかもしれない。」と思う。しかし調査の結果、くわしいことは知らないが「目はテレビからは害を受けないことがわかつている。そして、勉強のできる人（勉強狂を除く）は、テレビを見る時間が長いそうである。が、そうだからといって、勉強に追われている人が、じゃんじゃんテレビを見るなんてことは、よろしくない。あれはあれ、これはこれ、又、テレビによって、皆読書しなくなつたのは事実だ。しかし、内分けを見ると減少したのは、悪影響を与える本であつて、ノンフィクションものの読書は増加しているようである。そしてそれに、最近では、テレビの内容も良くなつてゐる。「テレビは何だ、かんだ。」とくつてかかるのはえんりよして、日常生活の知識の貯蔵、娯楽の用品として、大いにテレビを利用しようではないか。

厚い雲にとざされた空があると同様に、私たちには今の競争の後に、すばらしい夜明けが約束されているのです。冬の間はすっかり裸になつてゐるいちようの木でも、そばによつてみると小さなつぼみをいっぱいつけて春の来るのを待つてゐるようです。

なつかしき山々

斉藤栄子

音楽部の合宿。初めての体験だけに、期待に胸をふくらませていた。親を離れて一週間夜遅くまで友達と話をしたり遊んだり、まるで小学生のようだった。しかし、練習だけは一生懸命した。時にはいやになり、だらけてしまつたこともあつたけれど……。あれから七カ月たつた今でも合宿の時の練習風景がまざまざと頭に浮かんでくるのである。できることならば、もう一度あの日に戻りたい。

無題

白上末知子

人は何かを失つた時に、始めてその物が何

陰影

金原圭子

この地球上の目に見えるすべての物は陰影を持つ。これらは陰影を持つからこそ立体的に見える。しかし一つだけ陰影を持たない方がよい物がある。それは人間の心だ。私自身この陰影のある心を持つてゐることをつくづくいやになつてゐる。何かをしきりに影へおしやつて隠そうとしてゐる自分の心にフツと気づくと人間としてこの自分を最高にいやになる。その時、痛切に自己嫌悪を感じる。

せわしい生活の中で

小宮山陽子

「足からむ枯草のかさかさという音と、寒い空気が冬だと思わせてくれます。その女の子、が上を向いた時つぶやきました。『小さいけれどたくさん幸せだな。光がいっぱいある。長いこと忘れていたみたい。うん、幸せだね。』と。女の子の頭の上には、消えそうな程小さい、けれどたくさん山の星が広がつてゐたのです。」夏休みの時だったかこんな風

であるかを知る。こんなことを聞いたことがある。私にはこの一年間に失つた物が何であるか、はつきりわかる。が、それ以上にたくさん得ることができたものもわかるような感じがする。

時間のヴェールがいやなもの、すべてをおつてくれて、今はただ楽しく、美しい思いでのみが残つてゐる。

名も無く能無く

金も無く

金丸吉宗

中間テストにも負けず、期末テストにも負けず、続く小言も物とせず、毎晩喫茶店に通い、良くない友達と遊び、ニコリとせず、いつもくだをまいてゐる。一日煙草三本と水と少々の酒を飲みどんな事にも暴力をふるい、北に強い者あれば行つて味方をし、南にイカス女学生いれば行つて甘い言葉で誘い、西にガマ口が落ちていればむろんねこばはし、さらに東にも落ちていれば腹一杯焼イモを食い、時々変な音を立てても、顔色一つ変えずに食い続け、皆にいやな顔をされ、どんな事を言われてものとはしない、そういう男に私は

な文に気づいたことがあります。きつこの人は、忙しく動く社会にそんな小さい星のことや冬が来ていること、踏むと気持ちのよい音を出す枯草のことなど忘れていたのでしょう。夢みたいな話です。

いろいろと考え、自分を集団の中にとけこませ、それを気持よく動かそうとすることは大切なことだと思ひます。でも時々私は、この話の中の人がつぶやいた時の気持——何も考えないでいた時にふと思う——そんな気持ちを、集団を離れて、まわりの事に関係になく持つ時があつてもいいんじゃないかと考えたります。楽しい事ですし、せわしい生活の中では、必要なことだと思ひます。

ほっぺちゃん

鈴木和子

「ねえちゃん」と、いつも私の家に来るあの子

まっかなりんごのほっぺ。

いつも泣いてひびかれてるほっぺ。

私はこの子を「ほっぺちゃん」と呼んでゐる。

だってほおをすりよせるのが得意なんだから。

の。

「ほつぺちゃんしよう。」「ほつぺちゃんしよう。」と、ほおをすりよせてくる。九十のパンが大好物。両手に大きなパンを持って交互にかじる。美容体操が大好きで足の屈伸がとてもじょうずだ。

だから私は「ほつぺちゃん」はダンスの先生になればとも思っている。でもこのごろかぜをひいたのか見えない。でも、あしたかあさつてかやねあさつてか「ほつぺちゃん」は九十のパンを買いに来る。てまたよるだろう……。

友情にしいて考える

保 坂 美智子

友情とはいったいどんなものであろうか。ある人は「お互いの信頼で結ばれるものだ」と言った。しかし私にはわからない。私は今までに幾人かの親しい友を持った。どんなことでも気軽に相談できる、そんな友を。だが、それらの交わりはいつも短期間で終わってしまった。そして、そこには何かさみしい気持ちが残った。友情とはそんなにはかな

く消えてしまうものだろうか。私にはどうしてもそうとは思えなかった。同時に、自分の友情に対する考えに、不安をいだきはじめていた。新しい友をつくるのもためらいがちだった。そして、自分一人がとり残されていくような気さえた。ある人はこんなこともいった。「それは単なる遊び相手にすぎなかった。お互いに其の姿を見つめ合える友でなくては友情は生まれぬ。」と。私は何か根本的なことを忘れていたような気がする。そして自分のありのままの姿を見てもらえるような自分になりたいと思った。

銀世界に遊ぶ

エイトクッチャーズ

望月、保坂、白上、五味

小野、大平、市川、雨宮

二月十一日午前五時半出発。
暗闇と俗界を脱出。雲海の中を行く。
十時、霧が峯到着
踊り狂う雪、雪、雪。視界〇、積雪一メートル〇。
我ら若人の姿は白銀にはえ、足より細いスラックス、色様々なアノラック、ずり落ちそ

うなサングラスに、なつかしいようちゃん帽のいでたちも勇ましく、重いスキーをかついでグレンデに出れば身も心も吸い込まれそうな雪の世界に一同歓声をあげた。

スキーを履く手もどかしく心は早くもグレンデへ。
登る阿呆に滑る阿呆、同じ阿呆なら滑らにや損々。

白銀に愛をささやくAさん。食欲旺盛、雪まで食べるBさん。ドスン、ダダダー。地球にめりこむような巨大な穴はCさんの作品。雪煙をたて、風をきって進むDさん。滑るより転ぶ方に一生懸命のEさん。オリンピック選手級の格好はFさん。雪だるまに化したGさん。髪の毛につらら、おしりに雪のうろこのHさん。

それでもしばらくすると皆どうやら滑べれるようになった。

突如現われる我が一高スキー部の面々。さすがに滑るのはお手のもの。身にあまる親切には頭がさがる(?)。

吹雪は激しさを増し、風も冷たい。しかし若き十代の力は、体を燃やし、寒気を押しつけ、グレンデを征服したのである。

グレンデより帰ってバスに戻れば、いよい

スキーについて

中 沢 厚 男

僕のスキーは、たしか小学校の三年ぐらいから始めたのだと思う。それ以来ずつと、毎年二回ぐらいは、履くには履くのだが、すこしも上手にならない。そこで、本などを買って来て、いろいろ研究する、ということになるのだが、実際に滑って見ると、とても、それに書いてあるようにはいかない。それが本当のところだ。それでも毎年重い板をかついでスキー場に出向くのなら、スキーとは、よつぽど、僕を引きつけて離さないものらしい。



詩と歌

鈴 木

徹

教室に学ぶ友らの頬をそむ
秋の陽さしのいとあたたか、

よハッスルの時期来たる。再びナツプサックを広げる人、どら声をはりあげる人。最大のスターは渡辺先生。
ここに一年十一組の女子によるエイトクッチャーズなるものが生まれた。
名付親は古屋先生。八人でよく食つちやー飲んちやーするからだそうだ。
ひき続き、最後尾の我々二列でマイクを独占し、甲府一高第一放送を開局。
語学放送として、はミスター、ワタナベの……..
コーラスはエイトクッチャーズを中心に、クラシックからポピュラーまで。
村会議員立候補古屋先生のハワイアンギターならぬ、鼻いやんギター独奏。同じく村会議員立候補の渡辺先生の高校一年生。一段上がって市会議員立候補の山田先生のミュージカル自叙伝「……長ずるに及んで……長ずるに及んで……。」
高野先生を局長とした第二放送も開局し、車窓の美しい景色を実況放送。そのdelicateなexpressionに我々エイトクッチャーズは初めて車窓の雪景色に見いつたのである。
食べたり、歌ったり口は忙しかった。バス後部の揺れは激しく、消化はよろしい様でも

哀しみと孤独

坂本文彦

平林智雄

長谷部 幸男

夜

再びくるな。
と願ったのに、
とうとうきちゃった。
哀しい夜。

夢

終車はたち、
始発まではまだかなり時間があります。
眠ってしまったプラットホームに
不良少年の
靴音だけが聞こえます。
幽かに、吐息といつしよに。

時計だけが
寝ずの番。

哀しいリズムが聞かれます。

カチカチカチカチ カチカチカチカチ

無題

河野拓人

残雪を集め

サラサラと流れ

岩をほこび、

深いすんだよじみをつくり、

ただひたすらに流れる川。

川の音もゴーと変った

長い橋をくぐり、

小石をはい

魚とたわむれるが

流れることも忘れない。

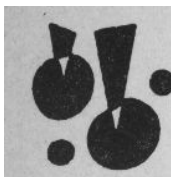
川は自分が大きくなったことがわかった、

もはや河となつた、

音もなく流れた、

河は、自分がわからなくなった、

広い海と化した。



カチカチカチカチ カチカチカチカチ
カチカチカチカチ カチカチカチカチ
カチカチカチカチ カチカチカチ、
幽かに聞こえる時計の音が
哀感だけを 伴って。
待合室の長椅子は
浮浪者の
安楽の寝台です。
飲み捨てられた酒びんに。
云いしれぬ
諦めの臭いが。
ブウンと――。

屋 台

屋台の。

アセチレンの灯が寂しく燃える。

赤い提灯が僕に

手招き。

薄暗い屋台の片隅に

男女の下卑た話し声。

鋭いとげが僕の胸に――。

アプレ女が僕を誘う

はずつば女めが。

外には、千鳥足の男女が

過去と未来

津久井 文明

無我夢中の一年であった。

緊張しつづけた一年でもあった。

その中には、

すべてのものが、春の陽光に歓喜し、

押えることのできない情熱が

炎のごとく燃えあがり、

体中をぐるぐるまわり

騒がしくなめつくした時もあった。

その中には、

心のともしびも消えうせ、

心の泉も乾ききって

心の中に鉛の玉が沈んでいたような時もあ

った。

反省の多い一年であった。

悔恨の深い一年でもあった。

毎日、毎日を、

人生の一部分にすぎず

しかし又、最も大事なその時を

何かにせきたてられているように感じながら。

隣の屋台の焙声が。
快樂のみをたよりに――。
今日だけを
楽しんでるんです。

夜

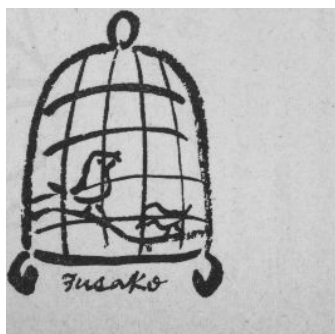
哀しみにうちひしがれて
星囊夜の街を。
不良少年が帰ります。
煙はスウツと、
溜息はソツと、
暗い夜空に吸い込まれ
石につまずき、

犬にさえ吠えられて
泣きながら。
不良少年が帰ります。

朝

清々しい朝でも
物憂いいらだたしい気分で
コソコソと起きるんです。
いつも――。

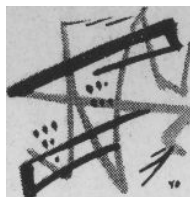
食事には味噌汁かけて
ペチヨベチコと食べるんです。
哀しみだけを食べるんです。



古い地図

守山源造

「ガラ」とした小使室で、釘抜きを、もうこれ以上探しても無駄だとあきらめた。



それでも何とかして、庭の片隅から赤くさびた短い鉄の棒を見つけ出した。それを釘抜きの代りにして、ガラス戸や入口の板をとめてある釘を一本一本むしり取るように抜きはじめる。五、六本抜いただけで、指先はさらさらと赤く鉄のさびでそまつた。

部屋の中には、ほこりをかむった畳が、十二、三枚敷きつめてあり古い大きな戸棚の背には、巻かれた地図が、ながながと寄せかけてある。いつ頃使った地図なのであろうか、巻いた外側の布地は、色がすっかりさめきつてしまい、ところどころにしみさえ見える。

る。落着きをもつようになってきた。夏は特に暑い教室で、風通しは悪く、ガラス戸を全部外しても間に合わない日もあったが、生徒は次第に、この教室になじみ、この教室を愛するようになってきた。寒い冬の日の午後、一万米のすんだ後、疲れた生徒らが下校してしまつてからの、ひっそりとした部屋で、二、三の女生徒が、目立たないようにカーテンの洗濯をすませ、干していたこともある。早いもので、あれからもう一年になる。ほこりっぽい部屋だったこ

一年間をふりかえつて



わが友へ

木原悦子

時は正確な歩みが続けた。私達に新鮮な環境を与え新しき友を紹介してくれた。桜の花が散り、五月の空にこいのぼりが泳ぎ、あじさいが雨にぬれ、ひまわりがお日様と語り合い……時は谷川の如く清くすみやかに流れ去った。私はあなたと負の走流性をもってそれに臨んだ。あなたと窓辺で歌い、あなたとお弁

当の時間語り合い、あなたと数学のトラを……。私はあなたの外観を知った。赤トンボが垣根に戯れ、菊の香が漂いはじめた。あなたと高原を歩き、又下校の道で電車の中で笑いこらげた。私はちよつぱりあなたを知った。やがて霜柱が土を押し上げ、梅のたよりが聞こえる様になった。授業中あなたといたずらをし、休み時間は変更板を見た。でも私はあなたを知り尽す事はできなかった。しかしあなたは友として私の心で映像された。すこく美しい潔白な姿で焼き付けられた。わが友よ

畳を階段近くの廊下までかつぎ出し、戸棚や、脚のびつこの机などを、部屋の外まで押し出した。汗とほこりで、下着がベツトリと肌にまつわりつく。先程まで気にしていたワイシャツも、これまでよければ、あきらめもつく。部屋の中の、ほこりを掃きまといめ、はめ板を一通り雑巾で拭きおえたら、ぐったりとした。最後に片附けようと思っていた、長い地図は、動かすのも、おつくうになつてしまつた。面倒くさくなつて、部屋の内側の窓の上に、投げるようにのせて一応の掃除をすませる。

これが一年十二組の教室造りの初めである。

その後、机もなんとか運び込み、新入生の諸君と、初の対面をした時は、さすがに嬉しく、まぶたが、うるむ思いであった。新しい帽子と、黄色に光るボタンは、ほこりまみれの古い地図と対称的であった。

一学期の学級役員もきまり、掲示係の生徒を中心にして、教室の整備も進み、壁紙などが張りめぐらされると、その部屋は、温か味のあるの部屋が、数々の思い出をもつ教室に変わり、更に又新しい生徒を迎えようとしている。古い地図は誰にも気づかれずに、きょうも、そつと窓の上ののっている。クラスの生活を、誰よりもよく知っているのは、ほこりまみれの、この古い地図であらうか。そうして生徒らは明るく、伸び伸びと、新しい学年を迎えようとしている。

時は未来を私達に与えてくれるだろう。共に確かな歩みが続けようではないか。私はあなたと結ばれた。永久に切れる事を知らない太いロープによつて、「美しい友情をいつまでも……」私はあなたに向つてそう叫んだ。

この一年

土屋 一三

高校生活第一年目のこの一年が終る。この一年。短かい一年だった。本当に短かい一年だった。

けれどもこの一年、号いろいろなことがあった。本当にいろいろなことが。高校入学、そしてあのこと、このこと。見る物、聞く物、感ずる物、すべてが大きく変わった。川の流

れのように。

しかし考えてみると、この一年、自分自身はその激しい流れに押し流されてしまっていたようだ。その流れの方向へ。この一年の、このはじめての世界で、自分自身の行動をすることを知らなかった。うわべだけをこの世界に対応させていた。すぐ高校生活第二年目だ。これから僕は大きな気持ちをもって歩んでいきたい。十二組の皆さんお互いに頑張りましょう。

この一年、短かい一年だった。けれども本当に貴重な一年だった。

わが一年の回想

小川 一郎

空虚な高校一年の生活が過ぎようとしている。過去一年間をふり返ってみると。

一学期 入学式、クラスは十二組。知りあいばかり。あとは知らんやつばかりで緊張が続く、学力テストが終わる頃から教室は暑くないやな毎日であった。

二学期 実に多彩な行事の季節 体育祭、研

あんなに恐れていた程、未知の世界ではなかったけれど、思いの外単調であった。

「高校つて意外につまらなかったね」と、Mも言っていた。 「理想が現実ばなれしでいすぎたんでしょ。でもまだ一年半はあるのよ」それはそのまま自分へのことばである高校生としてこの一年、自分にはたいした成長がなかったように思われる。無駄に日ばかり数ええているようでいやになる。なんとかしなければいけない。

この一年

山本睦子

「ハイ／ それでは予定帳を開いて／」。
「これをドイツ式に言うわ〜」

「Seeing is believing」
ある教室のこと。聞きての不熱心に気づいた先生「いいか、ここをテストにだすぞ」とたんにみなぎる緊張、その時である「ケチ／」等々の言葉、それは私達に笑い、さわやかさを何度か運んでくれました。春の運んだ眠気。完全暖房の夏。おまけに冬は完全冷房それは私の精神に、たくましさを植えたことでしょう。

修旅行、強行遠足、文化祭等、精神年齢が低いため落着かず、学校生活、友達にもねれずますますって落着きがなくなる。

三学期 二年進級可か否かで悩まされる。一学期と怠けてくると会話の中で「単位」という言葉がでてくると震えが起る。その上教室は完全冷房とくるので輪をかけるように震えが起る、精神健康上共によくない。

早かった一年

小林 幸博

高校生活の三分の一はもう終わりである。

「早すぎる」と言っても、もう終わりである。昨年の四月、だぶだぶの服をきて入学した時は、まだ四校時が終了する前に、弁当のふたを開けている者はいなかった一。

一学期が終わり。夏休みもすぎて、二学期。ようやく遊びぐせがぬけたころ、ぼくは足を折ってしまった。そして垂たいギブスをつけ学校のことを気にしながら、家でひっくり返っていた。半月、一ヶ月とたつうちに、あせてきた。あせているうちに二学期も終わった。そして三学期も、もう終わりである。

私は今、北風のあまりの痛さに、オーバーのえりをたて、日だまりで見つけた小さな春が、去年とは違った趣を添えて、私の体にしみ込んでくるのを感じます。

一年をふり返って

桶田 ゆかり

走った。思いきり無我無中で、あの時は苦しかった。でも今考えてみて、もし走らなかつたら、きっと後悔していたにちがいない。強行遠足ばかりではない、勉強だって、クラブ活動だって、自分が出せる限りの力を出して、それにぶつかっていく。そうすれば結果も多少なりとも気になつても「自分はやるだけやったんだ」となぐさめになる。そんな生活をしたい。今の私はすぐ結果のみを考える。その前に全力をつくしたのかどうかということを全然考えない……。

もうすぐ一年という長い月日を終えて二年生となる。一年をふり返って何度も耳にしたこのことばを、これからの目標として頑張りたい。

づいていなかった一年間だった。でも、学校にいる時は楽しかった一年間だった。早くすぎた一年間だった。

流れ

神宮寺 俊夫

一年間の流れは早かった。川上で生まれた川の流れは、多くの岩にくだかれ、多くの滝を下った。そして渦をまいた。支流へ流れた。再び本流にもどった。再び岩にぶつかる、またもぶつかる。そして暗い谷間を通り、ちょっと広い所へ出る。そして考える「もう少し何とかしなくては」。結論は出ずに再び暗い所へ入る。広い所へ出ると考える。「何とかしなくては」そうだ。何とかしなくては、もう結論が出ていい頃だ。よく考え、そして決定しよう。太平洋の大海原へ流れ出る日のために／

ある日の日記から

富田 裕子

×月×日 新しい年がまた来た。いつの間にか一年がたってしまった。高校の生活残

暦の上の今日と今

村松 万佐子

入学当時は新品だった机が、今では三角関数や不可解な文字で氾濫し、黒く変色している。その机に腰かけて、教室を見回すと、紙でベニヤのはがれをカモフラージュした壁や板の割れ目から隣りの部屋がのぞける戸、すき間風の入ってくる窓が目につく。それに誰の立案だったか、黒板の横には皆の十円募金で買った花が、殺風景な教室に色どりをそえている。これが私の過ごした十二組だ。この教室で、テストの点に一喜一憂し、友だちと議論し、ふざけあった事も、あと数日で終ろうとしている。一年なんてあっと言うまに過ぎてしまうものだ。＼ 暦の上の今日という日は来ても、今という時は永久に来ない。＼ という言葉が思い出されるが、これからは、今という瞬間を大切に、生活していきたいと思ふ。



恐い恐い一時間

桜本安善

空腹と恐怖のために体中冷汗でぐっしょりぬれている。「あつ」彼もまたやられた。これできょうは三人がやられた。きのうは七人もやられている。六番目はおれの番だ。隣の部屋の奴は大きな虎を飼っている。それで、あの殺人魔も手が出せないだろう。が、おれは飼っていない。どうしよう。今何時なんだろう。腹はすいてくる一方だ。目の前が暗くなってきた。こまった。どうすれば助かるんだ。ついに隣までやって来た。やはり彼は助かった。今度はおれの番だ。足音がはつきりと聞こえてきた。ドアをこわしている。ああこまった。奇跡よ起こってくれ。カラン、カラン、カラン、起こった奇跡が……。

四時間目英語の時間より

クラブと私

中島洋子

クラブの経験が全然なかった私は、友だちから書道部への入部を誘われてこまった。

ものだろうか、それもわからない。しかし次の試験の時私が終了のベルを目指すことは確かだ。不思議だ。

闇の中を

望月和典

最も印象に残っていることといえば第一にそれをあげなければならない。本校年間最大事業として古い伝統を持つそれは十月×日実施された。九時本校スタート、一路西へと：S地点からどれくらいか。水を飲み過ぎて体は弱っている。「なあに、たった二キロだ、それががんばれ」だがその二キロがこれほどえらいとは。何度もうだめだと思ったか。何度がつかりさせられたか。そしてK地点へ着いた時の気持、今でもはつきりとここにある。そして暗い夜道を歩く時必ずといっていいくらいそれを思い出す。それは一生自分の記憶に深い根を持つことだろう。

強行遠足

田口幹夫

強行遠足は始った。あたりは真晴だ。懐中

今まで筆を持ったことも少なく、おちつきのない私が、書というもの、芸術というものに、うちこめるかどうか心配だったからである。でもそんな不安はみごとにくつがえされた。先輩は私たち新入生を大歓迎してくれ、その日から私は毎日、ユーモアと笑いつつまれて書道をしたり、友情を深めたりしてきた。洋ちゃんという愛称までもらった。でもいったん紙に向かい筆をもつとユーモアと笑いはいつべんに隙熱と真刺さにかわる。そんな時の部員たちの真剣な表情が私をクラブに強くひっぱっている。今では私は書道部に入部したことを幸せにも感じ、誇りにも思っている。私は書道部が好きだ。これはだれの前でも言える事実だ。

あの時の色

角田啓子

野辺山へと私が息を切らせながら日陰の山の端を廻りきった時だった。灰色のからまつ幹と枝。そして灰色と茶色と黄色をまぜたような色の葉とが、山峡の平野を二段にぬり分けたように続いている。その中に赤い小海線の鉄橋と、たった一本の暗緑色のもみの木

電燈の光だけが無気味に暗やみの中に光る。N、S君と一諸に歩いた。しかしこの二人達とも夜明け頃には分れていた。野辺山から先は前進に抵抗が多かった。天気は雨だ。一諸に歩く人はいない。松原湖へ着いた時、もう終りだ。やめようとした。腰をすえて休んだ。しかしN君がさらに先へ進むのを見た。再び歩き始めた。足はこの上もなく痛く、つら

詩

考え

中沢倫子

私達はいつも何か考えてきた
もう何年いろいろなことを考えてきただろう
一つのことを考え
それがすむとまた一つのことを考え
あきることなくだれもが

が、その単調だが落着いた色調の中アクセントになつていた。細く白い秋の雨が時々落ちてくるような日だったので、そこにはかすかな霧がかかっていたのかも知れないが……。
その静かな落着いた色調を今でも時々思い出している。

試験時

山本一美

試験の始まる数日も前から、そして試験の最中も私は常にそのテストが早く終る事を望んでいる。常にテストの終了を知らせる鐘の音を待っている。そしてその瞬間のことを考えただけで何となく胸がドキドキしてくる。しかし現実はその時間が私のものになると私の心は期待した程は愉快にはならない。楽しいようでもあり、気の抜けたようでもあり、しかも妙な満足感に襲われる。何となく空虚になる「読みかけのあの本を読んではおう、あそこへも行こう」この考えもどこかへ飛んでしまふ。バスへ乗っても歩いても晴々しない。何時からこんな気持ちに襲われ出したのか想い出せない。何故だろう。結果がおもしろくないからだろうか。わからない。何か別の

った。S君も後から来た。また三人で一諸に歩き始めた。中込に着く少し前で、トマトと塩をくれた。しかしこの塩は以前経験したことがなく砂糖のように甘かった。中込へ着いた時は、服はすこぬれていた、遠足のあしたは「バカゲタコト」をしたと思った。しかし今はそうは思わない。よいことをしたなあと思う。



これをくり返している
ある時は、とても苦しみ
ある時は、とても悲しみ
しかし、すぎさつたあとには
何か私達を高めてくれるのだ
どんなに、ちいさなことで
ある人は、とても真剣に考え
ある人は、簡単にかたづけしてしまう
そして皆、ちがつたことを考え
成長していくのだ

その考えがどんなに甘いものでも
どんなに簡単でも

だれも、が、いつかは自分の考えの甘さを知り
次第にきびしい考えをもつよう変わっていく
のだ

ほら、あそこで。それ、ここで

世界中の人間が何かを考え悩んでいるではな
いか

朝

米山静子

高校生になって

八時には教室の戸をあける私

静かな朝

だれもない教室で
陽の光は机にさし
私は一人教室にいる

白いカーテンを引き

今日はどんなことが起こるだろうと考え
友の登校するのを待っている

澄んだ大気の中で

小鳥のさえずりだけが聞こえる静かな朝

無題

吉村真佐子

私は美白な闇をがむしやらに進む
何も考えず、足だけ動かし

後を見ることが知らない

果てしない白い野原を滑るために

灰色の世界は楽しい。青いわくの外の大自然

前も上も変らない、横も上も変らない。

けれど不思議に勇気が起こる

だれも後から来なかったら

私は死にさまようだろうが

ふぶきの中、私は平気

ま昼の小さな決闘、雪は私につきあたる。

ああ小屋よ……

リフトよ、スキーヤーよ／

はやく現れておくれ

楽しさを求めて、スリルを求めて、私は急ぐ

新雪の上を、新雪の中を

心は滑っているよう

アレトウドルワ／アレトウドルワ

グレンデはまっている。

知友

守屋操

あなたの前に春はくる

あなたの声が私にかえる

緑のいぶきがあなたを包む

あなたの前に私は立つ

あなたの鼓動が私に響く

私は、覚えている

あなたが「海が好き」といったこと

あなたが「死にたくない」といったこと

木々は葉は呼び、土はにおう

されど、あなたは帰り来ぬ

時は逸走、七年は過ぎつ

あなたの上に生命が宿る

あなたの生命は春のいぶきだ

ある夜

乙黒こずえ

暗やみの中に青白い光が一すじ

それは神から彼女に与えられた道であつた

しかし

彼女は視外にみとれ、夢をみつづけていた

あたたかい日ざし、甘い音楽

おしゃべりな友達もみんな彼女を

誘惑するものであった

彼女は自分を忘れていた

変化のない毎日がすぎていった

ある夜、一人ぼっちになってしまった

風がふいていた、心細さにふるえ……

ふと、何を何のために……

そう考えると、彼女は何か忘れていた物が帰

って来るように感じた

しかし、彼女にとって大切な事をみんな見失

っていた

落葉の中をとぼとぼ、あてもなく歩いてゆく

老人のように

彼女の心はさまよいつづけた

そして得た物は「明日からしつかりやろう」

それが一番大切な物だろうと……

そう思ってきたように

大自然に目を向けよ

石原澄恵

大自然に目を向けよ

そして考えよ

人の世の姿を

遠い山脈の姿、それはやさしく力強いもの

人の世の姿、それはきびしく弱いもの

夏の高原の姿、それは果てしなく広いもの

人の世の姿、それは小さく狭いもの

大自然はありのまま美しいもの

人の世はいつわりが多くさびしいもの

人間は弱すぎるあまりにも弱すぎる

私は言う、すべての人に

大自然に目を向けよ

それから考えよ

どうすれば大自然になれるかを、と。

この一年間

浅川博子

どのくらい登ったんだろうと思つて

下を見おろした

高校の旗からはまだほんのちよつぱりだ

上を仰いでみると

その瞬間眼前にどつとおしよせてきた

はるか向うのかなたに一年終了の旗が

雨

渡辺章

雨の放課後

つつ立つて灰色の空を見つめる

「ああ、雨のやつめ」

コートのを立てて校門を出た

ペタルに力が入る、顔に雨粒があたる

ビューター・

トラックが勢いよく追いついていった

いつそう強くペタルを踏む

雨粒がより強く顔にあたる

ひざがつめたい「ああ、雨のやつめ」

降りしきる雨の中を家路をいそぐ

朝の心

平井忠彦

まどをあけると
つめたい空気の感覚がほほをさわった
きもちがよい
こんな時には何もかも美しく見える
ああ、人生！
いつもこの気持ち
心にだきすすもう。

風は人のよう

佐野寿彦

風は人のよう
風には顔がある
暴風のような、鬼のような顔が
そよ風のような、やさしい顔が
風には愛がある
暑いときには、ぼくらの手助けをする
風は口をきく、ビュービューと
風はだれとも親類だ
陸上でも、海上でも

どこでも顔を出す
だから風は人のよう。

小人

笹本健博

みなさんはごぞんじですか
人間には生まれるとき
みんなひとりずつ
小さな小人の fairy がついてくるのを
小人はあなたの mascot
でもおりこうなあなたは
小人なんかいるもんか
と思っているのではありませんか
この科学と文明の今の時代に
小人なんかおかしくて
と思っているのではありませんか……
あなたが小人なんかいないと思つたとき
あなたの小人は死んでしまうのです
小人はあなたに幸せをしらせる司会者です
かわい司会者—それが小人です……
かわい司会者を信じてあげてください
それはだれのためでもありません
あなた自身の幸せのために……

もし私が……

小林哲朗

もし私が、だれかの胸のいたみを
とめることができれば
わたしの人生はむだではあるまい
もしわたしが、だれかの生きるなやみを
やわらげることができ
そのきずをいやすことができれば
あるいは、気をおとしている心を
そつと胸の中にもどしてやることができれば
わたしの人生は、むだではあるまい。

壁

剣持春雄

私の前に壁がある、幾枚かの壁がある。
その一つはつい一年前に、のり越えて来た
そして今度は二枚目だ
この壁がなんであるか
そんな事は私は知らない。
だが、この壁もいつかは越さなければならぬ
それがいつであるか私は知らない。

生きるつらさ

金原 栄

寂しさがあるから、つらいのです
だから涙が、あふれるのです
悲しみがあるから、つらいのです
だから涙が、こぼれるのです
希望があるから、楽しいのです
だから生きられるのです。

詩作

雨宮勝美

書けない、書けない
どうしてもぼくには書けない
ひからびた泉のように
ぼくの頭からは、なんの詩情も
生まれてこない
一滴の水さえも湧かない
いきものさえもない
からからに滴れている
ぼくの泉には

無題

北平二郎

紅や黄色の落葉を踏んで歩き回った
あの時の静かな心を想い出す
木立の名も知らぬ大きな鳥の泣き声が
林や山にこだましたつけ……
ふさわたる秋風は冷たく
落葉は深く私の足をかくしたつけ
空の青さが目にしみる
太陽は某を落した木々の間から
私の顔を照らしたつけ

心の富士

雨宮勝美

雄大な富士！
お前はいつも僕を見ている
お前はいつも何かを話しかける
けれど僕にはお前が
何を言っているのか分からない
知らぬふりをしているのか？
こんな自分がいやでたまらない。
雄大な富士！
僕はあまりにも汚ない奴なのだ

ぬぐつても、ぬぐつても
ぬぐいきれないしみをもち
それにまし、お前は、きれいだ
そんなお前にしつとを覚える
そんな自分がくやしい、にくい
今、僕は誰も気付かぬ遠い所で
お前を見ることしか許されない
だが、いまにみている
僕はお前の前に立ち進むのだ
そして、お前と遊びたわむれ
そして、きつとお前に
強いしつとを覚えさせてやる。

冬

阿部 太喜男

冬になると、寂しくなる
そんな時は、ひとりばつちで
夕陽の丘にたつて
幸福の歌を、力いっぱい歌おう
冬になると、なやむことが多くなる
莫白き雪の降る夜ほ
其赤に燃えるダンロにあたり
楽しかった夏の思い出をかたろう

は当分続きそうだ。

わたし

荻原和美

平凡な女の子。私。高校に入ってから、自
分を客観的に見る事が少しできるようになっ
た。そして私はやっぱり普通の人間だった。
あたりまえ過ぎた。でもとても大きな希望を
もっている。がんばろ。

友達、ひとりで考えこんだあと、いつも友
達に思っている事をぶつつけた。長い手紙も
書いた。彼女も私に投げてくる。こだまのよ
うに響いてくる励ましの返事。友達は大切。

ある日の日記から

小林敏公

無限にのびてきて、また無限にのびてゆく
その無限と無限との間の有限の一本の短かい
道。前は真つ暗な道。それが人生という道な
のだ。この道を輝やかせるも、くもらせるも、
他人がするのではない。それは私自身がする
のだ。私はこの道を歩み続ける。明かるい過
去は忘れ、暗い前だけを見つめ歩み続ける。

冬が北風をつれてやってくるころ

ぼくの胸にも孤独がそつと頭をもたげる

おれは見えた

樋口 一

おれは見えた
ゆうぐれの雑踏の中で
都会から田舎へ帰る電車が

随 想



忙しい朝

上田淑子

「お姉さん、古屋さんが走ってゆくよ」妹
が言った。「遅いかも知れないね」私はそう
言ってチャリと時計をみたが、別におそくも
ないようであった。しかし時計が遅れている
かも知れないと思って、かけだした。古屋さ

明かるい過去は忘れ、暗い前だけを見つめ歩
き続ける。二度と経験できないはかない道を
輝く道にするために歩み続ける。たとえその
道が他人には輝やいて見えなくてもよい。そ
れが私自身最善を尽くして歩んだ道ならそれ
は永遠に私自身の中に輝やき続けるだろう。」
こんなことを考えた。

わたしの願うこと

向山嘉代

「わたしの主人は、わたしをフルには使っ
てくれなかった。友だちに聞いてみると、友
だちは『私の主人は、私の顔なんか真赤にな
るほど使ってくれたよ』と答えてくれた。同
じ木から同じようにして作られたのに、わた
しも同じように使われたかった。お隣りさん
も、そんなふうに感じている様子だった。同
じ本箱の仲間と『こんなめに会うのは、私達
だけでたくさん』とか『こんな主人は持ちた
くないね』などと言ひ合った。『主人が来年
使う仲間達には、こんな思いをさせないよう
に』これがわたしが願うことです」

音もなく連なり過ぎるのを

同じ姿勢、同じ歩調、同じ間かくをもつて
同じ方向に、同じ目的に急ぐのを

おれが立ちどまつて過ぎゆく人を見た時

その人もとまつたように見えた

自分はそれから眼を離した時

左右へ急ぐ人々が

皆一定の法測にしぼられてるのを感じた

短 歌

早春 譜

市川直道

大空に弧を描きいる、とび一羽

二月の空に羽光り見ゆ

赤石の連峰白く甲斐盆地

早春の陽は乳色にかすむ

乳白に二月の夕べかすみいる

風なきし間をわれ庭に立つ

美しく西あかねして時の間を

春は音立ててもうそこに来し

歌作りよみかえしみれば腹立たし

破り捨てればかめの花散る

心つかれ荒れ行きしと思ふこのわれに

寒明けの寒さなおきびしけれ

清水永子

堪忍の終りしあとの心よさ

これ若い血の通うみちなり
忘れがたき身延の雄山かえりみば

日蓮の経聞えたるらむ

思 い 出

時 田 和 美

思い出はいい。思い出は過去の苦勞も苦しみも快としてくれる。のべ山の自然に身を沈め、自然の真のよさと偉大さを知る。煙る遠くの山も、足にまつわりつく霧も、今は昔し、信濃路を歩み、つまずくたびに顔をしかめては、日本の道路事情を改めて思う。百メートルが一キロメートルの長さを知り、文明の力の前に頭を下げる。人の世も、また、かくきびしく、つらきものと思いながら歩を進める。わが体力のわが氣力の力を求めて、秋には身延山に行き、神を、自然を、おのれ自身を考える。悩める者から考える者への上昇こそ、この一年最大の進歩であろう。

美を育てよう

武藤行子

人間が美を求めることは当然のことと思われます。しかし、本校では学校中穴だらけです。落書きもたくさんあります。四月には真新しかつた机も、今ではきすだらけになっ

てしまいました。是くらいと思っても、六〇〇人いれば六〇〇のきすができるのです。公共物はもつと大切に使わなければいけないなどということは、とうの昔からわかつているのです。

その反面、植木鉢で教室を飾ったことは非常によいことだと思えます。私たちのクラスではその外にも美しい花がたえません。こういう気持を皆が育てていけば、もつとノ１すばらしい学校になるのではないかと思います

一 点 鐘

笹本森雄

静かだった、静かな夜だった
時折り、にわかに風が吹いた
その風は、そのまま遠くへ吹きすぎた
一瞬の後、いつそう静かになった
そうして夜が更けた
そんな小さな旋じ風も
その後谷間を走らない。
一時が鳴った。一時が鳴った
一世紀半ばを生きた
顔の黄ばんだ老人のあの古い柱前計
こうして初まる三好達治の詩を、テストを

前にした夜などよく僕は思いだす。特別に好きな詩ではないがとても実感が出ている。今からも、またこの詩を思いだすような夜が幾度かあるだろう。

私 達

山下汎樹

知識のつかかさねが、学問の目的であろうか。学問は人生や宇宙のなぞを解く一つの手段にすぎないのではないだろうか。目的と手段を混合してはならないし、まして人に対して誇るべきものではないと思う。ややもすると私たち高校生、いや社会一般が、そういう傾向におちいりつつある。実際にそうである。しかし、そうあつていいのであろうか。私たちはもつと長い目で現代の生活を見るべきではないだろうか。環境や他人の考えに左右されないで。

緑 青

守 屋 一 博

画架の上にカンバスが置いてあつた。暗いグレーを主調とした街路、厚くのしかかる漆

黄色の層雲、そんななかで薄いピンクの撫子がひときわ艶めかしかつた。私ほとりとめのない不安に襲われ部屋を出た。外は白一色、それに雨天の赤が強い対比を表わしていた。

白い雪は中庭を埋め、太陽の光に反射して輝いていた。私は不安が心の隅へおしやられるように感じた。ふと木の方を見ると、黒味がかつた茶色の枝に生命の息吹きが感じられた。濃い紫色の新芽が陽光に映え輝いていた。「生命の息吹き！ 生命の息吹き！」私は二度つぶやいた。教会の鐘が鳴り始めた。部屋には画架の上にカンバスが置いてあつた。

瞑 想

村松資夫

祇園精舎の鐘の声……ひとえに風の前のちに同じ云々。すなわち万物の霊長たる人間は幾度かの興亡をくり返したのだ。興亡、より強い者が生きのびる現実。現代社会に於いて興えるとはいかなる事か？ 金を儲けて何になる。社長サンになったらモルモン教信者になりますか。亡びるに於てをや。去日の試験は失敗だ。あの娘に振られたらどうしよう。大学受験が心配だ等々。とかく此の世は住み

にくい住みにくきが昂じると「人生は不可解なり、とか何とかワメイテ、華嚴の滝へ飛び込んだ勇ましいオジサマの悩みに行きつくのではないだろうか。

映 画

森屋浩二

映画といえは、高校入学後は僕はまだ一本も見えていない。と言っても映画が嫌いなわけでもない。ただ去年は、いろいろな理由で見なかった。それではと、今年は「高校生活を楽しく有意義に暮すためにできるだけ見よう。」と決めたのだが、まだ一本も見えていない。もしかすると嫌いになってしまったのだろうか。いやそんなことはない、ただ時か金か好きなような映画がなかったのだろう。まあ、あしたからでもいいのがあったら見に行くこと、にしよう。

成長する時期

前村幸男

社会への仲間入りというか、義務教育から開放された僕たちはそれからすぐ高校へはい

った。上から与えられたものを受動的にやっていた昔と反対にこんどはすべて能動的に行動しなければならなくなった。勉強は少々つらいものなり、一日一日を悠々とすることはなくなった。そんな中で僕は成長した。体重もふえた。しかしそれ以上に心は成長した。考えることが多くなった。現在のこと、将来のこと、人生のこと、そして最後に行きつくところは「我身に対する頼りなさ」だった。これは自分勝手の思考による偏見かもしれない。とにかくいまは成長期だ。いろんなことを見、いろんなことを考えて成長したい。

日 記 よ り

藤 原 二 三 男

十一月七日

ふと足をとめた時。赤い蛇の目をさした、セーラー服が目に映ったり秋の雨はまだ降っていた。わけもなく急いだ。はねを上げほうだいに。蛇の目をのけた。とその時。後で、声がした。「入りませんか。」横に並んだ。が、ぬれたほうばの、はなおばかりみていた。「汽車に乗るんでしょ。お見送りしませ

う。」と、いわれても、うなずいたきりだった。いつのまにか。歩調はゆるやかに、なっていた。汽車が動き出した時、セラー服は白い手をふった。夢中でふり返った。赤い蛇の目が雨の中に消えるまで。気がつく、雨はやんでいた。遠方の山々の雪に。夕陽が赤く映っていた。むしろに悲しかった。「赤い蛇の目。さっきの事は夢だったのだから。」とも考えた。が、頭から赤色は消えなかった。それは雪に映っていた夕陽が、それとも蛇の目か、詰襟はぬれていて、身体は冷たかった。が、心の中に温かい物を感じた。

恐さ

林 幹、夫

人なら誰しも一度ならず恐い、恐ろしいという感情を持ったことがあります。そして昇れば人を臆病にし、卑怯にし、小心にしてまいります。では人は何をもちとも恐れていえるのでしょうか。死、神、戦い、犯罪等数えきれないほど人が恐れるものがあります。が、どれも人によって、また場合によって変化するものであって定まったものではありません。しかしそれらをよくながめてみると一つの共

通点をみつけることができます。それは過去は恐れないということです。つまり人は新しい一歩、新しい自分の又は他人の言葉を何よりも恐れるのだと思います。

志学の回想

内藤茂好

早いもんだ、あの時春で、夏がきて、秋がきて、今冬から春になろうとしている。希望に胸をふくらませていた、かつての姿、それが自分の事ではなかったように思われる。その時に立てた多様な計画は何一つ実行できず期待の多かった「志（避）学」の一年も今終ろうとしている。古典のテキストの始めの方にこんな文章があった。「道を学する人。タベには朝あらむことを思ひ。朝にはタベあらむことを思ひて。重ねてねんごろに修せむことを期す。いはんや一利郡のうちにおいて僻怠の心あることを。知らむや。なんぞただ今の一念においてただちにすることの。はなはだ難き。」兼好といへども毎日をいかげんにすごしたことがあったのだろうか、やはり、今も昔も同じなんだなと思いが、すぎ去った一

年を、もう一度ふり返ってみた。今まで、僕は自分なりに努力はした、短所を直そうともした。しかし、ついに「僻怠の心」に打ち勝つことはできなかった。兼好は我々に「毎日をいかげんにすゝすな、僻怠の心に勝て」と教えているんだらう。我々は人間として完成するために、さらに努力しなければならぬいんではないか。高い理想の中の自己にむかつて努力する姿こそ、本当にすばらしいものではないか。

過去の失敗をくやんではならない。現在のこの貴重な時間を有意義にすごさなければ……。歳月人を待たず。

美と愛

田 村一晴

この世は美しい。太陽・月・星・雲・山・月……。しかしその美しいものをこわす奴がいる。冷たいコンクリートが山を切り、雲をも切りさく。白く輝く鉄の鳥が空をわけてしまふ。それは人間だ。その上やたらに色をつくり、ベタへとわけもなく塗ってゆく。山にも、空にも、川にも。悲しい。人間がこの世に生まれたからだ。殺してしまえ。一人残

いのないように。

憩うコト

小 沢一隆

あの人はいい人だと聞いて、大がいの人はいい人に見えるし、！悪い人だと聞いてみれば大がいの人は悪い人に見える。事実、大がいの人はいい人であり同時に悪い人だからである。ゆえにあなたはあの人をいい人だと見てやりたまえ、それによりあの人もあるあなたも楽しくなるだらう。友人関係が楽しくなったら前進しよう。――若い生命が欲する物に体中でぶつかっていこう。すんでしまったことはしかたがない、神様が必要だと思ったことだけ君にあなたえてくれるのだ。あとは毎日楽しい（へ）思っって生活すればそれでいいじゃないか……。

自分

渡辺良樹

自分は今オートバイを運転しており自分自身楽しんでるが、父や兄はいつ事故が起きるかとしんばいしているが、自分は楽しみと

してこの趣味を生かし勉強には努力を、オートバイは楽しみとして大いにはりきっていきたい。また試験が終了時などオートバイに乗るのは最高ですが、あまり乗りすぎて成績が下がるようなことの原因にならないように自分自身、気をつけ楽しみたいと思っている。

一高かぞえ歌

富田保彦

待ちに待った御入学
上級生も恐そうで
まだおとなしきこの四月。
霧に煙る野辺山に
ヤジも楽しき弁論と
汗びつしよりの球技会
楽し楽しとこの六月。

クラブ活動活発で
バカンスブームも何のその。
いっぽう無所属家の中
パッチリ稼ぐはこの時と
机に向こうその姿。
さて次に控えしは、
話し合いの場身延あり
足下暗し強行遠足
それに創立記念日と
ああ目出度しやこの十月。

「生あるものは死す。」私という一個の人間も君という一個の人間もかならず死ぬのだそういう中で人間としてどう生きたらよいのだろうか。山奥にある小さな花、彼らは自分が一瞬のうちに死んでしまふということを知らずに、そこがどんなところであつても生命を授かったものとして力いっぱい美しい花を咲かせようとする。そして、きれいな花をつけ散っていく。人間も同じではないか。いや人間は自分の死のを知っているだけ他の動植物よりしあわせである。一日一日を、自分に自信を持ち、限りのある生命であることを知っているだけに精いっぱい力をだしてよりよい人生を生きるのだ。いつ死んでも悔

昭和三十九年三月二十二日印刷

昭和三十九年三月二十五日発行

あしおと

甲府第一高等学校第一学年

編集者 学年誌編集委員会

甲府市美咲二丁目13番44号

印刷者 佐藤森三

印刷所 株式会社 又新 社

甲府市百石町三〇二
電話 ②七二九五番